



TITLE:

漢代畫像石における昇仙圖の系譜

AUTHOR(S):

曾布川, 寛

---

CITATION:

曾布川, 寛. 漢代畫像石における昇仙圖の系譜. 東方學報 1993, 65: 23-221

ISSUE DATE:

1993-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66744>

RIGHT:

# 漢代畫像石における昇仙圖の系譜

曾布川 寛

はじめに

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 一 前漢畫像石における昇仙圖……………     | 二七 |
| (一) 江蘇北部、山東南部の畫像石棺…………… | 二七 |
| 1 棲山漢墓畫像石棺……………         | 二七 |
| 2 微山周邊出土畫像石棺……………       | 二七 |
| 3 前漢初、中期畫像石棺……………       | 二七 |
| (二) 南陽の墓室畫像……………        | 二七 |
| 1 南陽、鄭州の畫像磚墓……………       | 二七 |
| 2 南陽の畫像石墓……………          | 二七 |
| 二 後漢畫像石における昇仙圖……………     | 二七 |
| (一) 四川の畫像石棺、畫像磚墓……………   | 二七 |
| 1 四川の畫像石棺……………          | 二七 |

|                      |    |
|----------------------|----|
| 2 簡陽鬼頭山畫像石棺……………     | 二八 |
| 3 四川の畫像磚墓……………       | 二八 |
| (二) 陝北の畫像石……………      | 二八 |
| 三 祠堂畫像における昇仙圖……………   | 二八 |
| (一) 嘉祥武氏祠、宋山小祠堂…………… | 二八 |
| (二) 孝堂山祠堂……………       | 二八 |
| (三) 祠堂のヴァリエーション…………… | 二八 |
| (四) 祠堂の機能と畫像の意味…………… | 二八 |
| 1 陵寢と祠堂……………         | 二八 |
| 2 墓室との關係……………        | 二八 |
| おわりに……………            | 二八 |

はじめに

近年、漢代畫像石の資料の増大には目ざましいものがある。畫像石の本場といえは山東、徐州、南陽、四川、陝北など



が擧げられるが、これらの地方では現在畫像石の發掘が盛んに行われているだけではなく、從來發掘した資料が整理されて拓本圖錄という形で續々と刊行され、研究も盛んになりつつある。『山東漢畫像石選集』（濟南 一九八二）、『武氏祠漢畫像石』（濟南 一九八六）、『徐州漢畫象石』（南京 一九八五）、『南陽漢代畫像石』（北京 一九八五）、『南陽兩漢畫像石』（北京 一九九〇）、『四川漢代畫像石』（成都 一九八七）、『中國美術全集 繪畫編一八 畫像石畫像磚』（北京 一九八八）などがその成果である。また畫像磚の本場といえは南陽、鄭州、四川などが擧げられるが、これらについても發掘と研究が盛んで、『河南漢代畫像磚』（上海 一九八五）、『南陽漢代畫像磚』（北京 一九九〇）、『四川漢代畫像磚』（上海 一九八七）などが續々と出版されている。嘗て畫像石、畫像磚の拓本圖錄といえは、まず山東の資料を蒐めた傳惜華編『漢代畫象全集 初編・二編』（北京 一九五〇・一九五二）があり、『江蘇徐州漢畫象石』（北京 一九五九）、『四川漢代畫象選集』（北京 一九五八）、『重慶市博物館藏 四川漢代畫像磚選集』（北京 一九五七）、『四川漢代畫像磚藝術』（北京 一九五八）、『陝北東漢畫象石刻選集』（北京 一九五八）、『沂南古畫像石墓發掘報告』（北京 一九五六）など<sup>③</sup>だけであったことを思えば、飛躍的増大である。戦前にシャヴァンヌ『北支那考古圖譜』（パリ 一九〇九・一九一三）、關野貞『支那山東省における漢代墳墓の表飾』（東京 一九一六）など<sup>④</sup>によって畫像石研究の第一期が築かれ、解放後、文化大革命前に第二期があつたとすれば、今は第三期を迎えているといつても過言ではないであろう。

この第三期の特徴の一つは、何といつても畫像石資料の増加であるが、とりわけ前漢時代の畫像石資料の増加が特筆される。これまで畫像石といえは後漢時代の繪畫形式とする通念が根強くあり、それに先立つ前漢時代の墳墓における繪畫形式としては、帛畫、漆畫、壁畫、畫像磚などが主に考えられてきた。しかし近年の發掘によると、江蘇省北部、山東省南部、南陽の地方では既に前漢時代からかなり廣範に畫像石の制作が行われていたことが判明し、初期畫像石として後漢の全盛期畫像石を考えるうえで甚だ重要である。特に江蘇北部、山東南部の畫像石棺はこれまで餘り取り上げられたことがないだけに重要である。またそれと關連し畫像石棺の資料の増加も見逃せない。江蘇北部や山東南部では、大型の畫像

石墓が成立する前には畫像石棺が主流をなしたことがあり、四川では成立後も獨特の崖墓や磚室墓において畫像石棺が盛んに制作された。特に四川の資料の増加には著しいものがある。またいま一つの特徴は、地上の墳丘の前に設けられた祠堂の畫像石資料の増加である。これまで祠堂の畫像石といえば山東省肥城縣の孝堂山石祠、嘉祥縣の武氏祠が知られている程度であったが、近年益々その資料の數を増して、祠堂の形式も次第に明かになりつつある。その結果、これまで用途の不明な多くの畫像石が嘗て祠堂に用いられていたことがわかるなど、畫像石を用途、機能に即して考えることを可能にしたのである。

本稿は近年の畫像石研究のこのような狀況を踏まえて、前漢と後漢の畫像石を昇仙圖という觀點から考察することにす。ここで昇仙とは、人間の靈魂が死後に不死の仙界へ昇ることをいい、昇仙圖はその昇っていく途中のさま、或いは昇った後の仙界での生活のありさまを描いたものである。先に筆者は湖南省長沙で出土した戰國中、後期の繪畫資料である陳家大山楚墓帛畫（晚周帛畫）、子彈庫楚墓帛畫（人物御龍帛畫）、やはり長沙で出土した前漢初期の馬王堆一、三號漢墓帛畫、また山東省臨沂で出土した前漢中期の金雀山九號漢墓帛畫、また河南省洛陽で出土した同じく前漢中期の卜千秋墓主室頂脊壁畫を圖像學的に考察し、これらが墓の主人公の昇仙のありさまを描いた昇仙圖であることを考證した。そして陳家大山楚墓帛畫、子彈庫楚墓帛畫の昇仙圖では畫像が簡略に過ぎ昇仙の行き着く先は未だ不明であったが、後三者では他に前漢初期の長沙砂子塘墓外棺漆畫、長沙馬王堆一號漢墓朱地彩繪棺漆畫などを併せ考察することによって、その行き着く先が不死の聖域崑崙山であることも考證した。従って戰國中期から前漢中期にかけて死後の靈魂に關して昇仙という考え方が確かに存在し、それに基づき昇仙圖が制作されたことが判明したが、それがその後どのような経過を辿ったかについては、資料の不足でこれまで不明であった。しかし近年の畫像石資料の増加はそれについて考察することを漸やく可能にし、ここに改めて畫像石を通して昇仙圖を取り上げる次第である。但し畫像石といっても必ずしも畫像石のみに限定するものではなく、ここでは類似の墳墓繪畫資料である畫像磚は勿論のこととして、同時代の關係資料を含めて考えること

にする。この時代の昇仙圖は豫期した以上に盛んにかつ廣範に制作されて、様々な形式で表現されており、それらなるべく逃さずに捉えることにしたい。

筆者はこの畫像石における昇仙圖を考察するに当たり、前回同様、圖像學的方法を適用する。この方法にとって何よりも優先すべきことは圖像の觀察であり、それによって得られた知見である。そしてその知見を文獻史料を博搜することにより照らし合わせ意味を探るのである。但しその際に注意すべきことは、死後の靈魂の問題に關しては文獻史料は概して寡黙であると同時に、たとえ能辯であつたにしても遺物の圖像との間にはかなりの落差があり、必要以上の照合は危険なことである。美術史學の一方法としての圖像學である以上、あくまで圖像を主に文獻を從にすべきで、よしんば文獻史料に見當たらなくても、それはそれでよしとすべきである。また圖像の解釋に際して部分的モチーフに拘り過ぎて全體的テーマを見失う例が往々にあるが、これも十分に戒めるべきである。

またここで取り扱う畫像石は當然のこととして墳墓の裝飾材料であり、墳墓と切り離して考えることは出来ない。墳墓の裝飾材料である以上、それは死者或いは死後の世界と緊密に關係している筈である。たとえ神話、傳説、故事などが描かれても、それはそこに葬られた死者、或いは死後の世界と關係があるからである。また漢代も後世になればなる程、地上的、或いは世俗的要素が墳墓の中に混入してくるが、それを見極めることが必要である。墳墓のあるべき目的から離れて恣意的に解釋するのは好ましくない。

また本論において畫像石についての考察を進めて行くに当たり、その畫像石の置かれた位置、場所を重視した。畫像石墓も祠堂も畫像石棺も多くの畫像石によって構成されるものであり、その置かれた場所においてそれぞれの畫像石が独自の機能を擔っている。その機能に即して畫像の意味を解釋する必要がある。單なる生活の光景を描いた畫像石でもそれが仙界の内側に位置していれば、それはもはや地上の光景ではなく仙界の光景となり、意味は全然違ってくる。同一畫面の車馬行列でさえ、上と下では意味が違ふ場合すらあるのである。但し畫像石はたとえ發掘資料であっても、壞れていたり

後世の墓に再利用されたりして既に元の位置が分からない場合がある。まして傳世の畫像石の場合にはなおさら不明である。しかし重量のある畫像石は全く無秩序に散逸してしまうというケースは意外と少なく、多くの場合はある程度まとまって、また移動したとしても特殊な場合を除き近距離に留まっている。そこで必要になってくるのが復原的研究である。嘗てフェアバンク夫人<sup>6)</sup>が武氏祠の畫像石について復原を試みたことがあり、近年では蔣英炬氏<sup>7)</sup>が祠堂や石棺について意欲的に復原を試みている。これは有意義な方法であり、特に傳世畫像石の半数近くを占めるであろう祠堂畫像石については、構造が簡單で復原が容易であり、實りある成果が得られる筈である。要は畫像石をその位置において全體的に解釋すべきである。それはともかく、前漢時代の畫像石、とりわけ江蘇北部、山東南部の畫像石棺からまず考察していくことにする。

## 一 前漢畫像石における昇仙圖

### (一) 江蘇北部、山東南部の畫像石棺

#### 1. 棲山漢墓畫像石棺

從來、前漢の畫像石といえば極く稀な例として捉えられてきた。しかし近年の發掘資料によると、江蘇省北部の徐州一帶や山東省南部の魯一帯の地域では、最も早くは前漢初期からであるが、主に前漢後期から王莽時期にかけての墳墓において、既にかなり廣範に畫像石が制作されており、その多くは石槨墓形式の墳墓であった。つまりこれらの地域では戰國から前漢初期にかけて流行した豎穴木槨墓が、この時期になると一部石槨墓に取って代わられるようになり、その石槨の板に畫像を刻したのである。石槨の板には通常厚さ一三 cm 内外の石板が用いられ、蓋板、底板、頭足部側板、左右側板の六枚の石板によって高さ〇・八 m、幅〇・八 m、長さ二・五 m 内外の長方形の箱形を構成していた。但し石槨には單室石

槨と雙室石槨の二種類があり、後者の場合<sup>⑧</sup>には中央に仕切板が設けられ、その場合、頭足部側板に各々一枚の石板を用いる場合と各々二枚の石板、即ち室ごとに一枚の石板を用いる場合とがあった。いずれの場合も石板と石板の組立には凹槽や突起などを作ってはめ込んだり噛み合わせたりしていた。そしてこの石槨に遺體を納めるのであるが、嚴密に言うと、その際に遺體を木棺などに入れて納める文字通り石槨として使用する場合と、直接その中に遺體を納める石棺として使用する場合の二通りがある。しかし木棺が使われたとしても木棺自體は長い年月の間に朽ちてしまい、石槨として使われたのか石棺として使われたのか實際には判別が困難である。またこれから論を進める上で紛らわしいため、本稿では統一して（畫像）石棺の呼稱を用い、そこに刻された畫像を石棺畫像と呼ぶことにする。

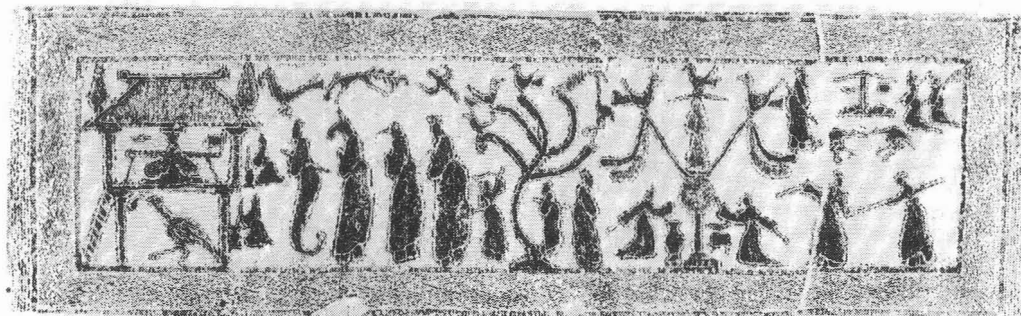
さて、徐州一帯と魯一帯の前漢後期から王莽時期にかけての畫像石のうち、前者、即ち沛縣西南の樓山公社の漢墓から出土した二つの畫像石棺は、保存状態が完好なうえに興味深い畫像内容を有しているので、まずこの石棺を詳しく取り上げることにする。この墓<sup>⑨</sup>は一九七七年に採石の際に發見された二基の墓のうちの二號墓で、墓は南北三・五〇m、東西三・六〇m、深さ二mの長方形の岩の穴を掘り、内部に中棺、西邊棺の二つの石棺と一つの石箱（東邊箱）を納めていた。中棺は幅一・一m、長さ二・六三mで、内部から一體の人骨と鐵劍二本、五銖錢などが見つかり、西邊棺は幅一・〇三m、長さ二・六六mで、内部から一體の人骨と鐵錘、五銖錢などが見つかった。徐州地區の墓葬形制や副葬品からみて被葬者は前者が男性、後者が女性で、夫婦合葬墓と考えられている。また問題の畫像は、中棺には前後左右四枚の側板の内壁（圖1 (1)）と外壁に計八面、西邊棺には前後側板の内壁にのみ計二面刻まれていた。中棺に見られるように石板の兩面に畫像を刻むのは、當時のこの地方獨特の方法である。

まず中棺の畫像からみていくと、頭部の側板（圖1 (2)(3)）は内外壁ともに中央に四つの方形の區畫を設け、上段の二區畫には各々鋪首、下段の二區畫には左側は劍を腰に佩び向かい合った二人物を配し、右側は一頭の馬を描いて外壁の方だけ馬の前に人物を一人配している。内壁の中央に壁が一つ描かれているのも注目される。また足部の側板（圖1 (4)(5)）

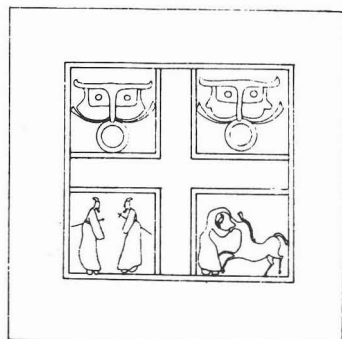
は、内壁は中央に三つの區畫を設け兩側の區畫に各々一羽の鳥の止まったスベード形樹木（以下長青樹と稱す<sup>①</sup>）を左右對稱の形で配し、外壁は中央の一區畫内に虎に似た神獸一頭を枰をはみ出すように大きく描いている。

また左右側板の外壁畫像は、上述の足部側板の内外壁と畫像が一部共通し、左側板（圖2（1））は横長の板面を大小七つの區畫に分割し、中央の大きな區畫には先の虎に似た神獸一頭を配し、一つ置いてその兩側の區畫には鳥の止まった長青樹、一番外側の兩區畫には壁を一個、それぞれ左右對稱に配していた。そして右側板（圖2（3））も同じく七つの區畫に分割し、中央には馬車一輛、騎馬一騎をくりだして、歩卒の六人が畢<sup>②</sup>と呼ばれる網を持って獲物を追う狩獵の光景を描き、一つ置いて兩側の二區畫ずつには左側板と同じく各々鳥の止まる長青樹と壁を配している。

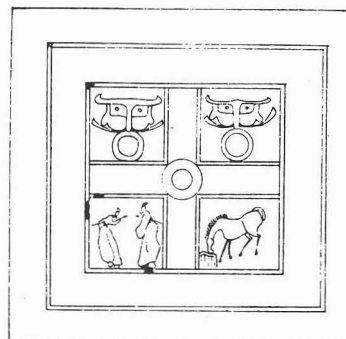
このように外壁は右側板の中央の狩獵圖を除けばかなり抽象的な畫像であったが、内壁の畫像は左右とも一層具象的にしかも興味深い内容を描いていた。左側板の畫像（圖2（2））は區畫はないけれどもおよそ五組に分けられる。まず左方には二層から成る樓閣があって、屋根の上には奇妙にも上述の長青樹に似た樹木が左右に一株ずつ生え、屋内の階上には頭に玉勝の飾りを着けた女性が一人几に馮りかかって坐り、階下には嘴に何か銜えた比較的大きな鳥が一羽いる。そして屋外は左方は階段がつくだけであるが、右方には三本の鳥、尾が幾つにも枝分かれた獸、白に向かい杵で何かを搗く人物二人がおり、更に右側には劍を腰に佩びた人身蛇尾の怪神を先頭に、やはり劍を腰に佩びた馬頭、鳥頭の神人<sup>③</sup>といま一人の神人が従い樓閣の方を向いている。そしてこの第一組畫像の右方には大きな樹木が一株配されて、五つに分かれた枝の先には三羽の鳥と魚を銜えた鶴に似た鳥が止まり、樹の下では佩劍の人物一人が鳥に向かって弓を射、もう一人佩劍の人物が傍らに配される。第三組は建鼓の場面で、上に三重の華蓋をつけ左右に羽葆<sup>④</sup>の飾りを翻した大きな建鼓が一つ置かれて、兩側から二人が枰を振って太鼓を叩き、華蓋と羽葆の先端に鳥が一羽ずつ止まっている。建鼓の周圍には壺や鼎が置かれ、傍觀する佩劍の人物一人もいる。第四、五組は畫面右端の上下に位置する。上段の第四組は棚狀のものを中にして左に佩劍の人物、右に何かをくくりつけた棒を肩に擔いだ二人の人物、手前に互いに嘴でつき合う二羽の鳥がいる。



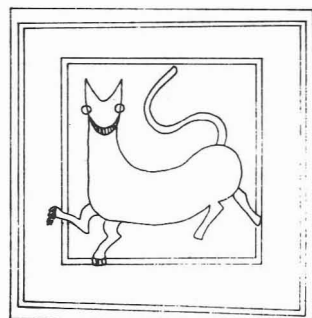
(1) 中棺左側板內壁（拓本） 高80cm 長265cm



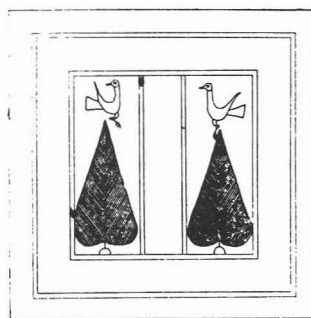
(2) 同上頭部側板外壁（模本）



(3) 同上頭部側板內壁（模本）



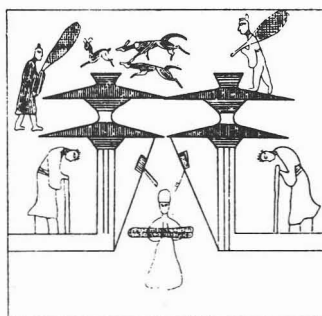
(4) 同上足部側板外壁（模本）



(5) 同上足部側板內壁（模本）

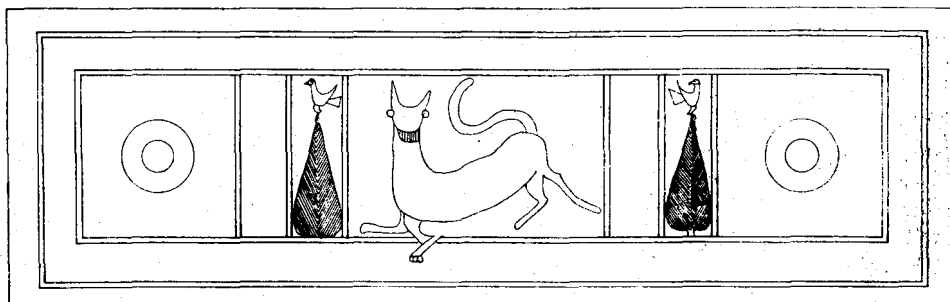


(6) 西邊棺頭部內壁（模本） 幅73cm

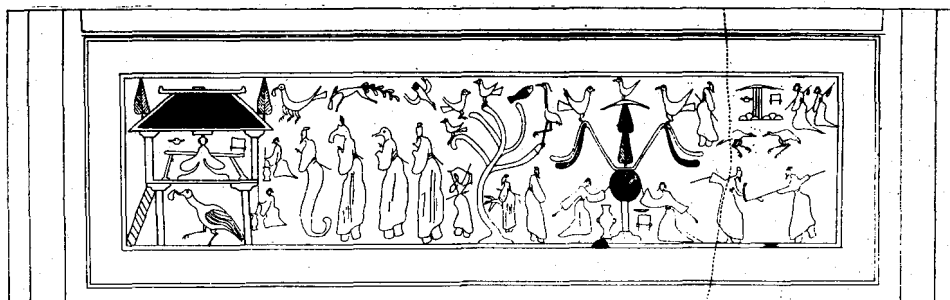


(7) 同上足部內壁（模本）

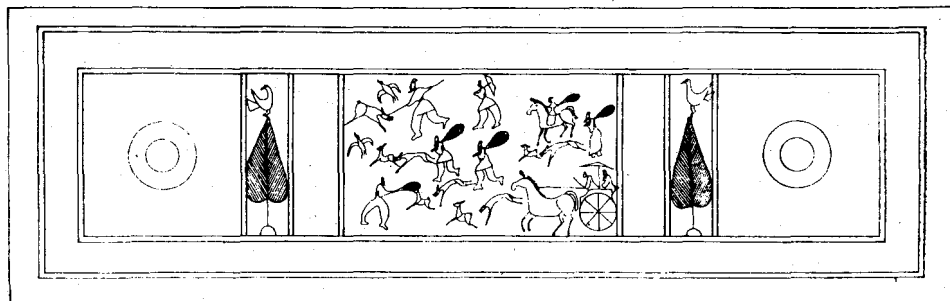
圖1 沛縣棲山漢墓石棺畫像



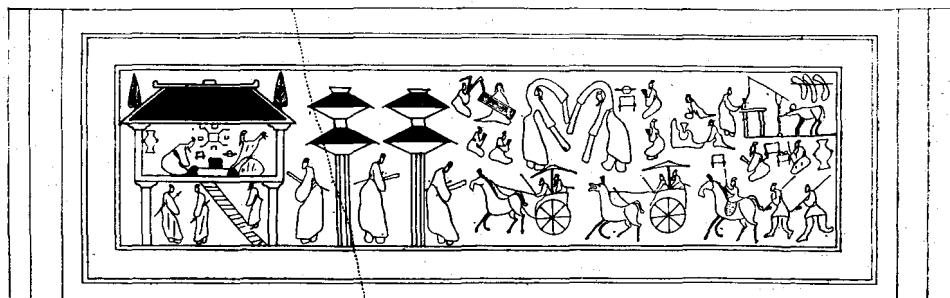
(1) 左側板外壁 長265cm



(2) 左側板内壁



(3) 右側板外壁



(4) 右側板内壁

圖2 沛縣棲山漢墓中棺畫像(模本)



また下段の第五組は右側の人物が矛を持ち、左側の人物が盾と剣を持って互いに闘っている。殺氣だった雰囲気はなく訓練としての撃剣の光景である。以上の五組の畫像は、いま便宜的にそれぞれ西王母樓閣圖、聖樹圖、建鼓圖、不明圖、撃剣圖と名附ける。

また右側板の畫像(圖2) (4)も五組に分かれる。左方には左側板と同じく二層の樓閣があつて、屋根の上には同じく長青樹が二株生え、階上では二人の人物が壁に掛けたようにみえる方格規矩文の局盤と箸(簞)を振る枰の臺を挟んで六博に興じ、階下には階段を昇る一人物と互いに向かい合った二人の人物がおり、屋外右方にも佩劍の人物一人がいる。第二組は二層の塔のような雙闕が描かれて、傍らに二人の佩劍の門衛が頭を垂れて右向きに配される。第三組は右側下段の出行の場面で、二人が乗る一頭立ての軺車二輛を先頭に旗狀のものを持つ騎馬一騎、武器をかつぐ歩卒の二人が従い、左方の雙闕に向かって進んでいる。第四組は畫面中央上段の舞樂の場面で、長い袖を翻して舞う二人を中にして左右各二人が坐して笙のような笛を吹き、左で一人が瑟を弾き、一人が曲尺形の樂器を奏でている。第五組は右上角の庖廚の場面で、桔槔式の井戸で水を汲む人物を中央に、右に一頭の牛が柱に繋がれて、その上には肉の塊が三個ぶら下がっている。また左側と手前には四人の人物が配されて周りに壺や鼎などが置かれている。この五組の畫像は便宜的にそれぞれ樓閣六博圖、雙闕圖、出行圖、舞樂圖、庖廚圖と名附ける。

以上が中棺の八面の畫像であるが、中棺の隣にあつた西邊棺の頭・足部側板内壁畫像の二面も紹介しておこう。まず頭部側板(圖1) (6)は區畫を設けず環を銜えた鋪首を一つ大きく描いて、環の下に帶飾りを結んでいる。そして環の左右には佩劍の人物が各々一人配されて、環に繋いだ紐を手を取っている。また足部側板(圖1) (7)は中央に二層の雙闕を描いて、その兩側に劍を杖にして頭をうなだれた門衛各一人を置き、闕と闕の間には盾を横に持った人物一人を配し、その背後には長い柄の戟二本が闕の屋根に立てかけられている。そして稍や不自然ではあるが、闕の上部、即ち闕の奥に當たる場所に狩獵の光景が描かれ、三頭の動物を左右から畢を持って追う二人の人物が配される。

それではこれらの畫像は一體何を表しているのでしょうか。まず中棺の内壁に描かれた具象的な畫像、なかんずく左側板(圖2 (2))から問題にすると、左邊の樓閣階上にいる女性は、頭部にかんざしの兩端に丸いもののついた勝という飾りを着けているところから西王母とみなされよう。西王母は中國の西北の神山崑崙山に棲むと伝えられる女神である。『山海經』西山經には玉山に棲む西王母について次のように記されている。

西王母は其の狀人の如く、豹尾、虎齒にして善く嘯き、蓬髮にして勝を戴く。

人の形をしているとはいえ、「豹の尾、虎の齒」という姿は恐らく西王母の原形を記すものであるが、ざんばら髪に勝の飾りを戴くことがはっきり述べられている。勝は草木の華などを象つて華勝ともいい、當時の婦人の頭飾として廣く用いられたが、西晉の郭璞が「勝は玉勝なり」と注するように、西王母の場合は玉製であつたと思われる。西王母はこの勝をつけ、『山海經』海内北經に「凡に梯りて勝を戴く」とあるように、凡に馮っているのである。またこの女性が西王母であることは、屋外に西王母の眷屬である三本足の鳥、即ち三足鳥、尾が九つに枝分かれた狐、即ち九尾狐がいること、更にこれらの動物が口にものを銜えて西王母の食事の世話をしていることから確かめられよう。階下で食物を口に銜えた鳥も西王母の身の廻りの世話をする神鳥であろう。前漢の司馬相如の「大人賦」(『漢書』司馬相如傳所引)には、

吾れ乃ち今日西王母を覩たり。曷然として白首に勝を戴きて穴處す。亦幸いに三足鳥有りて之が爲に使いす

とある。やはり西王母が勝を戴いて岩穴に住むことを記すが、併せて三足鳥が西王母の手足となつて働くことが記される。張揖の注には三足鳥とは三本足の青鳥のことで、主に西王母のために食を取ると記されている。また畫像が不明瞭であるが、屋外に杵で搗く者が二人おり、これは西王母の眷屬である玉兔が仙藥を搗く所作になぞらえていよう。後漢時代の山東や四川の畫像石、畫像磚に描かれた西王母圖(圖30 (4)、42)では、三足鳥、九尾狐に加えて杵で仙藥を搗く玉兔、そして蟾蜍が必ず西王母の傍らに配されている。従つて左側板内壁畫像の階上の女性は西王母であり、更に區畫や仕切がない以上、内壁畫像全體が西王母の世界を表し、人身蛇尾の怪神、馬頭、鳥頭の神人は勿論、聖樹、建鼓、擊劍の場面も全

て西王母の世界に屬するものと考えられよう。

また右側板の内壁畫像(圖2 (4))も西王母の世界と關係がある。左邊の階上で二人が六博に興じている樓閣は、屋根を見ると頂上に屋脊が渡されてその兩端と中央に簡單な裝飾が施され、何よりも興味深いことに兩側に長青樹が一株ずつ生えている。このような樹木の生え方は通常有り得ないだけに、この長青樹の存在は極めて象徴的であるが、これは左側板の西王母のいる樓閣も全く同様に表現されており、故に西王母の世界の樓閣であると考えられる。またこの樹木表現で思い起こされるのは一九七六年に山東省の臨沂金雀山九號漢墓で出土した帛畫の上部畫像(圖8)である。最上部の右に烏のいる太陽、左に兔と蟾蜍のいる月が配され、その下に縞文様のある圓い三つの山がそびえ、三つの山の麓に瓦葺きの建物が置かれている。そしてよく見ると屋脊の兩端近くに三角を串刺しにしたような樹木が一株ずつ生え、これが左右側板内壁の樓閣上の樹木と位置といい形といい共通性が認められる。帛畫の三つの山は、筆者が以前に考證したように、馬王堆一號漢墓朱地彩繪棺左側板漆畫の中央山嶽(圖11)などと同じく大地の中央にそびえる崑崙山を三山形式で表したもので、麓の建物は崑崙山の樓閣を表している。この樓閣上の串刺し狀の樹木はさしずめ崑崙山を象徴的に示す樹木といえよう。このような樹木の系譜を更に遡れば、長沙砂子塘一號漢墓右側板漆畫(圖10)の畫面中央に位置する柱狀の崑崙山の頂上部に生えるこれまた極めて象徴的な二株の樹木に辿り着こう。筆者は先に砂子塘墓の樹木については『山海經』西山經の記事に基づき沙棠と名附けたが、崑崙山にはこの他にも視肉珠樹、文玉樹、玕琪樹、不死樹などがあり、金雀山帛畫や棲山漢墓石棺の樓閣上の樹木は神話的というより神仙的な性格を考慮し、不死樹のような樹木をあてるのがより妥當であろう。いずれにしても棲山漢墓中棺内壁の樓閣上に描かれた樹木も崑崙山を象徴的に示すもので、上述の如く西王母は崑崙山に住むと考えられたが故に西王母の世界にも配されたのである。

すると中棺右側板内壁の樓閣内の階上にいる二人の人物は、西王母の世界で六博をしていることになるが、六博は局盤に天地宇宙の構造を圖式的に表した博局文を描き、箸もしくは骰子を振って出た目に應じて盤上に棋子を進める神聖なゲー

ムである。また後述する四川郫縣出土の後漢の西王母圖(圖25)<sup>(5)</sup>などにも見られるように、西王母の世界で神仙の羽人達が興じるゲームであり、これもふさわしい光景といえる。またこの樓閣の右側に位置する雙闕も當然西王母の世界の入口としての門ということになる。門衛二人が右を向いて番をしており、丁度その右の方向から馬車二兩を先頭とする一行がこの雙闕めがけてやって来ようとしている。雙闕は西王母の世界の内と外を分かつ門であり、一行は外からやって来て西王母の世界に入ろうとしているのである。しかしその出行圖の上段に描かれた舞樂、庖廚の光景は、西王母の世界に屬するものである。歌舞や御馳走に明け暮れる生活は一種の樂園としての西王母の世界にふさわしいものであり、雙闕の内側で繰り廣げられる光景を、畫面處理の都合上、出行圖の上に描いたのである。右側板の畫像は、西王母自身の世界を描いた左側板と異なり、その世界に至ろうとする場面とそこに至った後の生活の場面を描いたものといえよう。

それでは残りの畫像はどのように解されるであろうか。中棺の頭部側板(圖1 (2)(3))には内壁、外壁ともに鋪首二と佩劍の人物二、鞍をつけない裸の馬一が描かれていた。鋪首と二人の人物は、西邊棺の頭部側板内壁(圖1 (6))に一緒に描かれる如く本來一對であり、門扉の鋪首とその門衛を表していよう。そして中棺の足部側板の長青樹と虎に似た獸も、左側板の外壁の一板面内に描かれるように本來一對であり、長青樹は西王母の棲む崑崙山を象徴する樹木としてここではその門を表しており、この長青樹の間に位置して前方を睨んでいる虎に似た神獸は門番にあてられていよう。このような虎に似た神獸は、損傷を被り不明瞭ではあるが金雀山九號漢墓帛畫(圖8)の下方にも認められ、更に砂子塘一號漢墓外棺右側板漆畫(圖10)の崑崙山の麓にもおり、仙界の崑崙山の入口を守護する神獸と解される。また中棺の右側板の外壁には、二株の長青樹に挟まれて狩獵の光景が描かれているが、やはり長青樹を西王母の棲む崑崙山の入口の門に見立てて、その内部で行われる狩獵の光景を表すものと解される。また中棺の左右側板外壁の兩側、そして頭部側板内壁に璧が非常に象徴的に描かれているが、これについては後述することにする。

このように中棺の畫像は八面とも全て西王母の世界に関わりがあり、全體として西王母の世界に関連したある物語を表

しているものと考えられる。そして注目すべきは入口が重複して描かれ異常に重視されていることや、實際に出行圖が描かれているように、その世界に入っていくことがこの物語の核心を占めていることである。これらを順を追ってまとめれば、まず長青樹が兩脇に生え虎に似た神獸の守護する崑崙山の門があり、馬車に乗って入って行くと、二人の衛士が番をする雙闕の門があつて、そこから中が西王母の世界で樓閣があり、更に進むと、鋪首のついた門を二人の衛士が守る西王母自身の樓閣があり、そこで馬車を降り中へ入って行くのであろう。頭・足部側板には鋪首や門衛とともに裸の馬が描かれていたが、それは西王母の樓閣に到着して馬車の繫駕を解いた馬と解される。かように入口は三重になっており、西邊棺の場合には鋪首のついた門と雙闕の門しか描かれていないが、これは最も外側の長青樹の生えた崑崙山の門を略したものに他ならず、雙闕より内側の西王母の世界が重要であることを物語っている。そして西王母の世界はというと、西王母の眷屬である三足鳥、九尾狐などが彼女の身の廻りの世話をし、馬頭、鳥頭の神人などが仕えている。またこの世界には聖樹が生えて建鼓などがあり、そこに行った者は六博に興じ舞樂を楽しみ食事に舌鼓を打つというわけである。

では、誰が西王母の世界へと行くのであろうか。左右側板の内壁の畫像をみる限り馬車に乗って行く者や樓閣内で六博に興じる者は、あくまで不特定な風に大きさも一様に描かれ、これといって主人公らしき人物は見當たらぬ。但しここで忘れてならないのは、これらの畫像はあくまで死者の遺體の納まる石棺に描かれていること、つまり墓主人の存在を前提として描かれていることである。この石棺の畫像は、頭足部側板や左右側板にみられるように外壁に崑崙山と西王母の世界への入口を描いて、内壁に西王母の世界を描き、恰も棺内が西王母の仙界であるかのように演出されている。従って棺の中に納まった墓主人は西王母の世界にいるかのようにであり、墓主人の靈魂が馬車に乗って西王母の世界に行き、そこで六博に興じたり舞樂や食事の歡待を受けながら理想的な生活を送ることが暗示されている。『山海經』<sup>27)</sup>や『淮南子』<sup>28)</sup>などに說かれるように、崑崙山は天帝の下都として大地の中央にそびえる神山であり、そこに棲む西王母は神話的英雄である羿に不死の藥を授けたり、眷屬の一である玉兔が常に仙藥を搗くように、不死を屬性としており、西王母の世界は一種

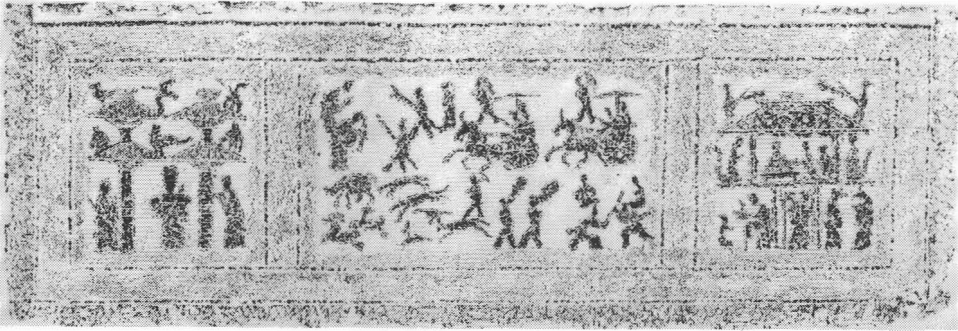
の死後の樂園として表象された。この圖は墓主人自身の昇仙圖ではないが、墓の主人公の永遠の不死が祈願されて、死者の靈魂が不死の樂園である西王母の世界へ行く様と、そこでの生活の有り様が表されたのである。

## 2 微山周邊出土畫像石棺

江蘇省沛縣棲山漢墓とよく似た畫像の石棺は、山東省北部微山縣の微山湖に浮かぶ微山島の溝南村、微山湖北側の滕縣、鄒縣一帯でも數多く發見されている。これらの地域は棲山漢墓とは現在の省こそ異なるものの、南北に長い微山湖を隔ててすぐ東側に位置している。當時、微山島は彭城（現徐州）を治とする楚國に屬し、滕縣、鄒縣は北隣の魯國に屬したが、沛縣を含めこれらの都市は殆ど同一の文化圈に屬していたとみてよからう。ただこれら石棺畫像の棲山漢墓と異なる點は、棲山漢墓がその中棺にみられたように一つの畫面に幾つもの場面を表していたのに對して、こちらは畫面を幾つかの區畫に區切り、一つの區畫に一つの場面を表す方法を採用していることである。従って相互の話の續き具合が不明確なのは否めない。また出土狀況の明かで完好な石棺が未だ發見されていないのも残念である。いずれにしても棲山漢墓の畫像解釋の確認の意味も含めて、これらのうち代表的な石棺畫像を検討してみよう。

まず微山島溝南村で發見されたもののうち、雙室石棺の内部の仕切板に使われ兩面に畫像の刻された二枚の石板がある。その一枚（圖3 (1)(2)）は高さ八三cm、長さ二四七cm、一九七六年に發見されたもので、別に一九八七年の調査で發見された高さ八一cm、長さ一七八cmの畫像石板と石質、畫風が一致するところから、兩者はもと一具と考えられている。即ち後者の石板は横に大きく二つの枠を作り、その各々の内部に更に四つの區畫を設けて上段の二つは鋪首、下段の二つは壁と對角線に交わった紐を描いており、これが雙室の頭部もしくは足部石板を形成して、この畫像のある面（内壁）の中央の凹槽に前者の仕切石板がはめ込まれたのである。

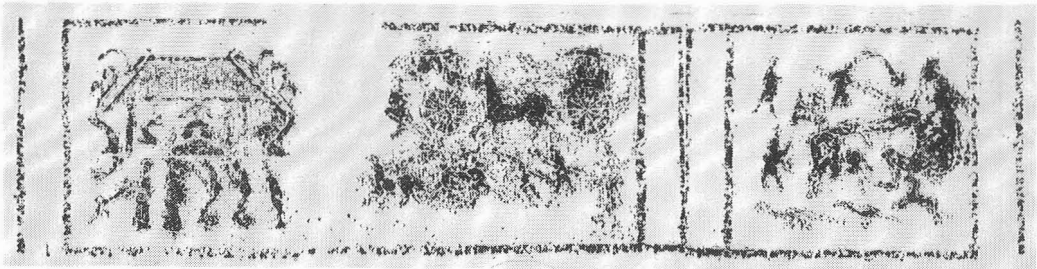
仕切石板（圖3 (1)(2)）は兩面ともに中央を稍や幅廣く兩端を狭く三つの區畫に分け、それぞれ具象的な畫像を刻して



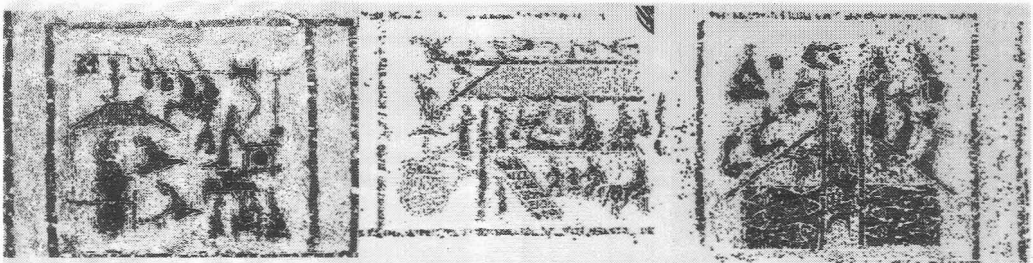
(1) 仕切石板 (1976年發見) 長247cm



(2) 同上仕切石板 (背面)



(3) 仕切石板 (1987年發見) 長239cm



(4) 同上仕切石板 (背面)

圖3 微山縣微山島溝南村石棺畫像 (拓本)

いた。棲山漢墓石棺の内壁畫像と共通性がみられ、一方の面(圖3 (1))の中央區畫は上段に出行圖、下段の左側に狩獵圖、右側に擊劍圖を描いている。棲山漢墓と異なる點は、出行圖において馬車二輛に歩卒の四人を伴う一行の前方で笏を持った二人の人物が拜禮して迎えていることである。また左端の雙闕圖は西邊棺の足部内壁畫像(圖1 (7))に闕の形、人物の構成とも酷似し、右端畫像は稍や不鮮明であるが二層樓閣の階上に二人の侍者にかしずかれて几に憑る人物、階下の扉の外に鳥頭と獸頭の神人がいるところから、中棺左側板内壁の西王母樓閣圖(圖2 (2))に對應すると思われる、階上の人物は西王母であろう。またその背面(圖3 (2))の中央區畫には二層樓閣の階上に六博に興ずる人物、階下に階段を昇る人物などを描くところから、右側板内壁の樓閣六博圖(圖2 (4))に對應し、ただ樓閣の兩側に曲がりくねった樹木が配されているのが異なっている。しかし左端と右端の畫像は棲山漢墓石棺になかったものである。左端は三本の柱を立て綱を斜めに渡して綱渡りしたり柱上で逆立ちしたりする走索又は高絙と呼ばれる曲藝<sup>(4)</sup>の場面、右端は水に落ちた鼎を綱で引き上げる人物達とそれを屋内で見守る人物達を描く所謂升鼎圖である。

またもう一枚の仕切石板<sup>(32)</sup>(圖3 (3)(4))は高さ八二cm、長さ二三九cmで、一九八七年に見つかったものである。兩面畫像のうち一面(圖3 (4))には中央に樓閣六博圖、右端に升鼎圖を配し、左端には井戸で水を汲んだり釜で煮炊きしたり肉の塊を吊るした庖廚圖を配している。またもう一面(圖3 (3))は中央に出行圖、右に大きな怪獸を何人もで捕獲する狩獵圖、左に殿堂の圖を配していた。殿堂の圖は單層の殿堂内に一人物が二人にかしずかれて坐し、屋外手前には鳥頭と獸頭の神人、人身蛇尾の二怪神などがおり、左右には曲がりくねった樹木が一株ずつ生えている。棲山漢墓中棺左側板内壁畫像や先の仕切板の畫像との類似から、殿堂内の主人は西王母であり、これも西王母樓閣圖を示しているよう。またこの石棺はもう一枚の石板<sup>(33)</sup>が見つかっており、一九七六年に片端が見つかり一九八七年に片端が見つかった。大きさは高さ八一cm、長さ二五二cmで、左端に孔子が老子に見える圖、中央には大きな喪車が大勢の人物達に引かれて右へと進む葬送の場面、右端はそれに續くかのように山の麓に長方形の墓穴らしきものが描かれ、その周りで十人の人物が祭祀をしている。



この石板は石棺の左右いずれかの側板を構成していたものと思われる。

この他、微山島溝南村出土の畫像石棺には、

(一) 一面 樓閣六博圖(中央)、庖廚圖(左)、建鼓・舞樂圖(右)(圖4 (1))

背面 五璧雙魚圖(中央)、璧圖(左)、璧圖(右) 高さ八二cm、長さ二七七cm

(二) 建鼓・走索圖(中央)、狩獵圖(左)、狩獵圖(右) 高さ八一cm、長さ二五七cm

(三) 雙闕圖 高さ八二cm、長さ八四cm

など三基がある。(一)の五璧雙魚圖は菱形の二匹の魚と五個の璧を組み合わせたもので、この面を左右いずれかの側板の外壁とし反對の面を内壁に構成するものであり、(三)は足部か頭部の側板に該當するものであろう。

また滕縣城頭村から出土した一枚の石板(一)、滕縣馬王村から出土した四枚の石板(二)の畫像内容はそれぞれ次のようであった。

(一) 一面 闕樓圖 高さ五六cm、幅六六・五cm(圖4 (2))

背面 鋪首門衛圖(圖4 (3))

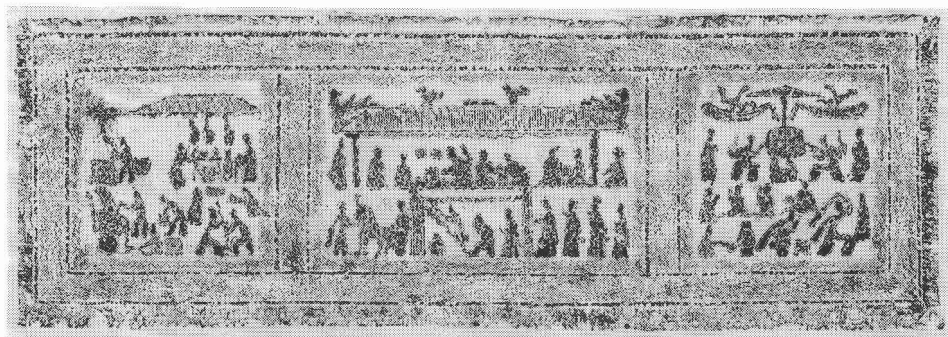
(二) 西王母圖(中央)、舞樂圖(左)、不明圖(右) 高さ七二cm、長さ二五八・五cm

樓閣觀舞圖(中央)、建鼓圖(左)、漁撈圖(右) 高さ七二cm、長さ二五八・五cm(圖4 (4))

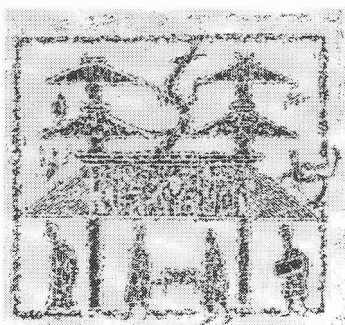
闕樓圖 高さ七〇cm、幅七六cm(圖4 (5))

雙闕圖<sup>37)</sup> 高さ七一cm、幅七七cm(圖4 (6))

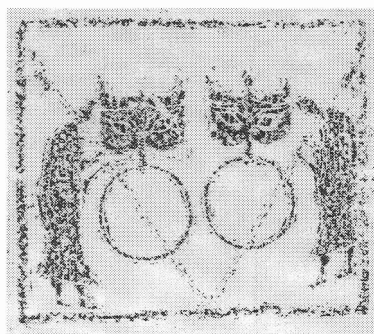
(一)は両面に畫像を刻し、闕樓圖は二層雙闕の第一層に屋根を渡したもので、下に物を運ぶ四人の人物があり、鋪首衛士圖は鋪首二とその兩側に衛士二人を描く。また(二)の四枚の畫像石板は珍しく一つの石棺を構成するもので、西王母は外にいて樓閣内に表されていないけれども傍らに仙藥を搗く兔がいるところから西王母と考えられ、不明圖は人身蛇尾



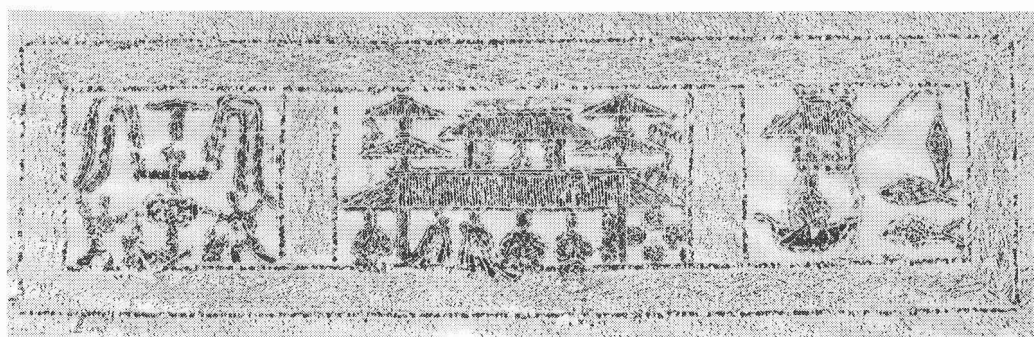
(1) 微山島溝南村石棺側板外壁 長277cm



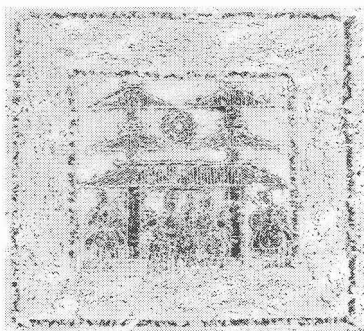
(2) 滕縣城頭村石棺側板 高56cm



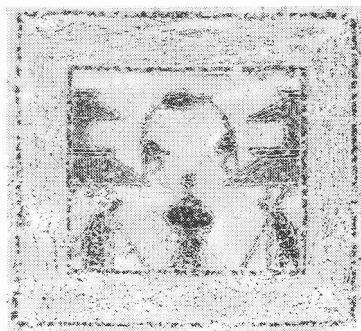
(3) 同上石棺側板背面



(4) 滕縣馬王村石棺側板(一) 長258.5cm



(5) 同上石棺側板(二) 高70cm



(6) 同上石棺側板(三) 高71cm

圖4 山東南部石棺畫像(拓本)

の二神などを描いている。また樓閣觀舞圖は六博をする代わりに階下で舞を觀ており、漁撈圖は魚を釣ったり舟を浮かべ魚を捕っている。また闕樓圖は上述の闕樓の下に三頭立ての馬車と戟を持つ騎吏を配し、注目すべきことに上方の闕と闕の間に一個の壁を配している。(二)は微山島溝南村や滕縣城頭村と較べ畫像が稍や散漫であると同時に新しいモチーフが目立ち、少し時代の下るものであらう。

このように微山縣、滕縣で發見された石棺畫像は、先に見た棲山漢墓の石棺畫像と内容の點で驚く程よく似ている。棲山漢墓中棺の左右側板内壁において一畫面内に區畫を設けることなく描いた畫像を更に幾つかの區畫に分けただけと言っても過言ではないであらう。即ち西王母樓閣圖、建鼓圖、擊劍圖、樓閣六博圖、雙闕圖、出行圖、舞樂圖、庖廚圖、出行圖、狩獵圖、壁圖、鋪首門衛圖などは兩者に共通し、新たに登場したモチーフといへば闕樓圖、走索圖、升鼎圖、漁撈圖ぐらいである。そのうち闕樓は下を馬車が通り抜けるから雙闕に準じ、また走索は舞樂と同様に觀者を樂しませるものであり、漁撈は狩獵と同様に食糧を確保するためのものである。ただ升鼎圖の意味が不明であるが、後漢時代の仙界圖にもよく登場するモチーフである。従つてこれらのモチーフは個々に分かれていたけれども相互につながりを有して、棲山漢墓の場合と同じく全體として西王母の世界への昇仙を描いたものと解釋することが出來よう。但し棲山漢墓とこれら微山附近の石棺畫像とで内容上の違いがあるとすれば、それは前者でみた長青樹や虎に似た神獸が後者には全くみられなくなった點で、これは明らかに前者が後者より制作時期が早いことを物語つていよう。棲山漢墓の石棺畫像は古い抽象的、象徴的要素と新しい具象的要素が併存しているのである。そして棲山漢墓の場合と同様忘れてならないのは、これらのモチーフが壁圖、鋪首圖を除き殆ど石棺の内壁に描かれていることで、恰も棺内の墓主人の遺體が西王母の世界に住んでいるかのように演出されており、墓主人の西王母の世界への昇仙が切に祈願されたことがわかる。

また少々趣を異にするが、一九三七年に曲阜縣城東八寶山の韓家鋪で出土したといい、現在曲阜の孔廟に保存されてい

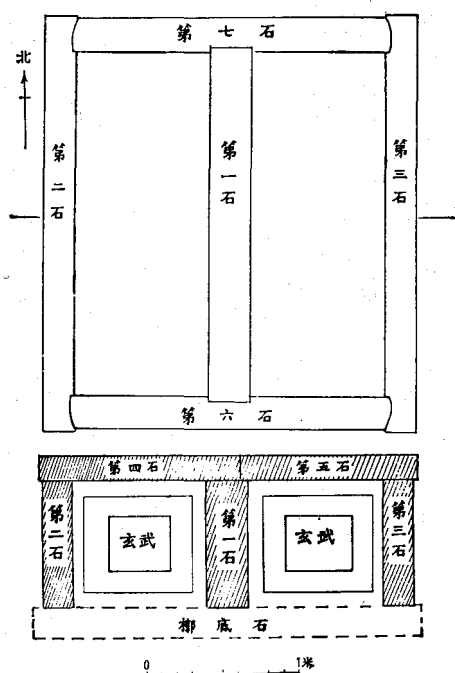
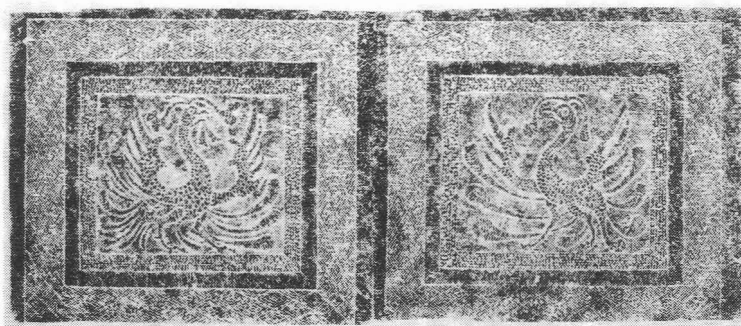


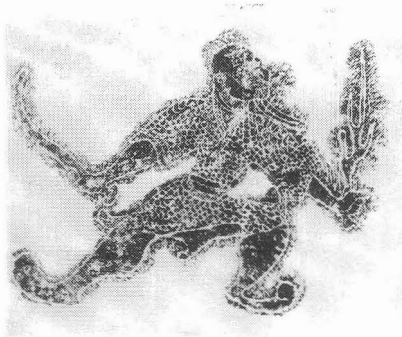
圖5 曲阜東安漢里畫像石棺（復原）

る所謂東安漢里畫像石も王莽時期から後漢初期に屬し、底板こそ缺くが各部が一應揃った畫像石棺として興味深いものである。この石棺は傳惜華編『漢代畫象全集 初編』<sup>39)</sup>にも拓本が掲載された有名なものであるが、厚さ一七―二七cmの石が全部で七石あり、大小、形状、畫像内容、邊飾文様などを勘案して、蔣英炬氏により復原<sup>40)</sup>（圖5）が成された。それによると、この畫像石棺は雙室をなし、第一石を棺室の仕切板として、縦八四cm、横二七六―七cmの第二、三石を左右側板、縦八四cm、横二二二cmの第七、六石を頭足部側板とし、第四、五石を蓋板としてかぶせていた。各石にはほどの突起や凹槽が施されて、ぴったり組合わさる仕組みになっており、出来上がった室内の廣さは長さ二二六cm、幅二〇六cm、高さ八四cmで、各室の幅は九〇cmであった。そして第一石仕切板の上部側面に隸書で「山魯市東安漢里禺石也」<sup>41)</sup>と書かれていた。畫像は左右側板と蓋板は片面のみであるが、頭足部側板と仕切板は兩面に畫像が刻され、頭足部側板外壁を除きいずれも枠を作り、畫像の輪郭を線刻してその内側を點で埋めるといふ獨特の手法を用いていた。まず内壁は、左右側板に北向きに青龍、白虎（圖6（4））を描き、頭足部側板には玄武と朱雀（圖6（1））を枠で區切って二組ずつ描いていた。但し

左右側板は中央に青龍、白虎を描くだけでなく、兩側に壁を配して、四邊の二分の一もしくは四分の一の壁と帶で結んで一種の穿壁文を作り、間に羽人や戯れる熊、兔、鳥などの動物を配していた。これは二枚の蓋板内壁も同様で、それぞれ中央に鱗文のある蜥蜴形の神獸と長い首と尾をもった恐龍形の神獸を配し、更に穿壁文を作って間に動物などを配していた。そして外壁は、頭部（圖6（3））は繩索を持った人物と笏を持った人物を描き、足部（圖6（2））は短甲をつけ刀を持った武士を向かい合わせに一対描いていた。また仕切板



(1) 足部側板（第六石）內壁 朱雀圖 幅212cm



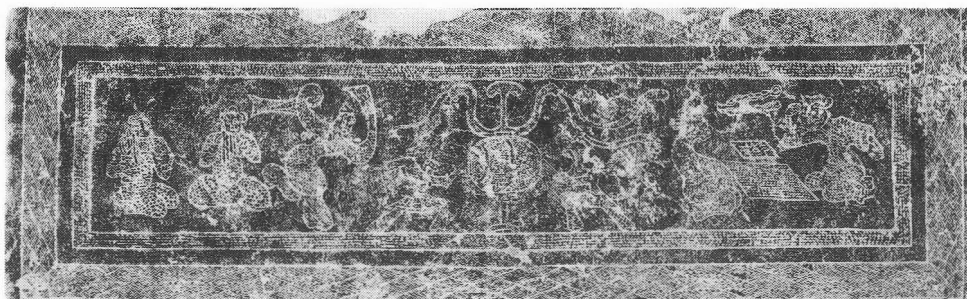
(2) 足部側板外壁（左）



(3) 頭部側板外壁（左）



(4) 西側板（第二石）內壁 白虎圖 長276cm



(5) 仕切石板 長232cm

圖6 曲阜東安漢里石棺畫像（拓本）

は、東面(圖6 (5))に二人が對局する六博、羽葆を翻し二人が叩く建鼓、二人の樂器に合せて一人が舞う舞樂の光景を描き、西面に五人が尊を傍らに酒を酌み交わしながら舞ったり談笑する宴飲の光景を描いていた。

青龍・白虎・朱雀・玄武の四神を描いた例は前漢の石棺畫像では珍しいが、陝西省の西安や咸陽の前漢後期の磚室墓では四神を描いた畫像磚がしばしば出土し、必ずしも珍しくはない。その最も早い例が興平縣の漢茂陵附近で出土した前漢中期の白虎・朱雀・玄武文磚で、最も成立の遅れた玄武も既に龜蛇合體で表されている。その後、王莽時期の咸陽空心磚漢墓で四神文磚が大量に出土し、後漢初期の山西平陸棗園村壁畫墓では天井の天象圖に四神が描かれていた。但し後者の壁畫では玄武は龜のみで表されているが、この石棺畫像でも玄武は龜のみで表され、代わりに右側の圖では龜に仙草を與える羽人が背に乗っていた。これら四神は石棺の内壁に描かれて棺内の遺體を惡靈から守る所謂辟邪の役割を付與されていたと思われる。その辟邪の役割は頭足部外壁に描かれた人物像も同様で、蔣英炬氏も指摘したように、滄海のうちの度索山ににいるという鬼退治の神荼、鬱壘の二神を描いたものと思われる。『山海經』(『論衡』訂鬼篇所引)によれば、度索山には蟠屈すること三千里という大きな桃の樹があって、その東北の鬼門を萬鬼が出入りし、神荼、鬱壘はこの萬鬼を取り締まって、もし害惡をなす鬼がいれば葦索でもって捉え虎に食わせたとある。後世、門に神荼、鬱壘の二神と虎を描いて魔除けとしたのはこの傳説に基づいているが、石棺畫像を見ると、頭部(北)側板の左側の人物(圖6 (3))は確かに繩索を手にしており、足部(南)側板の左側の人物(圖6 (2))は右手に刀を持ち左手には樹の枝を持っている。前者の繩索が葦索であり、後者の樹の枝が度索山傳説と關連し、また羿がそれによって殺され鬼が畏れたという桃の枝(桃棗)であろう。どちらが神荼、鬱壘であるかは言い難いが、雙室石棺と關連し朱雀と鳳凰を二體ずつ描いたと同じく、神荼、鬱壘も二體ずつ描いたのである。これら四神、神荼・鬱壘は棲山漢墓石棺の外壁や頭足部側板内壁に描かれた虎に似た神獸や鋪首と較べ、形こそ異なるものの意味、機能は同じである。そして仕切板に描かれた六博・建鼓・舞樂(圖6 (5))や宴飲もこれまで棲山漢墓や微山などの石棺の内壁畫像に見たものである。即ち昇仙後の西王母の世界での生活の光景を

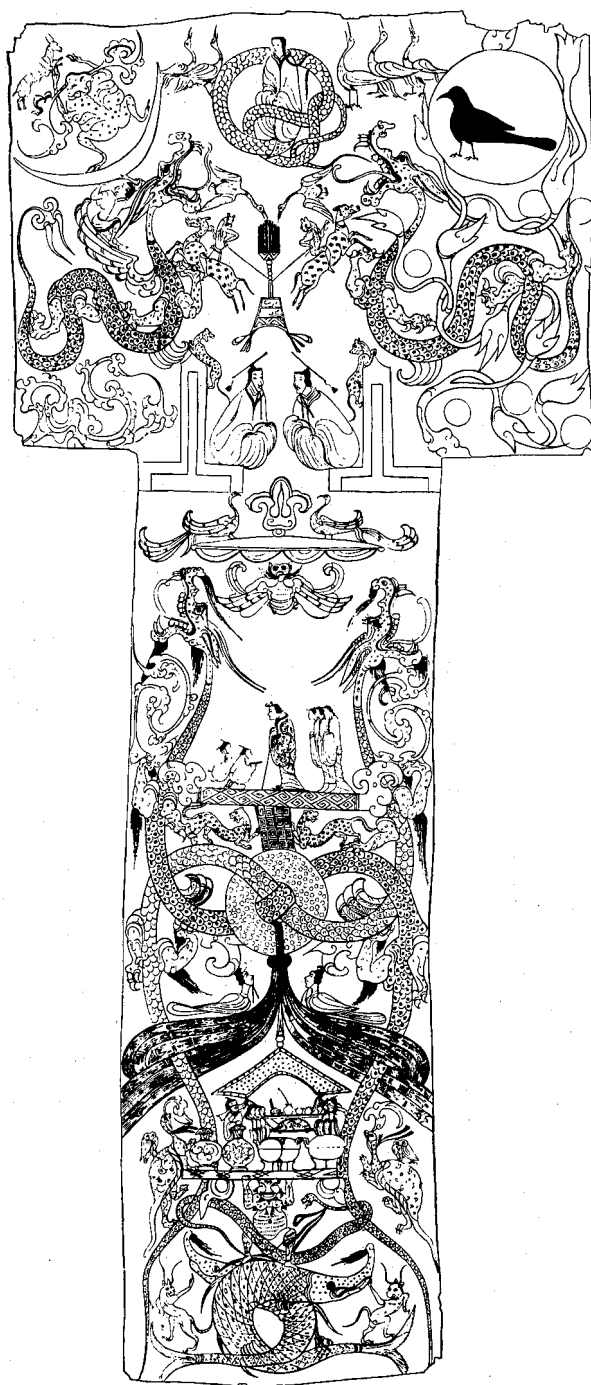


圖7 長沙馬王堆一號漢墓出土帛畫（模本）  
高205cm 前漢初期



圖8 臨沂金雀山九號漢墓  
出土帛畫（模本）  
高200cm 前漢中期



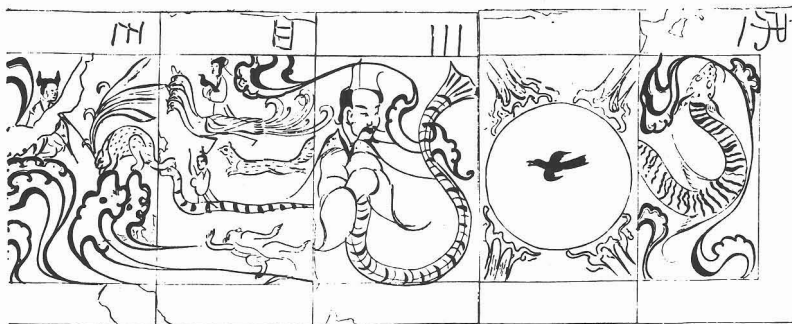


圖9 洛陽卜千秋墓主室頂脊壁畫兩端部分（模本） 幅52cm 前漢中期

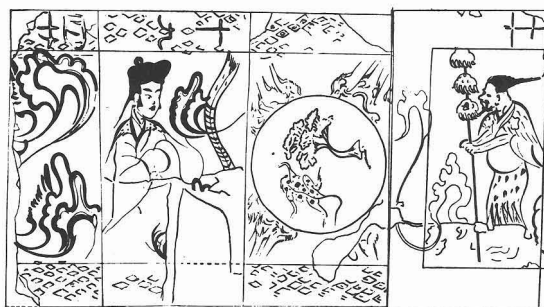


圖10 長沙砂子塘一號漢墓外棺右側板漆畫（模本） 高67cm 前漢初期

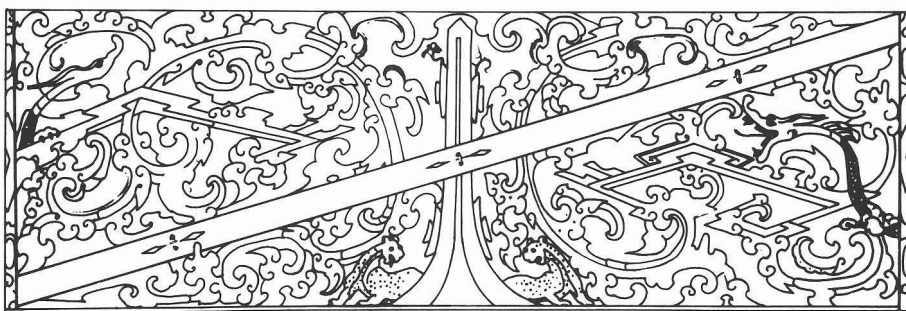


圖11 長沙馬王堆一號漢墓朱地彩繪棺左側板漆畫（模本） 前漢初期



表しており、つまりはここでも石棺内部が崑崙山の西王母の世界であることを暗示し、この棺内に納まった墓の主人公の昇仙への願望が込められているのである。

では、これら畫像石棺の昇仙圖はどのような系譜の下に出現してきたのであろうか。これらの石棺の制作年代は、棲山漢墓石棺がおよそ前漢末期から王莽時期、微山縣溝南村石棺が前漢末期から後漢初期と推定<sup>(48)</sup>されている。これまでこの地方の昇仙圖としては前漢中期の臨沂金雀山九號漢墓から出土した帛畫<sup>(49)</sup>が最も古く、先に樓閣上の樹木や虎に似た神獸など棲山漢墓石棺畫像との一部畫像の類似をみたように、石棺畫像がこの帛畫の延長上にあることは明かである。この帛畫(圖8)は高さ二〇〇cm、幅四二cmで縦長の形をし、最上部の左右に日月を配し、その下に三山形式の崑崙山と單層の殿堂を配していた。殿堂の中は右側に一人の女性を大きく描いて、その左に侍女を四人かしくように描いていた。その下は畫像が四段に分かれ、一段目は琴を弾いたり笙を吹いたり舞ったりする光景、二段目は右端の男性一人に左の四人の男性が向き合った光景、三段目は紡車などを作る光景、四段目は筋肉を盛り上がった力士の光景などを描いていた。そしてその下は互いに向き合って飛び跳ねる二頭の虎のような神獸、そして最下部には左右に二頭の龍とそれを手綱で御す有角の怪神を間に描いていた。この圖は先に考證した如く、殿堂内に大きく描かれた女性の墓の主人公(靈魂)が、下部の雙龍の引く車または舟、即ち龍車または龍舟に乗って崑崙山へと昇仙し、虎に似た神獸が入口を守護する崑崙山の樂園で多くの女性や男性にかしずかれて、舞樂や力士の角抵<sup>(50)</sup>のショーを楽しんだり、絲を紡がせたりしながら生活する様を表していた。この帛畫は崑崙山を描いた點や昇仙後の生活の有り様を描いた點に新味があったが、明らかに昇仙圖であり、同じく前漢中期の洛陽卜千秋墓主室頂脊壁畫(圖9)とともに、更にそれ以前に湖南省の長沙で制作された昇仙圖、即ち戰國中期の陳家大山楚墓出土の帛畫<sup>(51)</sup>(晩周帛畫)、戰國晩期の子彈庫楚墓出土の帛畫<sup>(52)</sup>(人物御龍帛畫)、前漢初期の馬王堆一・三號漢墓出土の帛畫<sup>(53)</sup>(T字形帛畫 圖7)と續く昇仙圖の系譜を繼いでいたのである。臨沂は湖南省の長沙とは随分離れているにもかかわらず、このように内容の近似する帛畫を出土したのは、戰國後期、南方大國の楚が莒、邾、邾、魯など

の國を滅ぼして山東南部を占領し、それ以後、楚の文化がこの地方に波及したためと考えられる<sup>(87)</sup>。

そして畫像石棺の昇仙圖は更にこの金雀山帛畫を受け繼ぐものであるが、これによって前漢中期以後不明であった昇仙圖の系譜が更に前漢末期へと受け繼がれていたことが知れたのである。また同じく棺の畫像としては、木棺と石棺の違いはあるけれども、前漢初期の長沙砂子塘一號漢墓外棺右側板漆畫<sup>(88)</sup>（圖10）、馬王堆一號漢墓朱地彩繪棺左側板漆畫<sup>(89)</sup>（圖11）のやはり崑崙山への昇仙を題材にした圖を受け繼ぐものといえる。この二つの漆畫も帛畫と違って墓の主人公は描かず、前者は中央に崑崙山、兩端に昇仙する際の唯一の乗り物とされた龍を描いて、崑崙山への昇仙の意志を表し、後者は中央に崑崙山、兩側に龍と騶虞、吉量の神獸、また鶉鳥、羿を描いて、崑崙山をめぐる弱水を渡るの困難さ、崑崙山の險しい巖に登るの困難さを比喩的に表していた<sup>(90)</sup>。いずれも棺内の墓の主人公の存在を前提として、墓の主人公の崑崙山への昇仙を祈願していたのである。その限りでは石棺畫像も全く同様であり、明らかにその傳統を引き繼いでいるのである。但しこれらの帛畫昇仙圖であれ木棺昇仙圖であれ、石棺畫像の昇仙圖との決定的な違いは、新たに西王母が登場していることである。馬王堆帛畫や金雀山帛畫では昇仙の行き着く先は確かに崑崙山であっても、未だそこに棲む神として西王母は登場しなかった。中國の南方の神話傳説に基づくものとしては當然であり、そこでは『山海經』や『淮南子』などにみられる如く崑崙山は天帝の下都<sup>(91)</sup>として天上世界にいる天帝の直轄地であった。西王母もしくはその侍女がその眷屬とともに初めて登場したのは、北方の神話傳説に基づいた洛陽卜千秋墓壁畫（圖9）であり、死者を迎える爲に西王母に遣わされた三足鳥、九尾狐、蟾蜍、玉兔の眷屬が、墓の主人公夫婦とともに昇仙する有り様が描かれ、その行く手に西王母もしくはその侍女も描かれていた<sup>(92)</sup>。それが畫像石棺に至ると西王母が主役として一層強調され、しかも西王母の世界並びにそこへの昇仙後の生活の有り様がより具體的に描かれるようになった。西王母は羿に不死の藥を授けたという傳説にみられる如くもともと不死を屬性としており、それが同じく不死を屬性とする崑崙山と結びついて崑崙山に棲む女神となり、遂に石棺畫像の昇仙圖において崑崙山がないがしろにされる程に脚光を浴びるようになったのである。

このような西王母の人氣の躍進振りはまた前漢末に起こった爆發的な西王母信仰とも關係があつたものと考えられる。即ち社會不安の色濃い哀帝の建平四年（前三）、關東に起こり京師にまで及んだ爆發的な西王母信仰について、『漢書』五行志は次のように記している。

哀帝の建平四年正月、民驚き走り、藁或いは楸一枚を持ち、傳え相付與して曰く、詔の籌を行ふ、と。道中相い過逢するもの多きこと千もて數えるに至り、或るものは被髮して徒踐し、或るものは夜に關を折り、或るものは牆を踰えて入り、或るものは車騎に乗りて奔馳し、置驛をもつて傳え行き、郡國を経歷すること二十六、京師に至れり。その夏、京師郡國の民、里巷仟佰に聚會し、祭を設けて博具を張り、歌舞して西王母を祠る。また書を傳えて曰く、母、百姓に告ぐ、この書を佩びる者は死せず、我が言を信ぜざるもの、門樞の下を視よ、まさに白髮あるべし、と。秋に至りて止む。

即ちこの年の四月、民衆たちが突如物に憑かれたように走り回り、藁やおがらを手渡して、西王母の詔の籌を廻すのだと云つた。そしてそうした者たちが道に寄り集まつて、多い時には千人にも達し、ざんばら髪に裸足のままだつたりかんぬきを破つたり、土塀を越えて入り込んだり馬車を馳せまわしたりして、驛傳により次々と傳え、遂に郡や國二十六を経て京師にやつて來た。その年の夏は、京師でも地方の郡國でも、民衆が巷に集まり、祭壇を設置して六博の準備をし、歌舞によつて西王母を祀つた。また次のような手紙を傳えた。西王母が皆に告げる。この手紙を身に帶びる者は死なない。わたしの言葉が信じられぬならば、門の樞の下をみるがよい。そこに白髮がある筈だ、と。そして秋になると騒ぎは収まつたというのである。『漢書』哀帝紀<sup>(85)</sup>には夜に火を持って屋根に上り太鼓を打ち鳴らし大聲で叫び合つたという。まさに新興宗教の誕生を思わせるような大騒擾であるが、確かに前漢末期のこの頃から、墳墓において西王母の畫像が急激に多くなるのである。

また昇仙の乗り物として馬車が使われるようになったのも大きな違いである。馬王堆帛畫や金雀山帛畫では昇仙する際

の乗り物として龍舟もしくは龍車が使われていたが、これらの石棺畫像では一様に馬車が使われている。龍が使われなくなったのは洛陽卜千秋墓壁畫からであり、卜千秋墓（圖9）では卜千秋夫婦は蛇に乗ったり三首鳥に乗って昇仙している。これは漢代中期以後になると、儒教の國教化など漢の王朝の體制が次第に整うにつれて、龍が次第に皇帝の獨占物となり、下臣による龍の使用は僭越行爲として憚られるようになったこと、また昇仙の行き先として西王母の世界が表に出て崑崙山が後退した結果として、崑崙山をめぐる危険な弱水を渡す唯一の乗り物であった龍の役割も後退したことなどが原因に挙げられよう。しかし卜千秋墓壁畫の空中を驅ける奇怪な蛇や三首鳥と、石棺畫像の地上を平行移動しかない日常的な馬車とではなお大きな落差があり、前漢中期から末期にかけて何等かの大きな變化があったことを物語っている。要するに崑崙山の後退といい龍の役割の後退といい、昇仙圖も神話的性格が次第に薄れて神仙的となり、更に現實的性格を色濃く帯びるようになり、また宇宙を背景にした規模の大きさも次第に縮少していくのである。

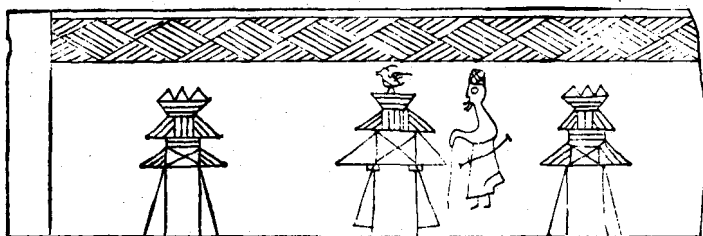
### 3 前漢初、中期畫像石棺

ところで、この章の冒頭でも述べたように江蘇北部や山東南部の地域では、實はこれら前漢末期の畫像石棺より更に早い時期、最も早くは前漢初期にまで遡る畫像石棺が近年發見されている。それらの畫像は早ければ早いほど抽象的に描かれて、恰も前漢末期の石棺畫像とは系譜を異にするかの如くみえる。従ってその圖像學的解釋には慎重な取り扱いが要求されるが、前漢末期の石棺畫像ともつながりがある筈であり、それらを援用すれば解釋も可能であろう。

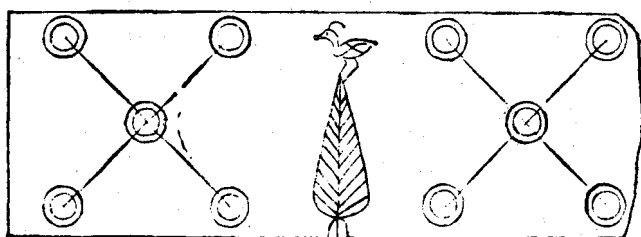
まず棲山漢墓などより若干早い時期の江蘇連雲港市錦屏山の桃花澗畫像石墓<sup>66</sup>で出土した石棺を取り上げる。この石棺は仕切板はないけれども大きさからみて雙室石棺をなしていたものと思われ、内側に畫像を刻した四枚の石板が發見されている。頭部側板は一部缺けていたが鋪首二個が刻されて全部で三個あったものと推測され、足部側板（圖12（2））は中央に鳥の止まる長青樹一株、その兩側に四隅と中央に置かれた計五個の壁に對角線の紐を通した穿壁文を各々線刻していた。

また右側板(圖12 (1))には中央に鳥の止まった二層建物と傍らに劍を佩び杖をついて建物の方へ歩む髭をはやした老人を描き、兩端は闕を一つずつ刻して併せて雙闕を構成し、左側板は斜線や直線を刻して畫面を埋めていた。右側板の中央建物は左右の雙闕と形が似るけれども、少し奥に配して上に鳥を止まらせるなど明らかに雙闕と區別して描かれており、雙闕の内側に置かれた樓閣であろう。いずれにしても髭をはやした人物が雙闕の門を通過して中へと進んで行くところを描いており、雙闕は前漢末期の石棺畫像では西王母の世界の入口を表していたから、これも一種の昇仙圖と解されよう。そしてこの石棺において同時に注目されるのは足部側板に極めて抽象的に描かれた長青樹と穿壁文のモチーフであり、同じく錦屏山の桃花澗から二km程離れた劉頂で發見された一枚の石板(高さ七五cm、長さ二六五cm 圖12 (3))でも、中央に五個の壁に紐を通した穿壁文を置き、その兩側に雙闕、更にその兩側に鳥の止まった長青樹が配されていた。

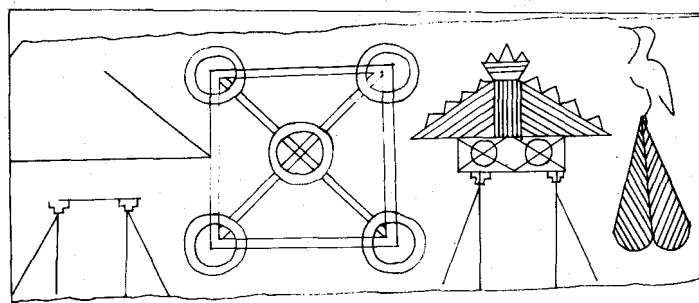
長青樹と壁のモチーフは、先の棲山漢墓中棺左右側板の外壁(圖2 (1)(3))においてもみられたもので、内壁の具象的な畫像と際立った對照をなし、虎に似た神獸ともどもより古風な性格が感じられたことは前述の通りである。實際、これより古い時期の石棺にもしばしばみられ、しかもその主要な畫像をなしているのが認められる。例えば一九八八年に、江蘇省北部の徐州に近い河南省東部の夏邑縣吳莊で發見された六基の石槨墓石棺(石槨)のうち、三つの石棺にも刻されており、しかもそこでは長青樹と壁の文様のみが刻されていた。二號墓を例にとると、石棺の大きさは長さ二・四〇m、幅一・〇六m、高さ〇・八八mで、頭部側板(圖13 (1))は壁を紐で吊るして上と下にリボン(綬)の飾りをつけ、足部側板(圖13 (2))は長青樹を二株描いて上方に鳥が三羽舞い、左と右の側板(圖13 (3))は文様が全く同じで、中央に一個の壁、左に鳥の止まった長青樹一株、右に上記の壁と綬を組み合わせた文様一つを配していた。二六號墓、三八號墓<sup>②③</sup>は畫像が頭部と足部側板のみに刻され、文様は二號墓と殆ど同じで、壁と綬を組み合わせた文様二つと鳥の止まる長青樹二株を描いていた。人物が全く登場せず畫像は頗る象徴的であるが、長青樹は沛縣棲山漢墓などでみたものとよく似ており、夏邑縣の地域(栗縣)が前漢において沛縣と同じく沛郡に屬したように<sup>④</sup>、江蘇北部と密接な交渉があったことがわかる。



(1) 桃花澗石棺右側板

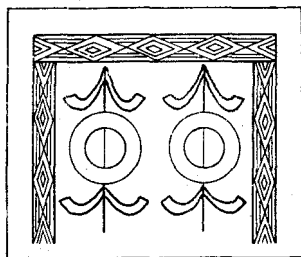


(2) 同上石棺足部側板

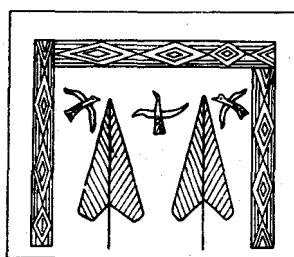


(3) 劉頂石棺側板

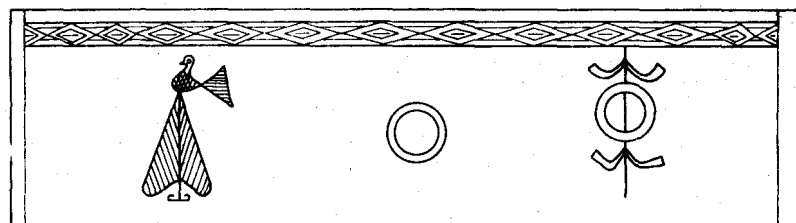
圖12 連雲港市錦屏山漢墓石棺畫像（模本）



(1) 頭部側板



(2) 足部側板



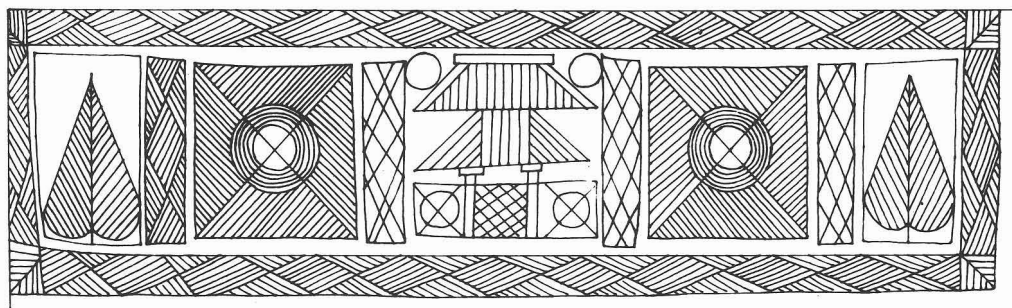
(3) 右側板 長240cm

圖13 河南夏邑縣吳莊二號漢墓石棺（石槨）畫像（模本）

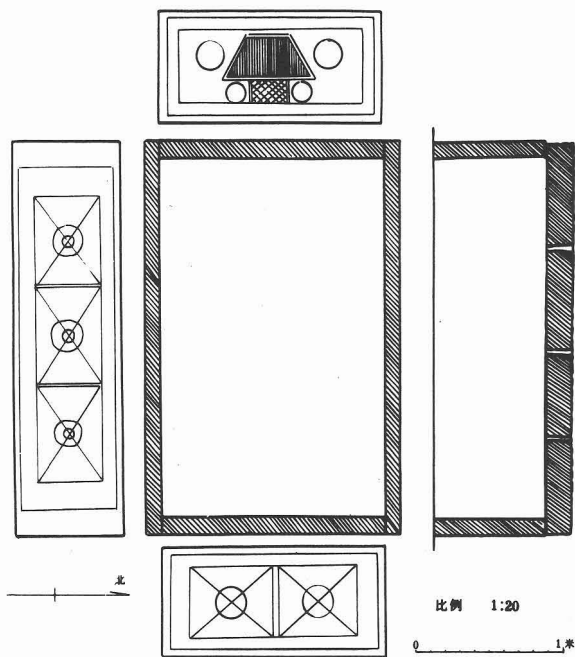
また江蘇銅山縣范山の漢代石槨墓で發見された一枚の畫像石板(圖14 (1))は、長さ三・一〇m、高さ〇・九〇mで、三區畫に分け、中央には周りに壁を描いた二層の樓閣、その左右に一個の壁に對角線の紐を通した十字穿壁文、兩端に長青樹一株をそれぞれ配していた。また徐州市の北十七kmに位置する萬寨石槨墓では合計四枚の石板(圖14 (2))が發見され、高さ七四cm、幅一五六cmの頭部側板には單層の殿堂、足部側板には二つの十字穿壁文、高さ七四cm、長さ二七四cmの左右側板は右側板のみ三つの十字穿壁文をいずれも内壁に刻していた。頭部側板の殿堂は簡素な家の形をして、范山漢墓石槨畫像と同じように屋根の左右に壁を一つずつ、左右の軒下にも壁を一つずつ配していた。

また山東の例を挙げると、鄆城縣蘇莊で發見された石槨墓の二枚の畫像石板は、頭部もしくは足部側板に該當する一枚(圖14 (3))は高さ七八cm、幅七八cmで、屋根と柱と基臺のみの簡素な殿堂を描き、左右側板のいづれかに相當する一枚(圖14 (4))は高さ七八cm、長さ二五六cmで、中央に二本の長い柱で支えた二層の雙闕と兩傍らに長青樹を描き、兩端には多くの小壁に太い紐を通した穿壁文を斜め格子狀に描いていた。また石槨ではないが、一九七八年に臨沂金雀山で發見された周氏墓群の十四號墓漆棺には興味深い畫像が描かれていた。この墓は豎穴木槨墓で、一槨一棺をなし、黒漆を塗った棺の蓋板には三十三の銅釘を打って斜めに整然と排列し、四周側板は一樣に紅色の絹を貼って、その上に左右側板は銅釘を斜めに排列して、それを黒線で結んで菱形文を作り、頭部側板(圖15 (上))は墨で二層雙闕とその間に鳥の止まった府門を描き、足部側板には簡素な單層殿堂を描いていた。この足部側板(圖15 (下))の殿堂は鄆城縣蘇莊石槨側板の單層殿堂と非常によく似ており、頭部側板の雙闕は同じく蘇莊石槨側板の雙闕に對應するであろう。この周氏墓群の十四號墓からは「周寛之」、「周□」の二顆の銅印の他に、十三號墓とともに帛畫斷片が出土して、交龍や殿閣上の瓦などの圖像が判別出來たといひ、同じく金雀山の九號墓から出土した帛畫との關連で注目される。

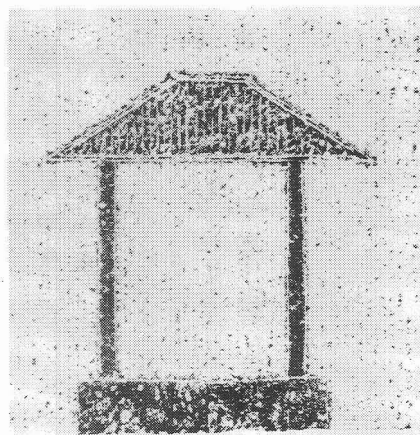
これらの長青樹や壁、或いは樓閣殿堂が何を表しているかというに、殿堂は金雀山周氏墓群十四號墓漆棺の頭足部側板でみたように雙闕と一對をなしており、雙闕は棲山漢墓石槨などでみたように西王母の世界の入口を示していたから、殿



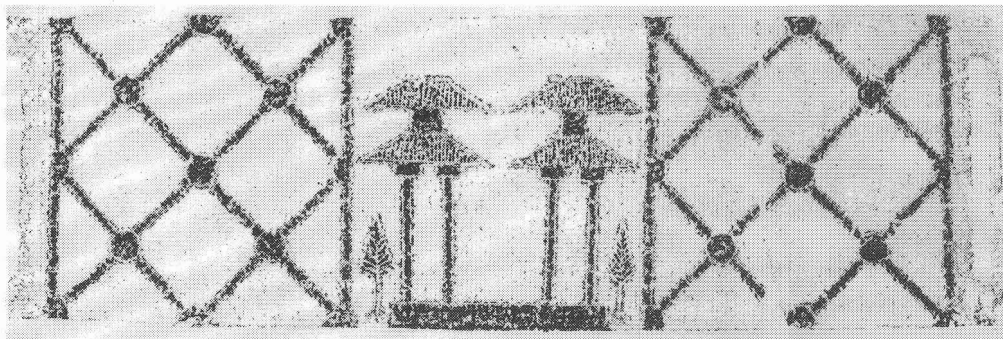
(1) 銅山縣范山漢墓石棺（模本） 長310cm



(2) 徐州市萬寨漢墓圖



(3) 鄆城縣蘇莊漢墓石棺側板（拓本）  
高78cm



(4) 同上漢墓石棺側板（拓本） 長256cm

圖14 江蘇北部、山東石棺畫像



堂も西王母の世界の殿堂を示しているよう。事實、單層の殿堂は微山縣溝南村石棺畫像(圖3 (3))でも西王母の棲む建物として描かれていた。そして長青樹は鄆城縣蘇莊石棺畫像において雙闕の兩傍らに配されていたように、西王母の棲む崑崙山を象徴しているよう。棲山漢墓中棺の左右側板において樓閣上の長青樹や、虎に似た神獸とともに描かれた長青樹が西王母の棲む崑崙山を象徴していた通りである。

また壁はというと、棲山漢墓中棺の左右側板において長青樹の兩側に一つずつ描かれていたが、先に考證した如く、中棺の内部は西王母の世界を表していたから、この壁も西王母の世界もしくは西王母の住む崑崙山を象徴するものであろう。事實、先に引用した山東滕縣馬王村出土の石棺の頭部側板(圖4 (5))では、馬車や騎馬が出入りして西王母の世界の入口を示す雙闕の屋根の上の闕と闕の間に壁が一つ置かれ、連雲港市錦屏山劉頂の畫像石板(圖12 (3))でも闕と闕の間に五個の壁から成る穿壁文を配していた。また後述する南陽市趙寨磚瓦廠前漢墓出土の畫像石(圖21 (4))は、縦長の畫面中段に鄆城縣蘇莊漢墓石棺畫像(圖14 (3))とよく似た單層殿堂を描き、その上段と下段にはともに穀粒文のある壁を中央に置いて四邊の四分の一に分割した壁と紐で繋いでいた。崑崙山の殿堂を修飾するこの壁の象徴性はもはや説明するまでもなからう。壁のみならず玉と崑崙山、西王母との結びつきは深く、『爾雅』釋地に「西北の美なるもの、崑崙の虚の瑇瑁、琅玕有り」というように、崑崙山の玉はつとに有名であり、また上述の『山海經』西山經<sup>⑨</sup>にあった如く、西王母は玉山に棲み、頭に玉製の華勝<sup>⑩</sup>をつけるのである。従って范山漢墓の側板や萬寨漢墓の頭部側板の殿堂の周圍に配された壁も西王母の世界を象徴する何らかの壁であり、夏邑縣吳莊漢墓石棺の長青樹と壁のみの文様も西王母の世界もしくは崑崙山に關係していたのである。但し穿壁文、特に鄆城縣蘇莊漢墓側板のように多數の壁を太い紐でつなぎ斜め格子狀に描いた文様は、或いは石棺を紐で縛り壁で覆うというような働きがあったかと思われる。ちょうど漢代において死者を再生させたり遺體を腐らせないよう祈願して、遺體の近くに玉器を置いたり玉衣を着せたりしたようにである。いずれにしても樓閣殿堂、長青樹、壁はいずれも西王母の世界もしくは崑崙山に關係しており、夏邑縣吳莊漢墓、銅山縣范山漢墓、徐州

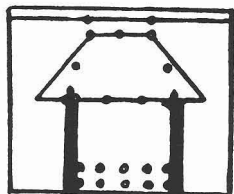
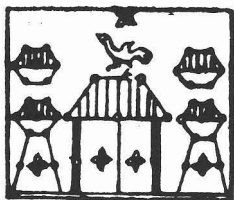
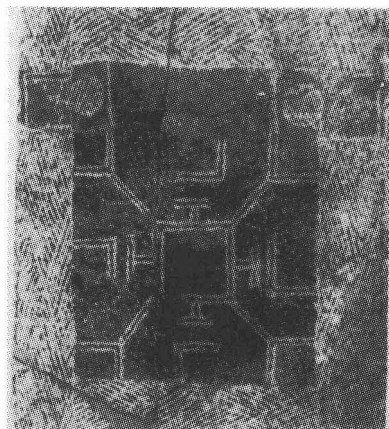


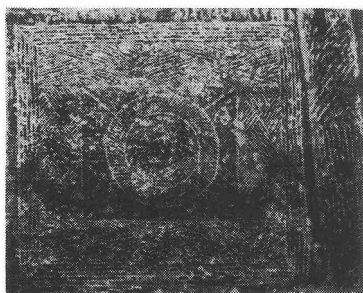
圖15 臨沂金雀山  
周氏墓群十四號墓  
漆棺

(上) 頭部 (模本)

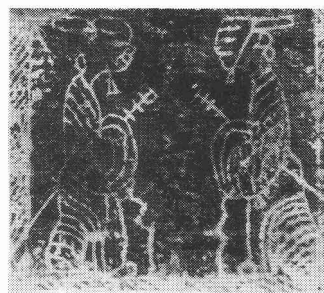
(下) 足部 (模本)



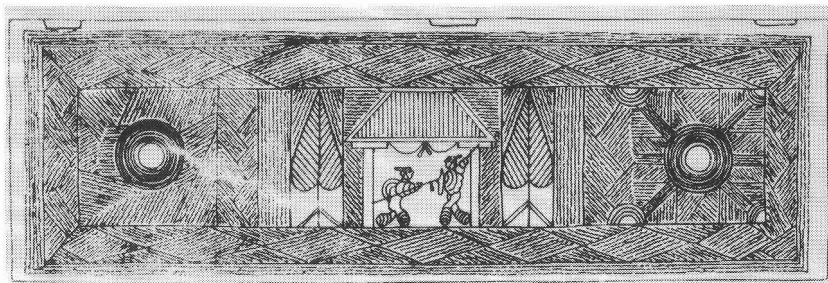
(1) 底板内壁 (部分) (拓本) 博局文



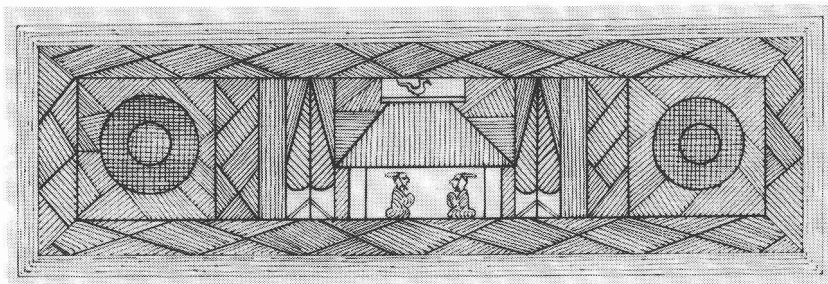
(2) 頭部側板内壁 (拓本)



(3) 足部側板内壁 (拓本)



(4) 右側板内壁 (模本)



(5) 左側板内壁 (模本)

圖16 臨沂慶雲山二號墓石棺畫像

市萬寨漢墓、鄆城縣蘇莊漢墓の石棺に描かれた畫像は、崑崙山にある西王母の世界を示しており、墓の主人公の昇仙と關連して石棺内部が西王母の世界であることを表している。つまりは棲山漢墓の石棺畫像が示したと同じ世界である。

一九八四年に山東臨沂の慶雲山で發見された最も古く前漢初期にまで遡る石棺の畫像<sup>82</sup>も、恐らく同じような内容を表しているものと思われる。慶雲山には二つの土坑竪穴墓があり、その二號墓から出土した石棺は長さ二・五m、幅一m、高さ〇・九六mで、六枚の石板から成り、蓋板を除いてみな内壁に畫像を刻していた。頭部側板の畫像(圖16 (2))は梓内の中央に壁を置いてこれを四隅から紐で引っ張り、足部側板(圖16 (3))の畫像は冠をつけて長袍を着、腰に劍を佩び曲杖を持った人物二人が向かい合って立っていた。また右側板(圖16 (4))は中央に單層の屋宇を配して、その垂れ幕の下で冠をつけた二人の人物が、一方は戟、一方は盾と劍を持って互いに渡り合う擊劍圖を描き、屋宇の兩側には長青樹、兩端には壁を一つずつ描いていた。左側板(圖16 (5))は不鮮明であるが右側板と殆ど同じ内容で、但しこちらは中央の屋宇の屋根に鳥が一羽止まり、屋内では冠をつけ長袍を着た人物が二人坐って向き合っている。また興味深いことに底板にも畫像を刻し、中央部にのみ六博の博局文(圖16 (1))を描いていた。

頭部の佩劍の二人物は棲山漢墓中棺の頭部側板内外壁において鋪首とともに描かれていたように門衛を表しているよう。右側板の屋宇内での擊劍のモチーフも同じく中棺の左側板にもみられたものであるが、頭部側板の二人の門衛と同じ冠をつけているところから、この二人物も門衛であり、恐らく擊劍の訓練をしているのであろう。無論、左右に長青樹や壁が配されているから崑崙山の仙界でのことで、配置の似る左側板の畫像も同様に崑崙山での光景を描き、左側板の屋宇と區別して屋根に鳥が止まることから樓閣内に住む昇仙した人物を描くのであろう。また底板の博局文(圖16 (1))は、棲山漢墓中棺右石板を始め微山縣溝南村の畫像石板において樓閣六博圖をみたように、昇仙した者が行う最もポピュラーなしかも神聖なゲームとしてここに局盤だけ描いたものと考えられる。ただこの局盤は方格とT・L・Vの所謂博局文の他、その外側に小さな圓圈と方框が描かれていること、また四本の線によってVと方格が結ばれていることは注目される。そ

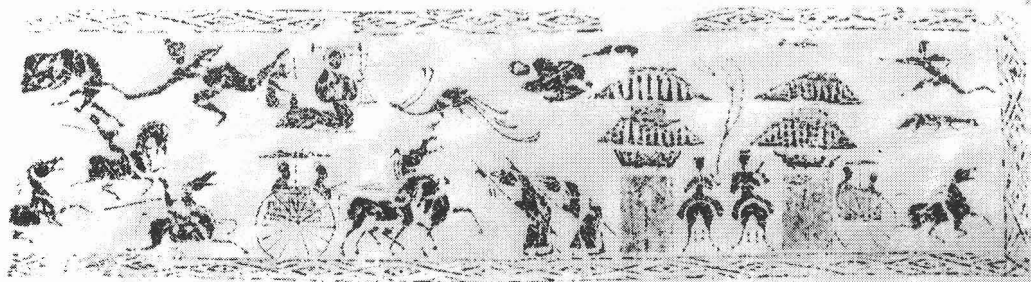
れはともかく慶雲山石棺も昇仙をテーマとし、棺内に収まった墓の主人公の靈魂の昇仙を祈願して描いたものであろう。但し昇仙の行き着く先が西王母の世界かという点、それには問題があり、前漢初期の西王母信仰並びにその圖像は未だ確認されていないので、ここでは崑崙山としておくのが妥當である。この墓が前漢初期に編年されたのは、臨沂金雀山、銀雀山でこれまで発見された五十餘基の前漢墓のうち、初期のものは陶器の鼎、盒、壺と半兩錢を同出し、晩期のものは陶器の鼎、壺と五銖錢を同出するが、この墓は半兩錢こそなかったが陶器の鼎、盒、壺の組み合わせがみられたからである。

## (二) 南陽の墓室畫像

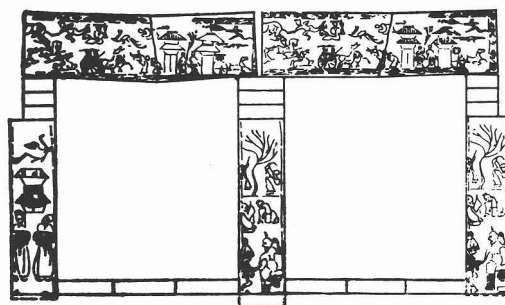
### 1 南陽、鄭州の畫像磚墓

前節において江蘇北部、山東南部の前漢畫像石における昇仙圖表現をみたが、畫像石のいま一つの本場である河南省の南陽地方においても、既に前漢時代から畫像石の制作が行われていた。また江蘇北部や山東南部と異なる現象としてこの地方では畫像磚の制作も盛んに行われ、時代的には畫像石より少し先立つ現象であった。但し畫像石にしろ畫像磚にしろ、江蘇北部や山東南部の地方と異なるのは、これらが棺ではなく、石や磚で地下に構築した墓室に描かれた点である。いずれにしろ、いま畫像石を検討する前に、新野樊集などで出土した畫像磚における昇仙圖表現を検討してみることにする。

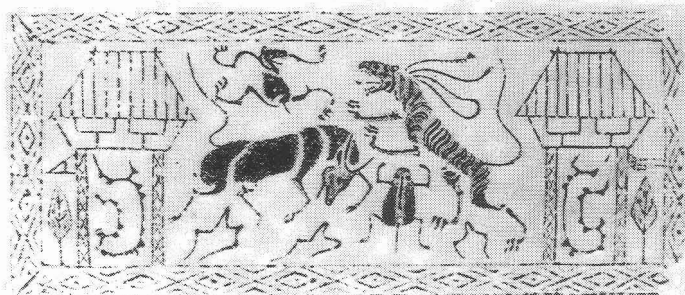
新野縣は南陽市の南方にあり、河南省でも最も南に位置しているが、一九八五年、その新野樊集の墓地で四十七基の漢墓が発見され、そのうち十基は一般の磚室墓、三十七基が畫像磚墓であった。そしてこれら畫像磚墓において、昇仙圖との關係で特に注目されるのは二八號墓の墓門門楣の畫像磚である。二八號墓(圖17 (2))はほぼ北向きの單室側室墓で、幅〇・九六m、奥行二・四m、高さ一・一七mの主室に奥行一・四mの側室が西側についていた。畫像磚は墓門のみにみられ、幅二・五一m、高さ一・四八mの墓門を五個の實心の長方形畫像磚で構築し、柱に三個、門楣に二個あてられてい



(1) 樊集二八號墓出土門楣畫像磚 長115cm



(2) 樊集二八號墓基門畫像磚



(4) 樊集出土畫像磚 長100cm



(5) 南陽市郊段莊村收集畫像石(拓本) 西王母 高42cm

(3) 樊集三七號墓出土門柱畫像磚 高112cm

圖17 新野樊集畫像磚(拓本)及び関連畫像

た。門柱は東柱が闕と門衛、中柱と西柱が畫像が同じで樹木と人物數人を描き、門楣の二個も畫像が同じであった。

さて門楣の畫像磚（圖17 (1)）の内容は、右側に豪壯な二層の雙闕を配してその間を騎馬二騎がこちらに背を向けて入って行き、左側下段は二人の乗る二頭立ての輶車を先頭に後ろに騎吏三騎を従えた一行が進み、その右前方の雙闕の傍らでは二人の門衛が裂飾りのついた檠戟<sup>87</sup>を手に拜禮し馬車を迎えている。また左側上段には玉勝の飾りをつけた西王母が坐して左傍で玉兔が仙藥を搗き、その右には冠羽をつけ尾羽根の長い鳥一羽と西王母に向かって拜禮する人物一人が描かれ、左端には角で突きかかる牛と鬪う人物一人が描かれる。この畫像は先にみた棲山漢墓中棺の左右側板の畫像と驚く程似ており、馬車に乗って來た人物が雙闕の門衛に迎えられ、更に雙闕の中へ入って、西王母に拜謁する様を表している。雙闕の内側が西王母の世界で、冠羽をつけ尾羽根の長い鳥は仙界にふさわしく鳳凰である。また注目すべきことに雙闕の間には一株の樹木が描かれており、これは棲山漢墓中棺の左側板でみた西王母の世界の聖樹に對應しよう。従ってこの圖も昇仙圖であり、墓門に描いて死後の靈魂の西王母の世界への昇仙を表しているのである。

新野樊集の畫像磚墓にはもう一つ西王母を描いた三七號墓の畫像磚<sup>88</sup>がある。三七號墓は雙室墓で、二八號墓と同じく五個の實心畫像磚で構成された墓門の門柱にあてられていた。畫像（圖17 (3)）は中段の上方から寫した屋根を境に、下には荷を積んだ四頭立ての馬車と駱駝を配して、前を横切る駱駝に驚きたじろぐ馬に車上の二人が鞭をいれるユーモラスな光景を描く。また屋根のすぐ上には互いに激しく鬪う虎と熊、そして鳳凰を描き、その上には玉勝をつけ左手に何かを持つ西王母と何かを差し出す羽人、仙藥を搗く玉兔を描き、最上部には三羽の鳥と猿のいる樹木を描いて、樹下で一人がそれに弓をひき、傍らに猿の方を指差す人物と犬がいる。中段の屋根は恐らく闕樓のような門を示したものと思われ、その内側が西王母の世界である。左側の虎に似た獸は右側の熊に似た獸と鬪っているが、後者は前者によって追い立てられているかの如くである。虎が熊以外にも角をもった牛などと雙闕の傍らで鬪うモチーフは、新野樊集出土畫像磚（圖17 (4)）などにおいてよく取り上げられる。棲山漢墓中棺の左側板外壁（圖2 (1)）でも虎に似た神獸がいて長青樹に象徵される崑崙

山の門を守護していたが、この虎に似た獣もそれに該当するものであろう。また西王母とその前で何かを差し出す羽人のモチーフは南陽市郊段莊村で収集した西王母像畫像石<sup>(9)</sup>(圖17 (5))にもみられ、羽衣を着た羽人は仙界の一員として玉兔など西王母の眷屬とともに西王母に仕える者であろう。しかし何よりも注目すべきは、樹木に止まった鳥を樹下の人物が弓で射るというモチーフが西王母の世界内に描かれていることで、棲山漢墓中棺の左側板にみた西王母の世界の聖樹のモチーフがここにも確かめられたのである。要するに三七號墓の門柱の畫像磚は西王母の世界を表しているのである。

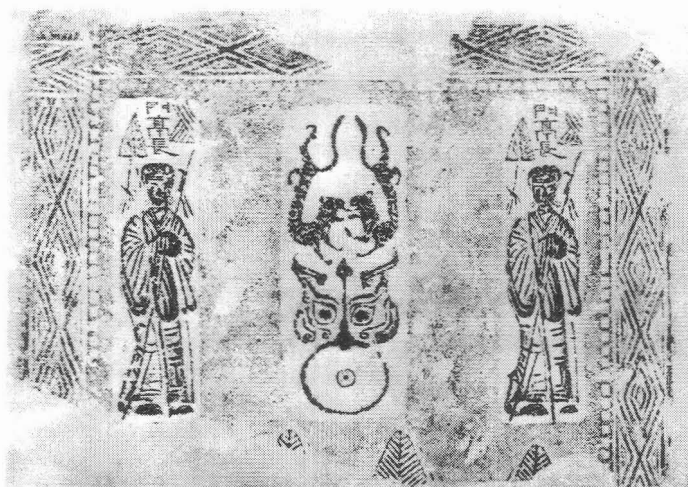
また新野樊集の畫像磚墓の墓門柱によく見受けられるものに闕のテーマがある。二四號墓出土の東柱畫像磚<sup>(10)</sup>(圖18 (1))を例にとると、畫面上方に頂きに鳳凰が止まり屋根の兩側に長青樹が生えた二層の闕があり、その前に槩戟を持った二人の門衛が立ち、下方には胴體に縞文様のある虎に似た神獸、珍しくも獸の足までついた鋪首、そして盾を脇に抱え武冠をつけた門吏が描かれる。山東の石棺畫像でみた長青樹のモチーフが南陽でもみられることが注目されよう。この長青樹は南陽では雙闕の兩傍らに配される(圖17 (4))ことが多いが、ここでは棲山漢墓石棺畫像と同じく屋根に生え、闕が崑崙山の西王母の世界の入口であることを示している。その門番として描かれた槩戟を持つ二人の門衛、虎に似た神獸、盾を持つ門吏も、これまで西王母の世界の入口に見てきたものである。この門衛は淅川出土畫像磚(圖18 (2))などでは「門亭長」とか「亭長」と榜題がついており、榜題の傍らの長青樹が西王母世界の入口の門番であることを物語っている。

新野樊集以外にも南陽の畫像磚には昇仙圖を表しているとみなされる畫像磚が多々ある。唐河新店で發見された畫像磚<sup>(11)</sup>(圖18 (3))は出土の状況は明かでないが、左に二人の乗る一頭立ての輶車と騎吏を一騎描き、中央には二層の雙闕と盾を持って立つ門吏一人を配し、右には鶴に似た鳥の止まる二層の樓閣と幕の垂れた階下に酒尊などの食器を中に坐して向き合う戴冠の人物二人を描き、左の人物は先端に何かついた棒を持ち、右の人物は笏を持っている。そして雙闕と樓閣の周りに五株の長青樹を配し、畫面の上部には縁に沿って魚を四匹横に並べている。この圖は最早や言うまでもなく西王母の仙界への馬車による昇仙とそこでの生活を描いていよう。唐河謝莊出土の畫像磚<sup>(12)</sup>も殆ど全く同じ内容であったが、唐河

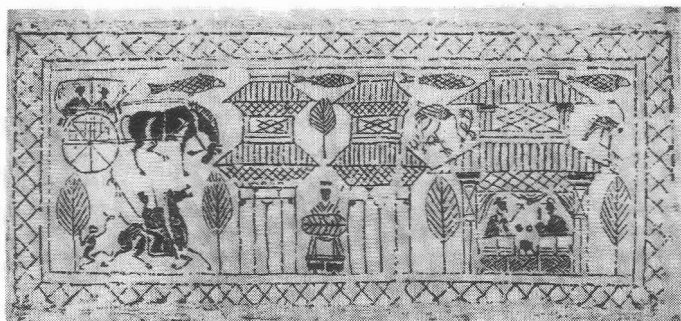




(1) 新野樊集二四號墓  
出土畫門柱像磚  
高120.5cm



(2) 浙川出土畫像磚 門亭長 幅36cm



(3) 唐河新店出土畫像磚 長88.5cm



(4) 唐河出土畫像磚 長85cm

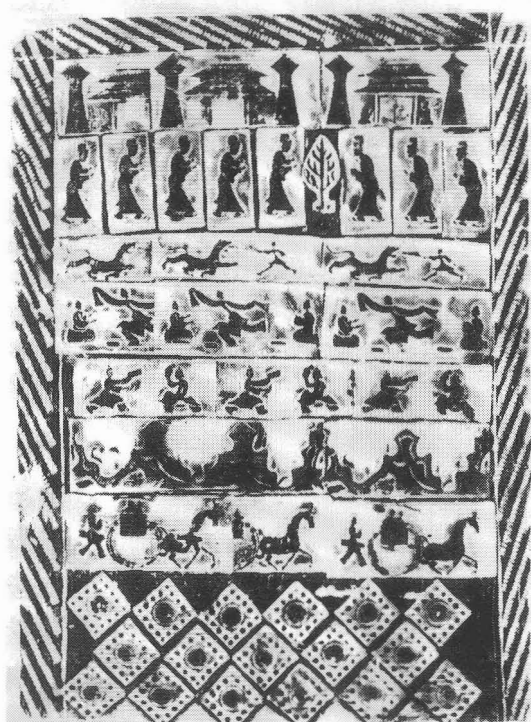
圖18 南陽畫像磚（拓本）



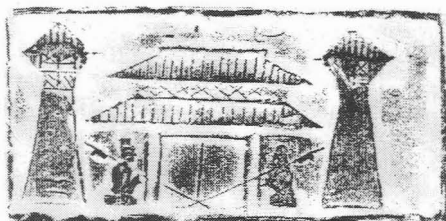
で發見された別の畫像磚<sup>(96)</sup>(圖18 (4))は畫面上段にこれと同じ内容を描き、下段には樹上の鳥を射るモチーフ、八個の手玉を操る弄丸の人物、四人による舞樂の場面を描いていた。下段は崑崙山の内部の世界を表し、上段の屋内の二人が舞樂や弄丸を樂しむのである。

南陽の新野樊集と唐河の墓室畫像磚をみてきたが、これらの制作年代は、出土狀況のわかる新野樊集の場合、王莽期より早い前漢末期と推定<sup>(96)</sup>されている。というのはこれらの畫像磚墓では副葬品に南陽の王莽時期特有の豚、犬など家畜、鶏、鴨など家禽の明器がみられるが、まだ家畜類が多く家禽類が少ないこと、前漢の五銖錢は出たが王莽時期の貨幣は出なかったからである。唐河、とりわけ新店、謝莊の畫像磚は表現が新野樊集と較べ未だ硬いことから、これと同時期もしくは少し早い時期のものであろう。従って南陽地方でも前漢末期の畫像磚墓において昇仙圖の制作が行われていたことが、これによって判明したのである。

ところで、河南省は他に鄭州で前漢時代の畫像磚が大量に出土している。これらの畫像磚は磚室墓の建築資材である空心磚に何種類かの小畫面の型を押して畫面を構成したもので、畫像としての一貫性に缺ける憾みがあるが、これまで見てきた南陽の畫像磚とモチーフの類似が見られることも事實である。例えば鄭州出土の畫像磚<sup>(97)</sup>(圖19 (1))では畫像を七層に分けて配するが、上から第一層の雙闕及びその間の府門、第二層の長青樹と笏を持った人物、第四層の舞樂、第五層の擊劍、第六層の山林狩獵、第七層の車馬出行などは、これまでに南陽の畫像磚、或いは江蘇北部、山東南部の畫像石棺で見えたモチーフである。型の使用による制約はあるが、これも昇仙をテーマに扱っているものと考えられ、第一層の雙闕と府門<sup>(98)</sup>の圖(圖19 (2))もよく見ると、府門の前に戟を肩にして坐す二人の門衛がおり、府門の屋根の上には鳥が左右に止まっている。この雙闕と府門のモチーフは鄭州の畫像磚では屢々使われ、一九五四年鄭州二里崗出土の漢畫像空心磚墓<sup>(99)</sup>でも三件發見されているが、一九七〇年出土の鄭州新通橋漢代畫像空心磚墓<sup>(100)</sup>や近年鄭州發見の畫像磚<sup>(101)</sup>では、更に雙闕の兩側には長青樹が生えている。第二層の長青樹ともども雙闕と府門が崑崙山の西王母の世界のものであることを示しているのである。河南禹



(1) 鄭州出土畫像磚 高63cm



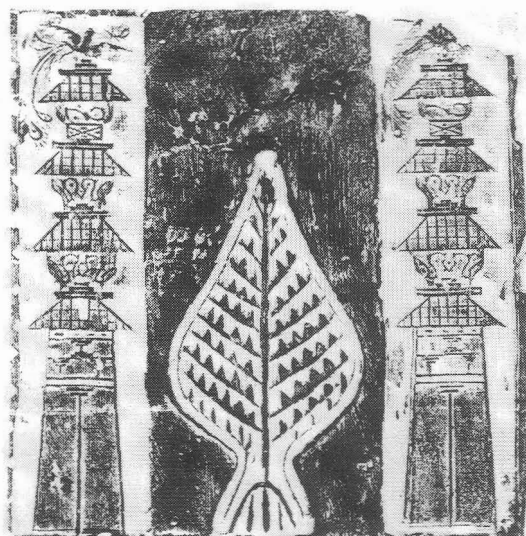
(2) 鄭州出土畫像磚 雙闕 長15cm



(3) 鄭州出土畫像磚 西王母 長17cm



(4) 鄭州出土畫像磚 西王母 長9.5cm



(6) 禹縣出土畫像磚 雙闕 高19cm



(5) 鄭州出土畫像磚 三足烏 九尾狐 長8.8cm

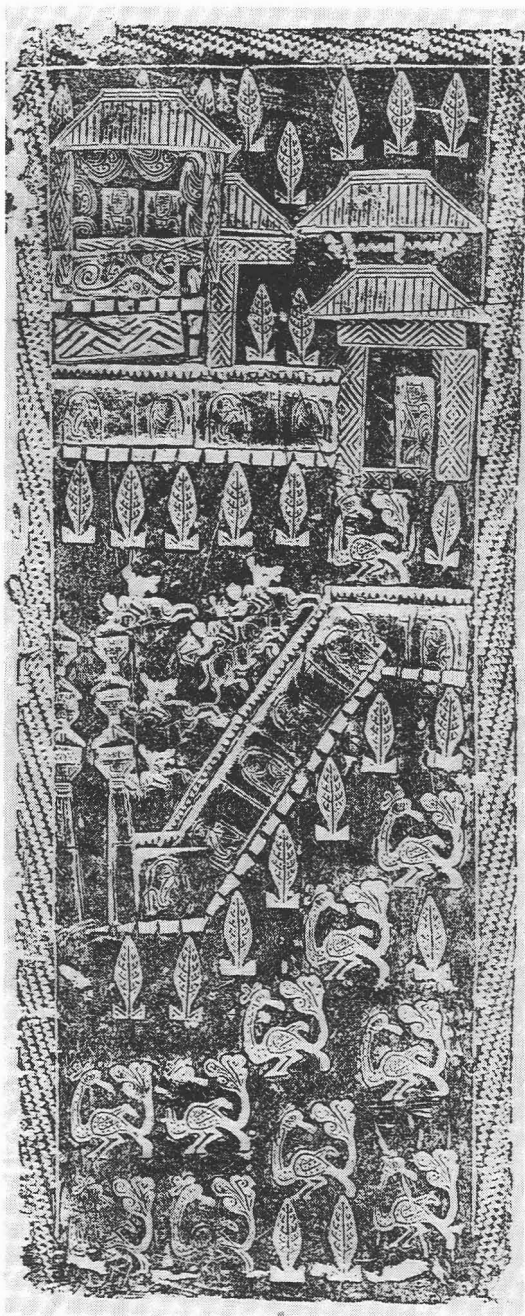
圖19 河南出土畫像磚（拓本）

縣出土の畫像磚（圖19 (6)）において、鳳凰の止まる雙闕の間に大きく表された長青樹も同様である。要するにこの畫像磚は、下から上へと物語が展開し、最下層の馬車で出行した人物が第二層の笏を持った門吏たちの出迎えを受けて西王母の世界へと昇仙し、その雙闕を入って舞樂などを楽しみながら死後の生活を送るのである。

事實、鄭州では西王母も盛んに表現され、鄭州出土の畫像磚（圖19 (3)）では山嶽中に玉勝をつけた西王母が表されて、周圍に仙藥を搗く玉兔、九尾狐、三足鳥を抱く細腰の玉女などがおり、注目すべきことに左端と右端には長青樹も描かれている。また上廣下狹の臺の上に坐した西王母と玉兔を描く畫像磚（圖19 (4)）、樹木に止まった三足鳥と九尾狐を描く畫像磚（圖19 (5)）も屢々見るものである。

一九五九年に出土の鄭州南關一五九號墓の墓門を構成していた二件の畫像空心磚も、恐らく昇仙と關係があろう。この畫像磚は大きさが縦一二〇cm、幅四五cmで、一件は型を逆さに押したり畫像が亂れているので別の一件（圖20 (1)）を取り上げると、これは「庭院圖」という呼稱もあるように、屏で圍まれた邸宅の内外が表されている。まず中段の左側に雙闕があって屏が右上へと連なり、その下部の外側には長青樹が屏に沿って一列に植えられ、冠羽と長い尾羽根の認められる鳳凰が九羽配されている。そして屏の中はというと、庭には後ろ向きに弓を構えた射騎が數騎表されて、やはり長青樹と鳳凰が配され、右奥には二層の門樓があって左へと屏が続いている。門樓には門衛がいて、その更に奥が後院にあたり、左上の二層の樓閣では階上の幕の垂れた室内には二人の人物がおり、階下には龍が表されている。限られた數の型を繰り返し用いて作ったため畫像に稍や不自然な感じがあるのは否めないが、長青樹や鳳凰が描かれるように、勿論「貴人の住宅」などではなく、崑崙山にある雙闕を境とした西王母の世界を表しているのである。

恐らく洛陽卜千秋墓主室頂脊壁畫の昇仙圖（圖9）も、このような西王母信仰や昇仙信仰を背景に少し以前に作られたものである。洛陽でも鳳凰の止まった雙闕と府門、そして門衛を描いた畫像磚（圖20 (2)）が出土しており、前漢末期にこのような信仰があったことは確實である。但し前漢中期の卜千秋墓壁畫昇仙圖では乗り物が蛇や三首鳥とはいえ、そ



(1) 鄭州南關一五九號漢墓出土畫像磚 高126cm



(2) 洛陽出土畫像磚 高60cm

圖20 河南出土畫像磚（拓本）

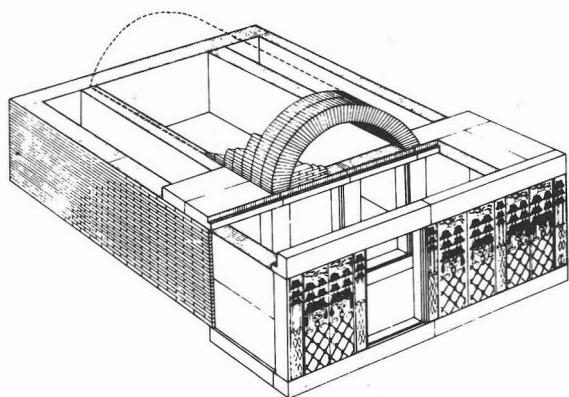
れらに乗って空中を飛んで昇仙したが、この場合は馬車であり、前漢中期と末期ではここでも大きな落差があったのである。

## 2 南陽の畫像石墓

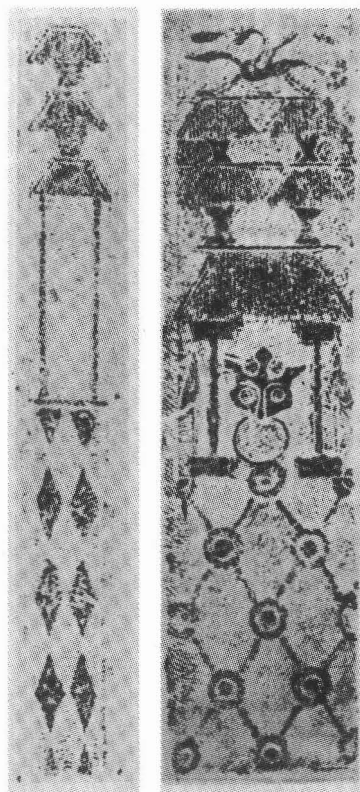
次に前漢時代、南陽の畫像石墓において昇仙圖の制作がどのように行われたか、みてみよう。現在、南陽でこれまで發見された畫像石墓のうち、最も早期のものは南陽市趙寨磚瓦廠漢畫像石墓で、前漢中期の宣帝（前七三—四九）の頃まで遡ると推定されている。それに次いで唐河縣石灰窰村漢畫像石墓、南陽楊官寺漢畫像石墓があり、次いで王莽新の天鳳五年（後一八）の紀年をもつ唐河縣新店漢鬱平大尹馮君孺人畫像石墓がある。大量の畫像石を出土して有名な唐河縣針織廠漢畫像石墓はそれに次ぐ時期のものであろう。<sup>⑭</sup> 要するに南陽の初期畫像石墓の場合は、天鳳五年の馮君孺人畫像石墓を基準に編年することが出來、前漢時代に既に畫像石がかなり盛んに制作されていたことは確實に言えるのである。

さて、一九七六年、南陽市東郊の趙寨磚瓦廠で發見された畫像石墓（圖21）<sup>⑮</sup>（1）は、墓室の大きさが幅五・三〇m、奥行五・八六mで、殆ど正方形をなし、東向きに造られていた。内部は前室、内主室、左右二側室に分かれ、磚と石を混用して、前室（大門と前室左右二壁）と南北二側室の天井は石で、内主室と側室の周壁、内主室のアーチ形天井は磚で構築されていた。畫像石が見つかったのは大門で、大門は四つの門を並べ、五本の柱と八枚の門扉を組み合わせて造っていた。門扉は高さ一・七〇mで、中央の四枚の門扉は幅〇・四五m、兩側の四枚の門扉は幅〇・五二mであった。そして畫像は五本の門柱に闕の圖を、八枚の門扉に樓閣の圖をそれぞれ一様に刻んでいた。

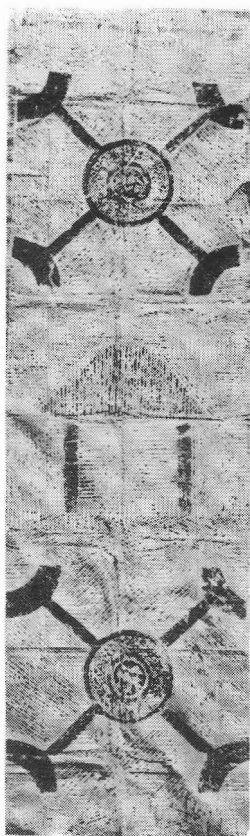
門扉に刻まれた畫像（圖21）<sup>⑮</sup>（3）は、下部には全部で十三の壁に紐を通した穿壁文を描き、上部には單層の屋宇の上に二層の望亭を二つのせた樓閣を置き、正面入口には鋪首をつけて、頂に鳳凰一羽が止まり、兩傍らには長青樹が配されていた。建物を樓閣と言ったが、先に取り上げた同じような形をした山東滕縣馬王村出土石棺頭部側板の闕樓（圖4）<sup>⑯</sup>



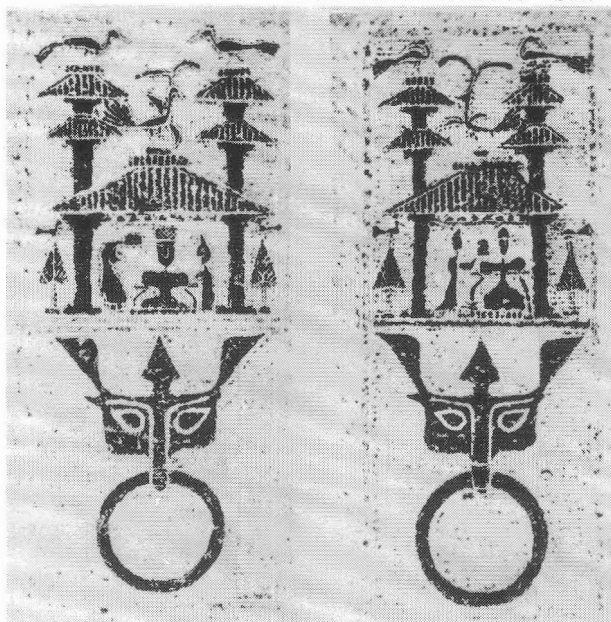
(1) 趙寨磚瓦廠畫像石墓



(2) 同上門柱畫像石(拓本) 闕  
(3) 同上門扉畫像石(拓本) 樓閣

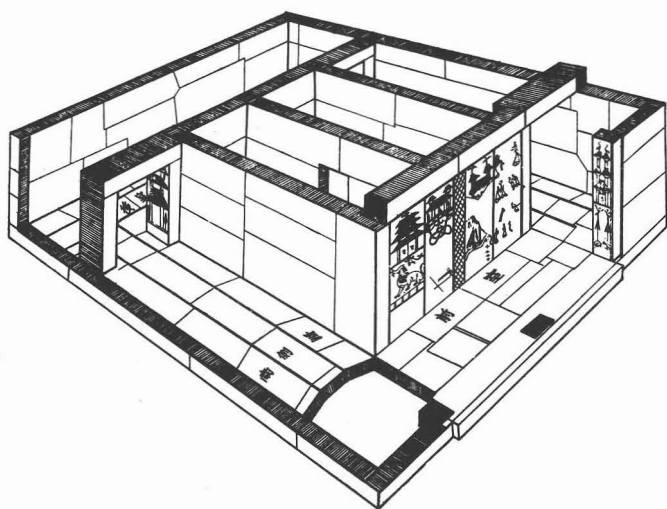


(4) 趙寨磚瓦廠漢墓出土畫像石  
(拓本) 廳堂 高172cm

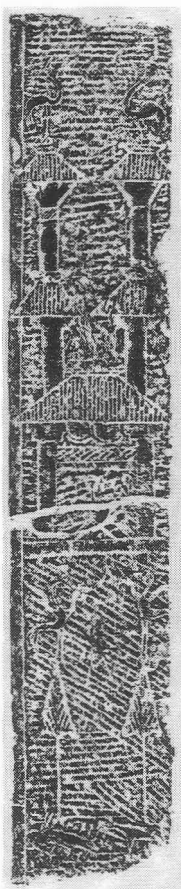


(5) 唐河縣石灰窖村漢墓門扉畫像石(拓本) 各高102cm

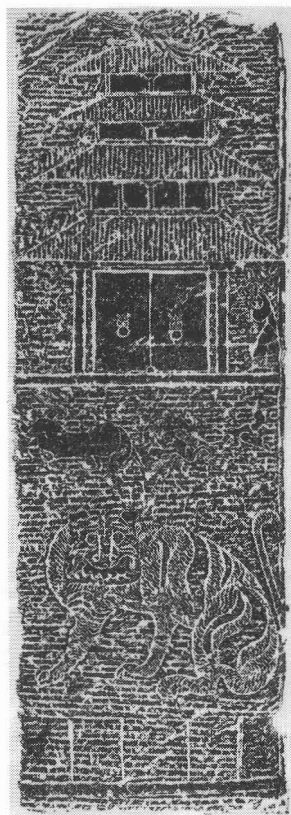




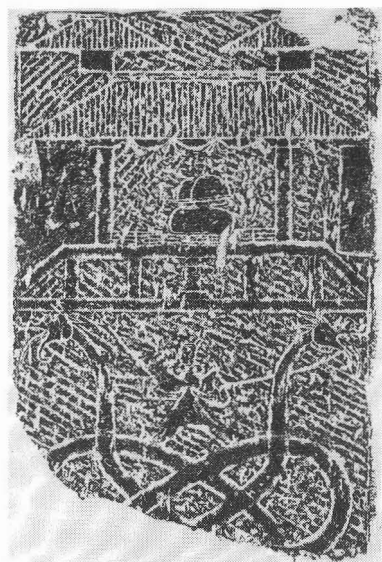
(1) 楊官寺畫像石墓



(2) 墓門北側柱南側面畫像石(拓本)



(3) 南主室南扇門正面畫像石(拓本)



(4) 南主室北扇門正面畫像石(拓本)

圖22 南陽楊官寺畫像石墓

との違いは、後者は下が吹き抜けの構造をしているのに對して、これは下が鋪首のついた門扉の構造をなしていることである。また門柱に刻まれた畫像（圖21 (2)）は、縦長畫面の下部に菱形文を十個二列に並べ、上部には第一層の柱が異常に長く表された三層の闕を描いていた。

これらの畫像の意味するところは、樓閣は頭頂に冠羽と長い尾羽根をつけた鳳凰がおり、兩傍らに崑崙山を象徵する長青樹が生えているところから崑崙山の仙界に屬することがわかり、加えて崑崙山を象徵する穿壁文の壁が崑崙山の樓閣であることを傍證する。壁の象徴性は江蘇北部や山東南部の前漢の石棺畫像でも見たが、南陽においても南陽市趙寨の同時期の別の墓で出土したという廳堂圖（圖21 (4)）をみれば明かである。この圖は中段に簡素な單層屋宇を描いて上と下には壁を四隅から紐で吊った十字穿壁文を配している。單層屋宇は上述の山東鄆城縣蘇莊出土石棺の屋宇（圖14 (3)）と似、同じく崑崙山の樓閣を表して、上下の壁が崑崙山の樓閣であることを象徵しているのである。また闕は、畫像配置の點からも上記の樓閣に至る入口の闕門、即ち崑崙山の世界の入口を示していると思われるが、同じく南陽市趙寨で出土した別の畫像石では、三層の闕を描いてその兩傍らに長青樹を配しており、この推測を裏附ける。要するに闕も樓閣もその奥が崑崙山の世界であることを示しており、つまりは前節の石棺でみたと同じく、その内部、ここでは墓室内部が崑崙山の世界であり、墓の主人公が崑崙山に住んでいることを示しているのである。

趙寨磚瓦廠のこの樓閣圖と似た畫像はまた唐河縣石灰窰村畫像石墓でも見られ、そこでははっきりと墓の主人公が崑崙山の樓閣内にいるところを描いている。この墓は南を向き、墓室の大きさは幅三・三四m、奥行三・九七mで、室の中間に隔牆を築いて東西二室から成っていた。畫像石は東室の墓門に集中し、門楣、門柱二本、門扉二枚の五件が出土した。ここで注目されるのは二枚の門扉の畫像（圖21 (5)）で、兩者は殆ど同じ圖様であったが人物像だけ異なっていた。即ち共に下半分に鋪首を大きく描いて、上半分には單層の屋宇に二層の望亭を二つのせた例の樓閣を描き、二層建物の上に鳥が止まり、望亭と望亭の間には長い冠羽の鳳凰が羽ばたき、樓閣の兩傍らには鳥の止まった長青樹を配していた。ここま



では兩者同じであるが、屋内の人物は、西扉の方は中央に几に馮つて坐す男性を大きく描いて、左に拜禮する人物、右に何かを捧げる人物各一人を配し、東扉の方は右に几に馮つて坐す女性を大きく描いて、左に何かを差し出す人物を配していた。つまり趙塞磚瓦廠の樓閣の鋪首を下に移して代わりに人物を描いたのである。樓閣が趙塞磚瓦廠と同様、崑崙山の樓閣であることは勿論、屋内の几に馮る一際大きな男女二人は樓閣の奥にいる筈の人物、即ち墓室内部の墓の主人公を表しているよう。この墓は墓室が東西二室に分かれて夫婦合葬墓とみられるので、男女の墓主人を描いたのである。要するに崑崙山に既に昇仙して、その樓閣内で侍者にかしづかれながら生活する墓の主人公夫婦を描いており、これも一種の昇仙圖といえる。

また趙塞磚瓦廠畫像石墓、石灰窑村畫像石墓に次いで古い南陽楊官寺漢畫像石墓<sup>⑩</sup>は、昇仙圖と關連して興味深い畫像を示している。この墓(圖22 (1))は東を向き、墓室の大きさは幅五・六m、奥行六・四七mで、前室、主室、南側室、北側室、後室に分かれ、主室は更に隔牆によって南主室と北主室に分かれていた。後室の無い趙塞磚瓦廠畫像石墓と異なり、主室を中に回字形、即ち回廊式の構造をなし、より新しい墓葬形式を示していた。畫像石は墓門と主室の門に集中し、他後室の南側入口に一箇所あった。墓門は中柱と兩側側柱と門楣二石によって門框を形造り、畫像は中柱の正面と南側柱の北側面、北側柱の南側面、そして門楣に刻まれていた。また主室の門は中柱、兩側柱、門楣二石、そして門扉四枚によって形作り、畫像は門扉四枚と中柱正面に刻まれていた。後室の南側入口の畫像は北側側柱の南側面に刻まれていた。

これらの畫像石は未完成であったり描き直して二重に刻したり、また一部壊れたりして、必ずしも完全ではなかったが、いま昇仙圖との關連で興味深いのは次ぎの三つの畫像石である。まず墓門北側柱南側面は樓閣圖(圖22 (2))で、單層屋宇に二層望亭二つを載せた樓閣を描いて、その頂きに鳥が止まり、樓閣の前面には鳥の止まる二株の長青樹を配していた。これは趙塞磚瓦廠の樓閣と較べると鋪首の描かれていないことだけが異なり、崑崙山の樓閣を表しているよう。また主室の門扉、とりわけ南主室の二つの門扉に刻された畫像(圖22 (3))は、左側門扉は上に四層の樓閣を描き階下の入口に鋪首

をつけて、頂きに鳳凰、右傍らに門衛を置いていた。そして樓閣の前面には牛と怪獸の闘うところを描き、更に前面には胴體に縞文様のある虎を大きく獐猛な様に描いていた。また右側門扉（圖22（4））は下半分が缺け、上半分も上端が缺けていたが、單層屋宇に望亭二つを載せた闕樓を描いて、屋内に盾を膝の上に横たえて坐る門吏<sup>⑬</sup>、屋外の兩傍らに長青樹を配し、樓閣の前には互いに絡み合った二匹の龍とその首に手綱をかけて御す人物を描いていた。この二匹の龍と御者、虎で思い起こされるのは上述した臨沂金雀山九號墓出土のあの帛畫昇仙圖（圖8）である。帛畫の下部には昇仙した人物が乗って來た二匹の龍とその御者が描かれ、そのすぐ上には縞の文様のある二頭の虎が跳ね、崑崙山の仙界を守護していた。この門扉の二匹の龍と虎もおのの昇仙の乗り物としての龍、崑崙山の仙界を守護する虎を表しているよう。そして昇仙の手順としては、龍に乗って崑崙山に着くと、盾を持った門吏の守る闕樓から入って、更に虎の守る樓閣へと入って行くのである。従ってこれら門扉の圖も昇仙と密接な關わりのあることがわかり、また前漢中期の金雀山帛畫との類似は、山東南部と南陽との文化交流の密接さとともに、この楊官寺畫像石が昇仙圖の古い形式によって描かれたことを物語っている<sup>⑭</sup>。

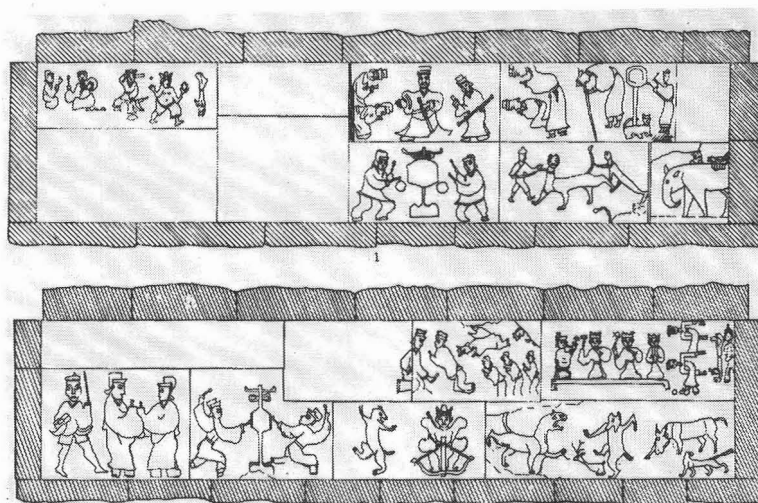
しかし南陽地方における墓室の昇仙圖も、王莽期の天鳳五年（後一八）に造營された唐河の馮孺人墓<sup>⑮</sup>に至ると、表現の形式が曖昧になるようである。この墓は一九七八年に發掘され、墓室は東を向き、大きさは東西の長さ九・五m、南北の幅六・一五mで、前室、中室、主室、閣室に分かれ、前室には南車庫と北庫房の耳室がつき、主室は南主室と北主室、閣室は南閣室、北閣室、西閣室にそれぞれ分かれていた。構造的には楊官寺畫像石墓と同じく回字形の墓室である。また多くの題記が刻されていたのもこの墓の特徴で、全部で八箇所あり、特に主室の中央柱には、

爵平大尹馮君孺人、始建國天鳳五年十月十柒日癸巳葬、千歲不發

と、被葬者の名前<sup>⑯</sup>、官職、造營年月日がはっきりと記されていた。畫像石は合計三十五石あり、大門、中大門、內門、南車庫門、北庫門、中室南門などの門柱、門楣、門扉の他、北閣室の北壁、南閣室の南壁と北壁に刻されていた。しかしこ



(1) 南閣室北壁畫像石 (拓本)

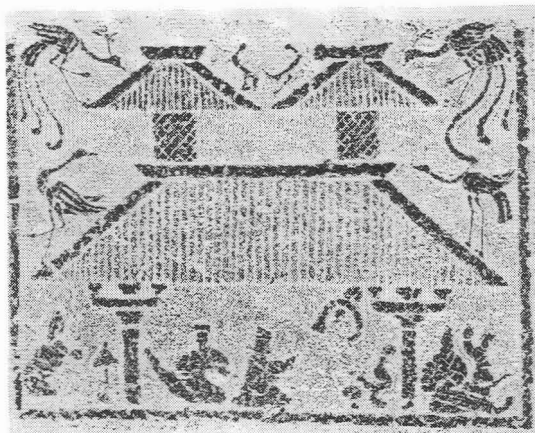


(2) 北閣室北壁及び南閣室南壁畫像石 (模本)

圖23 唐河馮儒人畫像石墓 新 天鳳 5 年 (後18)



(1) 前室南壁 (拓本) 高84cm



(2) 前室北壁 (拓本) 高78cm

圖24 唐河針織廠畫像石墓

れまでの楊官寺畫像石墓などと異なり、門の畫像は四神、鋪首、執笏・執盾門吏、二龍穿壁圖などを描くのみで内容的に著しく抽象化し、闕、樓閣などは描かれなかった。闕や樓閣は代わりに内部の閣室に描かれていた。閣室の畫像石は配置の仕方が必ずしも規則的でなかったが、南閣室の北壁(圖23 (1))には中央に單層の屋宇を配して、屋内に三人の女性、屋外に二人の男性を描き、屋宇の左右に闕を一つずつ置いて併せて雙闕を構成し、闕の外側には笏を持つ門吏、盾を持つ門吏を描いていた。そして左側には戟を持った侍者を従える人物が上述の笏を持った門吏と互いに拜禮をしているが、これがこの場面の主人公で、門吏の拜禮を受けてこれから雙闕、屋宇内へと入り、屋内に坐す二人の女性の前に置かれた几に馮って坐るものと思われる。従って唐河縣石灰窰村畫像石墓門扉畫像の樓閣内の几に憑り坐す人物圖(圖21 (5))と類似し、同じく昇仙後の有り様を描くものと思われる。また多くの人物の拜禮を受ける圖(圖23 (2))は北閣室の北壁、南閣室の南壁にもあり、昇仙した人物が多く的人物に取り巻かれ、また周りに描かれた舞樂、建鼓、虎や象の登場する百戲などを樂しみながら生活する情景を描いたものと思われる。このように昇仙後の生活の有様が墓室内に刻されるようになるのは、先にみた棲山漢墓石棺などの棺内畫像(圖2 (2)(4))と共通する現象といえるが、その昇仙の畫像内容は少しウェイトが低くなるとともに曖昧になっているのは否めない。しかし唐河針織廠畫像石墓のように傳説や故事圖が未だ顯著にみられないのはその前段階の證といえる。

唐河針織廠畫像石墓<sup>⑩</sup>は一九七二年に發掘され、墓室は東向きで、大きさは奥行五・〇八m、幅四・五二m、高さ二・二三mであった。墓門、前室、南北兩主室、南北兩側室、後側室から成り、馮孺人墓と同様に平面は回字形をしていた。畫像石は全部で七四石出土し、壁面、柱、横額、天井などに配されていた。主室内の各所に描かれた「范睢受袍」「聶政自屠」「桃殺三士」などの故事圖<sup>⑪</sup>、天井に描かれた太陽、月、虹、四神などの畫像も興味深い。いま昇仙と關係のある畫像を探せば、前室の南北壁に配された二つの畫像石がある。南壁の畫像(圖24 (1))は拜禮圖であり、兩傍らに長青樹が生え、二つの望亭のついた樓閣内に、几に憑った人物が拜禮を受ける光景が描かれている。屋根の上には鳥が止まり、

羽人らしきものが空中を飛んでいるのは興味深い。望亭の間にいる人物は時折仙界の樓閣に登場するが、昇仙を迎える側の人物であろう。また北壁の畫像(圖24 (2))には南壁と同じような樓閣が描かれ、室内では中央に客が坐して前で曲藝が演じられ、室外では瑟などの樂器が演奏されている。これも屋根の上に鳳凰や羽人などが舞っており、仙界の光景であろう。この他にも墓門門楣に出行圖などが描かれるが、主室に故事などが描かれたように、昇仙のテーマが後退したのは否めないところである。この針織廠漢墓はおよそ後漢初期に編年されているが、以後、南陽の畫像石は動物などの登場する角抵戲や故事などに關心を示して、この傾向はますます顯著になるのである。

## 二 後漢畫像石における昇仙圖

### (一) 四川の畫像石棺、畫像磚墓

#### 1 四川の畫像石棺

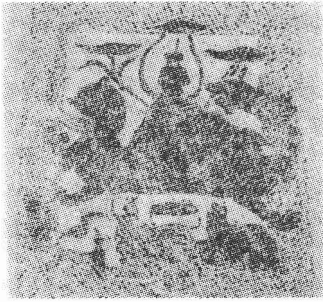
先に江蘇北部と山東南部の前漢時代における畫像石棺を考察したが、これらの地域では後漢時代に入っても依然として畫像石棺が制作された。しかし石槨墓の時代は既に盛期を過ぎたとみえて、現在確認し得る石棺畫像の數もそれ程多くはなく、代わって幾つかの室を持つ墓室が盛んに造られた。そこでこの地域の畫像石棺は後に他との關連で觸れることにして、今は後漢時代に入って非常な勢いで流行した四川の畫像石棺について述べることにする。

四川地區の漢代の墓葬形式には土坑墓、磚室墓、崖墓などがあり、畫像石棺は磚室墓<sup>(18)</sup>、崖墓などで多く發見されている。一九七二年に一號墓、七三年に二號墓、七四年に三號墓と三回に分けて發掘され、合計六件の畫像石棺が發見された郫縣新勝後漢墓<sup>(19)</sup>の場合は、全て磚室墓であった。一九七三年に發見された二號墓<sup>(20)</sup>を例に取れば、墓は全部花文磚で構築され、

全長一〇・四八m、幅二・四六m、高さ二・〇二mで、墓門、墓道、墓室から成り、石棺三件が墓室に置かれていた。この墓は早くに盗掘を受けていたが、搖錢樹破片の他、石俑、石案、石田などが出土した。主な石棺畫像をみると、四號石棺<sup>②</sup>は長さ二・三一m、幅は上が〇・七七m、下が〇・八八m、高さ〇・九四mで、四石のうち頭部側板(圖25 (1))は正面に靈芝狀の仙草を背に西王母が龍虎座に坐し、その前に九尾狐、三足鳥、そして鼎と釜で何かを煮る人物がおり、足部側板(圖25 (2))は左右に互いに尾を絡ませた人身蛇尾の日神、月神がいて、それぞれ鳥のいる太陽、兔のいる月を片手で上に捧げている。また側板A(圖25 (3))は右上と左上に窗を配して、中央の入口をかたどった梓内には笏を持った人物と盾を横に持った門吏が少し腰をかがめて拜禮しており、右下には二人の乗る輶車と騎馬による出行を描き、左下には高床式の倉のようなものの前で二匹の犬が守り、傍らに語らい合う二人物が立っている。また側板B(圖25 (4))は上下二段に分け、上段には十五人の人物と二人の童僕による宴飲の場面、下段には庖廚、七盤舞などの曲藝、舞樂などを描いている。この墓は石棺同士で畫像に共通性があり、側板Aの畫像は三號石棺側板Aの畫像<sup>③</sup>と互いにほぼ共通し、右側板の畫像は五號石棺側板Bの畫像<sup>④</sup>とほぼ共通している。

また二號石棺<sup>⑤</sup>は頭部側板に鳳凰、足部側板に四號石棺と同じく日神・月神を描き、側板Aは一部缺けていたが、中央に高床式の倉のような建物、その兩側に雙闕を描き、側板B(圖25 (5))は中央に靈芝狀の仙木の下で龍虎座に坐す西王母を描いて、その左側に三足鳥、九尾狐、玉兔、蟾蜍を配し、右側は高い臺上で二人の羽人が六博をする光景を描いていた。六博は上述の如く神聖なるゲームであり、仙界の羽人にふさわしいゲームである。

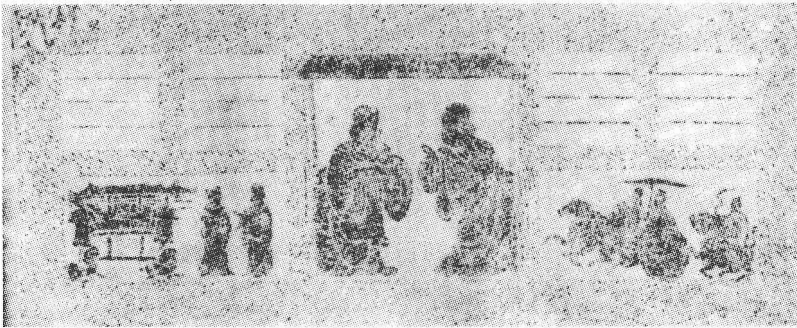
これら二つの石棺畫像の意味するところは、どちらも西王母がいる以上西王母の世界を描いたものと考えられ、四號石棺は馬車で出行する人物が西王母の世界の入口で執笏、執盾門吏に出迎えられ、そこで舞樂や曲藝を楽しんで暮らすところを描いているのであろう。そして二號棺は三足鳥、玉兔などの眷屬や羽人に圍まれた西王母自身の世界と、その世界の入口である雙闕を描くのである。どちらも高床式の倉を描くのは、樂園の一つの證としてこの世界には糧食が満ち足りていること



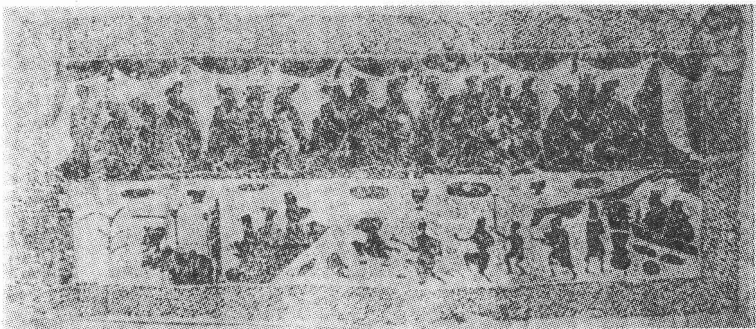
(1) 四號石棺頭部側板



(2) 同上石棺足部側板



(3) 同上石棺側板 (A)



(4) 同上棺側板 (B)



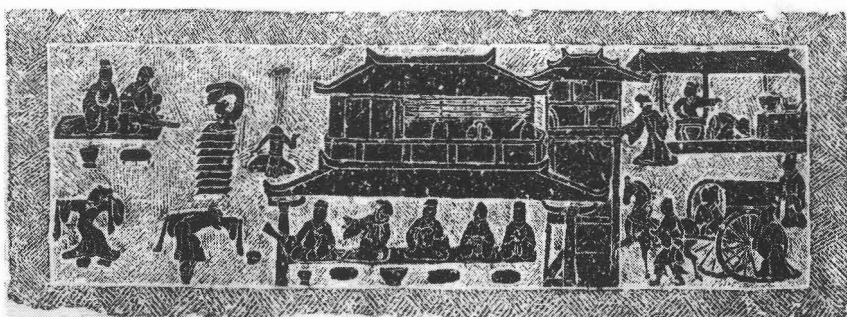
(5) 二號石棺側板 (B) 長225cm

圖25 郟縣石棺畫像 (拓本)

を示さんとするのであろう。また足部側板に日神・月神を描くのは、そのモチーフが四川で何故好まれたかは別にして、日月が宇宙の陰陽原理の代表であり、その調和が祈願されたからであらう。但し四川の石棺畫像では人身蛇尾の日神・月神がコンパスと定規を持っていることがあり、二神が伏羲と女媧であることを示しているが、それはあくまで伏羲と女媧が日神と月神に見立てられたからである。いずれにしても、これら石棺畫像は死後の靈魂の昇仙と關係しており、棺内に墓主人の遺體が納められていることを考慮すれば、墓主人の西王母の世界への昇仙が祈願されていることは間違いないであらう。

この解釋に沿って郫縣磚室墓出土の他の石棺畫像も解くことが出來よう。一號石棺は四號石棺と同様に頭部側板に西王母、足部側板に日神・月神を描き、珍しいことに蓋板にも畫像を刻して、力士が頭で支える壁に龍と虎が戯れる圖を描き、更に上下逆向きに牛の手綱を引く牽牛と織女を描く。蓋板に七夕傳説で有名な牽牛織女を描くのは、蓋板を蓋天に見立てたからで、山東長清の孝堂山石祠天井の隔牆畫像とともに珍しい作例である。また側板Aは左に鳳凰の止まる雙闕、右に幕の垂れた室内で奥にいる人物が三人の人物と相對する場面、更に右端に馬車と御者を描いている。これは馬車で昇仙してきた人物が雙闕を通して樓閣の中に入り、奥に坐して三人の拜禮を受けるのであろう。同じような畫像は一九七二年に發掘された一號墓の石棺にもあり、頭部側板には雙闕圖、足部側板に日神・月神圖が刻されていたが、一方の側板(圖26(1))には右から馬車による出行、二層の樓觀、樓閣と續き、そして樓閣の階下には屋外で演じられる戴竿、疊案などの曲藝や舞樂を見物する場面が描かれる。昇仙した人物がこの順に進んで曲藝や舞樂を楽しむのである。そして仙界の娛樂の有り様を更に詳しく示したのが他方の側板(圖26(2))で、上段には所謂曼衍角抵戲を描き、みな上半身裸で駆け、武器を手にして猿の假面をつける者、瓶をかついで豚の假面をつける者、虎と蛇の絡まった座に坐って他の一人がそれを牽く者などがある。これを見物するのが、下段右で周りの多くのことから拜禮を受けている人物で、彼は更に左に描かれるように水鳥や魚のいる池に小舟を浮かべて遊ぶのであろう。また一號石棺のもう一つの側板Bの畫像は、左半分は不明であるが、

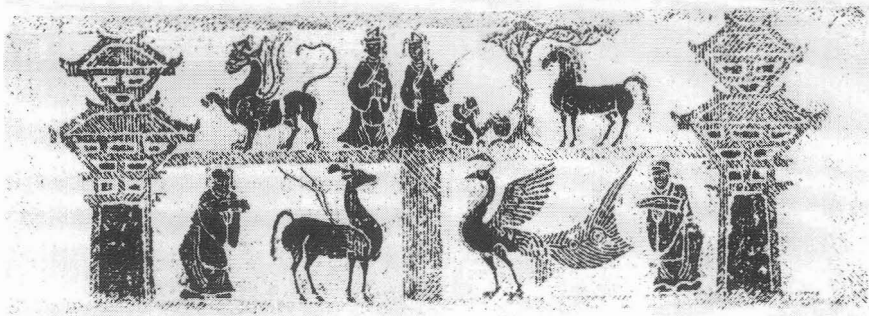




(1) 一九七二年郫縣出土石棺側板 (A) 長237cm



(2) 同上石棺側板 (B)



(3) 彭山縣雙河鄉出土石棺左側板 長200cm



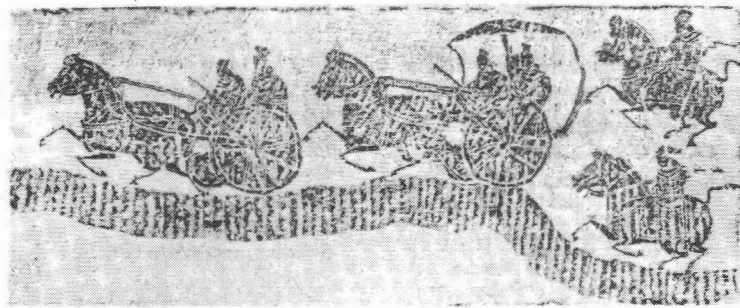
(4) 同上石棺右側板

圖26 郫縣及び彭山石棺畫像 (拓本)

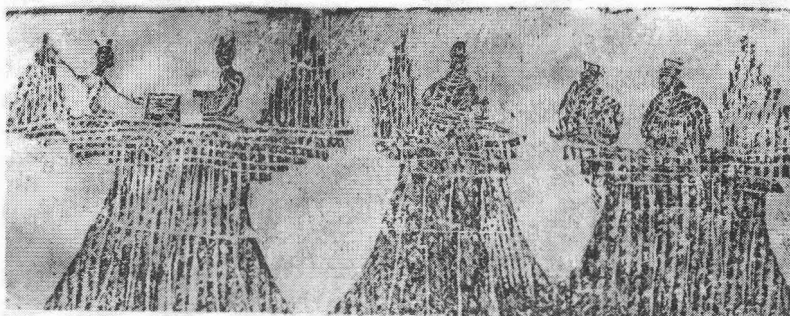
右側に下が狭く上が廣い山嶽狀の臺を描いて、その上には數人の人物と六博に興じる二人の羽人がおり、右下角には三頭立て馬車が止まっている。上廣下狹の山嶽は山東沂南畫像石墓（圖72）（2）などによくあるように西王母の棲む崑崙山を表したものと思われ、昇仙する者の馬車が崑崙山に到着したことを示している。

このように郛縣磚室墓で出土した六件の石棺の畫像は全て昇仙を内容としていることがわかった。更に彭山の崖墓で發見された幾つかの畫像石棺をみてみよう。まず一九五〇年に彭山縣雙河鄉崖墓で出土した畫像石棺は、左側板（圖26）（3）に雙闕圖、右側板（圖26）（4）に西王母圖を描き、この組み合わせ方は郛縣二號石棺と同じである。但しこちらの雙闕圖は雙闕の他に盾を持った二人の門吏、樹木に繋がれた馬と水をやる馬飼ひ、傍らの進賢冠をつけた二人の人物、更に尾羽根が長く冠羽をつけた鳳凰、頭頂に一角の生えた麒麟、翼のある虎に似た神獸まで描かれている。虎に似た神獸は身の丈以上の長い尾を持っているところから騶虞であろうか。馬は昇仙の乗り物に使われたもので、進賢冠の官吏二人と馬飼ひが世話しており、元來天界にすみ瑞獸としても機能する鳳凰や麒麟や騶虞がいるのは仙界の證としてであろう。また西王母圖は六博をする羽人の代わりに琴を弾き笛を吹き雙鬢の羽人を配し、蟾蜍がそれに合わせて踊っており、更に右下角に長袍を着た人物が立っている。この人物は昇仙して西王母の世界にやって來た者であり、その歡迎のために蟾蜍が踊っているであろう。

また一九八五年に彭山縣兩江鄉高家溝梅花村崖墓で出土した彭山三號石棺は興味深いものであった。この石棺は頭足部側板に當たる部分に雙闕圖と麒麟圖を描き、左右側板に當たる部分に三山圖と車馬出行圖を描いていた。特に後二圖が興味深く、車馬出行圖（圖27）（1）は騎吏二騎を後ろに従えた一頭立ての馬車二輛を描き、共に二人が乗って、後ろの一輛には蓋がついていた。ここで注目すべきは馬車の進む道の表現で、右下角からうねうねと起伏しながら次第に上昇するよう描かれていた。この車馬出行は上述の石棺畫像などとの比較から昇仙する途中の様子を描いたものと思われるが、昇仙の乗り物として龍車ではなく馬車が使われた關係上、高い所に位置する仙界への上昇性を表さんがためにこのように道を



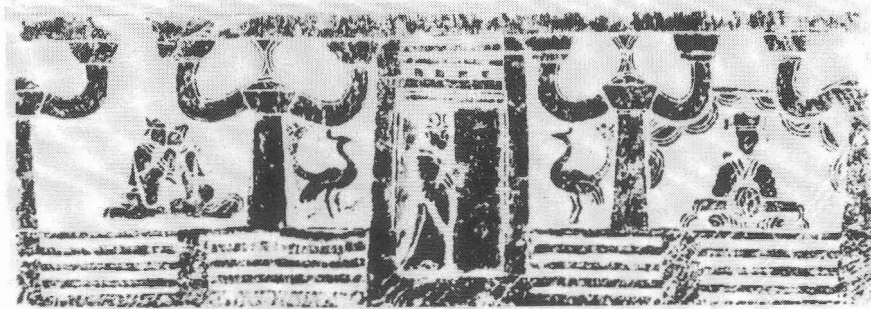
(1) 彭山三號石棺側板 (一)



(2) 同上三號石棺側板 (二)



(3) 新津寶子山出土石棺側板 長220cm



(4) 蔡經出土石棺側板 長232cm

圖27 四川出土石棺畫像 (拓本)

上昇氣味に描いたのであろう。事實、目指す仙界はもう一方の側板(圖27 (2))に三つの山嶽として描かれており、下が裾廣がりの臺形をなして頂上部が廣くなった所謂上廣下狹の三つの山嶽には、頂きに六博をする二人の羽人、琴を弾く人物、その音に聴き入る二人の人物がそれぞれ描かれ、傍らにこんもりした三角形の灌木が配される。こうした仙界の有り様は新津寶子山出土の畫像石棺にも描かれており、こちらは頭足部側板に日神・月神圖、雙闕圖、左右側板の一方に徒步の伍伯二人を先頭に蓋附きの馬車二輛が今や雙闕に達せんとする車馬出行圖を描き、もう一方の側板(圖27 (3))に二つの山嶽の仙界を描いていた。この二つの山嶽は彭山三號石棺以上に極端な上廣下狹の形をして、頂上部が板狀に横に廣がっており、左の山嶽の頂には乳房も露に上半身裸の女性の羽人が二人六博に興じており、右の山嶽には琴を弾く人物と笙のような笛を吹く人物がいる。そしてそれぞれ仙界らしく、左には孔雀の羽を思わせる枝葉を伸ばした樹木と木に止まった長い尾羽根の鳥、右には飛ぶ鳥と龍が配される。彭山三號石棺において仙界を三つの山嶽で表したのは、それが西王母のすむ崑崙山であることを示さんがためであらう。三つの山嶽を蓬萊、方丈、瀛州の東海三神山とする説もあるが、これが的確なものであることはいうまでもなく、崑崙山が三山の形で表されることがあったことは、臨沂金雀山九號墓出土の帛畫(圖8)で見た通りである。また琴を弾く人物とそれを聴く人物を二つの山嶽に分散して配したのも、この三つの山嶽が一つの山としてまとまっていることを示すものである。目指す仙界は大地の中央にそびえる崑崙山であり、六博に興ずる羽人のモチーフをこれまで度々西王母の世界にみたように、そこは西王母の世界である。

また昇仙の行き着く先が西王母の所であることを明らかに示す畫像石棺がある。それは一九六九年に榮經縣で出土した畫像石棺<sup>(4)</sup>で、頭部側板と足部側板にはそれぞれ雙闕と鳳凰を描き、左右側板の一方は破損して樹木に繋がれた馬と桶の水をやる馬飼いの、そして桶を擔ぐ人物を描いた部分が残っていた。今注目するのはもう一方の側板(圖27 (4))で、畫面中央に半ば開いた扉があつて一人の人物が姿を現して立ち、左右兩側の室の前にはそれぞれ上に斗拱をのせた二本の柱が配され、室内には扉を挟んで向き合う鳳凰各一、更に左側は坐りながら顔を寄せ合つて睦み合う二人の男女、右側は玉勝を

つけ几に憑って坐す西王母が描かれる。二人の男女は昇仙してきた夫婦で、木に繋がれた馬の牽く馬車で雙闕を通して來たものと考えられるが、西王母と一つの扉、一つの建物を共有して同一の樓閣内にいることは明瞭であり、西王母の所まで來たのである。しかし西王母は同じ樓閣内でも別の室にいるように、昇仙して來た者には常に無頓着な風に表され、彭山縣雙家郷石棺畫像でもみただけでも、歓迎は常に雙闕門吏、蟾蜍などの眷屬、この圖の扉の所にいる人物たちの役割である。

## 2 簡陽鬼頭山畫像石棺

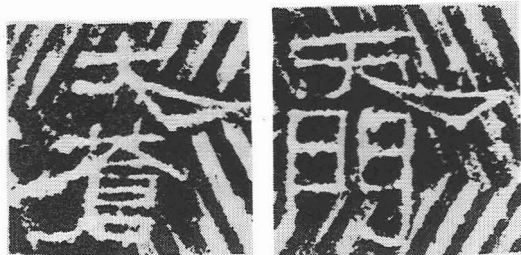
これら四川の畫像石棺に描かれた雙闕など様々なモチーフは當時どのように呼ばれたのであろうか。それを示す畫像石棺が一九八六年に簡陽縣鬼頭山の崖墓<sup>(14)</sup>で發見された。この墓は簡陽縣城の西四五kmに位置する董家埂郷深洞村の鬼頭山頂上の岩中にあり、墓道、墓門は既に壞されていて、墓室は東向きの單室で幅四・五五m、奥行五・二m、高さ一・七mあり、凸字形をしていた。中に石棺六具が置かれており、奥の西邊に三具、北邊に二具、南邊に一具あった。畫像で注目されるのは西邊の二號棺と三號棺、とりわけ三號棺で、長さ二・一二m、幅〇・六三m、高さ〇・六四mあり、蓋がかぶさっていた。この三號棺<sup>(15)</sup>が貴重なのは畫像自身が珍しいうえに畫像に隸書の榜題(圖28 (1))がついていたことである。頭部側板は早くに壞れ中央部を缺いていたが、鳥の廣げた羽根や長い尾羽根などの部分の畫像が残っており、その前に縦書きの榜題があり「鳥」字の一字が僅かに残っていた<sup>(16)</sup>。また足部側板(圖28 (2))は右と左に人身蛇尾の二神を大きく描いて、それぞれ「伏帝」「女姪」の榜題があり、その下に「茲武」の榜題をもった甲羅の高い龜、左側に「九」の榜題をもった小鳥を配していた。「伏帝」は伏羲、「女姪」は女媧、「茲武」は玄武であろう。

また左右側板も畫面一杯に畫像を描き榜題を細かく書いていた。左側板(圖28 (3))は右上に長い鳥の羽の冠をつけた二人の人物が向き合って坐し、間に回文の方形局盤と六本の箸を置き、上に「先人博」の榜題があった。またその左には

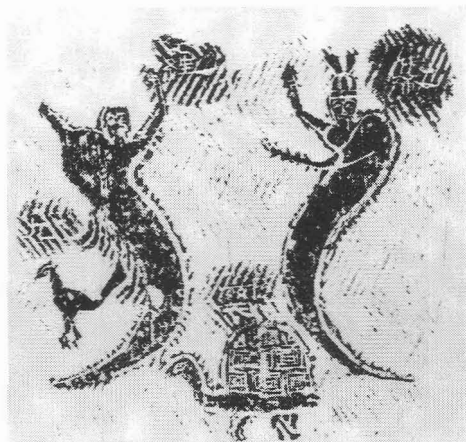
長い鳥の羽の冠をつけ鹿の背に乗った人物を描き、「先人騎」と榜題があった。「先人」は仙人で、それぞれ六博をしたり鹿に乗ったりして遊ぶ光景を描いているのである。そしてこれらの下には長い胴體を鱗文でおおい角をもった一匹の龍を描き、傍らに魚が二匹配され、また中央上には一頭の馬の牽く馬車が驅けるが、乗員の姿はなく大きな車輪が強調されている。この二つには榜題はないようである。そして左側には頭に羽の冠をつけ腹部に圓輪のある人面鳥神の二神を左右に並べて配し、右の神の腹部圓輪内には鳥、左の神のそれには蟾蜍と桂樹が描かれていた。これは上に「日月」の榜題がある通り日神、月神を表しているよう。またこの二神の下には三本の枝に分かれ葉の繁った一株の樹木があり、「柱銖」と榜題されていた。そして左端には尾羽根の長い鳥がいて「白雉」と榜題があり、頭頂に一本の角をもった馬に似た動物がいて「离利」と榜題があった。

また右側板(圖28 (4))は右側に高床式の倉のような二層建築が描かれて右傍らには足の長い鶴のような鳥があり、「大蒼」(圖28 (1))と榜題されていた。また中央には單層の雙闕があつて各闕上には尾羽根の長い鳥が止まり、雙闕の前に冠をつけ長袍を着た人物が立ち、上の榜題に「天門」(圖28 (1))、左の榜題に「大司」と書かれていた。そして左側には虎が頭をもたげて飛び跳ねており、「白虎」と榜題に書かれていた。

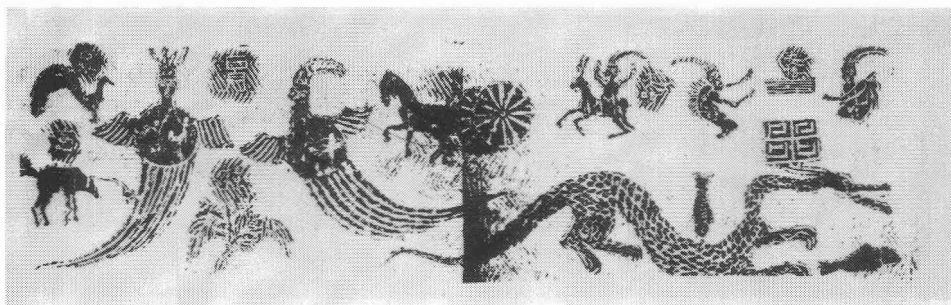
この石棺の畫像内容については、まず四枚の石板に四神が描かれていることは明かである。左側板の龍は榜題はなかったが青龍であり、頭部側板の「鳥」一字の榜題が残った尾羽根の長い鳥は鳳凰の一種であり、本来「朱鳥」と榜題があり朱雀を表したものと考えられる。これらが足部側板の玄武、右側板の白虎と併せて四神を構成し、東西南北の四方の側板に配當されて、天上の四方の星宿を表しているのである。また日神、月神が腹部に圓輪をもった人面鳥神の形式で表されることはこの地方ではよくあり、後述する新繁清白郷畫像磚墓出土畫像磚(圖30 (3))などにみられる通りである。しかし前述した如くこの地方の畫像石棺では日神、月神は人身蛇尾の伏羲、女媧の形を借りて表されることが多く、この石棺のように頭部側板の伏羲、女媧像と別々に表されることは珍しい。また長い尾羽根をもった「白雉」は、『春秋感精符』<sup>(148)</sup>



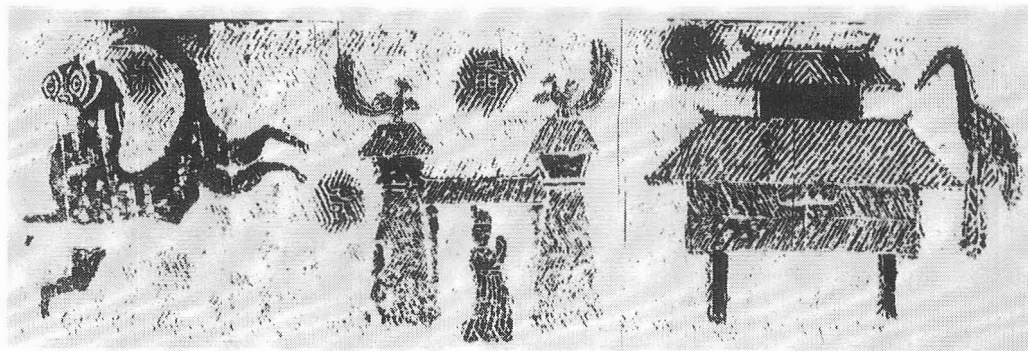
(1) 榜題「大蒼」「天門」



(2) 足部側板畫像 高60cm



(3) 左側板畫像 長200cm



(4) 右側板畫像 長200cm

圖28 簡陽縣鬼頭山三號石棺（拓本）



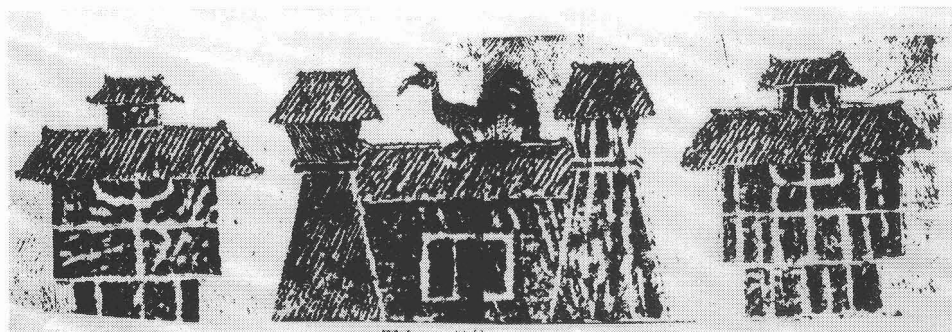
『太平御覽』卷九一七所引)に「王者の徳、四表に流るれば、則ち白雉見わる」とあるように、王など爲政者の徳が高いと地上に出現する瑞鳥である。その下の一角獣の「离利」も一角獣である麒麟と同じ類の瑞獸と思われる。これらの瑞鳥、瑞獸は天帝によって下されるもので、元來は天上世界に在る。また六博に興じ鹿に騎乗する仙人は、王充の『論衡』に「仙人の形、體に毛を生やし、臂は變じて翼となり、雲を行く」とあるように、體に羽毛が生えているので羽人ともいい、道を體得し不死を獲得した者である。この羽人が西王母の世界で六博に興じる光景は石棺畫像にしばしば見た所である。また羽人が鹿に騎乗する姿も彭山縣高家溝崖墓石棺畫像において六博をする羽人とともに見るところである。

このように簡陽縣鬼頭山崖墓三號石棺の畫像は日月、四神、瑞鳥、瑞獸、仙人など天上世界や西王母の世界の有り様を描いていたが、更に注目すべきは右側板の雙闕とその「天門」榜題、高床式建物とその「大蒼(太倉)」榜題である。二號石棺の左側板(圖29 (1))にも中央に鳳凰の止まる雙闕、兩側に高床式の二層の建物が描かれており、榜題はないけれどもこれも「天門」と「太倉」ということになる。雙闕も高床式建物もこれまで石棺畫像に度々見てきたモチーフであるが、ここで榜題の「天門」「太倉」とは何を意味しているのだろうか。他のモチーフと同じく天上世界もしくは西王母の世界などの仙界に屬するのは異論がないとして、天上世界或いは仙界のいずれに屬するのであるか。

まず「天門」を文字通りとれば天上世界の門、つまり天帝の住む紫微宮の門ということになる。『淮南子』原道訓には、山川を經紀して、昆侖に蹈騰し、閼闔を排きて天門に淪る

とあり、山や川を經めぐって西北の方崑崙山に昇り、閼闔の門を開いて天門に入ることをいうが、高誘は閼闔に注して「始めて天に升るの門なり」といい、天門に注して「上帝の居する所、紫微宮の門なり」という。つまり高誘は墜形訓の「懸圃、涼風、樊桐は昆侖の閼闔の内に在り」に注して「閼闔は昆侖の虚の門の名なり」というように、閼闔は天に昇る際の通路である崑崙山の門をいうが、天門は更にその直上に位置する天上世界の天帝の住まう紫微宮の門だといっているのである。これが天門について一般的な解釋であるが、一方『宋書』樂志にみえる魏の曹操の「駕六龍」<sup>(15)</sup>という作品には、主人公が各地





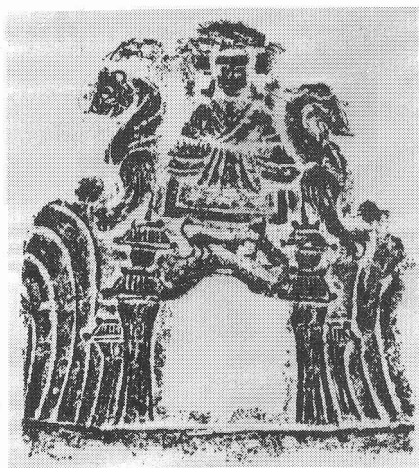
(1) 簡陽縣鬼頭山二號石棺左側板（拓本） 長200cm



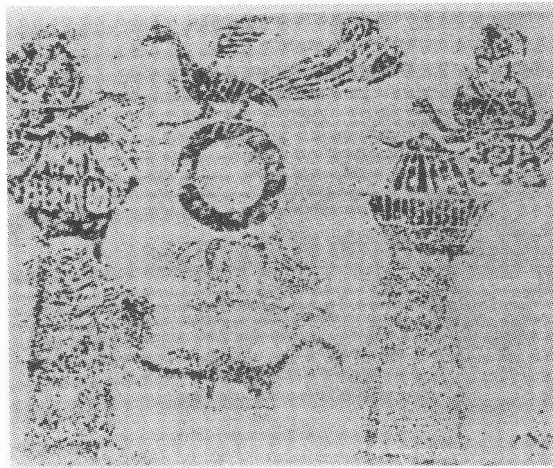
(2) 巫山縣出土銅牌（一） 直徑23.5cm



(3) 巫山縣出土銅牌（二） 直徑23cm



(4) 綿陽河邊崖墓出土搖錢樹座（拓本）  
高43cm



(5) 瀘州一號石棺側板（拓本）

圖29 四川天門畫像

の仙界をめぐる話をうたい、

六龍に駕し、風に乗じて行き、四海の外を行く。(略) 行を奉持して東のかた蓬萊山に到る。上天の門に到り、

玉闕の下、引見して入るを得、赤松(子)と相對し、四面顧望すれば、視正焜煌たり

とある。ここで「天の門」とは當然崑崙山の門である。というのは、そこで相對したという赤松子は、後にも崑崙山の西王母の側に到って赤松子、王子喬を迎えられたことをうたうように、崑崙山に住む仙人だからである。

このように天門は文獻によると天上世界の門と崑崙山の門の二通りの解釋が可能であるが、近年、この天門に關する塗金銅牌の興味深い資料が四川巫山縣で出土した。この銅牌<sup>(18)</sup>は現在までに巫山縣の後漢墓で七件收集されており、巫山縣城に近い長江北岸と大寧河口兩岸に沿った山坡地帯の單室磚墓や崖墓で出土した。一つの墓から二、三件出土することや、銅牌のまわりに木棺の殘痕がついていることなどから、元來木棺の前端の中央につけた飾りであったと推定されている。形は直徑二三—二八cmの圓形をなして、中心に一つの丸い孔があり、ここに半球形の頭のついた塗金銅釘を打ち込んで木棺に固定したものと思われる。例を示すと、巫山縣城江東咀千溝子漢墓で出土した銅牌<sup>(19)</sup>(圖29 (2))は、直徑二三、五cmで、二層雙闕を大きく配して、間に直徑一・二cmの孔を利用して壁を刻し、その上に縦に「天門」と雙鉤隸書して、兩側の雙闕から伸びた帶狀のもの山形の上には鳳凰が一羽止まっている。そして壁の下、雙闕の奥には冠をつけ肩に羽を生やした神人が端坐し、雙闕の左側には神鳥、右側には犬のような神獸を配し、間には雲氣を描いて畫面を埋めている。神人は籠冠のような冠をつけ男性のようである。また同じく江東咀千溝子の別の漢墓から出土した銅牌<sup>(20)</sup>(圖29 (3))は、直徑二三cmで、上記の銅牌と圖柄が殆ど同じであるが、雙闕を細く小振りに描いて、間に壁と雙鉤隸書きの「天門」榜題、二つの闕を結ぶ布狀のものの山形の上にはやはり鳳凰が止まっている。また壁の下には肩に豪華な羽を生やした神人がおり、雙闕の左側には胴體を縦に頭をもたげた龍、右側には胴體を縦に頭を上に向けた虎を描いている。こちらの神人は冠をつけず女性のようにである。

この雙闕とともに描かれた男女の神人が何かというに、綿陽河邊の後漢晚期の崖墓から出土した搖錢樹臺座<sup>(21)</sup>の表現が參

考になろう。この臺座（圖29（4））は高さ四三cmで、二層の浮彫表現があり、下層は單層の子闕と二層の母闕から成る子母雙闕を刻して、母闕と母闕を帶狀のもので結び、上層に龍虎座に坐し頭に玉勝をつけた西王母を刻し、間に三足鳥、九尾狐を配している。紛れもなく西王母であり、その西王母が雙闕の奥に彼女の眷屬といふように表現されている。恐らくこの搖錢樹臺座の表現から類推して銅牌に描かれた女性の神人も西王母であろう。西王母が雙闕の間に表現されても上方に表現されても雙闕の奥にすることに變わりはなく、闕と闕を結ぶ帶狀のものの山形表現も共通している。そして男性の神人の方は後漢後期に出現して西王母と對で表されるようになった東王父であろう。すると、銅牌に表された雙闕の「天門」とは西王母もしくは東王父の世界の入口を意味することになるが、これは先に曹操の「駕六龍」にみた崑崙山の門としての天門に合致するばかりか、これまでみてきた四川の畫像石棺の雙闕表現とも矛盾しない。そこでも雙闕は崑崙山の西王母の世界の入口を示していたからである。また石棺畫像の雙闕も銅牌の「天門」も、石棺と木棺の違い、畫像石と銅牌の違いがあるとはいえ、同じ四川の棺飾表現である以上、當然お互いに關係がある筈であり、ともに崑崙山の西王母（もしくは東王父）の世界の入口を表していても不思議はないのである。

ところで西王母が崑崙山に住むのは問題ないとして、東王父が何故ここに登場するのであろうか。瀘州市博物館に所藏される瀘州一號石棺<sup>(4)</sup>は、一九四〇年代に瀘州市郊外の洞賓亭一帶の崖墓で出土したといい、左右側板にそれぞれ青龍と白虎を刻し、頭部もしくは足部側板（圖29（5））には雙闕を描いて間に鳳凰と玄武を刻し、鳳凰の下には一個の壁、そして雙闕の上方、即ち雙闕の内部には右に龍虎座に坐した西王母、左に不明瞭であるが報告者によれば東王公を配していた。雙闕の圖に注目すると、つまりこれは雙闕を描いた銅牌の二枚の畫像を一枚の畫像に併せたような圖で、同じく壁が表されるとともに、西王母と東王父が一つの世界に一緒に表されていたのである。西王母がいる以上、これは崑崙山の世界と考えられるが、實は當時東王父も崑崙山に住むという考え方があったのである。『宋書』樂志に載せる曹操の「駕虹蜺」<sup>(5)</sup>という作品の前半は次のように詠われている。

虹蜺に駕し、赤雲に乗じ、彼の九疑に登って玉門を歴る。天漢を濟り、崑崙に至り、西王母に見えて東君に謁す。赤松(子)と交わり、羨門に及び、秘道を受要し精神を愛す。

主人公が崑崙山に行つて西王母と東君即ち東王父に謁見したとある通り、東王父も西王母と一緒に崑崙山に住んでいたのである。銅牌は木棺の前端に取り附けたものであったから、その畫像は瀘州一號石棺の頭部畫像と性格を全く同じくし、この點からも銅牌の天門が崑崙山の門であることがいえるのである。また銅牌には雙闕の間に一個の壁が表されており、瀘州一號石棺畫像にもみられたが、これが崑崙山を象徴する壁であることは、先に同じく雙闕の間に壁を描いた山東滕縣馬王村出土石棺の頭部畫像(圖4 (5))にみた通りである。

従つて鬼頭山石棺右側板(圖28 (4))に描かれた雙闕の榜題「天門」も崑崙山の西王母の世界の門と解するのが妥當と思われるが、この雙闕の少し前には長袍を着て冠をつけた人物が拱手して立っており、雙闕の左側榜題には「大司」と書かれていた。四川の石棺畫像の雙闕には盾を横に持ったり笏を持って腰を屈める門吏が配されたり、或いは戟を持った門衛(門亭長)が配されたりすることがあるが、この人物は何も持たず雙闕の外に出て拱手し誰かを迎えているようである。その限りでは戟を持った門吏でもなければ門衛でもなく、強いて挙げれば馬王堆一・三號漢墓出土帛畫(圖7)の上方の門の内側にいて腰を屈め拱手する人物と似ている。馬王堆の場合は天帝の側近く仕える者がつける獨特の冠をつけている所から、昇仙する墓主人を迎えるために天帝から崑崙山へと遣わされた者と解されるが、この人物も恐らくそのような人物であろう。榜題に「大司」とあり、可は司の異體字かとも思われるが、いずれにしても意味不明である。

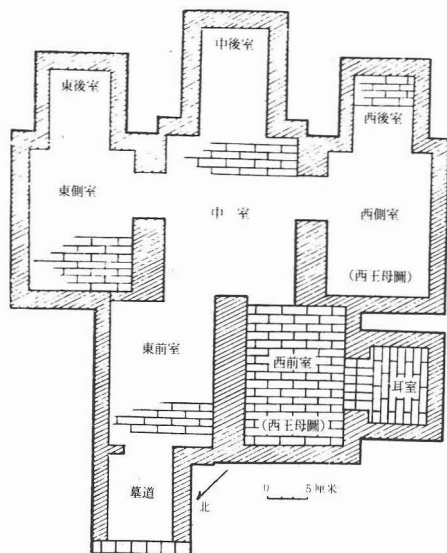
また鬼頭山三號石棺の右側板に描かれたもう一つの「太倉」は、二本の脚で支えられて高床式の二層建築をなしている。このような高床式の建物<sup>⑤</sup>は郫縣二號畫像石棺、四號畫像石棺(圖25 (3))で既にみた所であり、前者は雙闕の奥に位置し、後者は圖の構成からみて二人の門吏のいる門の中にあつて二匹の犬が守っていた。いずれも倉を表したものと考えられ、

西王母の世界の中にあつたが、この圖の「太倉」も「天門」の右傍らに位置しているところから、崑崙山の門の中にあるものと解される。太倉は『史記』平準書<sup>(18)</sup>に「太倉の粟、陳陳相因り、充溢して外に露積さる」などとあるように、政府の米倉のことで、また『晉書』天文志<sup>(19)</sup>に「天倉の六星、婁の南に在り、倉穀を藏する所なり」とあるように、天倉と通じて天上世界の穀物を藏する場所をいう。しかしこの圖の「太倉」は明らかに崑崙山の門の内側に描かれており、崑崙山の西王母の世界にある太倉とみるのが妥當であろう。昇仙の行き着く先である樂園の一つの證として糧食に満ちた倉を描く必要があつたのである。「太倉」の右傍らに在る鶴に似た鳥は、先にみた江蘇沛縣棲山漢墓畫像石棺左側板(圖2 (2))や山東滕縣馬王村畫像石棺足部側板(圖4 (6))でも、また四川宜賓市翠屏村第七號墓畫像石棺側板<sup>(20)</sup>でもしばしば魚を銜えたところが表され、これも糧食と關係がある鳥である。

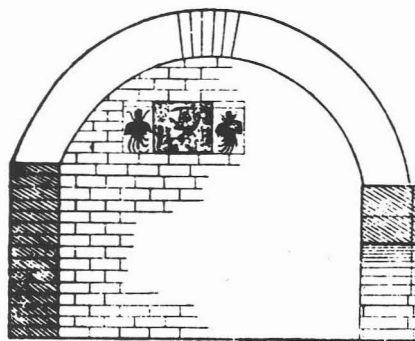
### 3 四川の畫像磚墓

四川は南陽と並んで畫像磚の本場で、解放後から現在に至るまで四百以上の畫像磚が出土し、その畫像は七、八十種類に及んでいる。<sup>(21)</sup>これらの畫像磚は必ずしも畫像磚墓から出土するとは限らず、彭山の崖墓から出土したり、特に成都地區は石材に恵まれなかつたため成都羊子山一號漢墓や成都西郊の曾家包漢墓などのように畫像磚と畫像石を混用した墓からも出土している。しかし保存狀態の完全な墓や發掘狀況のわかる墓は意外と少なく、多くの畫像磚は收集によって得られたものである。

まず昇仙圖と關連して、一九五五年に發掘された新繁縣清白鄉畫像磚墓<sup>(22)</sup>を取り上げる。この墓(圖30 (1))は數回にわたる盜掘を受けていたが墓自體は比較的保存がよく、墓道と九個の墓室から成り、西に偏った北向きで、南北の長さは一二・七二m、東西一〇・二四mであつた。墓は花文磚で組み立てられ、八個の墓室の壁には五十四の畫像磚がはめ込まれていた。最も注目されるのは西王母圖を中に日神・月神圖の三件の畫像磚を組み合わせたもの(圖30 (3))で、西前室の



(1) 墓平面圖



(2) 西側室斷面圖



(3) 西側室北壁上部畫像磚



(4) 西王母畫像磚(拓本) 高40.3cm

圖30 新繁清白鄉漢墓及び畫像磚

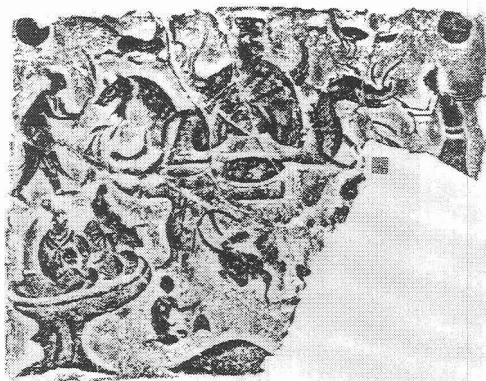
北壁と西側室の北壁の共に高い位置(圖30 (2))にはめ込まれていた。西王母畫像磚(圖30 (4))は高さ四〇・三cm、幅四八cmで、蓋の下に龍虎座に坐る西王母を中心に、尾が九つに分かれた九尾狐、靈芝草を手にする玉兔、三本足の三足鳥、踊る蟾蜍など眷屬が周りに配され、下部には頼り無げに互いに顔を見合わせて坐る男女二人と、低い案を隔てて、二人に對し地に伏して拜禮する冠をつけ笏を持った人物を配し、その後ろには戟を持った人物が立っている。全體に雲氣を漂わせ仙界の氣分も十分である。また兩側に配置された日神・月神畫像磚は、ともに人間の顔をして冠をつけ、羽翼を廣げ尾羽根を長く垂らした所謂人面鳥神の像を描き、腹部に大きな圓盤を抱いている。同じような人面鳥神の畫像は簡陽縣鬼頭山の畫像石棺(圖28 (3))にも描かれて「日月」と榜題があり、日神・月神の圖であることは明かである。またここでは圓盤の中に何が描かれているか不明であるが、このような圓盤を持った人面鳥神の畫像磚は四川では他にも幾つか出土例があつて、それを見ると圓盤には飛んでいる鳥もしくは桂の樹に繋がれた蟾蜍が描かれており、それによつても日神、月神の圖と知れる。また西王母畫像磚の周圍が太く枠取りされ立派であるのに對し、日神・月神畫像磚の方が枠取りされていないのも注目されよう。

では、この三點一組の西王母・日月圖とでもいうべき畫像磚は全體として何を表しているかというに、中央の畫像磚は單に西王母圖ではあるまい。この畫像磚の解釋をめぐつては、以前に左下の笏を持って拜禮する人物が、千里を遠しとせず福を求め藥を求めにやつて來た者と解されたことがあるが、やつて來た者はこの人物ではなく右下の二人の男女である。左端に戟を持った人物は、『山海經』海内北經に西王母について敘述し、「人有りて大行伯と曰い、戈を把る」というように、西王母に武器をもつて仕える大行伯であり、笏を持った人物は大行伯とともに左側に控えて、西王母の世界にやつて來た右側の男女に拜禮し最大級の歡迎の意を表しているのである。これと全く同じ圖柄の畫像磚は解放前に成都市郊外で出土しているが、構成のよく似た畫像磚は他にも新都縣新民鄉(圖31 (1))と新龍鄉(圖31 (3))、そして彭縣で發見されており、また若干構成の異なる畫像磚が成都西門外で出土している。新都縣新民鄉の畫像磚は永元元年(八九)の紀年





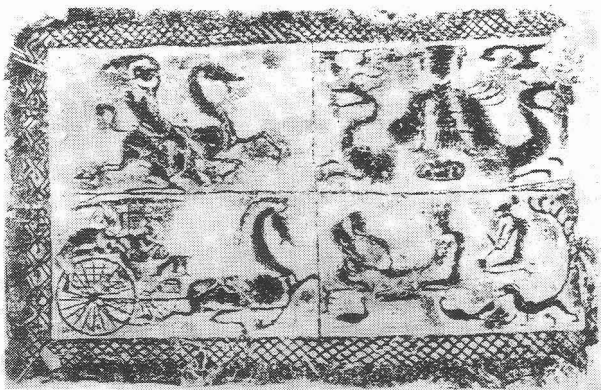
(1) 新都縣新民鄉出土西王母像 永元元年(89) 高26cm



(2) 成都西門外出土西王母像 高38cm



(3) 新都縣新龍鄉出土西王母像 高29.5cm



(4) 彭山出土車騎西王母像 高28cm



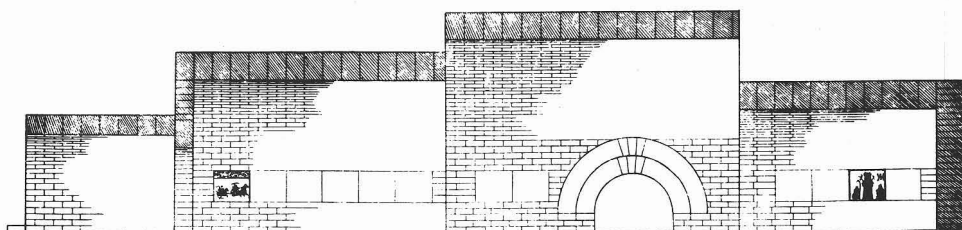
(5) 彭山出土西王母像 高35.5cm

圖31 四川西王母畫像磚(拓本)

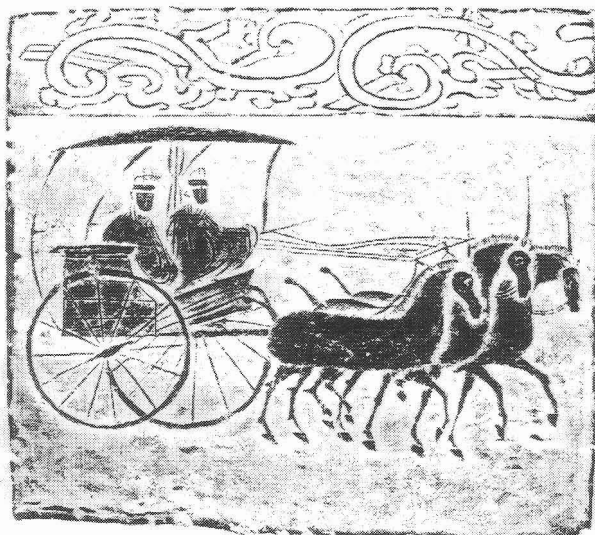


銘磚が同出して重要であるが、新龍郷の畫像磚では玉勝をつけ龍虎座に坐る西王母の前に笏を持った人物と二人の男女が配され、笏を持った人物は右手に裂地の垂れた幢を持って三足鳥、九尾狐、蟾蜍とともに踊りをおどっている。また成都西門外畫像磚（圖31（2））では二人の人物が左下に西王母と同じ上廣下狹の山嶽上に坐し、蟾蜍が踊り歓迎の鈴が鳴らされている。新繁の畫像磚でも蟾蜍が脚を上げ腕を振っておどっていたが、いずれも二人の男女に對し歓迎の踊りをおどっているのである。また笏を持った人物が太行伯とともに西王母に仕える者であることは、更に彭山縣で出土した西王母畫像磚（圖31（5））によって證明されよう。この畫像磚では柱のように伸びた山嶽の頂の上に龍虎座に坐した西王母が描かれ、山嶽の左右の麓には戟を持った太行伯と幢を持った長袍の人物が向かい合って立っている。無論、山嶽は崑崙山で、二人は崑崙山に住む西王母を守護する役を果たしており、この幢を持った人物が笏を持った人物に對應するのである。このように西王母の世界にやって來たのは確かに二人の男女であり、西王母の眷屬、並びに太行伯、笏を持った者は西王母の御前で二人を迎えているのである。一九四三年に彭山縣で收集された畫像磚（圖31（4））は畫面が四つに區畫されているけれども、右の二區畫には西王母とその九尾狐など眷屬が表され、左の二區畫に配された軺車一輛と騎吏一騎がまさに西王母目指して疾驅している。従って新繁縣出土の畫像磚は單なる西王母圖ではなく、更にこの畫像磚が墓の中にあつたことを考慮すれば二人の男女、つまり墓の主人公夫婦の西王母の世界への昇仙を表しているということが出來、紛れもなく昇仙圖である。

そしてこの西王母畫像磚の左右に日神・月神圖が配されているが、この配置の仕方はこれまで見てきた昇仙圖に通有のものである。例えば臨沂金雀山九號漢墓帛畫（圖8）は最上部の左右に日月を配し、そのすぐ下に崑崙山とその宮殿を配し、宮殿の中には昇仙した墓の主人公を描いていた。西王母はまだ登場していないが、西王母は崑崙山に住むから同じ構成ということが出來よう。但し日月の圖が金雀山帛畫と較べて位置が低くなり、西王母のいる崑崙山と同等もしくはそれより下になっているが、これはひとえに西王母の地位の向上を物語り、馬王堆漢墓帛畫（圖7）でいえば天帝女媧の地位にまで上がっている。晉の王嘉の『拾遺名山記』<sup>(6)</sup>に「崑崙山に崑陵の地あり、その高きこと日月の上に出ず」とある通り



(1) 墓縦断面圖



(2) 東前室畫像磚（拓本） 軺車 高41cm

圖32 四川新繁清白鄉畫像磚墓



(1) 羊子山二號墓出土畫像磚 高40cm



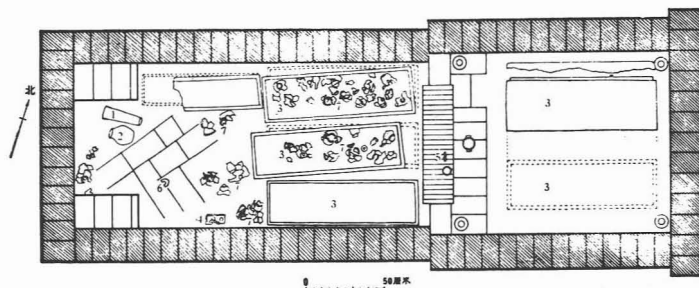
(2) 大邑安仁鄉出土畫像磚 高38cm

圖33 舞樂雜技畫像磚（拓本）

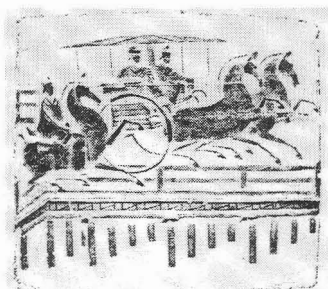
で、紫微宮のある北辰めざしてそびえる崑崙山の、日月を下に見るその頂に西王母はいると考えられたのである。また四川の石棺畫像、例えば郫縣二號石棺や四號石棺（圖25）（1）（2）において、一畫面ではないけれども西王母圖と日神・月神圖を同一石棺の別々の側板に描いていたのは既に見た通りである。つまり西王母を中に日月を左右に配したのは、宇宙における陰と陽の原理の代表である太陽と月を兩脇に従えることによって、西王母がそれを統率する地位にあることを示そうとしたのは勿論のこととして、それと同時に昇仙圖と關連して、天文の代表たる日月の高さに比肩する西王母の世界を描くことによって、昇仙の行き着く先の高次さを示そうとしたのである。この西王母・日月畫像磚が實際に他の畫像磚より一段と高い位置にはめ込まれていたのも、西王母の世界の高次さを示さんためであろう。

このように新繁畫像磚墓の西王母・日神月神圖は墓主人夫婦の昇仙を表し、西前室と西側室の奥壁二箇所にはめ込まれていたが、先に見た畫像石棺の昇仙表現と同じように、他にも車馬出行圖や闕圖が墓室内に表されていた。即ち入口に近い東前室の東西壁（圖32）（1）には輶車一と從騎一を描いた車馬出行圖の畫像磚や三頭立ての輶車圖（圖32）（2）の畫像磚などが六個づつはめ込まれ、最も奥の中後室の左右壁には闕と兩側に戟を持つ門衛と盾を持つ門吏を配した單闕圖（圖32）（1）などの畫像磚が四個づつはめ込まれていた。しかし報告が簡略過ぎて不完全なので、更に墓室の畫像磚全體の表現を探索するため他の畫像磚墓を見ることにしよう。

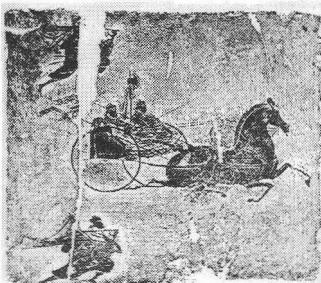
墓室の畫像磚全體の表現を探索するには、その墓の保存状態がよく、畫像磚の墓壁上における位置が完全に保存されていることが要求されるが、成都昭覺寺畫像磚墓、成都羊子山一號墓、十號墓などの墓はよくその條件を満たして、畫像磚の位置も報告されている。この三基の墓はいずれも成都にあって、出土した畫像磚は互いに同範かと思われる程圖柄がよく似ており、例えば昭覺寺畫像磚墓の宴樂圖（圖34）（8）と羊子山十號墓出土の宴樂圖などがそうである。またこれら以外にも成都もしくはその近くには、出土畫像磚は公表されているけれども詳細な發掘報告の出していない畫像磚墓が幾つかあり、その成都羊子山二號墓、成都站東鄉青杠坡三號墓、成都跳蹬河漢墓、成都曾家包畫像磚石墓、大邑安仁鄉墓



(1) 墓平面圖



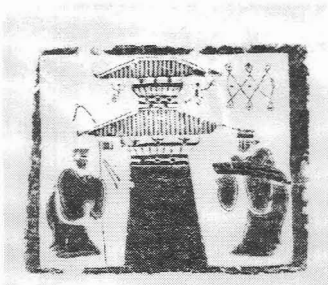
(2) 左壁(九) 過橋圖  
成都跳蹬河漢墓



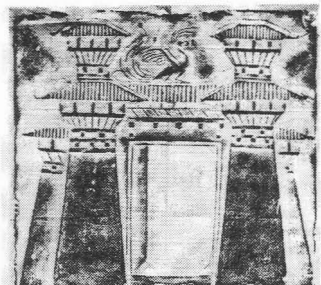
(3) 同(四) 斧車圖  
青杠坡三號墓



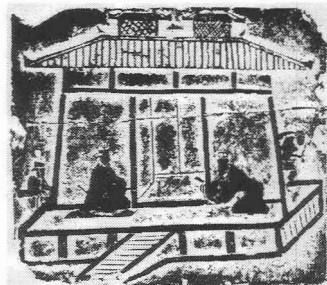
(4) 同(一) 導車圖  
青杠坡三號墓



(5) 右壁(一) 單闕迎謁圖  
成都市郊區出土



(6) 同(二) 雙闕圖  
成都附郭出土



(7) 同(五) 拜禮圖  
羊子山二號墓



(8) 同(六) 宴樂圖  
昭覺寺漢墓



(9) 同(八) 宴飲圖  
成都附近出土



(10) 同(九) 弋射・收穫圖  
羊子山二號墓

圖34 成都昭覺寺漢墓及び畫像復原

なども互いによく似た畫像磚を出土している。例えば羊子山二號墓と大邑安仁鄉墓出土の弋射・收穫圖(圖34 (10))、舞樂雜技圖(圖33 (1)(2))がそうであり、同范かそれに近いものである。これはこれらの畫像磚墓がともに後漢晩期の桓帝・靈帝・獻帝(後一四七—二二〇)期のもので時代が互いに近いだけではなく、これらの畫像磚がその墓のために特別に制作されたものではなく、墓を營むに当たりこれらを扱う店から購入してきたことを物語っている。それはともかく、まず形式の整った墓として成都北郊の昭覺寺畫像磚墓を取り上げるが、この墓は一應詳しい發掘報告は出ているけれども畫像磚の圖版が十分に公表されていないので、いま上記の似た畫像磚を出土する成都近邊の墓の畫像磚で補い復原することによって説明することにする。

さて、昭覺寺畫像磚墓は一九六六年に發見され、墓(圖34 (1))はアーチ狀の天井をもった長方形の磚室墓をなし、西を向き前室と後室に分かれて後室が少し幅が廣く、全長は八・五二mであつた。墓室内には棺が並べて置かれ、後室に瓦棺二個、前室に瓦棺三個と小瓦棺一個があつた。畫像磚は全部で二十三個使われて、大きさは高さ四二cm、幅四八cm、厚さ六・五cmで、墓室の周壁に順序正しくはめ込まれ、左壁(南壁)に十個、右壁(北壁)に十個、奥壁に三個あつた。奥壁の三個一組の畫像磚が上記の新繁清白郷畫像磚墓と同じく西王母・日神月神圖であつたことは注目されよう。それはともかく畫像磚の並べ方を左壁から順に見ていくと、左壁は右向きの車馬出行を表し、入口の側から(一)幢と檠戟を持った二導騎、二人の乗る有蓋の輶車、檠戟を持って隨走する歩卒から成る導車圖(圖34 (4))、(二)二人が輕車に乗り車箱に二本の檠戟を插した檠車圖、(三)導車圖、(四)車上に柄附きの大きな斧をたて車箱に二本の檠戟を插し、兩傍らに各一人が旌旗を持って隨走する斧車圖(圖34 (3))、(五)導車圖、(六)六騎が前後二列に分かれ馬上で鼗鼓・箏・排簫・鐃・胡笳などの樂器を叩いたり吹いたりする騎吹圖(圖35 (3))、(八)四騎が檠戟を持って驅ける騎吏圖、(九)欄干のある木橋の上を二人の乗る二頭立ての輶車と從騎が驅け抜ける過橋圖(圖34 (2))、(十)導車圖、が配列されている。立派な車馬出行圖であり、主人らしき者も過橋圖の二頭立て輶車に乗っている。また右壁は入口の側から(一)

二層の闕の兩側で戟を持った門衛と盾を持った門吏が迎える單闕迎謁圖（圖34（5））、（二）子闕を持った雙闕の上に鳳凰の止まる雙闕圖（圖34（6））、（三）雙闕圖、（四）導車圖、（五）臺階をもった廳堂の前で衣冠を正した人物が笏を持った人物の拜禮を受ける拜禮圖（圖34（7））、（六）方案や酒尊の置かれた宴席で琴や太鼓の演奏を聴き舞を楽しむ宴樂圖（圖34（8））、（七）簫や鼓の音に合わせて舞を舞い、七丸や劍舞の曲藝をする舞樂百戲圖（圖33（1））、（八）婦人二人と男二人が對面して飲み、端坐した一人が二人の侍女の供應を受ける宴飲圖（圖34（9））、（九）上半部に魚や水鳥のいる園池を配して二人が上空を飛ぶ雁を弋で射ち、下半部で六人が稻の穂を摘んだり鎌で刈ったり運んだりする弋射・收穫圖（圖34（10））、（十）山中の鹽井で櫓を組んで鹽水を汲み釜で煮る一方、狩獵したり柴を刈って運ぶ鹽場圖（圖35（6））、が配列されている。こちらは雙闕の内側で娛樂を楽しんだり糧を得たり生活する場面である。

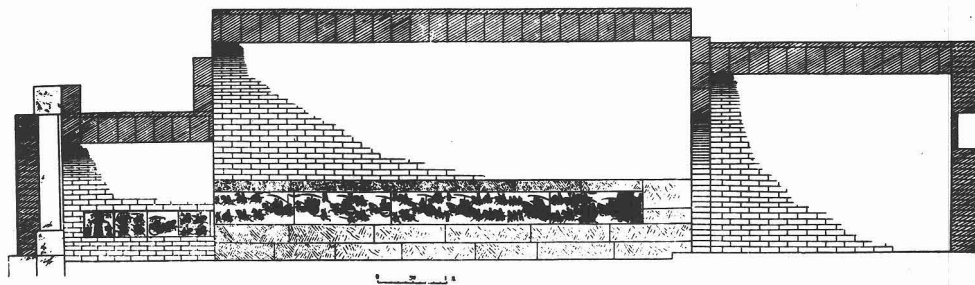
そして後室の奥壁正面稍や高い位置に三個の畫像磚がはめ込まれ、新繁畫像磚墓と同じく中央には西王母圖（圖30（4））、その左右には圓盤を抱いた人面鳥身の日神・月神圖を配していた。日神・月神圖だけは幅が狭く三八・五cmであった。

これらの配置の仕方から考えて、昭覺寺畫像磚墓の構想は、左壁（南壁）に墓室奥から入口へと進む車馬出行圖を表して、これを右壁（北壁）の入口から奥へとつなげたものと思われる。即ち二頭立て輅車の主車に乗り、導車、檠車、斧車、騎吏に騎吹の樂隊を伴い行列を組んで出行した人物は、雙闕の手前で門衛と門吏に出迎えられ、更に雙闕内の廳堂に入つて拜禮を受け、そこで宴飲したり舞樂百戲を楽しんだり、また米を收穫したり鳥を射たり、また鹽を作りながら生活するのである。そして生活をする雙闕の内側がどこの世界かといえば、後壁の一段と高い位置に西王母が表されている通り西王母の世界であり、また誰が生活するのかといえば、西王母圖に墓の主人公夫婦が表されていた通り墓の主人公夫婦であろう。日神・月神圖を伴った西王母畫像磚は奥壁の一段と高い場所に位置して、西王母は墓室全體に君臨するかのようであり、右壁に描かれたことも左壁に描かれたことも全て自分の世界のことであり、これらとして受けとめているのである。これらの畫像を一見してわかることは、これまで見てきた石棺畫像との類似であり、出行、雙闕、拜禮、宴飲、舞樂のモチーフも畫

像石棺にみたものである。またその構成の仕方も畫像石棺とよく似ており、例えば郫縣第四號石棺も左右側板(圖25)(3)(4)に出行・迎賓圖と歌舞宴樂圖を描き、頭足部側板には西王母圖と日神・月神圖を描いていたのである。従ってこの畫像磚墓も西王母畫像磚のみならず墓室畫像全體としても昇仙を表しているということが出來、墓の主人公夫婦が車馬行列を組んで西王母の世界へと昇仙し、そこで死後の生活を送るさまが表されているのである。すると、それと關連してここで注意しなければならないのは、右壁の弋射、收穫圖(圖34)(10)や鹽場圖(圖35)(3)はともに當時の四川の現實の生活の色濃く反映して描かれ、そのためにしばしば漢代の風俗圖として引用されるけれども、嚴密に言えばこれらは現實の世界の光景ではなく西王母という仙界での光景を表していることである。それは車馬行列も同様で、これまでみた石棺畫像の出行圖と異なり隊列を組んで非常に壯麗に描かれているけれども、それは生前の出行の有り様を描いたものではなく、あくまで死後の靈魂の西王母の世界への出行の有り様を描いているのである。

また成都羊子山一號墓<sup>(9)</sup>は成都門外北約5kmの小羊子山にあり、一九五三年に發見された。墓は石と磚の兩方を用いて作られ、墓壁には石材と長方磚、アーチ狀の天井には楔形磚が使われた。大型墓で、墓室は前室、中室、後室に分かれて中室が最も大きく、全長は一三・八四mであつた。そして壁面畫像(圖35)(1)にも畫像磚と畫像石の雙方が用いられ、前室の左右壁と中室に入る角の所には畫像磚、中室の左右壁には畫像石がはめ込まれていた。まず前室の畫像磚は左壁(圖35)(2)には入口の側から單闕迎謁圖、矛を持った僕と婢を從えた婦人の乗る輜車圖、檠戟と幢翳を持った四騎吏圖、弋射・收穫圖が並べられ、右壁(圖35)(1)には入口の側から單闕迎謁圖、騎吹圖(圖35)(3)、三頭立ての輜車圖(圖35)(4)、四騎吏圖(圖35)(5)が並べられ、中室との境のアーチ形門をくぐって中室に入った角の場所には左壁は同じ高さで鹽場圖(圖35)(6)があり、右壁は盜掘のため壞れていた。これらの畫像磚は最初に左右に單闕があつて雙闕の入口を構成し、奥に弋射・收穫圖、鹽場圖を配してその内部の世界を構成しているが、その内側の車馬の畫像磚は右壁は奥の方を向いているにもかかわらず左壁は入口の方を向き、統一がとれていない。思うにこの不統一は全て右向きの車馬の畫

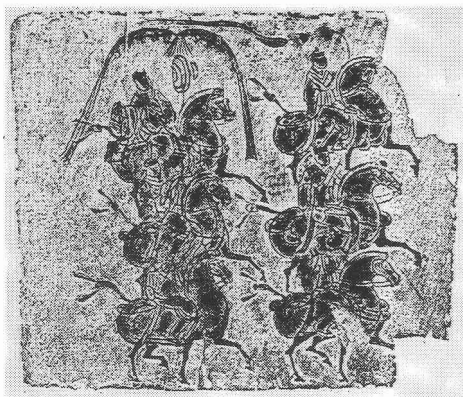




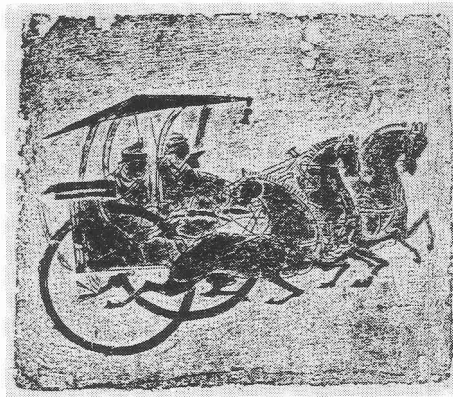
(1) 基縦断面及び畫像配置圖（右壁）



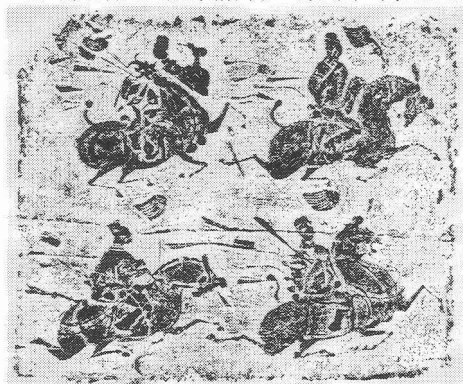
(2) 前室左壁畫像磚（模本）



(3) 前室右壁畫像磚（拓本） 騎吹圖 高38.8cm



(4) 同上畫像磚（拓本） 軺車圖



(5) 同上畫像磚（拓本） 四騎吏圖



(6) 中室左壁畫像磚 鹽場圖

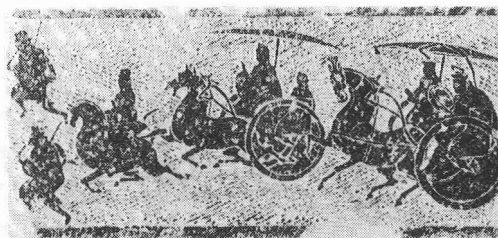
圖35 成都羊子山一號漢墓



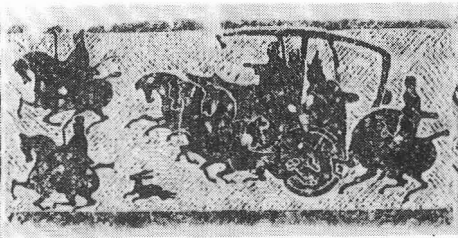
像磚を使用したことに起因しており、上述の如く既成の畫像磚を購入してそのまま使用したために生じたことと思われる。

これに對して中室に使用された畫像石は全てオリジナルなものである。右壁(圖35 (1))は四石から成り、高さ〇・四七m、長さ六・〇四mにわたって奥から手前の方へと一續きの車馬出行圖が刻され、左壁(圖36)も四石から成り、長さは五・一二mあり、最初の二石は手前から奥へと車馬出行圖を刻し、残りの二石は百戲宴樂圖と庖廚圖を刻し、最後は切り取られていた。畫面は右壁(圖35 (1))の奥から手前に至って左壁手前の出行圖(圖36 (1)(2))へとつながり、奥の宴樂圖(圖36 (3))、庖廚圖(圖36 (4))で終わるのである。従って出行圖は全長七・九九mにも及び、そこに車馬、人物が克明に描かれて、十二輛の馬車と五六頭の馬、そして人物八三人が隊伍を組んで大車馬行列が構成されるのである。馬車には一頭立て、二頭立て、四頭立てがあり、それぞれ進賢冠をつけ笏を持った人物などが乗るが、先頭部分に位置する二騎に先導された四頭立ての一際大きな馬車に乗り冠をつけた人物(圖36 (2))がこの行列の主人であろう。そしてそのすぐ前方に百戲宴樂圖(圖36 (3))が配され、垂れ幕の張られた廣間では宴會もたけなわで、劍舞、弄丸、皿回しなどの百戲や舞が演じられ、奥で二人の侍者にかしずかれて主賓らしき人物がそれを見物している。またその宴席の背後では帷幕を境にして庖廚では料理の準備(圖36 (4))などがなされており、室内にも拘らず帷幕の兩側に生える妖しい草は、庖廚も宴樂もこの世ならぬ仙界の光景であることを象徴していよう。車馬出行圖のすぐ前方に百戲宴樂の光景が繰り廣げられるのは餘りに唐突に過ぎ、本來ならばその間に宴樂の行われる世界の入口として門が描かれるべきであるが、恐らく前室の手前の所に雙闕畫像磚を配した關係上、省略されたのであろう。

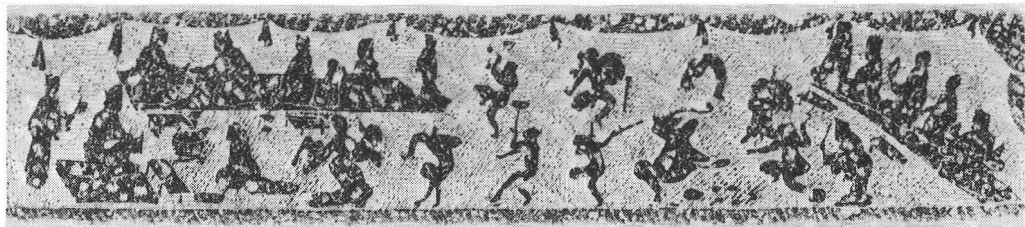
この畫像石の車馬出行圖、百戲宴樂圖、庖廚圖も昇仙と關係があろう。畫像の配置の仕方が〇・五km離れた近くの昭覺寺畫像磚墓と基本的に同じであり、またもとの位置は不明であるが、この羊子山一號墓からは人身蛇尾の日神が太陽の圓輪を支えた縦長の日神畫像磚斷片(圖37 (1))が出土しており、西王母・日神月神圖が配されていた可能性もあるからである。事實この墓の近くの二號墓では新繁清白郷畫像磚墓出土の西王母圖(圖30 (4))と同じ圖柄の畫像磚(圖37 (2))



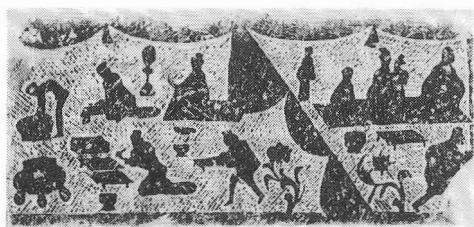
(1) 出行圖



(2) 出行圖



(3) 宴樂圖



(4) 庖廚圖

圖36 成都羊子山一號墓中室左壁畫像石（拓本）



(1) 一號墓出土日神畫像磚（拓本）  
高40cm



(2) 二號墓出土西王母畫像磚 高40.7cm

圖37 成都羊子山一、二號漢墓畫像磚

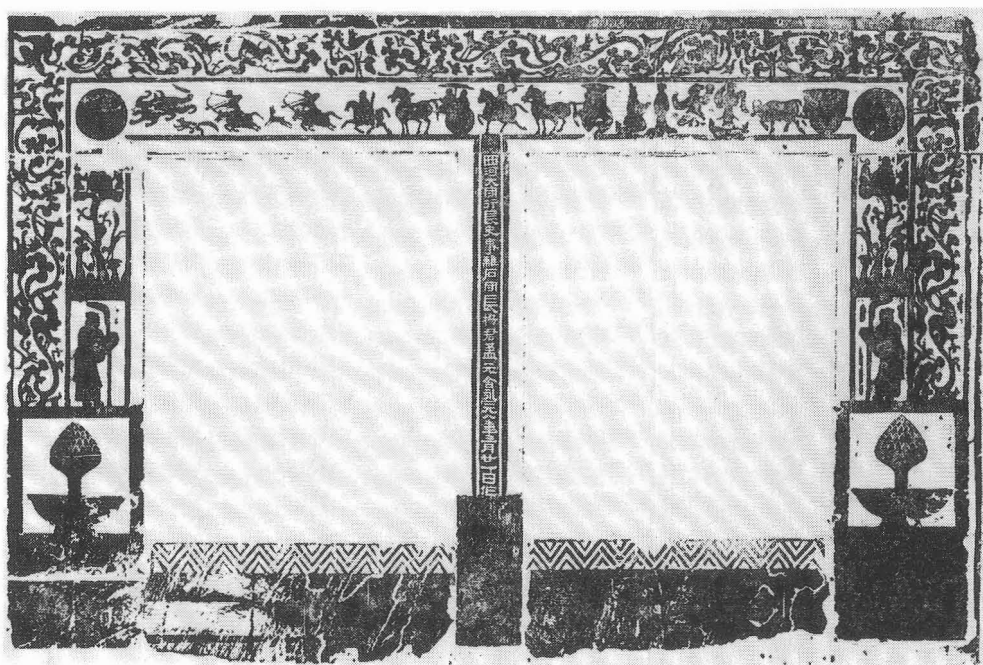
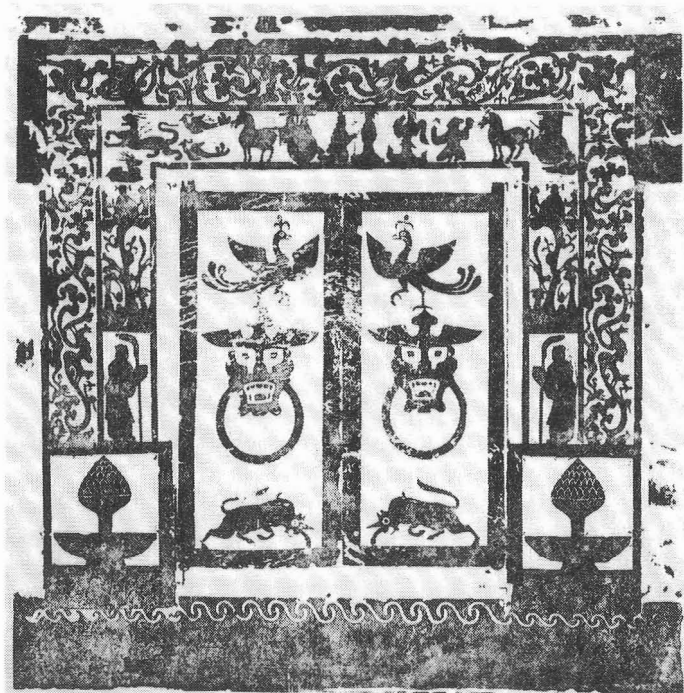
が出土しており、羊子山でも西王母・日神月神圖が表された可能性がある。

これらを要するに、四川の畫像磚墓の墓室内の畫像磚も先に見た畫像石棺と同じく全體として昇仙圖を表していたのである。両者は同時代の同地區の畫像表現として昇仙圖であることを互いに傍證し合う關係にあったのである。

## (二) 陝北の畫像石

陝西省の北部、黄河に西から注ぐ無定河流域の綏德、米脂、榆林といった地域では後漢時代の畫像石墓が多數發見され、大量の畫像石を出土している。現在紀年銘をもった畫像石墓は七基ほど發見されており、そのうち最も古いのは綏德出土の永元八年（九六）の楊孟元墓<sup>⑧</sup>であり、新しいのは米脂縣出土の永和四年（一三九）の牛季平墓<sup>⑨</sup>である。最も新しい畫像石墓が永和四年というのは偶然ではなく、翌永和五年（一四〇）、南匈奴の句龍王吾斯、車紐などが漢に反旗を翻して陝北地方を攻めたため、西河郡は郡治を平定から南五百里餘りの離石に徙し、上郡も南の夏陽に徙すことを餘儀なくされ、この地區一帯は戰場と化してもはや墓を造營することも不可能になったのである。従って陝北の畫像石は永和五年を下限として、その畫像石は黄河の東の離石（山西省）などに移り、事實、一九一九年に離石馬茂莊では和平元年（一五〇）の紀年銘をもつ陝北風の左表（左元異）畫像石墓<sup>⑩</sup>などが發掘され、最近また同じく馬茂莊で後漢末期の三基の畫像石墓が發掘されている。それはともかく陝北の畫像石は一般に前室と後室に分かれた墓室の墓門や、後室に至る門などの門框、門扇、門楣に刻されるのが普通である。

いま最も古い永元八年（九六）の紀年銘をもつ楊孟元墓<sup>⑧</sup>を取り上げると、この墓は一九八二年に綏德縣城東南三五kmの蘇家圪坨村で發見され、無定河に面した臺地上に位置していた。墓室は北向きで、墓門、前室、過道、後室から成り、幅二・四m、奥行三・一mの後室には木棺三具が置かれていた。畫像石は墓門と前室の奧壁、即ち後室に至る過道の門に刻



(1) 墓門刻石 (拓本)  
(2) 過道刻石 (拓本)

圖38 綏德楊孟元畫像石墓 永元8年(96)

まれていた。墓門（圖38）（1）は六石で構成され、門楣、左右の立框、二枚の門扇、そして門坎の全てに畫像を刻していた。二枚の門扇には各々鳳凰、鋪首、一角獸を刻し、左右の框は下に盤に植物を植えたものを配し、その上の外側の枠にはくねくねとくねった樹木が門楣の最上部まで伸びて神獸を間に描き、内側の枠には下に簪（20）を持った門吏、上に樹木のように伸びた山嶽の頂上に玉勝をつけた人物と兩側に二神獸を描いている。また門楣も上下の枠に分かれ、上の枠には雲氣文と神獸、下の枠には馬車二輛と間に踊る男女など四人を描き、左端に飛禽二と奔獸と臥鹿などの神獸を描いている。また過道の門（圖38）（2）は門楣、左右の門框、門坎、中央の柱の五石で構成され、各部の畫像は墓門と殆ど同じであったが、門楣の下は馬車二輛と踊る男女など四人の他に牛車と騎馬を描き、左端に狩獵、兩端に日月を描いていた。そして中柱には隸書一行で「西河太守行長史事離石守長楊君孟元舍、永元八年三月廿一日作」と刻されていた。

二つの門の左右立框の内側に刻された樹木のような山嶽の上に坐す玉勝をつけた人物は西王母であろう。陝北の畫像石はこの位置にこの畫像を左右相稱の形で表すことが多く、更に畫像の鮮明な綏德賀家溝磚窖梁漢墓出土の左框畫像石（圖39）（1）などを見ると、山嶽は三つから成って兩脇の低い山嶽の上では各々犬のような動物と尾の長い狐のような動物が跳ね戯れ、中央の高い山嶽の上に玉勝をつけた人物と兩側に長い耳と尾のある兔のような動物と後頭部の毛が立った羽人のようなものが侍している。山嶽は崑崙山を三山形式で表したものとみられ、西王母であることはその崑崙山の頂に坐すること、玉勝をつけること、傍らに免のような動物が侍ることによって知れる。榆林古城灘南梁村漢墓の門框（圖39）（2）などのように、この頂に局盤を中に二人の羽人が腕を振り上げ六博をする光景が描かれることがあるが、それも四川の新津寶子山出土畫像石棺（圖27）（3）で崑崙山の西王母の世界の光景として見たところである。崑崙山を節くれだった樹木のように表した例としては、他に樂浪王盱墓出土の永平十二年（六九）銘の神仙龍虎畫像漆盤（21）に描いた西王母圖（圖39）（3）が挙げられる。この漆盤は「蜀郡西工綰紵行三丸治千二百盧氏作」の銘がある通り蜀で制作されたものである。

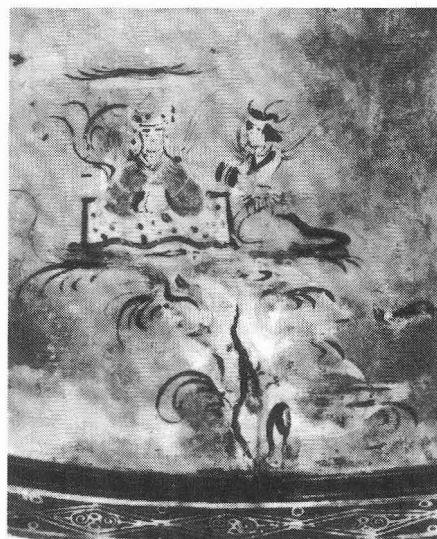
また門楣の下は玉勝の畫像はともに神獸が登場するところから仙界の有り様を描くものであろう。但し何を表しているの



(1) 綏德賀家溝漢墓石刻門框 幅37cm



(2) 榆林古城灘漢墓石刻門框 幅38cm



(3) 樂浪王盱墓出土漆盤 西王母像  
永平12年(69)



(4) 米脂縣官莊村四號墓前室後壁石刻 永初元年(107)



(5) 綏德義合鎮漢墓石刻門楣 長139cm



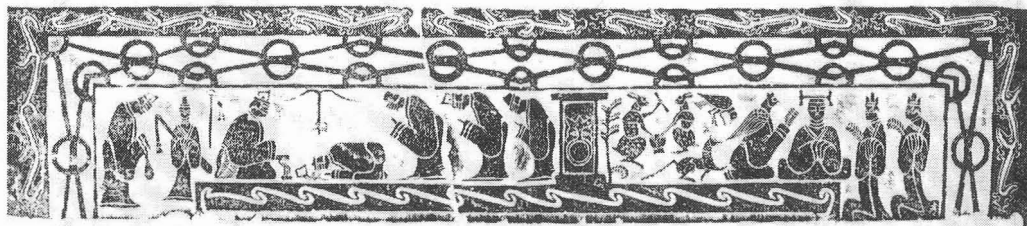
(6) 綏德王得元墓正面石刻門楣 永元12年(100) 長186cm

圖39 陝北畫像石(拓本)及び關係資料



か判断に決め手を缺くので、一九七一年に發掘された永初元年（一〇七）の米脂縣官莊村四號畫像石墓（牛文明墓）の前後壁門楣の畫像<sup>(4)</sup>（圖39）を見ると、中央に三層の雙闕があつて間に二層の樓閣があり、階下には二人の人物が坐して屋外の四人の人物がこれに仕え、雙闕の外では馬車と騎馬の一行が左右から雙闕目指して駆け來たり、雙闕の傍らで門吏が腰を屈めてこれを迎えている。出行といふ雙闕といふ樓閣といふ、これまで南陽や四川の畫像で見慣れたモチーフばかりであり、昇仙を扱っているのは間違ひなからう。また綏德義合鎮園子溝漢墓の門楣の畫像（圖39）<sup>(5)</sup>は、中央に二層樓閣を二つ合わせたような建物があつて、眞ん中に立つ高い望樓には鳥や獸の獲物がぶら下がり、階下の右の室では二人の人物が語らい合い、右の室では二人の人物が盤上に箸を並べて六博をしている。そして外では左から騎馬と馬車が樓閣へとやって來て側の樹木に馬を繋ごうとしており、右からは佩劍の人物と馬を引く御者がやって來ている。これも昇仙における出行の有り様と仙界での生活の有り様を表しており、望樓に吊り下げられた獲物は多分仙界での糧食に當たるものである。四川簡陽縣鬼頭山三號石棺（圖28）<sup>(4)</sup>に仙界での糧食の倉として太倉が描かれていたことが思い起こされる。このように墓門の門楣の畫像は仙界での光景を表したものとみられ、更に昇仙の出行の光景や門框に崑崙山上の西王母が描かれていたことを考慮すれば、崑崙山の西王母の世界への昇仙を表したものと理解出來よう。この他、門楣の畫像としては永元十二年（一〇〇）銘の綏德王得元墓の墓門門楣畫像（圖39）<sup>(6)</sup>のように麒麟、鳳凰、玉兔などの天上界の瑞獸を描くものがあり、これも天帝の下都である崑崙山における西王母の世界の光景として描かれたものであらう。楊孟元墓の門楣の畫像（圖38）も、馬車で西王母の世界へ昇仙してきた人物が舞樂の歓迎を受ける光景と、そして西王母の世界の神獸、狩獵の光景を表すものと解される。

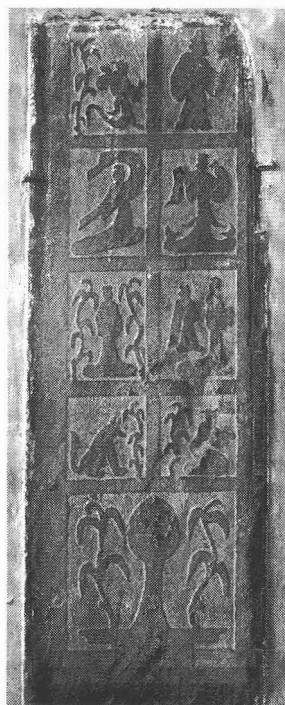
この他、出土の状況や位置は詳しく分からぬが、興味深い畫像として一九七五年に綏德四十鋪鎮で出土した墓門門楣畫像石（圖40）<sup>(24)</sup>がある。この石は中央に鋪首のついた扉を配して、右側には玉勝をつけて坐す西王母を中心に鳥頭の羽人と冠をつけた二人の人物が草を持って侍り、左傍らには三足鳥、九尾狐と仙藥を搗く二匹の玉兔が控えている。玉兔の



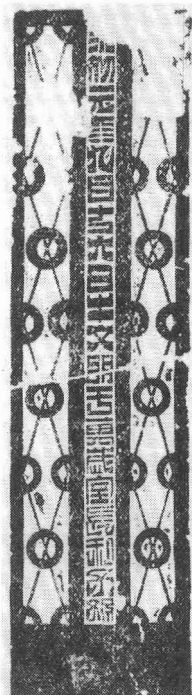
(1) 綏德四十鋪鎮出土石刻門楣 (拓本)



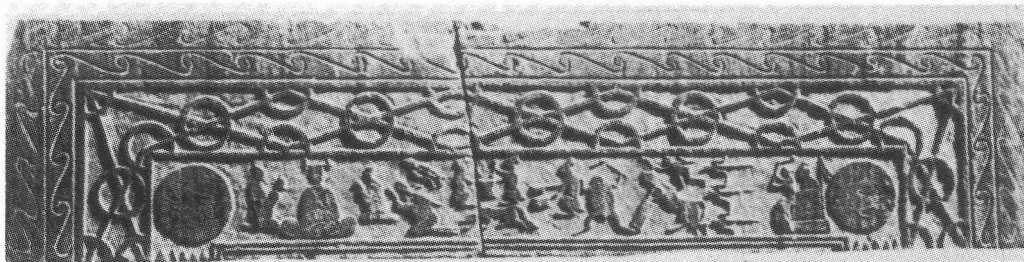
(2) 綏德四十鋪鎮石刻  
左門框(拓本)  
高97cm



(3) 綏德出土墓石刻門框



(4) 米脂縣官莊村四號  
墓室後壁石刻  
(拓本) 永初元年(107)



(5) 綏德軍劉家溝漢墓出土石刻門楣 長167.5cm

圖40 陝北畫像石



傍らの草は仙草で、玉兔はそれを搗いて仙薬を作り、鳥頭の羽人たちが持つ草もこの仙草であろう。また左側には一際大きく描かれた進賢冠をかぶり几に馮る人物を中心に、その前に笏を持って拜禮する四人の人物がいて、一人は冠を脱ぎ地に伏して跪拜し、几に馮る人物の背後の二人は、戴冠の一人は拜禮し童僕のような一人は何かを抱えて立ち、壁には弩と劍が掛かっている。この圖を見て思い起すのは四川榮經の石棺畫像（圖27 (4)）で、やはり中央に扉を配して、右側の室内には西王母、左側の室内には頬を寄せ合う二人の男女を描いていた。この二人の男女は先に考證した通り西王母の世界へと昇仙して來た者で、右の西王母と屋根を一つにして同じ樓閣内にいるのであるが、門楣畫像石でこれに相當するのは左側に大きく描かれた人物で、扉を隔てて右にいる西王母の家來たちの歡迎の拜禮を受けているのである。この光景も四川新繁清白郷畫像磚墓出土の西王母圖（圖30 (4)）が思い起され、そこでも笏を持った家來が二人の男女に跪拜していた。従ってこれもまさしく昇仙圖であり、ここでは西王母と拜禮のモチーフが描かれているのである。

またこの門楣畫像石と同じ墓門の左框に配したと思われる畫像石（圖40 (2)）が發表されており、縁の鉤狀の文様と穿壁文が互いに共通する。この石は縦長の畫面の一番下に五本に枝分かれした一株の樹木を描き、その上部は左側に穿壁文を縦に配してその右側には人物像を七段に配し、上六段は各々向かい合った二人の人物を描き、上の三段は酒尊を側に置いた對飲、局盤を中にした六博、酒尊と壺を配した投壺、下の三段は長い袖口を翻した席舞、そして最下部には後ろ向きに坐す檠戟を持った門衛を描いている。これまで西王母の世界における六博の光景をたくさん見たように、これらは全て西王母の世界での光景であり、ここは本來山嶽上の西王母を描くべき箇所であるが、門楣に西王母を描いたがために、これらがここに描かれたのであろう。すると下の檠戟を持った門衛は西王母の世界の門番であり、綏德楊孟元墓墓門框に描かれた簪を持った人物も同じ西王母の世界の門衛と知れる。また一番下の五枝に分かれた樹木は、この箇所には樹木に馬を繋ぐモチーフや樹上の鳥を弓で射るモチーフなどが描かれることがあり、江蘇沛縣棲山漢墓畫像石棺でみた西王母の世界にある聖樹を示すものであろう。綏德楊孟元墓の鉢に生

えたスベード状の植物（圖38）（1）（2）とともに西王母の世界を象徴しているのである。この植物については博山爐とする説もあるが、表面に小さな花瓣状のものが重なっているうえに、米脂縣官莊村畫像石墓前室北壁門框畫像石（圖39）（1）のように鉢がなく大地から直接生えていることもあり、やはり棲山漢墓畫像石棺（圖2）（1）などでみた長青樹のような植物とみなすのが妥當であろう。

また綏德軍劉家溝漢墓で出土した門楣畫像石（圖40）（5）も興味深いものである。この石は左端に飛び跳ねる兔、空を飛ぶ蟾蜍の中にいる月、右端に空を飛び羽文様の描かれた鳥の中にいる太陽を配し、左側（圖41）（1）には便面を持った侍者や鳥頭の神人などにかしずかれ、玉勝をつけて坐す西王母と、右傍らに三足鳥、九尾狐、仙藥を搗く玉兔などの眷屬、更に何か樂器を鳴らす玉兔と蟾蜍、琴を弾く犬のような動物を描く。また右側（圖41）（2）には三羽の鳥の引く乗物があり、乗り物は側面に屏を備えて後ろに幟を立て、下はそりのように平たくて車輪は無く雲氣のようなものが描かれている。雲車であろう。その雲車に左手に手綱を取り右手に鞭を振り上げる羽人の御者と冠をつけた男性が乗り、左に向かって空を駆けている。三羽の鳥の先を駆ける羽人らしき者は先導役であろう。この圖については、右側の鳥の引く乗り物に乗る戴冠の人物を東王父と解釋し、東王父が左側の西王母との會合に向かうところを表したとする説がある。この説の根據は『東方朔神異經』の次の記事である。

崑崙の山に銅柱あり、その高さ天に入り、いわゆる天柱なり。圍三千里、周圍は削りしが如し。下に回屋あり、方百丈、仙人の九府これを治む。上に大鳥あり、名づけて希有と曰う。南を向いて左翼を張れば東王公を覆い、右翼は西王母を覆う。背上の小處に羽なく、一萬九千里。西王母歳ごとに翼上に登り、東王公に之くなり。

即ち崑崙山が天柱であること、また仙人の役所があって回屋と呼ばれたということもさることながら、西王母が崑崙山の上にいる希有という大きな鳥の翼に乗って、一年に一度東王父に會いに行くことが述べられており、これと關係があると



(1) 左邊部分



(2) 右邊部分

圖41 綏德軍劉家溝漢墓石刻門楣

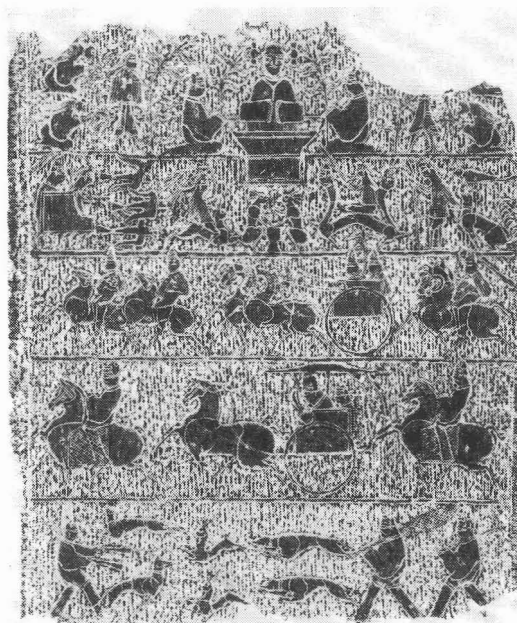


圖42 山東嘉祥縣嘉祥村出土畫像石(拓本) 高81.5cm

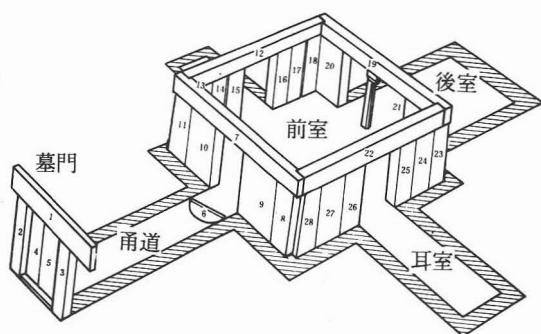
いうのである。しかるに門楣の畫像は男性の方が西王母のところに向かっており、また三羽の鳥が希有という大鳥に比定され得るかどうかも疑問である。そして何よりの疑問は、この畫像石の制作された時點に既に東王父が成立していたかどうかである。陝北の畫像石は先にも述べた通り、紀年銘を持つ畫像石に依る限り、永元八年（九六）が最も古くて永和四年（一三九）が最も新しく、下限は陝北地方が南匈奴によって攻められ郡治を離石などに徙した永和五年であった。この畫像石もこの間のものと考えられ、畫像の上の穿壁文帶は綏德四十鋪鎮出土畫像石（圖40（1））に共通し、永初元年（一〇七）の米脂縣官莊四號墓の墓室後壁正中畫像（圖40（4））に共通している。たとえ最も遅い永和五年（一四〇）を採ったとしても、この時點で東王父が既に成立していたという資料は未だ何も見當らない。後述するように現在の確實な資料に依る限り、東王父の畫像の最も早い例は元嘉元年（一五一）の山東嘉祥武梁祠東壁畫像（圖47（1））である。従って上述門楣畫像の右側人物を東王父と解釋する説にはなお檢討の餘地があろう。

むしろ、この畫像を解釋するに當たっては、他の畫像石資料を運用する必要がある。アドルフ・フィッシャー舊藏の山東將來畫像石（圖62（2））はしばしば引用されるが、それと同時に山東嘉祥縣嘉祥村出土の畫像石（圖42）に注目すべきである。この兩圖はともに第一層に西王母を描いてその下は人物群像、車騎出行、狩獵などを描く。いま注目するのは第一層で、西王母と侍者を中心に、その周りに玉兔、三足鳥、九尾狐、鳥頭の神人、羽人などを配し、左側には三羽の鳥の引く雲車に冠をつけた人物と手綱を取る羽人の御者が乗り、西王母の方へ向かって空を驅けている。陝北畫像石と兩圖、特に嘉祥村畫像石とのテーマの一致は明かである。雲車がともに側面に屏を備えて幟を立てるなど細部でも似ており、何等かの影響關係にあったことを推測させ、恐らく陝北畫像石の方が山東畫像石の影響を受けて作られたのであろう。そして更に嘉祥村畫像石を細かく見ると重要なことを示唆してくれる。雲車を三羽の鳥が引くといったが、實は三羽の鳥の前には空を驅ける兔に乗った羽人がおり、この羽人が三羽の鳥を先導しているのである。羽人は先端に數本の紐がついた棒を持っており、その紐は鳥の二重の首輪に繋がれている。雲車の御者の手綱の方は首輪に繋がれず、鳥が口に銜えているのである。劉家溝畫像石（圖41（2））

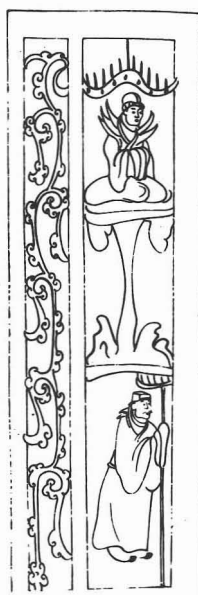
でも羽人が鳥の前を駆けていたが、やはり先導していたのである。またこの場面に登場する鳥、兔、羽人は西王母の周りにも眷屬として配されているが、これも細かく観察すると同じ種類のものであることがわかる。羽人の乗る兔はすぐ右側で仙薬を搗く耳のピンと伸びた二羽の玉兔と形が全く同じであり、羽人と雲車を引く鳥はというと、畫面右端で戟のような武器を持った羽人が三足鳥と九尾狐を紐で繋いでいるが、この羽人と三足鳥によく似ている。羽人はともに被髪で、羽衣をつけて肩に羽を生やし、半ズボンのようなものをはいており、鳥もともに首に二重の輪をつけ尾がよく伸びている。

そこでは、雲車を御す羽人、雲車を引く三羽の鳥、先導する羽人と兔、これらはみな西王母の眷屬たちであり、西王母の命により雲車に乗っている戴冠の人物を迎えに行き、いまや戴冠の人物を伴って西王母のところへ歸還せんとする光景を表したものであるまいか。では誰を迎えに行ったのかといえば、ここで思い起こされるのは前漢中期の洛陽卜千秋墓主室頂脊に描かれた壁畫（圖9）であり、あの壁畫でも奥の第三、四番目の磚を使って、西王母に遣わされた玉兔、三足鳥、九尾狐、蟾蜍とともに、墓の主人公夫婦が蛇と三首鳥に乗って西王母の所へ昇仙しようとするところが表され、行く手の雲の上には西王母もしくはその使者が配されていた。この圖も墓の主人公の昇仙の光景を表したものでないかと考えるのである。雲車に乗る人物は進賢冠をつけた普通の人間で、何等特定の神仙を表すしるしは見當たらない。これは劉家溝畫像石の雲車に乗る人物（圖41（2））も同様である。劉家溝漢墓出土門楣石刻と上述の西王母の世界に昇仙した光景を表す綏德四十鋪鎮出土石刻門楣（圖40（1））は、周縁の穿壁文や鉤狀文様など共通點が多く、制作年代も近いことを物語っており、また墓における位置も同じ門楣であることを考え併せ、前者も墓の主人公が西王母の所へ雲車に乗って昇仙しようとするところを表したとみるのが妥當であろう。

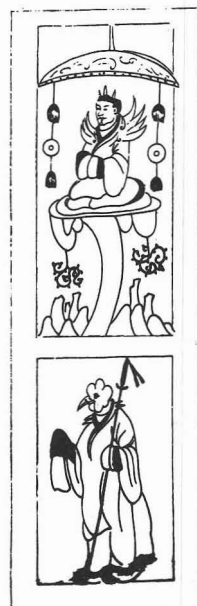
ところで、一九九〇年、山西離石馬茂莊村において三基の畫像石墓が發掘され、陝北畫像石のその後の變化を示すとともに、以上の推測を裏附けるような注目すべき畫像石が出土した。馬茂莊村では一九一九年に上述の和平元年（一五〇）銘の石刻柱をもった左表（元異）畫像石墓が發見されており、三基の墓は西より東へ二號墓、三號墓、四號墓と編號され



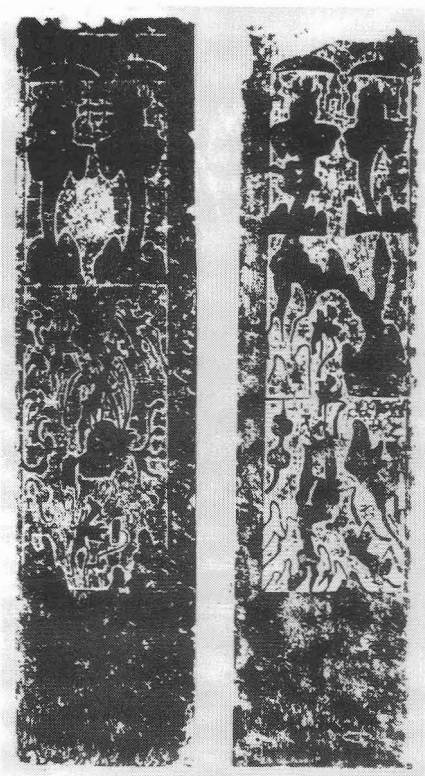
(1) 二號墓畫像石位置圖



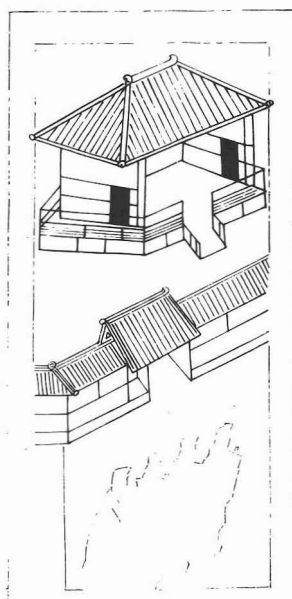
(2) 同上石刻左門框  
(模本) 西王母



(3) 同上前室東壁石刻  
(模本) 東王父



(4) 同上前室南壁石刻 (拓本)



(5) 同上前室北壁石刻 (模本)



(6) 三號墓石刻  
右門框(模本)  
東王父

圖43 山西離石馬茂莊二、三號畫像石墓

た。最も多く畫像石が出土したのは二號墓<sup>(27)</sup>(圖43 (1))で、南向きの墓門、甬道、前室、兩耳室、後室とから成り、畫像石は墓門と前室の四壁と横額上に、計二八石、三一畫面が刻されていた。注目されるのは墓門門框、前室南壁、前室東西壁に配された畫像石で、それぞれ西王母と東王父を表していた。まず墓門左右の門框畫像石(圖43 (2))は、外枠に雲氣文を描いて、内枠は下に簪と盾を持った門吏を描き、上に樹木狀の山嶽に坐した西王母と東王父を描いていた。つまりこれまでこの陝北畫像石ではこの左右門框にはともに西王母が表されていたが、ここでは明らかに男女が描き分けられて新たに東王父が登場したのである。ともに華蓋の下に肩に毛の生えた羽衣を着け拱手していたが、西王母は頭巾のようなものをつけ、東王父は上に三本の突起が伸びた三梁冠のようなものをつけて髭をはやしていた。これは前室の東西壁に左右一對で配されていた畫像石(圖43 (3))も同様で、東壁には下に檠戟を持った鶏頭の人神、上に樹木狀の山嶽に坐す男神東王父を描き、西壁には下に檠戟を持った牛頭の人神、上に同じく樹木狀の山嶽に坐す女神西王母を描いていた。鶏頭と牛頭の人神は江蘇沛縣樓山漢墓石棺(圖2 (2))などにみた鳥頭と馬頭の神人と同じ系譜に屬し、もともと西王母の眷屬であつたと思われる。綏德漢墓出土の門框畫像石では屢々山嶽上に西王母の代わりにこの鶏頭と牛頭の人神が坐しているが、西王母の眷屬の故であつたと考えられる。また前室南壁の畫像石(圖43 (4))も左右一對をなすが、ともに上部に西王母の坐す山嶽と東王父が坐す山嶽をセットで描き、下部は層巒疊嶂する險しい峯々を描き、その間を上部の山嶽目指して垂直に車騎が空中を驅ける様を描く。左側は數頭の動物が引き羽人が御す雲車を中心に、前に吹き流しのような旒をつけた旗を持って先導する騎吏二騎、後ろに動物に乗り蓋をさしかけられた羽人を描き、右側は旗を持って疾驅する騎吏四騎を描いている。雲車に誰が乗っているか不明であるが、これらは明らかに西王母、東王父の世界への出行を描くものであろう。西王母と東王父の坐す山嶽が並んで表され、その二つの山嶽を一行が目指しているのも注目すべきである。

また三號墓<sup>(28)</sup>は長さ八・四五m、幅六・六五mと、二號墓とほぼ同じ大きさで、西向きの墓門、甬道、前室、北側耳室、

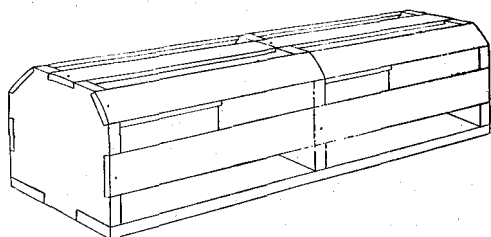


(1) 前室東壁石刻左邊框（模本）

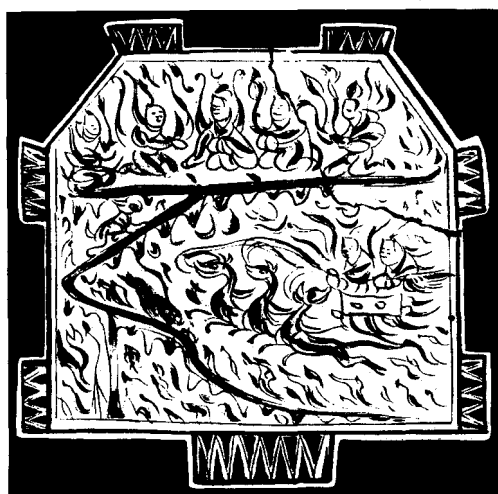


(2) 前室東壁石刻右邊框（模本）

圖44 山西離石馬茂莊三號畫像石墓



(1) 枕形器 長35.3cm



(2) 中間石板彩繪畫（模本） 出行

圖45 河北望都二號漢墓出土石製枕形器



後室から成り、墓門と前室の西壁、東壁に計十一石配されていた。墓門は左右門扉にそれぞれ鋪首を中心に上に朱雀、下に一角獸を描き、左右門扉に二號墓と同じく下に盾と簪を持った門吏、上に樹木狀の山嶽に坐す西王母と東王父（圖43(6)）を描いていた。二號墓と異なるのは西王母と東王父がともに三梁冠をつけて、傍らに仙草が生え、山嶽の下に鳥がいることである。圖像として興味深いのは前室の東壁、つまり後室に通ずる甬道の入口に配された左右兩框の畫像石である。左右の畫像石（圖44(1)(2)）は下に檠戟を持った鶏頭の人神と笏を持った牛頭の人神を仙木の傍らに門吏のように配し、上には空中を驅ける壯大な車騎出行の様を描いていた。左側の畫像石（圖44(1)）は最上部に旗を持ち先導する騎吏二騎、その下に三頭の馬のような動物が引く蓋付き雲車、その下に龍に乗って驅ける羽人と、龍と戯れる二人の羽人を描いていた。また右側（圖44(2)）は最上部に旗を持って先導する騎吏二騎、下に四頭の馬のような動物の引く蓋付き雲車と五頭の馬のような動物の引く蓋付き雲車を描き、間に旗やはたばこなどを持った三騎吏と鳥の背に乗って飛ぶ二人の人物を描いていた。この出行が何を表しているかといえば、右側畫像石中段のはたばこに注目すると、これは長い柄に三段重ねの毛のふさをつけ、節と呼ばれるものである。この節は皇帝の意思を帶びて使いするものに對して證明用に授けられるものであるが、ここではこれを持つ人物が空中を驅けているように、天帝から授けられたもので、天帝の使者を表しているよう。この節を持った羽人は洛陽千秋墓頂脊壁畫の昇仙圖（圖9）にも描かれており、そこでは羽人が天帝の使いとして墓の主人公を迎えに龍、鳳凰などを伴って地上に降り、崑崙山の西王母から遣わされた玉兔、三足鳥、蟾蜍、九尾狐など彼女の眷屬とともに、墓主人夫婦と一緒に崑崙山へと昇仙するところが表されていた。<sup>(20)</sup>この圖も昇仙を表すものと考えられ、四頭立ての雲車と五頭立ての雲車に乗る人物が墓の主人公であろう。この一行は二圖にまたがって右から左へと進み、二號墓南壁畫像石に描かれていた如く西王母と東王父の世界を目指しているのである。そして左側の圖では下に龍と戯れる羽人二人が描かれていたが、一人の羽人は鶏頭神人の傍らの仙木の頂に足をかけており、鶏頭神人と牛頭神人の守る西王母・東王父の世界へ一行が到着したことを表しているよう。二號墓南壁畫像石では畫面下部から垂直に上の西王母・東王父

の世界を目指し空中を駆けていたが、三號墓ではそれが上部に描かれてより自然な描き方といえるであろう。そして三號墓では描かれなかったが、二號墓の前室北壁、つまり後室に通ずる甬道の入口(圖43 (5))には側廊とその内部の寄棟造の殿閣が描かれ、側廊の外では笏を持った四人の人物が身を屈めて賓客を迎えていた。この殿閣が西王母・東王父の世界の宮殿であり、昇仙した墓の主人公はこの中へと入って行くのであろう。

このように最近発見された離石馬茂莊の畫像石墓は全體として西王母・東王父の世界への昇仙を表していたが、これらはあくまで山西離石のもの、即ち永和五年(一四〇)に西河郡が郡治を陝北の平定から離石に徙して以後のものである。年代は和平元年(一五〇)の左表墓<sup>(2)</sup>より遅く、後漢晚期の桓帝(一四七—一六七)、靈帝(一六八—一八九)頃と推定されている。これまでみた陝北畫像石の傳統を受け継ぎ、その後の變化を示しているといえよう。そしてこれらのうちで最も注目すべきは、新たに東王父が登場したことである。この地方におけるこれまでの西王母單獨神の原則が崩れて、東王父が女性神の西王母に對して男性神として對等の地位を占めるようになったのである。昇仙の先もこの二神の世界となり、二神の棲む山嶽目指して雲車による壯大な出行が表されていた。東王父の登場はやはり二世紀中頃以降のことであり、後に詳述する山東地方の狀況とほぼ類似する。従って先に取り上げた劉家溝漢墓門楣畫像石(圖40 (5))の雲車に乗って西王母の所へ向かう人物はやはり東王父とみなすのは難しいのである。そして逆に離石馬茂莊二號墓の前室南壁畫像石(圖43 (4))や三號墓前室東西壁畫像石(圖44 (1)(2))の出行圖は、墓の主人公が雲車に乗って空中を昇仙する様を描く點で、劉家溝漢墓の畫像と共通性があり、後者が墓の主人公の昇仙を描いていたことが改めて理解されるのである。

ちなみに一九五五年、河北省西部の望都二號漢墓<sup>(2)</sup>で発見された彩繪石製枕形器には離石馬茂莊畫像石墓の畫像と關係の深い畫像が描かれていた。この墓は後漢末期の靈帝光和五年(一八二)の賣地券が出土しており、墓の造營時期もほぼこの頃と推定される。枕形器<sup>(2)</sup>(圖45 (1))は長さ三五・三cm、幅一一・六cm、高さ一一・二cmで、六角形の長方體をなし、十二枚の長方形石板と三枚の六角形石板から成っていた。いま問題とする畫像は兩端と、中央に仕切板のようにはめ込ま

れた六角形石板に墨と彩色を使って描かれ、兩端の石板は外側に鳳凰、内側に四神を描き、中央の石板は片面に「西王母」、片面に「東王父」を描いていた。「西王母」の畫像(圖45 (2))は、上部に横に太い墨線を引いてその上に肩に毛の生えた羽衣をつける五人の人物が描かれ、拱手して坐す人物を中にして、左と右に仙草のようなものを差し出す人物を二人ずつ配している。また下部には三匹の龍のような神獸に引かれる雲車を配し、手綱を手にした御者ともう一人が乗り雲氣のたなびく空中を驅けている。畫面は太い墨線で區切られているが、この線は樹木狀の山嶽を示すようでもあり、雲車が沿って行く道のようなでもある。道ならば四川彭山三號石棺の左上がりの道を進む車馬出行の圖(圖27 (1))が思い起こされよう。いずれにしても雲車が上方の人物たちを目指して驅けているのは明かである。また「東王父」の畫像も殆ど同じであるが、雲車の前に馬と鹿に乗った三騎が描かれ先導をつとめるのである。畫像が正確さを缺くので斷定することは避けるが、馬茂莊畫像石墓の畫像と類似から判斷し、これもそれぞれ西王母と東王父の世界への昇仙を描くものと考えられる。

いずれにしても、このように陝北の畫像石墓は、初期には墓門などに西王母並びにその世界への昇仙の畫像を表して、南陽の前漢時代の畫像石墓や畫像磚墓と同じく、その内部の墓室が恰も昇仙した西王母の世界であるかのように演出されていた。また後期の離石馬茂莊の畫像石墓では、墓門だけでなく墓室内部にも盛んに畫像が表されて、西王母の他に新たに東王父が加わり、その西王母、東王父の世界への昇仙が表現されるようになったのである。

### 三 祠堂畫像石における昇仙圖

#### (一) 嘉祥縣武氏祠、宋山小祠堂

これまで地下の墳墓の裝飾としての畫像石、畫像磚をみてきたが、ここに取り上げる祠堂<sup>(25)</sup>は墳丘の前に設けられた地上

の石造構築物であり、その内部壁面に畫像が刻された。墓域内に墳墓とは別に祠堂を設ける制度は前漢時代にまで遡り、『漢書』卷六八 霍光傳<sup>(226)</sup>、同 卷五九 張安世傳<sup>(227)</sup>に豪華な冢祠堂建立のことが記されており、前漢時代の祠堂の遺物もな<sup>(228)</sup>くはない。しかし現在、遺蹟の確認されるのは全て後漢時代のものである。なかでも山東肥城縣の孝堂山石祠堂や山東嘉祥縣の武氏祠が古來有名で、前者は最古の建築物として今なお残っており、後者は武氏一族の少なくとも三つ以上の祠堂があり、清朝に發見された畫像石に基づいて度々復原の試みがなされてきた。また近年の發掘によって祠堂關係の資料が續々と發見されており、江蘇徐州青山泉白集畫像石墓祠堂<sup>(圖69)</sup> (1)や安徽宿縣褚蘭畫像石墓祠堂など、實際に幾つかの祠堂が墳墓を伴って發掘されているのみならず、嘉祥宋山一、二、三號墓などから、後世の墳墓に石材として使われた祠堂の畫像石も相當量出土して、祠堂の構造、畫像内容も次第に解明されつつある。その結果、これまで用途が不明であった數多くの畫像石がもとも祠堂の畫像石であることが判明し、その資料の數を益々増やしつつある。但しそれらの地域は、『水經注』には張伯雅墓や胡著墓など河南省の例<sup>(229)</sup>がみえるけれども、現在遺蹟が確認されるのは壓倒的に山東、江蘇徐州に集中している。いま祠堂畫像石を取り上げるに當たって、おおよそ二世紀半ばを境にして前期と後期の二期に分け、前期は孝堂山祠堂畫像石、後期は武氏祠畫像石を中心に考察することにし、併せてこれら以外の幾つかの祠堂のヴァリエーションをみてみたい。

最初に山東嘉祥縣武氏祠畫像石と同じ嘉祥縣の宋山發見畫像石を取り上げる。兩者は互いに10km餘りしか離れておらず、地理的に非常に近いうえに、およそ後漢後期の桓帝時期(一四七—一六七)頃と、時代も非常に接近しており、畫像石の様式が互いに類似して一括しやすいからである。またこれらの畫像石は祠堂の畫像石として形式的には殆ど完成の域に近づいており、祠堂の典型として見やすいからである。

嘉祥縣武氏祠は、乾隆五一年(一七八六)に濟寧運河同知の官にあった黃易(一七四四—一八〇一)<sup>(231)</sup>が現地で調査を行って、武斑碑、一對石闕の他、「武梁祠」「武氏前石室」「武氏後石室」「武氏祥瑞圖」「孔子見老子圖」などと命名した二十

石餘りの畫像石を發見し、乾隆五四年（一七八九）にはまた李克正等が「武氏左右室」の畫像石十石を發見した。黃易と李克正はこれらの畫像石三十六石を、武梁祠三石、祥瑞圖二石、後石室九石、前石室十二石、左右室十石、と組に分け編號した。<sup>(23)</sup>その他、「孔子見老子圖」「何餽畫像石」「供案石」「花紋條石」など十四石を未編號畫像石とし、別に一對石闕、一對石獅子、武斑碑、武榮碑を保存した。これが武氏祠の全容で、これまで多くの研究者によって研究がなされてきたが、祠堂石室を復原する試みも度々なされ、古くはフェアバンク夫人の「最良の拓本資料」に基づいた、四石室のうち武梁石室、前石室、左右室を復原した案がある。また近年は蔣英炬氏<sup>(24)</sup>が綿密な現地調査に基づいた研究を行い、後石室は存在しなかったとして武梁祠、前石室、左右室の復原案を發表した。

武氏一族は發見された諸碑碑文や石闕の銘によると、この地方の豪族で、武始公、武梁、武景興、武開明の四人兄弟がおり、武梁は郡從事に官して武開明は吳郡丞に官し、また武開明に武斑、武榮の子があつて、武斑は敦煌長史に官し武榮は執金吾丞に官したという。そして武斑碑によると、武斑は永嘉元年（一四五）に天逝して二年後の建和元年（一四七）二月に碑が立てられたといい、武氏石闕銘にはその年の三月に石闕と獅子石獸が建てられたとある。また北宋の趙明誠の『金石錄』卷十四に著録された武開明碑によると、武開明は建和二年（一四八）、五十七歳で病死したといい、南宋の洪适の『隸釋』卷六に著録された武梁碑によると、武梁は元嘉元年（一五一）に七十四歳で病没したという。武梁碑にはまた良匠衛改に「雕文刻畫」させたことも述べられている。武榮の死期については武榮碑は「孝桓の大擾に遭つ」て後に死んだといい、桓帝の次に即位した靈帝の建寧元年（一六八）頃が考えられよう。武氏祠は復原された武梁祠、前石室、左右室についても嚴密に誰の祠堂であるか比定するのは不可能であるが、これらによっておよそ後漢後期の桓帝期（一四七—一六七）から靈帝初年に造營されたと考えられ、他の畫像石に對しても編年のおよその基準たりうるのである。

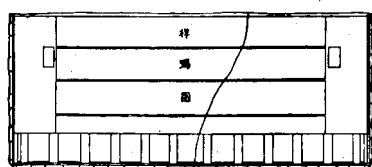
また嘉祥宋山畫像石は、一九七八年に嘉祥縣城南二五kmの宋山の斜面で一號墓が發見されて九石の畫像石が出土し、一九七九年にはこの一號墓から二〇—二五m離れた場所で二號墓、三號墓が發見され、それぞれ二十一石、十石の畫像石が

出土した。これらの墓はいずれも後代の墓で、一號墓は隨葬品に乏しく年代を知る手掛りはなかったが、二、三號墓は後漢末年から三國、西晉時期と推定された<sup>(24)</sup>。畫像石は石灰を塗られて墓室内での配置も亂れており、明らかに後代の人間によって墓の資材として利用されたのである。これらの畫像石は、一號墓から出た九石全部と、二、三號墓から出た三十一石のうち十二石は、元來漢代の祠堂の建築材料であつたとみられている。また三號墓から出土した第二八石は八葉文と雙魚四組を刻して、その右邊に隸書一行で「陽遂富貴、此中人馬、皆食大倉、飲其江海」と刻し、第二九石は同じく八葉文と雙魚四組を刻して、その左邊に十行で四六二字、右邊に一行で二八字を刻し、左邊題刻冒頭には、

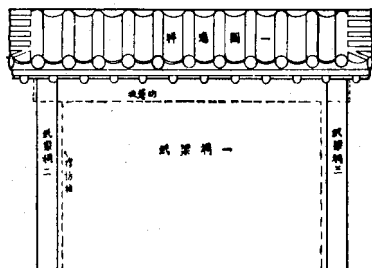
永壽三年十二月戊寅朔廿六日癸巳、惟許卒史安國、禮性方直、廉言敦篤、慈仁多恩、註所不可、稟壽卅四年、遭／＼  
(禍)、……其弟嬰、弟東、弟強、與父母并力奉遺、悲哀慘怛。……以其餘財、造立此堂、……

と書かれていた。即ち許縣の卒史安國なる者が永壽三年(一五七)に三十四歳で亡くなり、父母と三人の弟が祠堂を建てたことをいうのである。宋山畫像石は幾つかの祠堂、墓室の畫像石を寄せ集めており、この永壽三年(一五七)をもって一律に全畫像石の制作年代とすることは出来ないが、その制作技法の共通性からみて、これをもって年代のおよその目安とすることが出来る。蔣英炬氏はこの宋山畫像石の祠堂關係資料についても復原を試み、第一號から四號に至る四基の小祠堂を復原した<sup>(25)</sup>。但し三號小祠堂については若干問題があり一部保留することにする。まとまって出土したため、縦と横の寸法、石質、畫風、そして側面の文様などを考慮すれば、復原も不可能ではないのである。

いま武氏祠畫像石について復原された武梁祠、前石室、左右室の三基祠堂、宋山畫像石について復原された一、二、三、四號小祠堂の四基祠堂を通観してみると、構造的に三種類に分けることが出来る。第一種は武梁祠(圖46 (1)、47)にみられるもので、最も簡単な木造瓦葺單層の切妻造建築を石材で模し、周壁はコの字形に東壁、後壁、西壁を立て、上に屋頂前坡、後坡の屋根をのせ、全五石の畫像石で構成していた。大きさはおよそ幅が二・四一m、奥行が一・四m、高さが二・四m程である。第二種は前石室(圖46 (3)、48)、左右室にみられ第一種を更に複雑にしたもので、奥壁の中央に方

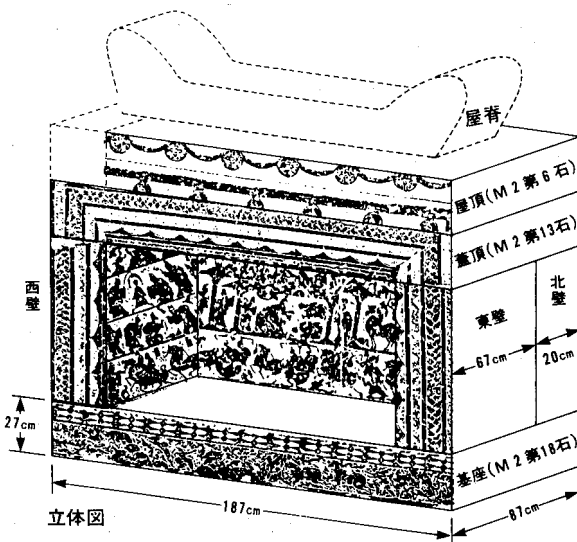


屋頂前坡 (詳端圖一)



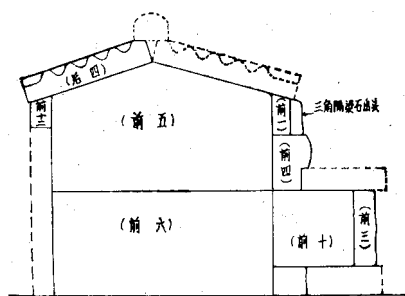
正立面圖

(1) 武梁祠復原圖

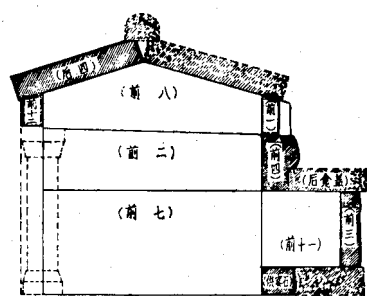


立體圖

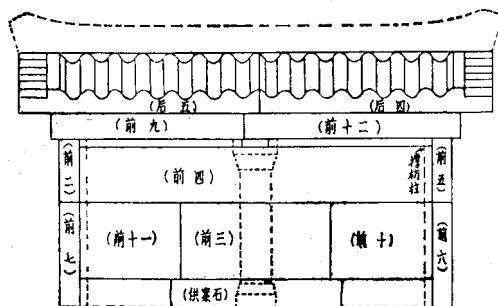
(2) 宋山一號小祠堂復原圖



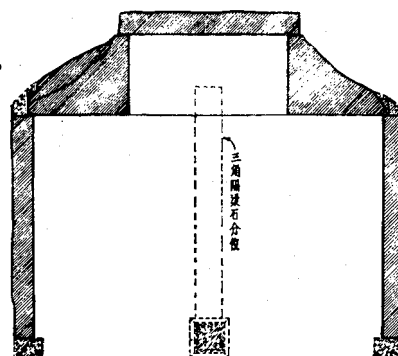
西側立面圖



橫斷面圖



正立面圖



平面圖

(3) 武氏祠前石室復原圖

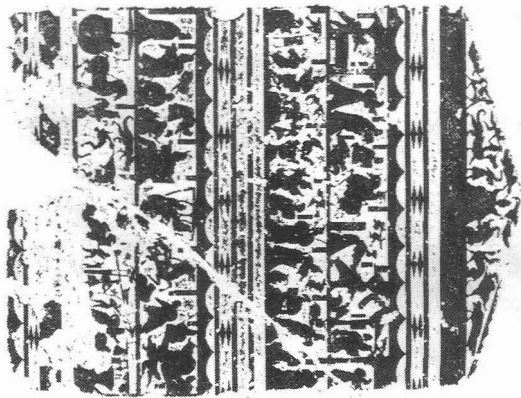
圖46 嘉祥縣武氏祠、宋山小祠堂復原圖 (蔣英炬氏による)

形の龕を設けて外に張り出させ、また入口の中央には柱を立て、室内の中央にも三角形の隔梁を設け、天井には前坡、後坡ともに二石ずつをのせていた。大きさは前石室でおよそ内部の幅が三・三〇m、奥行が二・二〇m、高さが二・一三mである。第三種は宋山の第一號(圖46 (2)、49 (1)(2)(3))から四號(圖49 (4)(5)(6))までの四基の小祠堂にみられ、第二種の龕に相當するもので、コの字形に東壁、後壁、西壁を立て、上に蓋頂、屋頂をのせ、下に基座を置いていた。東壁と西壁の畫像石は片方の側面にも文様を刻してこちらに見せる仕組みになっていた。大きさは一號小祠堂で幅が一・八七m、奥行が一・八七m、高さがおよそ一・六一mである。三種類ともに、一種のはこのように、前面が吹き放ちになっていたことも忘れてはならないだろう。因みに一九六九年に嘉祥縣南武山で發見された三石の畫像石は、宋山小祠堂畫像石と大きさ、内容、様式が似ると同時に、東壁、後壁、西壁の三點セットを成しており、この第三種に入れることが出来る。

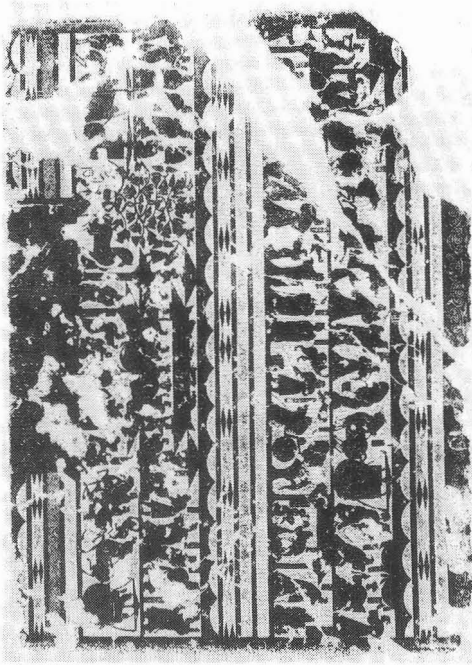
このように嘉祥縣で發見された武氏祠と宋山の祠堂は構造的に三種類に分かれるけれども、その畫像は互いに大いに共通性がみられる。畫像には祠堂ごとに内容の異なる可變的部分と、どの祠堂も一定の内容を表す不變的部分があり、この不變的部分が共通するのである。まず西壁と東壁の畫像は、祠堂の向きによって後壁に對して右側に來たり左側に來たりするけれども、西壁の最上段中央、つまり破風内側に當たる部分には必ず西王母が端坐して表され、東壁の最上段中央には必ず東王父が端坐して表される。西王母は髪を三山形に結って肩に翼をつけ、羽人たちを左右に侍らせ傍らには仙藥を搗く玉兔や蟾蜍が配される。また東王父は左右に棒の突き出た高い冠を被り、肩に翼をつけて、羽人や神獸を左右に侍らせている。中でも興味深いのは、左右室、四號小祠堂(圖49 (4))、南武山祠堂に見られるように鳥頭、牛頭、狗頭の神人が侍っていることである。この神人は冒頭に取り上げた前漢末の江蘇沛縣棲山漢墓畫像石棺など(圖2 (2))では西王母に仕えていたが、ここ後漢の嘉祥縣祠堂では東王父に仕えているのである。

また西壁、後壁、東壁を通じ最下層において向かって右から左へと驅ける車馬行列の出行圖を描くのも共通している。

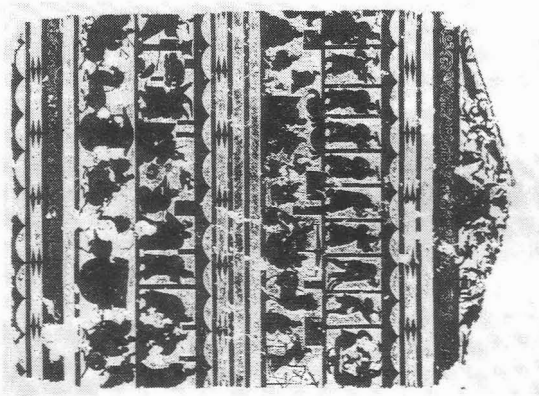




(1) 東壁



(2) 後壁

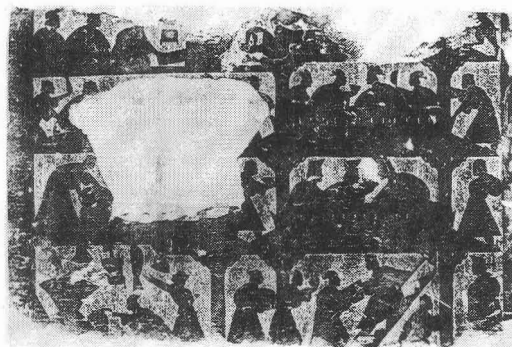


(3) 西壁

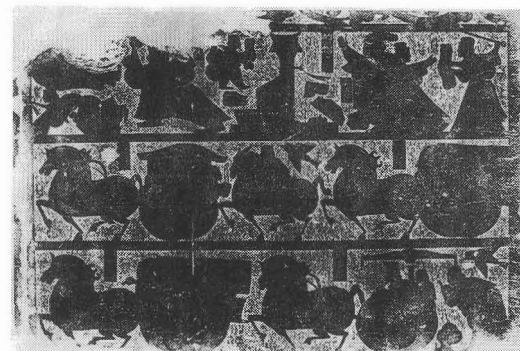
圖47 武梁祠 (復原) 畫像石 (拓本)



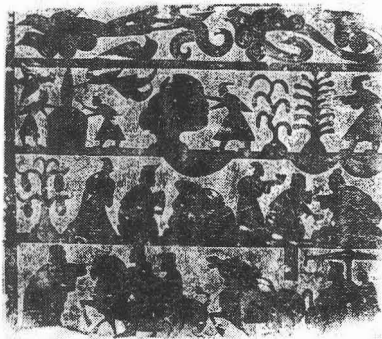
(1) 龕外上層



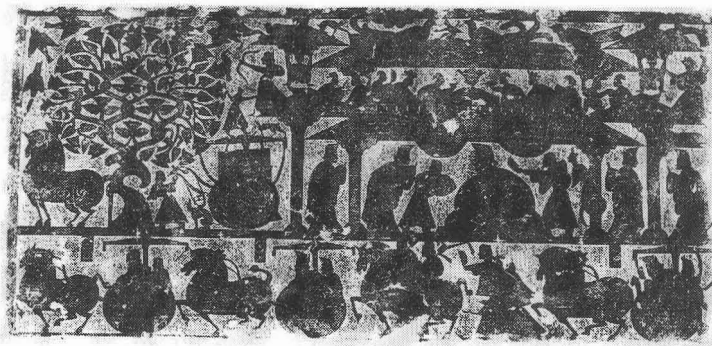
(2) 龕外東側



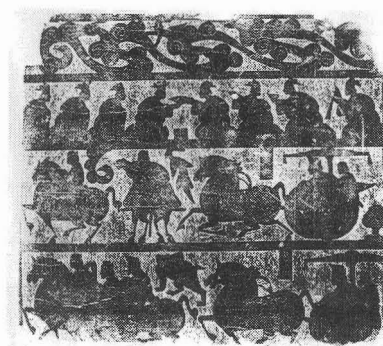
(3) 龕外西側



(4) 龕内東壁



(5) 龕内後壁



(6) 龕内西壁

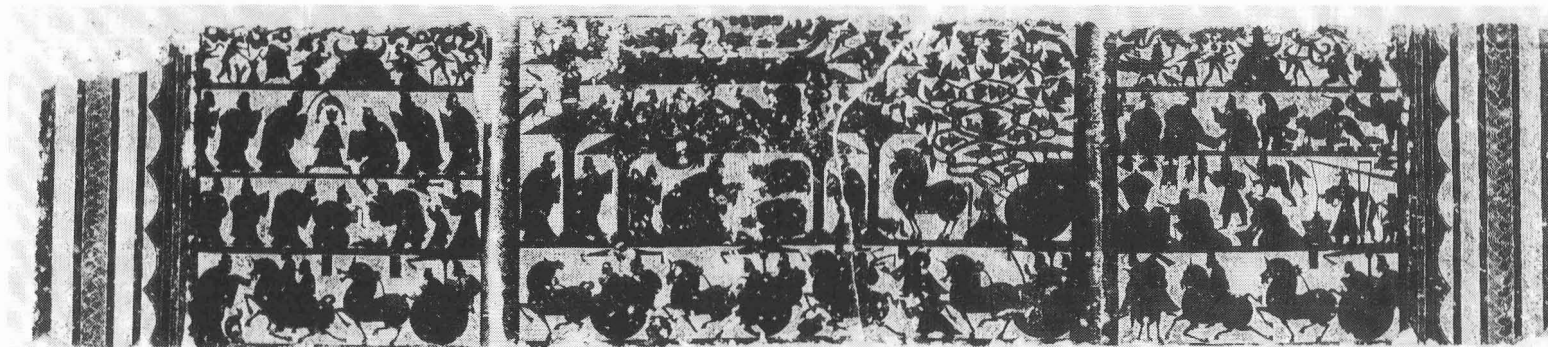
圖48 武氏祠前石室（復原）後壁畫像石（拓本）

但し第二種の前石室（圖48）や左右室のように後壁に龕を設ける場合は龕内を含めて後壁のみであり、この場合は更に龕のすぐ上の段に三壁通じて長い車馬行列が表される。また時に武梁祠（圖47）（2）（3）のように後壁の右端で途切れることもある。

そして最も重要な共通點は後壁に決まって所謂拜禮圖が描かれることである。拜禮圖は左右に闕を配した二層樓閣と、空の馬車の馬を繋いだ樹木のモチーフから成り、時に三號小祠堂後壁（圖50）（1）のように樹木が省略されることもある。樓閣は階上に多くの場合一人の女性（武梁祠、前石室、左右室、一・二號小祠堂）が坐して左右の數人の侍女がこれに仕えるが、冠をつけた二人の男性（四號小祠堂）もしくは三人の男性（三號小祠堂）が數人の男性にかしずかれて坐す場合もある。そして階下には衣冠を正し坐す人物が一際大きく描かれて、數人の笏を持った人物たちの拜禮を受け、閣の外でも笏を持った人物たちが拜禮している。特に左右室と宋山小祠堂では笏を持ち平伏して跪拜する二人の人物が描かれ、二號小祠堂を除けば跪拜する二人はともに冠を脱ぎ、必ず進賢冠と武冠の二つの冠が前に置かれている。また樓閣の屋根に鳳凰、羽人、その他の神獸がいるのもこの圖の特徴である。そして樓閣の傍らの樹木はくねる枝が絡まり合って文様のよな形をなし、上に數羽の鳥が止まり、樹下には繫駕を解いた馬車の馬と車が置かれる。時に羽人が樹下（四號小祠堂）、闕の上（武梁祠、前石室、二號小祠堂）、或いは車の上（左右室）から弓で鳥を射ている。

いま一つの共通要素は庖廚圖で、東王父のいる東壁の下段に描かれる。桔槔と竈は必須の道具立てで、上から獸、鳥、魚の肉が吊るされ、下では水を汲んだり竈に木をくべたり、洗い物をしたり獸を屠殺したりしている。

これらが祠堂畫像における不變的要素で、残りの畫面はというと歴史故事などの可變的要素でふさがれる。武梁祠（圖47）でいえば、三壁の五層の畫像のうち第二、三層と東西壁の第四層は全て歴史故事で埋め盡くされ、西壁第二層右端の伏羲・女媧、祝融、神農から始まって、東壁第四層左端の聶政、鍾離春に至る四十三の聖人、列女、孝子の故事が榜題をつけて時代順に描かれている。また一號小祠堂の西壁第二層（圖49）（1）は周公が幼い成王を輔ける故事、第三層は不明



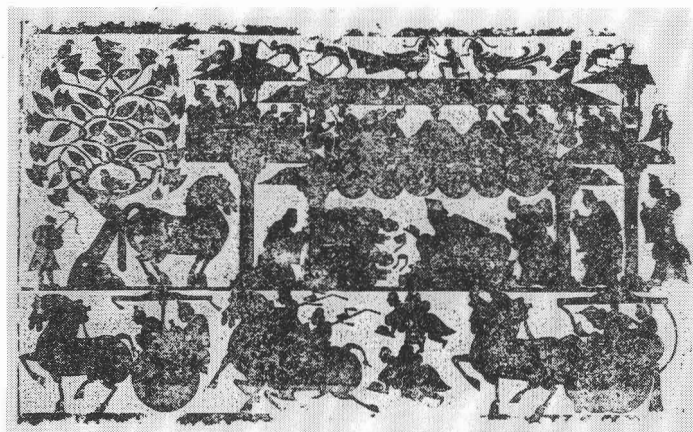
(1) 一號小祠堂西壁

(2) 一號小祠堂後壁

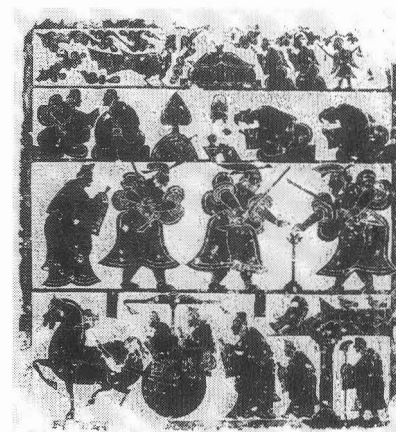
(3) 一號小祠堂東壁



(4) 四號小祠堂東壁



(5) 四號小祠堂後壁

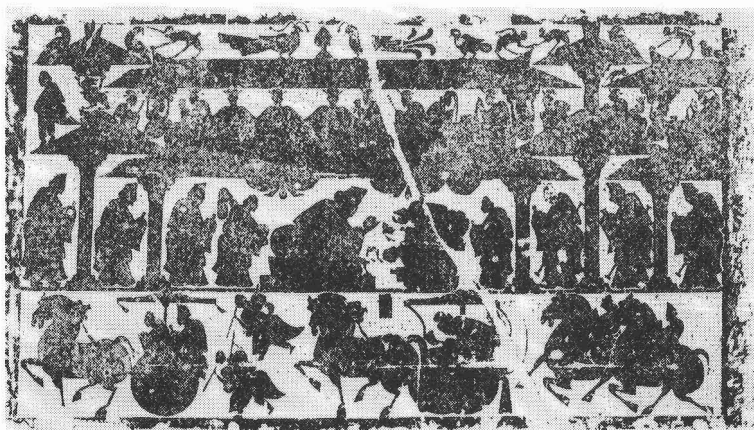


(6) 四號小祠堂西壁

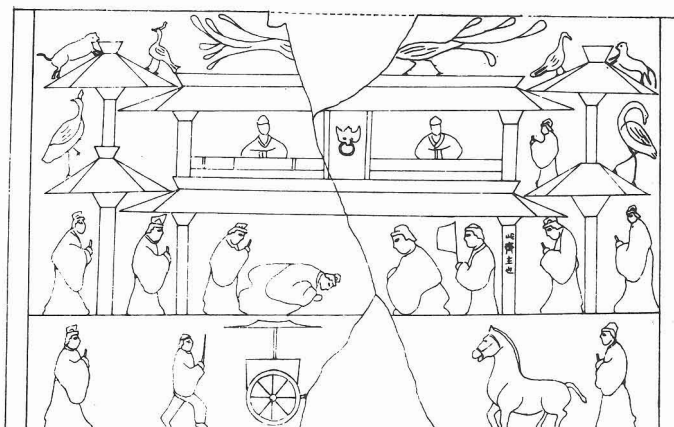
圖49 宋山小祠堂（復原）畫像石（拓本）

故事、第四號小祠堂の西壁第二層(圖49 (6))は吳の季札が徐君の墓に劍を挂ける故事、第三層は二桃、三士を殺す故事(255)といった具合である。

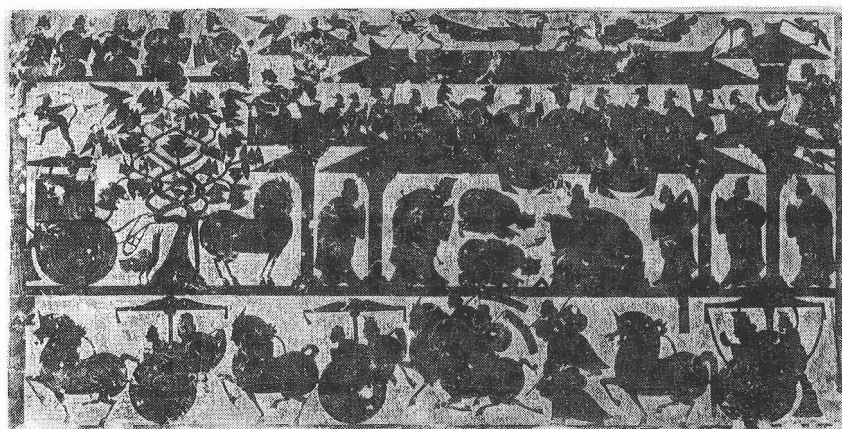
では、祠堂畫像における可變的要素である歴史故事などはひとまず措いて、不變的な、従って第一義的要素である西王母・東王父圖、出行圖、拜禮圖、庖廚圖などは全體として何を表しているのであろうか。後壁の中心的位置を占める拜禮圖について見ると、樓閣の階下では一際大きく描かれた人物が、數人の拜禮を受けているが、笏を持った二人の人物は床に伏し冠を脱いで跪拜している。冠を脱ぐこと(免冠)は漢代では謝罪を意味することもあるが、ここでは最大級の拜禮を意味していよう。餘りの丁重な拜禮に對して大きく描かれた人物は手を前に伸ばして制止しているようである。この大きく描かれた人物は誰であろうか。古代繪畫の常識として、最も大きく描かれた人物がその畫面の主人公である。同じく嘉祥縣の五老洼で一九八一年に發見された畫像石(第三石 圖59 (2))は、後述するように初期の祠堂のものと思われるが、殆ど同じような樓閣が描かれて、階下では大きく描かれた人物がやはり數人の人物の拜禮を受けている。そして注目すべきことにこの大きく描かれた人物の體には「故太守」と三字が刻されていた。これは生前に郡の太守の官にあった人、即ちこの祠堂に祭られた主人公を意味するに違いない。また嘉祥縣焦城村の畫像石(圖50 (2))も祠堂に使われたものであり、古く馮雲鵬、馮雲鵠の『金石索 石索』卷四に掲載され、傅惜華の『漢代畫象全集 初編』にも拓本が載せられた有名なものであるが、同じように樓閣の階下では一人の人物が拜禮を受けており、その人物の背後の柱には「此齋王也」と八分書で四字が刻されていた。この四字については、畢沅、阮元の『山左金石志』(嘉慶二年撰 一七九七)が齋が齋と通用するとして「此齊王也」と讀んで以來、『金石索』などに踏襲され、齊王の故事を描いたものと解されてきた。(256)しかし近年、信立祥氏(259)は戦前に山東鄒縣で發見された一枚の祠堂畫像石(周進『居貞草堂漢晉石景』圖三)上に「食齋祠園」の四字が該されて、祠堂が齋祠と呼ばれた形跡があること、また第三字目は「主」と讀むべきことを指摘して、「齋主」が齋祠、即ち祠堂の主人公を表すと解した。筆者もこの説に賛成である。「齋主」と「齊王」とでは全く意味が異なる



(1) 宋山三號小祠堂（復原）後壁（宋山二號墓第十六石）（拓本） 高70cm



(2) 嘉祥焦城村畫像石（模本）



(3) 武氏祠左石室（復原）龕內後壁（拓本） 高72cm

圖50 祠堂後壁畫像石



り、これが從來この畫像石のみならず祠堂の畫像石全體の解釋を誤らせてきた當のものといっても過言ではない。五老注出土祠堂畫像石に「故太守」と榜題があったことも鑑み、訂正されるべきであろう。

では、この祠堂の主人公、つまり墓の主人公は一體どの世界にいたのであるうか。屋根の上には本來仙界に在るべき鳳凰や羽人がおり、また武氏祠左石室拜禮圖（圖50 (3)）を見ると、樓閣の屋根を羽人が支えたり、闕の屋根を生きた蟾蜍が逆立ちして支えるなど尋常でないところから、どこか仙界の光景であることが確實に知れる。またこの祠堂の拜禮圖の形式で思い起こされるのは、陝北綏德四十鋪鎮出土門楣畫像石（圖40 (1)）である。この圖の左側の畫像は祠堂の拜禮圖とよく人物構成が似ており、大きく描かれた人物の前で笏を持った一人が跪拜して、三人の人物が立って拜禮しているばかりか、跪拜する人物は同じように進賢冠を脱いで前に置いている。この圖は先に考證した通り、大きく描かれた人物が、扉を隔てて右側にいる西王母の世界へと昇仙して來、西王母の樓閣内で家來の拜禮を受ける光景を描いていた。祠堂の拜禮圖も墓の主人公が西王母の世界へ昇仙して、西王母の家來の拜禮を受けているのであるうか。もしそうだとすれば、祠堂の拜禮圖の階上にいる中央の人物は門楣畫像石の右側人物に相當して當然西王母ということになるが、果たしてそうであろうか。武氏祠左石室の畫像（圖50 (3)）を見ると、確かに階上の女性は何人もの侍女にかしずかれて、階下で起こっている出來事にも無頓着な風に描かれ、その容姿、頭髮の形も西壁の最上段に描かれた西王母と似ている。しかし全く同じかというとはなく、何よりも西壁の西王母は肩に羽が生えているけれども、階上の女性にはこれが見られず、明らかに兩者は區別して描かれているようである。また階上の中央人物は祠堂では必ずしも女性ではなく、宋山三號小祠堂（圖50 (1)）、四號小祠堂（圖49 (5)）では男性が配され、しかも各々三人、二人と配されていた。こちらの男性の表現も四號小祠堂東壁（圖49 (4)）の東王父をみると冠は左右に棒が突き出て似てはいるけれども、東王父は棒の先端が下に折れ曲がるなど、嚴密には違ふようである。いまはひとまず似ている點を考慮し、階上の中央人物は西王母の家來、また東王父の家來とし、各々その世界を描いたものとしておこう。

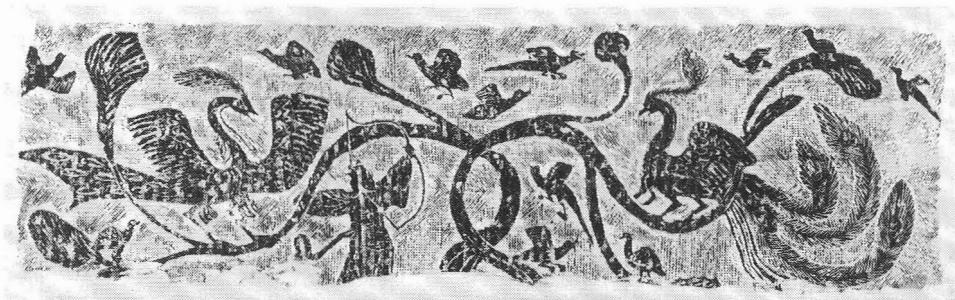


圖51 四川新津出土石棺畫像（拓本） 長209cm

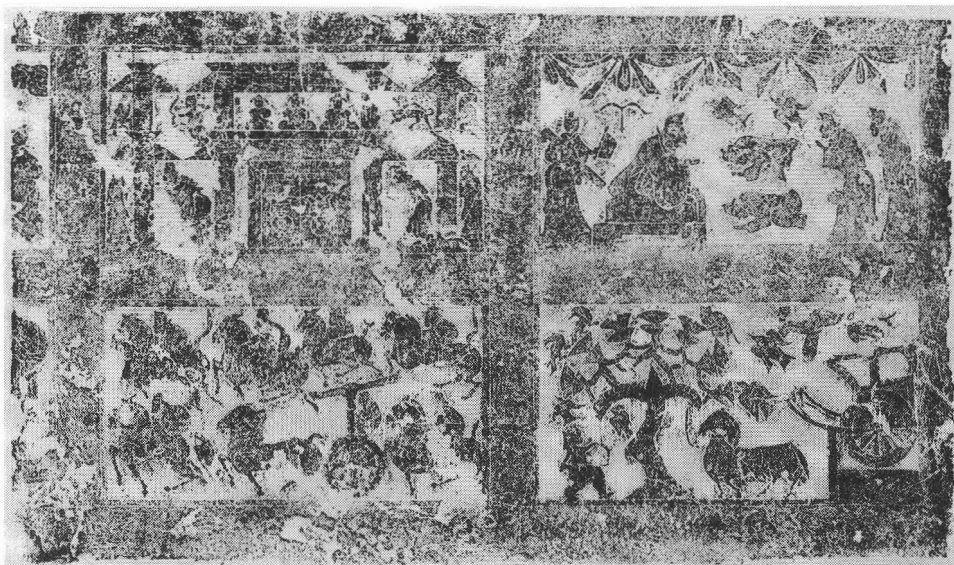
また樓閣の外の枝の曲がりくねった樹木に鳥が止まり、これを羽人が弓で射ていたが、このようなモチーフは既に江蘇沛縣棲山漢墓畫像石棺（圖2（2））で見、南陽の新野樊集第三七號墓出土畫像磚（圖17（3））、唐河出土畫像磚（圖18（4））で見た。そこでは弓を射るのは羽人ではなく、また樹の形も異なっているけれども、確かに下で人物が弓を射ており、いずれも西王母とともに描かれたり雙闕の内部に描かれたりして、西王母の世界の中にあり、便宜的に聖樹と名付けておいた。また四川新津出土の畫像石棺（圖51）では曲がりくねった二株の樹木が互いに交差し、樹上には二羽の鳳凰が左右の枝に止まって周りには澤山の鳥が飛んでおり、下で一人の人物が弓を引き絞って鳥を射ようとしている。これも四川の石棺畫像の常として西王母の世界の光景を描き、聖樹に相當する樹木<sup>(20)</sup>であろう。従って祠堂の樹木も西王母の世界の聖樹を描いたものと考えられるのである。そしてこの聖樹の下には繫駕を解いた馬が繋がれていたが、このモチーフも四川彭山縣雙河鄉崖墓石棺畫像（圖26（3））にあり、西王母の世界の入口である雙闕内部の光景として、一頭の馬が樹木に繋がれ馬飼いが世話をしていた。また陝北の綏德義合鎮園子溝漢墓門楣畫像石（圖39（5））では、左側から西王母の世界へと馬車が行き来し、その昇仙した人物たちの住む樓閣の傍らには馬を繋ぐにふさわしい樹木が配されている。従って祠堂の馬を繫いだ樹木も西王母の世界のものと考えられる。

これらを要するに、祠堂の後壁に描かれた拜禮圖は、墓の主人公が馬車に乗って西王母の世界へと昇仙し、西王母の樓閣の傍らで馬車の繫駕を解いて聖樹に繋ぎ、樓閣の内に入って西王母の家來の拜禮を受ける有り様を描いているのである。但し昇仙の先は西

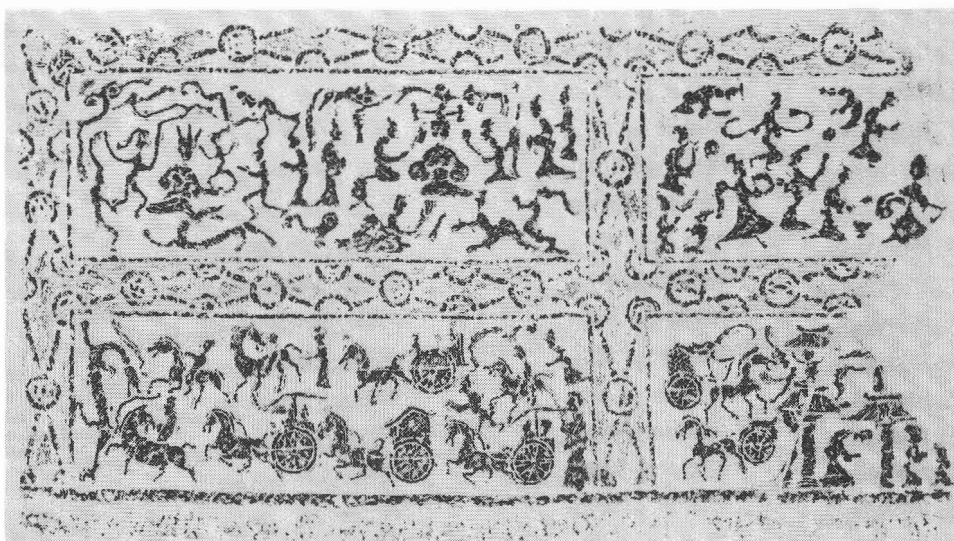


王母だけとは限らず東王父も考えるべきであるが、上述したように東王父は西王母から派生した神であり、東王父であったにしても原理的には變わりないのである。従ってこの拜禮圖も一種の昇仙圖であり、墓の主人公の昇仙後の有り様を描いているのである。

最下層に描かれた車馬行列の出行圖も當然この墓主人の昇仙に關係があろう。行列は導騎、二人乗りの輜車、檠戟を持った騎吏、歩卒、四維をつけた輜車などで構成され、中程に位置する四維つきの輜車に乗る戴冠の人物が行列の主人であろう。前石室の出行圖(圖48 (4)(5)(6)(3))は後壁の西端から行列が出發して龕内の西壁、後壁へと至りその東壁で終わっているが、八輦のうち六輦の馬車には榜題がついており、前から順に「賊曹車」「門下游微」「門下功曹」「君車」「主簿車」「行亭車」と書かれている。一頭立ての四維付き輜車に戴冠の人物と他一人が乗る「君車」が主人の車であり、後に詳述するように『續漢書』輿服志に従えば、「(門下)賊曹」「門下游微」「門下功曹」の車を導車とし、「主簿車」を從車として出行するのである。また宋山四號小祠堂西壁畫像(圖49 (6))、武氏祠前石室(圖48 (3))、左右室を見ると、この出行を笏を持って見送る人物がおり、一號小祠堂西壁畫像(圖49 (1))、武氏祠前石室(圖48 (4))、左右室を見ると、行列の行く手で笏を持って迎える人物がいる。恐らくこの行列を迎える人物は西王母の世界の入口である雙闕の門吏であり、行列はここを通過して西王母の樓閣へと進み、馬を聖樹に繋いで樓閣内で西王母の家來の拜禮を受けるのであろう。つまりこの最下層の車馬行列は後壁の拜禮圖へと繋がって行くのである。それが證據に武梁祠(圖47 (2)(3))の車馬行列は西壁から後壁へと進み、後壁右端の所で拜禮圖に切り替わってしまう。また宋山四號小祠堂(圖49 (4)(5)(6))の場合、後壁樓閣階上の中央に東王父の家來と思われる東王父に似た男性が二人描かれ、昇仙の行き先が東王父であることを示していたが、車馬行列の方も東壁の東王父の方へと進んでおり、反對に昇仙の行き先が西王母である他の祠堂の場合は、みな西壁の西王母の方へと進んでいる。出行圖と拜禮圖が互いに關連していることを物語っているのである。そしてもう一つの不變的要素であった庖廚圖は勿論西王母もしくは東王父の世界の光景であり、昇仙した墓の主人公を迎えての宴飲の準備、また



(1) 曲阜縣西顏林出土畫像石（拓本） 長158.5cm



(2) 曲阜縣梁公林出土畫像石（拓本） 長191cm

圖52 曲阜出土後漢畫像石棺

日々の御馳走の準備をしているのである。但し、何故常に東壁に描かれるのかは不明である。

このように祠堂の畫像は全體として墓の主人公の昇仙を表していると考えられるが、それはまた嘉祥縣の西の曲阜縣西顏林で出土した畫像石<sup>(88)</sup>によっても確かめられよう。この畫像石(圖52 (1))は縦九三cm、横一五八・五cmで、畫面が太い帶狀の枠によって四つに區畫されているが、左側が缺けており、もとは六つの區畫があったものと思われる。大きさ、畫面を六つに區畫する方法からみて、これは明らかに畫像石棺の左右側板のいずれかを成したものであるう。現在残っている畫像は、左上の區畫は左右に闕を配して間に二層の樓閣を置き、階上に端坐する人物と二人の侍者、階下は鋪首のある扉を閉ざして、樓閣の外に腰をかがめて迎謁する二人の門吏、闕の外に二人の門衛を配する。右上は幕の垂れた室内において、一際大きく描かれた人物に對して笏を持った二人が跪拜し二人が立って拜禮する圖である。また左下の區畫は馬車一輛、騎馬五騎、歩卒二人で構成された出行圖であり、右下は大樹に繫駕を解いた馬をつなぎ、樹上の鳥を下で一人の人物が弓で射る光景を描いている。この四つの圖が祠堂の畫像と共通していることは一目瞭然である。祠堂の拜禮圖がここでは左上、右上、右下の三つに分けて描かれ、出行圖も共通している。ではこの四つの圖が何を表しているかといえば、山東の石棺畫像は先に前漢の多くの例を見た如く死者の靈魂の昇仙を表しており、この四つの畫像も當然昇仙を表していると考えられる。左上の樓閣は西王母の世界の樓閣であり、死者の靈魂はそこへと馬車で出行昇仙し、到着すると樹木に馬を繫いで樓閣に入り、そこで西王母の家來たちの拜禮を受けるのである。従って畫像の共通する祠堂の畫像も當然昇仙圖を表していると考えられよう。この石棺畫像は水磨きした石の表面に畫像の部分を彫り残して周りを彫りくぼめ、線を畫像に陰刻した表現技法の上からも武氏祠の畫像と共通するが、畫像が未だこなれず生硬なところが見られるところから、武氏祠より若干時期が早い後漢中期のものと思われる。拜禮圖というモチーフは前漢末期の石棺畫像には未だなかったので祠堂畫像の影響と考えられるが、石槨墓形式はもはや廢れたとはいえ、畫像石棺は祠堂の影響を受けながら後漢中期にもなお昇仙圖を表現していたのである。

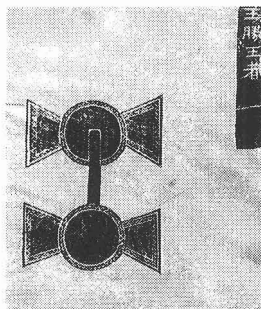
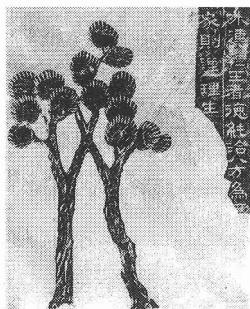
また祠堂の畫像を考えるに當たり、後漢の山東畫像石棺にいま一つ興味深い畫像石(圖52 (2))がある。前記のものと

同じく曲阜縣の梁公林で出土したもので、縦一〇三cm、横一九一cmで、右側が損なわれており、四區畫ある畫像のうち右側二區畫の半分が缺けている。大きさ、畫面を區畫する方法などから、畫像石棺の左右側板のいずれかを構成していたものと思われる。現在残っている畫像は畫面を四つに區畫する枠の部分に穿壁文を刻し、左上の區畫には右方に玉勝をつけた西王母が坐して侍女や神獸に取り卷かれ、左方には冠をつけた人物が坐して羽人などに取り卷かれており、全體に雲氣文が漂っている。また左下の區畫には二列の車騎出行圖、右上には舞樂圖、そして右下の區畫には缺けているけれども二層樓閣、雙闕、馬車などを配して拜禮圖を表していたものと思われる。従ってこれらの畫像も西王母、出行、舞樂、拜禮のモチーフを示して、顔林畫像石と同じく死者の靈魂の昇仙を表していたものと思われる。問題は左上の區畫の左方の人物で、右方の西王母に對して同格で坐し、頭には三本の稍や長い突起のある三梁冠をつけている。この種の冠は山西離石馬茂莊二、三號畫像石墓（圖43 (3)(6)）でも東王父がつけていたが、嘉祥宋山一號墓發見の第七石（宋山三號小祠堂東壁）上層の東王父にも認められ、狗頭の神人などにかしずかれて凡に馮って坐し、頭には中央に二本の太い突起、左右に二本の細い突起が伸びた冠をつけている。恐らく同じ冠の少し變つた表現とみられ、梁公林畫像石の人物も東王父と解される。西王母が屋外に坐した石棺畫像は滕縣馬王村出土の畫像石棺にもみられたが、ここでは東王父と一緒に表されているのである。また四川瀘州出土一號石棺畫像（圖29 (5)）において崑崙山の雙闕の奥に西王母と東王父が同時に表された例も既に見たところである。要するに、上記の四區畫は昇仙を表していたから、ここに東王父が西王母とともに表されたのは、昇仙の目的地としてであり、西王母のみならず東王父も昇仙の先として考えられたことを示している。これは祠堂畫像石も同じで、宋山四號小祠堂（圖49 (3)）では、事實、墓の主人公は東王父の樓閣へと昇仙し拜禮を受けていたのである。

では、西王母の世界にしる東王父の世界にしる、仙界へはどのようにして行くと考えたのであろうか。昇仙の表現には常に出行圖がつきものであるが、馬茂莊畫像石墓など陝北畫像石の一部を除けば、畫像石、畫像磚の出行圖は常に馬車に

よる平行移動しか示さず、前漢初期の馬王堆漢墓出土帛畫(圖7)にみたような龍舟による垂直的昇仙の飛翔感は餘り感じられなかった。死後の樂園としての仙界へ行く以上、馬車といえども飛翔感の表現は必須であるが、武氏祠左右室屋頂前坡に配された畫像石(圖53 (3))はまさにそのような要求に應える表現であり、昇仙の様相を別の面から描き出したものであった。

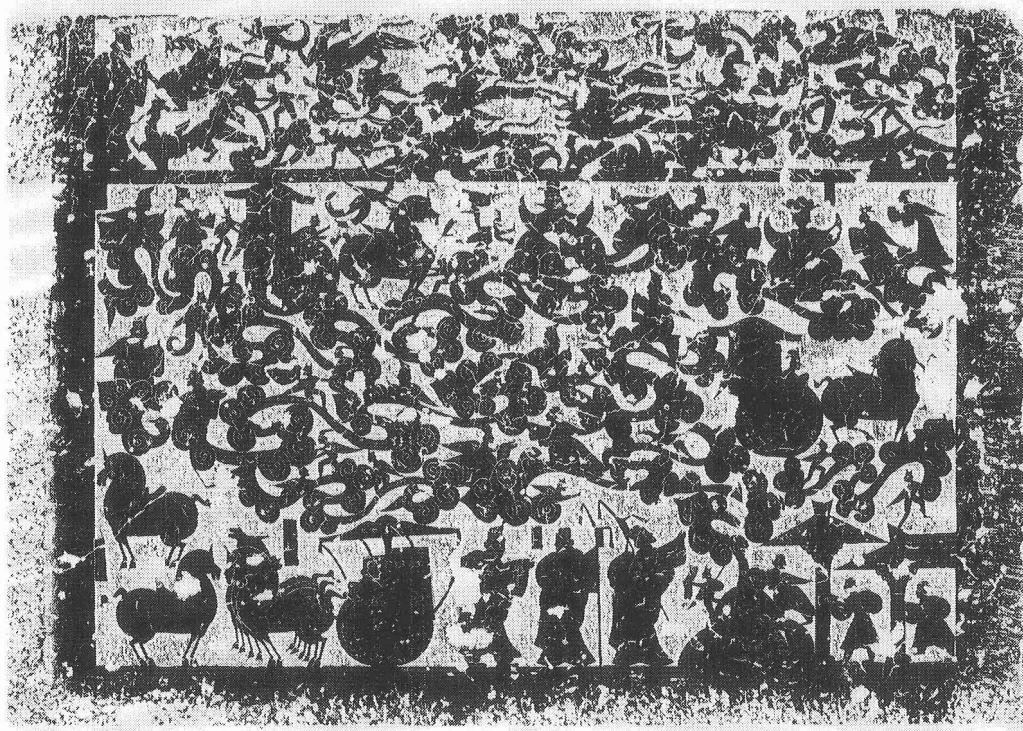
武氏祠は屋頂、つまり屋根を形作る板石の内側にも畫像が一面に刻され、武梁祠の前坡、後坡から成る屋頂には祥瑞圖が描かれ、前石室、後石室の前坡、後坡各東西段から成る屋頂にも、それにふさわしく天界の畫像が描かれていた。武梁祠の祥瑞圖(圖53 (1))は前坡(「祥瑞圖」第一石)、後坡(同第二石)ともに三段に分けて圖が刻され榜題が附されていたが、後坡は祥瑞圖が第二段までしかなく、第三段は車馬行列の圖が描かれていた。畫像は石が缺けてみにくい、例えば後坡第一段には「銀鸞」「比目魚」「白魚」「比肩獸」「比翼鳥」「玄圭」「璧流離」「木連理」「赤鰲」「玉英」「(不明)」「玉馬」「(不明)」など十三種が刻されていた。木連理(圖53 (1))の榜題に「木連理、王者の徳 純治し、八方一家を成せば、則ち連理生ず」とあるように、地上の爲政者が徳のある政治を施し天下が平和に治まれば、天がそれを讃えて動植物、品物などを地上に下すと信ぜられたのである。つまりは祥瑞は天上のものであるが故に、屋頂に表現されたのである。西王母が頭につけた玉勝(圖53 (1))まで祥瑞に含まれているのは注目されよう。また前石室の屋頂は前坡東西段の二石だけが残り、各四段に分かれて、西段は風伯と北斗君など、東段は伏羲・女媧などが刻されていた。また左石室の屋頂は前坡東西段と後坡東段のみが残り、後坡東段には河伯など、前坡西段は四段に分かって雷神など、そして東段には上述の圖が描かれていた。この左石室前坡東段(圖53 (3))は幅の狭い上段と廣い下段に分かれたれ、上段には二匹の龍に引かれた雲車に乗る神を中心に天界での出行の様が描かれるが、いま下段の圖に注目することにする。まず畫面下部には三つの饅頭形の墳丘があつて、そこから雲氣が立ち昇り、周りの三人の羽人がそれを護衛しているようである。右側に闕を伴った建物があつて、二人の人物が外の出來事に驚いて駆けつけ、また左側には二人の武冠をつけ檠戟を持った武人とその主人に當たる冠をつけ



(1) 武梁祠祥瑞圖（模本）  
（左）木連理 （右）玉勝



(2) 武氏祠蔡題第二石（部分）（拓本）



(3) 武氏祠左右室（復原）屋頂畫像石（拓本） 幅167.5cm

圖53 武氏祠畫像石

た人物がおり、更に左には三人の乗って來たと思われる二頭の馬と三頭立ての馬車が置かれている。主人の冠は進賢冠の前に長い板を立て名稱は不明であるが身分の高い者がつける冠である。柴戟を持った武人の一人が雲氣の行方を見上げて何かを叫んでいるが、墳丘の上の羽人はそれを盾でもって遮ろうとしており、もう一人の武人は振り向いて主人に何かを告げようとしている。そして雲氣の行方を追うと、雲氣は各所に配された羽人たちに守られて左方へうねうねとうねりながら向かい、左端の進賢冠をつけ笏を持った羽人の所に達すると今度は方向を轉じて右へ向かっている。この雲氣に乗って左上には有翼の馬の引く屋根形の蔽いのある駟車<sup>(20)</sup>が羽人に御されて右へ進み、右側の中段にも女性の羽人の御す駟車があり、目的地に着いたのか羽人が馬を制止しようとしている。そして畫面最上段の中程に左右に突起の伸びる冠をつけ肩に羽の生えた男性の神人がおり、その右側には三山型に髪を結い肩に羽の生えた女性の神人がおり、それぞれ男性の羽人、女性の羽人にかしずかれている。左上の馬車は男性の神人の方へ向かって進んでおり、右側中段の馬車は女性の神人のすぐ下で止まっているのも注目されよう。このような圖は武氏祠ではこれだけではなく、「蔡題第二石」<sup>(21)</sup>（武氏祠其它第三石）と分類される畫像石（圖53）<sup>(2)</sup>にも同じような圖柄が描かれていた。石の大きさは縦八四cm、横一七一cmで、圖は上部に帶狀に描かれ右端は缺けている。左から二頭の馬と三頭立ての馬車、冠をつけた人物と柴戟を持った二人の武人が描かれて、配置も仕草も左右室畫像石の下部と全く同じである。しかしその後は若干異なり、上下に壓縮された形で、雲氣が立ち昇って男性の神人とそこへ向かって行く羽人二人が描かれる。全體の鈞合から右には更に女性の神人も描かれていたものと思われる。

さて、左右室畫像石について解釋を試みるに、最上段の男性の神人と女性の神人は東王父と西王母であろう。女性の神人の方は武梁祠西壁最上段の西王母（圖47）<sup>(3)</sup>に似、男性の神人の方は宋山一號小祠堂東壁最上段（圖49）<sup>(1)</sup>の東王父に似ている。下の三つの饅頭形のは、宋山四號小祠堂の西壁第二層（圖49）<sup>(6)</sup>に刻された季札挂劍故事圖の徐君の墳墓にみられる如く、確かに墳墓を表している。その墳墓に葬られた死者の靈魂が立ち昇る雲氣とともに馬車に乗って

行き、西王母、東王父のもとへと昇仙する光景を描くのであろう。羽人たちが墳墓の周りを警護しているが、彼等は西王母或いは東王父から派遣されて死者の靈魂を迎えに來た者であり、墳墓において迎えの馬車に乗り込む時から西王母、東王父のところへ着くまでずっと警護や先導の役を勤めるのである。同じような役目の羽人は馬王堆漢墓出土の帛畫昇仙圖にも描かれており、第三號墓帛畫の中段を見ると、四頭立ての龍舟に乗り込んだ墓の主人公の頭上には二人の羽人がそれを見守るように描かれており、この羽人は上の崑崙山の門の上にもいて、主人公の昇仙に當たりそこから派遣されて守護しているのである。乗客臺と下の壁とを結ぶ通路を警護する赤豹も崑崙山から派遣された神獸であり、乗客臺に乗り込むのを警護するのである。畫像石の羽人は帛畫の羽人と赤豹に相當する役目を果たしており、下で柴戟を持った武士が何か叫ぶのを盾で遮り、建物の中から駆けつけた二人に對しても近づけないように警戒しているのである。建物は墳墓の傍らにあるから當然墳墓に附隨した祠堂のようなものであり、左側の冠をつけた人物も墓參りに來たような死者に關係する者であろう。また馬車を細かく見ると、左上の羽人に導かれて東王父の方へ向かう馬車の御者は男性の羽人であるのに對して、右側中段の西王母の下所で止まった馬車の御者は女性の羽人であり、上の西王母の側近く仕える女性の羽人たちと頭飾が似ている。或いは左上の馬車に乗る人物は男性で、右側中段の馬車に乗る人物は女性であり、男性は東王父のもとへ昇仙し、女性も西王母のもとへ昇仙するのであろうか。

但しここで問題となるのは、東王父は一體どこに棲んでいるのかということである。西王母は勿論崑崙山に棲んでいるとして、東王父の居所はどこであり、死者の靈魂はどこへ昇仙して行くのであろうか。武氏祠や宋山小祠堂では東王父と西王母が東西壁に分かれて表され、西王母は中國の西北の方角に當たる崑崙山に棲んでいるから、東王父は何處か東方に棲んでいるものと推測されるが、管見の限り、文献にはそれについての具體的記事は見當たらぬ。却って先に引用した『宋書』樂志に載せる曹操の「駕虹蜺<sup>(23)</sup>」という作品では、東王父は西王母とともに崑崙山におり、主人公は崑崙山で西王母と「東君」(東王父)に謁見する。また上述の四川瀘州一號石棺の畫像(圖29 (5))では東王父は西王母とともに同じ



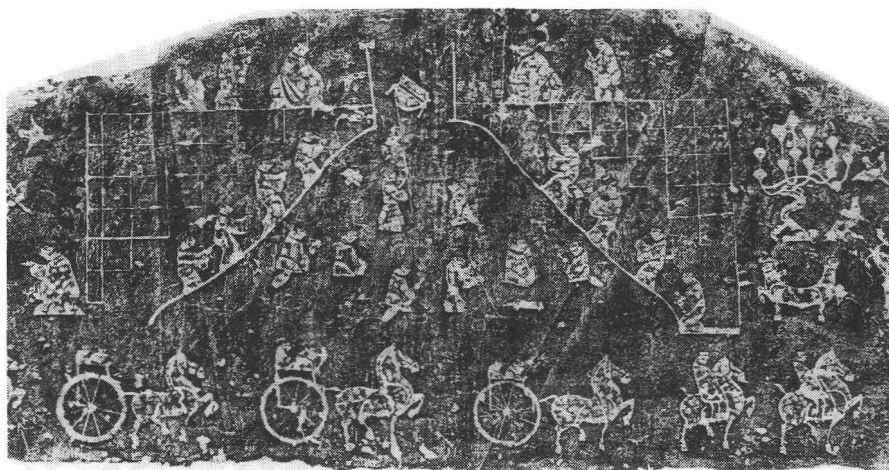


雙闕の中におり、上記の曲阜縣梁公林出土の石棺畫像(圖52)でも同一區畫内に、東王父は三梁冠をつけて玉勝をつけた西王母とともに同じ世界にいるかのように表されていた。そして武氏祠左石室のこの圖でも西王母と東王父は東西の對極的位置ではなく、東王父が畫面最上部の中央に位置して西王母はそのすぐ右側に表され、恰も並んで表されているかの如くである。東王父はもともとは存在せず、西王母の陰的、女性的原理に對して陽的、男性的原理を體現する神として、西王母から新たに派生した神であるから、當座は獨自の居所を與えられることもなく、崑崙山に西王母とともに棲んでいたのである。従ってこれらの資料は西王母と東王父が完全に東西に分かれ棲み、ひいては先に『東方朔神異經』<sup>(26)</sup>にみたような希有という大鳥に乗って西王母が東王父に會いに行くという話が成立する前の段階のものといえる。いずれにしても、この左右室屋頂の圖は昇仙の光景をより具體的に示して興味深いものといえる。

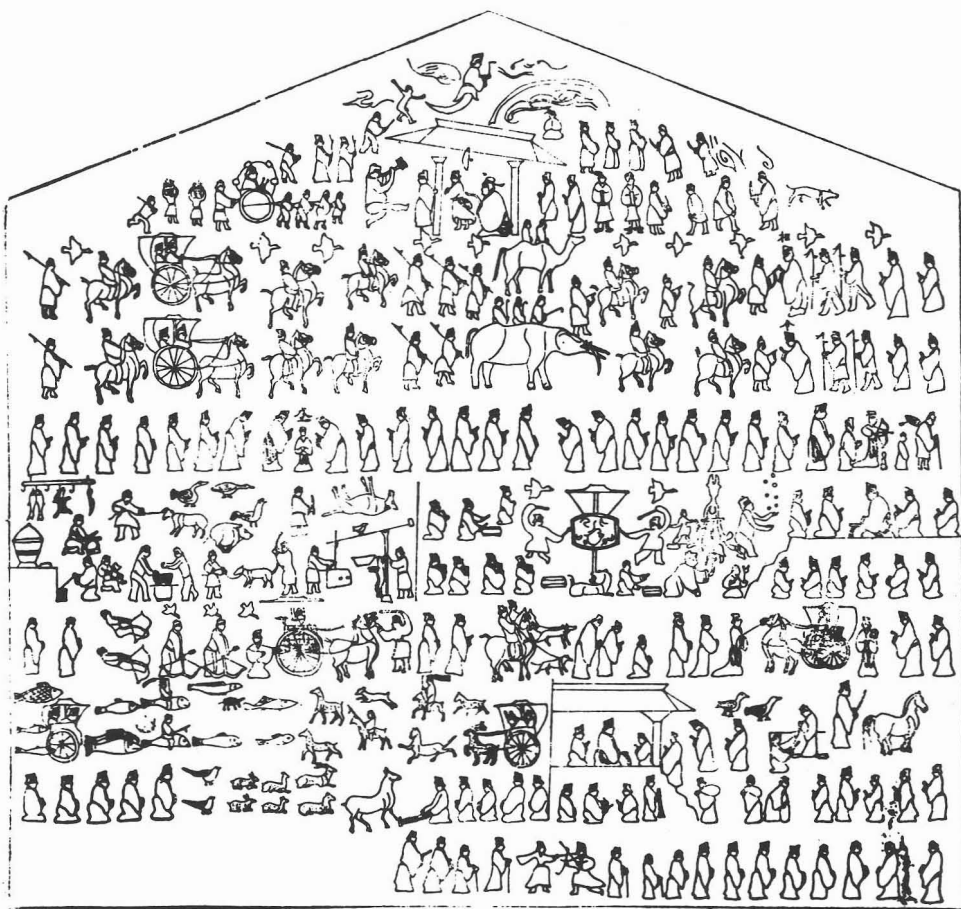
## (二) 孝堂山祠堂

山東省長清縣城西南二〇kmの孝里鋪村南に位置する孝堂山(海拔六二m)の頂北部には一つの石造建築があり、これが有名な孝堂山祠堂<sup>(27)</sup>で、後期の武氏祠に對して前期祠堂を代表するものである。この祠堂は現存最古の地上建築であると同時に祠堂として原形をとどめた唯一のものであり、南向きの祠堂の背後には高さ約三・二mの墳丘がいまなお残っている。祠堂の構造(圖54) (1)は前記の武氏祠と宋山小祠堂の分類でいえば、武梁祠と同じく木造瓦葺切妻式建築を石材で模して第一種に屬するが、武梁祠より大きく、入口の中央に石柱を立てて三角形の隔梁を縦に渡し、更に前坡、後坡の屋根をかぶせて、全七石で構成していた。大きさは内部の幅三・八m、奥行二・一八m、高さ二・二〇mである。

畫像は後壁、東西壁と石梁の東西面、下面、そして東南角の石に刻されていた。後壁と東西壁の三壁の畫像については、これまで後部神臺上に孝子郭巨及びその父母の塑像<sup>(28)</sup>を載せた石臺があったため、下部の畫像が覆われてしまい、從來の舊



(1) 三角隔梁東面畫像（部分）（拓本）



(2) 東壁畫像（模本）

圖55 孝堂山祠堂

拓本などにも全て缺けていたが、近年それを取り除かれて下の高さ二〇cmばかりの神臺とともに漸やく日の目を見るに至った。後壁の畫像（圖54）<sup>(2)</sup>は上層に東向き二列の車馬行列を横に配して、その中層は縦と横に三重の枠を設けて中に二層樓閣を三つ並べ、その間と左右に闕を置いていた。そして近年明かになった下段<sup>(28)</sup>には、上に孔子が老子に見える場面及び弟子の畫像計四十七人を一列に描いて、「孔子」の榜題があり、下は右向きの車騎出行圖（圖58）<sup>(1)</sup>を一列に描いて、四維がついて前後左右に格子狀の屏のある轎車には「二千石」の榜題があった。また西壁（圖56）と東壁（圖55）<sup>(2)</sup>は最上層の三角形部分に西王母と風伯をそれぞれ中心に据えて、その下の上層には二列の車馬行列と一列の人物立像、そして中層には西壁は「胡王」榜題のある胡漢戰爭圖、東壁は百戲、庖廚などの圖を刻し、下層は西壁は狩獵圖と六博などの圖、東壁は屋宇をまじえた何か不明の圖と擊劍などの圖を描いていた。

また三角隔梁<sup>(29)</sup>は東面に升鼎圖（圖55）<sup>(1)</sup>を描いて、西面には虹と橋上戰鬪の光景を描き、その底面には日月星辰並びに織女星を描く。武氏祠のように屋根の石の内側には畫像はなかったが、一應上方を天上世界に見立てていたのである。

そして祠堂の東南角に天井を支えて立っていた畫像石には、龍及び猿に似た獸が描かれていた。因みに三角隔梁の升鼎圖については、秦の始皇帝が彭城で泗水に沈んだ周の鼎を探したが得られなかったという所謂泗水撈鼎の故事を描いたとする説が根強くある。しかし上述の如くこの部分は天上世界に屬するうえに、周りには枝の曲がりくねった聖樹と樹上の鳥を射る人物、或いは人首の二つある神獸、人首の三つある神鳥などが配され、人間世界のそのような故事を描くことはありえない<sup>(30)</sup>。これは先に取り上げた微山縣溝南村出土の畫像石棺（圖3）<sup>(2)(4)</sup>などの升鼎圖についてもいえることである。

ところで、この孝堂山祠堂は武梁祠と構造的に似ることを先に述べたが、畫像内容も類似點が多く、武氏祠・宋山小祠堂などと同じく不變的要素と可變的要素に分ければ、不變的要素は後壁の拜禮圖、東西壁最上層の西王母、風伯圖、後壁下層の出行圖などが挙げられる。これらのうち先ず注目されるのは、東西壁の最上層の畫像が、西壁は西王母と同じであるが、東壁が東王父ではなく風伯に變わっていることである。三角形の畫面は東西壁ともに三段に分かれ、西壁（圖56）は第一層にコンパ

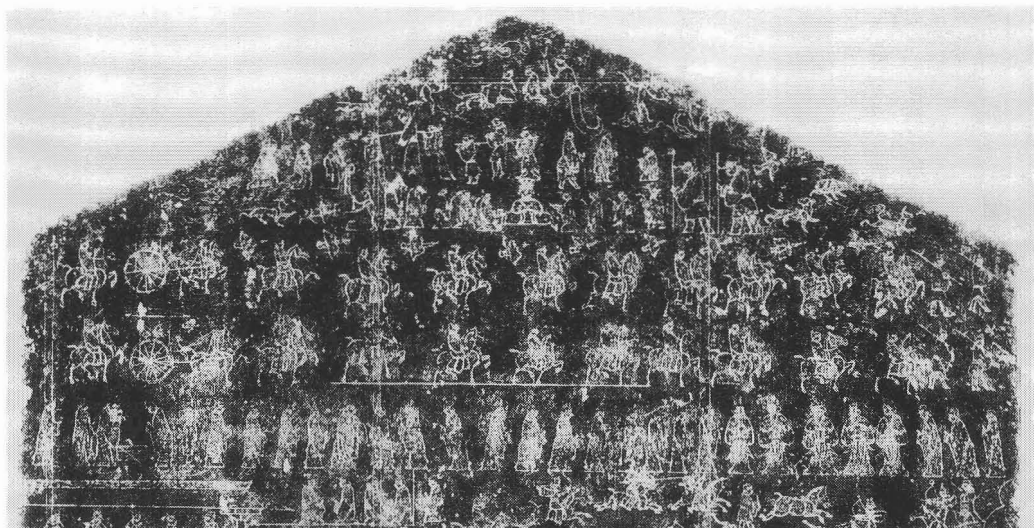


圖56 孝堂山祠堂西壁畫像（部分）（拓本） 幅210cm



(1) 嘉祥五老注第十二石 高123cm



(2) 汶上縣先農壇畫像石 高120cm

圖57 祠堂東壁畫像（拓本） 風伯

スを持ち人身蛇尾の形の女媧を配して、東壁の定規を持った人身蛇尾の伏羲と相對し、第二層に胸を棒で貫かれた人物を運ぶ光景などを描いて、第三層は坐した西王母を中心に兩側に侍臣や獸頭・鳥頭の怪神、また藥を搗く玉兔、三足鳥、檠戟を持った武士二人などを刻す。また東壁(圖55) (2) は第一層に伏羲、第三層に不明人物を描き、第三層は中央に屋宇を大きく配して、左傍らの風伯が笛状のものを吹くと屋宇の屋根が浮き上がってしまう光景、そして左側に四人の部下の引く車に乗って雷公が太鼓を叩く光景などを描く。明らかに西王母と風伯が相對しているが、風伯吹屋の同じような畫像は前期祠堂に使用したとみられる後述の嘉祥五老洼第八石、同第十二石(圖57) (1)、山東汶上縣先農壇畫像石(圖57) (2) のいずれも最上層にみられ、孝堂山祠堂も含めて胡漢戰爭圖を伴っているのが特徴である。嘉祥縣劉村洪福院畫像石第一石では最上層に風伯吹屋ではないが被髪の子に向かい風伯が風を吹いており、これも一つの變形であろう。また徐州銅山縣小李村苗山畫像石墓では前室前壁の門の東に太陽とともに風伯が描かれており、東方と關係の深かったことがわかる。東王父が未だ成立していなかった前期の段階では、祠堂の東壁最上層には東王父の代わりに風伯が配されたこともあったのである。

また後壁(圖54) (2) の拜禮圖は三重の椀内一杯に三基の二層樓閣と雙闕を描く。闕は兩端と樓閣と樓閣の間に一基ずつ配され、左右の樓閣の雙闕を中央の樓閣が共有した形になっている。樓閣の内部の表現は三つとも殆ど同じで、階下に主人公が一際大きく描かれて、笏を持った人物數人の跪拜や立禮の拜禮を受けており、主人公の背後、樓閣の外、闕の外にも笏を持った人物が配されている。但し中央の樓閣には跪拜する人物はなく、また左右の樓閣にみられる壁に掛けた弩もないようである。また階上には冠をつけ拱手して坐す男性が七人もしくは八人おり、右側樓閣のみ重僕が配される。樓閣の屋根には鳳凰や羽人など、闕の屋根には猿に似た獸、ふくろうなどがある。これを見てもわかる通り、個々の拜禮圖としての表現は武氏祠や宋山小祠堂と基本的には同じであり、これも昇仙した人物が崑崙山の仙界に至って西王母の家來による丁重な拜禮を受けている圖と解されよう。樓閣が三つありそれぞれ主人公が拜禮を受けているのは、この祠堂が何らかの理由で三人もしくは三代の人物を祀っていたためと解せられる。また階上の人物が武氏祠などと違って全て男性で

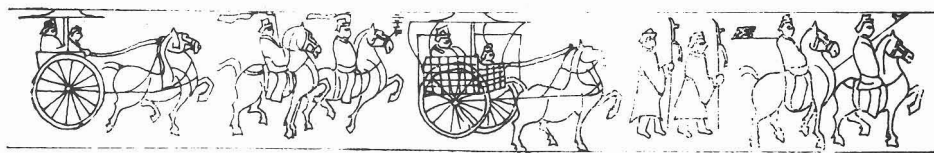


あるのは、東王父が出現する以前の現象として、昇仙する先は西王母一人であり、女神だからといって女性の家來を描く必要がなかったからであろう。そして武氏祠などと違って、この拜禮圖には樓閣の左右傍らに聖樹や繫駕を解いた馬などが描かれていないが、そうしたものが出現するのはもう少し後の現象である。

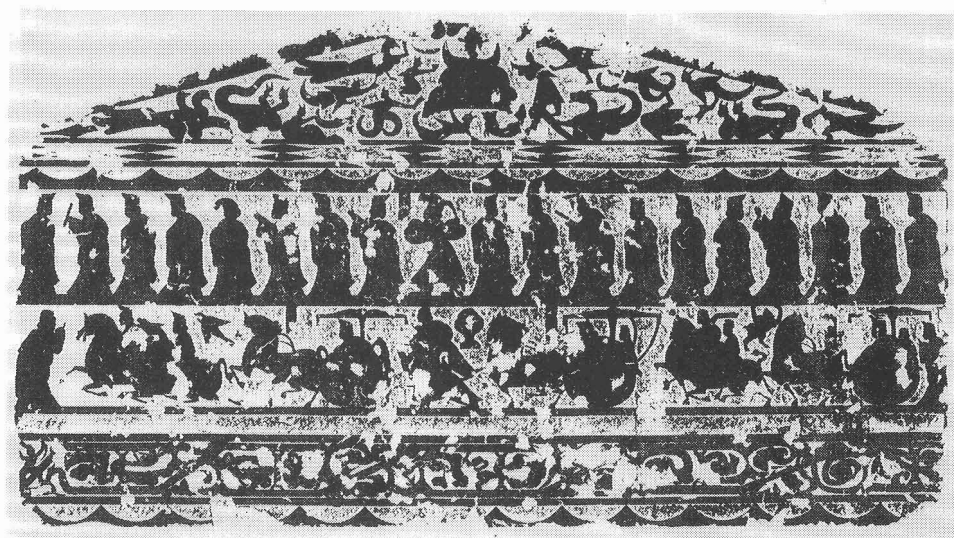
また車騎出行圖(圖58<sup>(2)</sup>) (1)は後壁の拜禮圖の下部、老子見孔子圖の下に右向きに描かれる。前から兵杖を建てた無蓋の導車、輜車五輛、四維をつけ屏のある主車、輜車二輛の順に馬車を並べて、間に檠戟を持った騎吏や歩卒を配し、後ろで笏を持った人物が行列を見送り、前で盾を持った人物が身を屈めて出迎えていた。そして注目すべきことに、四維附きの主車の左上方には「二千石」との榜題があった。この孝堂山のあたりは前漢から後漢初めには太山郡に屬していたが、後漢永元二年(九〇)には太山郡から分かれて濟北王國となり、和帝の弟の劉壽が濟北王となった。<sup>(2)</sup> 諸侯國の二千石といえば、『續漢書』百官志五に諸侯國の制度について、

皇子 王に封ぜらるるや、その郡を國と爲し、毎に傳一人、相一人を置き、皆二千石なり

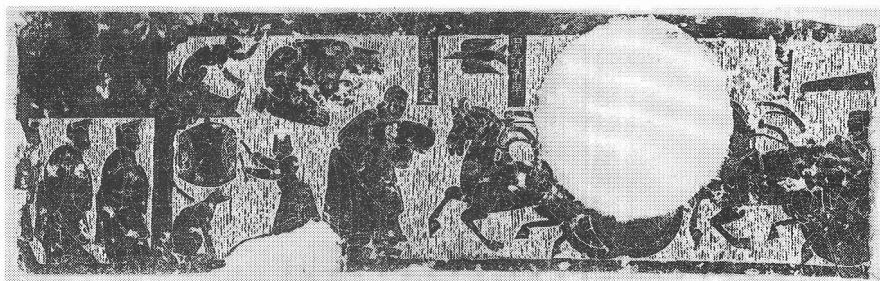
とある通り、傳もしくは相クラスの人物であり、この祠堂の主人の位を示したものと考えられる。しかし、この祠堂にはもう一つの長い車騎出行圖(圖55<sup>(2)</sup>) (2)、54<sup>(2)</sup> (2)、56<sup>(2)</sup> (2)が上層の東壁、後壁、西壁を通じてひと繋ぎに描かれており、そこには「大王車」の榜題があった。即ちこの車馬行列は東壁の前列から順に騎吏四、駱駝・象、騎吏四、輜車二、騎吏四、四維つき二頭立て輜車二輛、騎吏二二、建鼓と樂人を乗せた鼓車、騎吏二、四頭立て四維つき馬車、騎吏二二、輜車二輛を並べて、間に歩卒を配し、更にこの行列を前方で笏を持った人物六人と檠戟を持った人物二人が迎えていた。そしてこの後方の二人の乗る四頭立て馬車に「大王車」の榜題(圖54<sup>(2)</sup>) (2)があることが古くから知られており、更に前方の執笏の先頭人物に「相」の榜題があり、その横の執笏人物にも「令」の榜題(圖55<sup>(2)</sup>) (2)があることが近年發見されたのである。この「大王車」の大王をもって諸侯王國の王にあて、濟北王の劉壽(在位永元二年—永寧元年 九〇—一二〇)の祠堂とする意見も出たが、蔣英炬氏も推測した通り恐らくそうではあるまい。後に



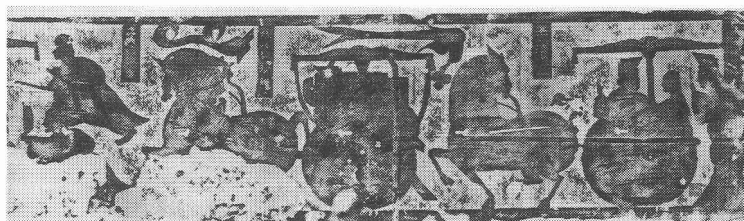
(1) 孝堂山祠堂後壁下層出行圖（部分）（模本）



(2) 武氏祠前石室（復原）東壁出行圖（拓本）



(3) 泰安縣出土畫像石出行圖（拓本）



(4) 武氏祠前石室（復原）軒下出行圖（部分）（拓本）

圖58 出行圖



考證する通り確かに諸侯王は大王とも呼ばれたが、出行圖には例えば洪适の『隸續』卷十七に著録される魯峻石室殘畫像<sup>(24)</sup>の榜題に「南郊を祀り大駕に従い出ずる時」とあったように、自分が部下として従った主人の出行圖を描く場合があった。魯峻石室畫像の場合は二石の内の第一石に「大車帳下騎」と榜題のある「大車」に主人が乗り込み、自らは第二石の「君 九江太守たりし時」と榜題のある後方の馬車に乗り込んだのである。孝堂山の場合も「大王」の行列に従った時、もしくは關係した時の光景と考えられる。事實、諸侯王の祠堂としては、およそ千石のクラスの武氏一族の武氏祠と較べても小規模過ぎ、「相」「令」の榜題があったように、二千石の(國)相<sup>(25)</sup>もしくは千石の(縣)令<sup>(26)</sup>クラスの祠堂と考えられるが、拜禮圖の下<sup>(27)</sup>の出行圖には墓主人の馬車の榜題に「二千石」とあったから、やはり「相」、即ち諸侯王國の相がこの墓の主人公と考えられるのである。「二千石」といえば、郡の太守も二千石であるが、郡の太守と諸侯王國は互いに獨立していたから「大王」、即ち諸侯王の馬車に従うことは原則的にないのである。「大王」の行列を迎える役をつとめた諸侯王國の相の生前の榮華な光景を描いたと考えるのが妥當であろう。

このように孝堂山祠堂畫像は、上層の出行圖が主人の出行に従った時の生前の光景を描き、一方、下層の出行圖は墓の主人公自身の出行を描いて昇仙の出行圖としての條件を備えているが、このことは武氏祠にも當てはまろう。榜題のある前石室を例にとると、上層には東壁(圖58 (2))、後壁(圖48 (1))、西壁を通じて左向きの車馬行列<sup>(28)</sup>が描かれ、輜車と四維つき輜車それぞれ數輛に騎吏、歩卒をまじえていた。東壁には「門下功曹」「此丞相車」「□□車」、後壁には「門下賊曹」「門下功曹」「令車」「主簿車」、西壁には「調閒二人」「此騎吏」「此君車馬」「主簿車」「主記車」の榜題があり、それぞれ「丞相」「令」「君」の乗った四維つき輜車を主車とする行列であることがわかる。「丞相」は無論國家の丞相ではなく、ここでは恐らく諸侯王國の相の舊稱<sup>(29)</sup>と考えられ、「令」は縣令、「君」は勿論祠堂の主人公である。縣令については、『續漢書』百官志<sup>(30)</sup>五に、縣、邑、道ごとに、大なるものには令一人を置き、千石、その次には長を置き、四百石、小なるものには長を置き、

三百石なり

とある。この場合の「令」は大縣の縣令で千石である。これら三壁の行列はつながっているかにみえるが、それぞれ行列の後ろと前には笏を持った人物が送迎をしており、一應獨立した行列とみなすことが出来る。縣令などの行列については、『續漢書』輿服志上に、

公卿以下、縣の三百石の長に至るの導從は、門下五吏を置き、賊曹、督盜賊、功曹は皆帶劍して、三車もて導となり、主簿、主記は兩車もて從となる

とある。つまり門下の賊曹、督盜賊（游徼）、功曹の車を導車、主簿、主記の車を從車として出行するといひ、後壁に描かれた行列と殆ど同じである。いずれにしても位の高い「丞相」「令」の行列を前に配して、自身の行列はその後ろに配しており、この上層の車馬行列の表現は生前の行列の光景を表したものとみなすことが出来る。

これに對して前石室の三壁下層に描かれた出行圖（圖48）は前述の如く輜車五輛、四維つき輜車一輛に騎吏、歩卒を間に配し、榜題は前から順に「賊曹車」「門下游徼」「門下功曹」「君車」「主簿車」「行亭車」とあった。これも上引の『續漢書』輿服志上に記す行列配置とほぼ同じであり、「賊曹車」「門下游徼」「門下功曹」を導車にし、「主簿車」を從車にして出行するのである。しかし、こちらは四維付き輜車の「君車」が主車であり、「君」より位の高い人物は一切登場せず、あくまで墓の主人公を中心とした車馬行列である。またこちらには輿服志に全く記されていない「行亭車」が加わっている。「行亭車」は文字通り亭に行く車と解され、ここで亭とは、行列の前方で笏を持った人物が拜禮して迎えるその場所を指すものと考えられる。別の泰安縣城外乾家堡で發見された出行圖畫像石（圖58）（3）では、「盧行亭車」と榜題のある馬車を、「寺門亭長」と榜題のある盾を持った人物と笏を持って跪拜する人物の二人が迎え、その後ろの建物には上に猿のような神獸がおり、下に門犬がいて軒に吊るした太鼓が鳴らされている。猿のような神獸がいるのは、屋根に猿のいる孝堂山祠堂拜禮圖の樓閣と同じように、この世の建物ではあるまい。また盾と笏を持った門吏の組み合わせはこれまで四川郫縣畫像石棺（圖25）（3）などに描かれた西王母世界の入口でみたところであり、先にみた南陽の畫像磚（圖18）（2）（1）では墓室の入

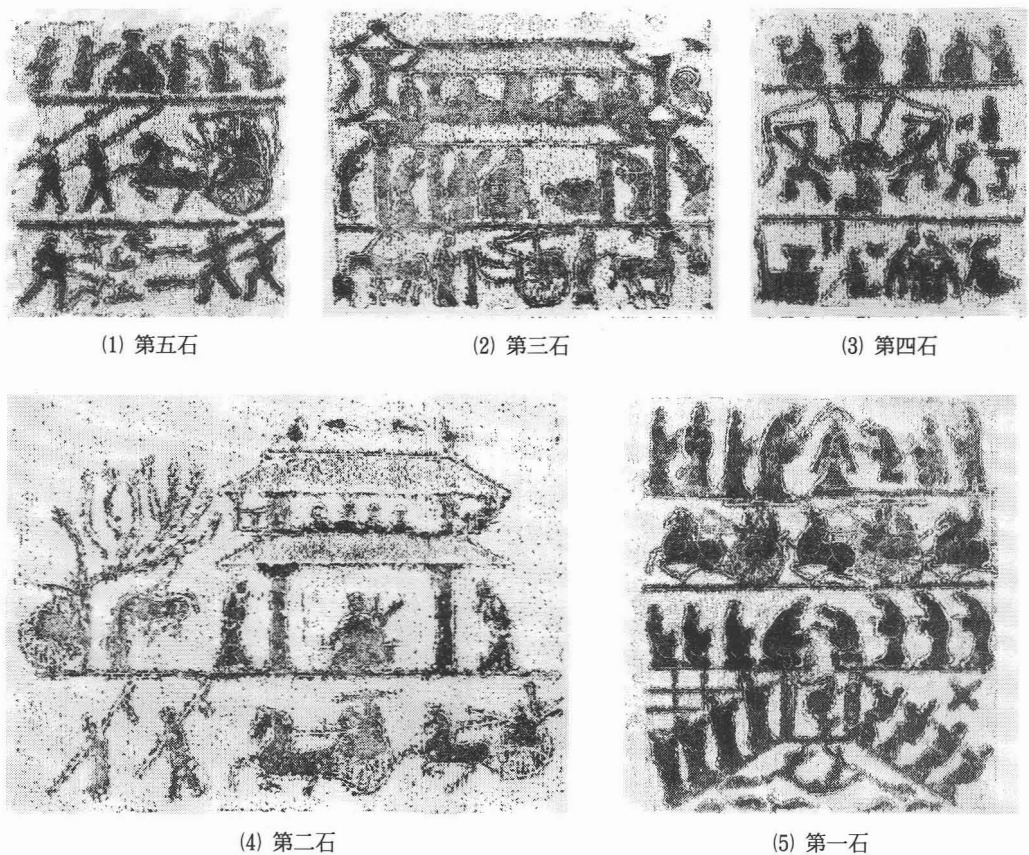
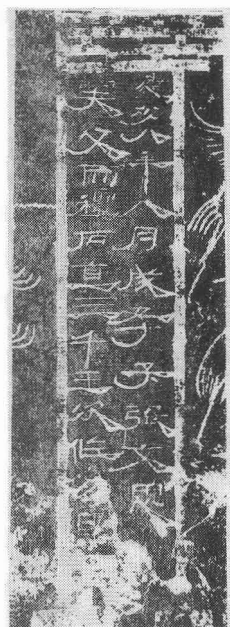


圖59 嘉祥五老洼祠堂畫像石（拓本）



(1) 肥城樂城鎮畫像  
石題記（拓本）  
建初 8 年（83）



(2) 孝堂山祠堂榜題（模本）  
（蔣英炬氏による）

圖60 初期祠堂畫像石題記

口、即ち西王母世界の入口を守る門衛が「門亭長」と呼ばれ、長青樹の生えた闕を門衛が虎に似た神獸とともに守っていた。ここで亭とは崑崙山の西王母の世界の入口を意味していよう。要するに武氏祠前石室下層の出行圖は墓の主人公が昇仙のために出行する光景を表しているのである。これはまた孝堂山祠堂の後壁下層出行圖にも當てはまり、「二千石」の墓の主人公が四維、四屏つきの馬車に乗り行列を組んで昇仙のための出行をし、上の拜禮圖の樓閣の場面へとつながっていくのである。ともに上層の生前の光景を表した出行圖とははっきり性格を異にしているのである。

これまで墓の祠堂や墓室などに表された車馬行列については、死後の世界において墓主人の靈魂が天界もしくは仙界へと出行する様を描いたものか、或いは墓主人の生前の官職にあった時の出行の様を描いたものか、意見が大きく分かれてきた。<sup>(35)</sup>この議論で氣が附くのは、その車馬行列を描いた畫像石が墓室もしくは祠堂のどの位置にあったかということを殆ど考慮しなかったことである。例えば祠堂の畫像石の榜題に「君爲市掾時」「五官掾車」「君爲都□時」<sup>(36)</sup>とか、或いは「爲督郵時」<sup>(37)</sup>とかある以上、古く畢沅、阮元が『山左金石志』卷七において指摘したように、これらの畫像石は確かに生前に市掾、五官掾、都□の官、或いは督郵の官にあった時の出行の様を履歷風に描いたものであり、天界もしくは仙界へ出行する時の様を描いたものとするとは出来ないであろう。しかしこうした畫像石があるからといって、車馬行列を一律に生前の出行の様を描いたものと規定することも出来ない。これらの榜題のある畫像石は、前者が武氏祠前石室の三角隔梁、後者が同じ武氏祠前石室の軒下に置かれたもの<sup>(38)</sup>(圖58)で、前石室三壁上層に配された車馬行列圖と同じく目のつきやすい祠堂上部にあって生前の出行の様を描いていたのである。しかし祠堂の車馬行列にはもう一種、天界もしくは仙界へと出行する様を描いたものがあり、それが武氏祠、宋山小祠堂、孝堂山祠堂でみた如く、祠堂の下層に、必ず後壁の拜禮圖の下部を使って描かれたのである。この出行の表現は祠堂にとっては不可欠な不變的要素で、生前の出行の表現の方が可變的要素である。例えば武梁祠や四基の宋山小祠堂には生前の出行圖はなかったからである。また墳墓裝飾を歴史的にみても、先述の前漢の畫像石棺などには天界もしくは仙界への出行の表現はあっても、生前の出行の表現は未だなく、それ

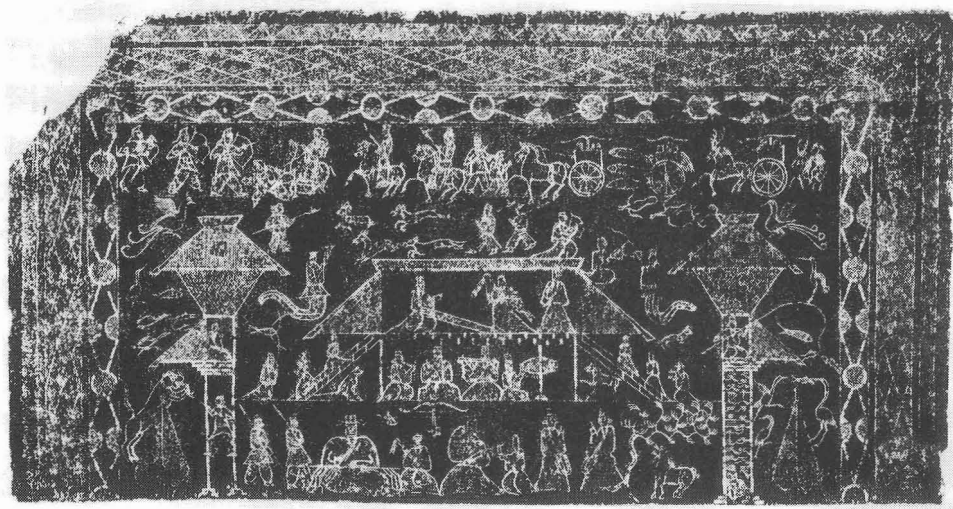
はあくまで後から墳墓裝飾に加わったものである。これは武氏祠などで畫像の大半を占めるようになった故事の表現も同様で、前漢の畫像石棺や墓室の裝飾には未だなかったものである。あったとしても控えめであった。これはとりも直さず墳墓裝飾の世俗化、現世化を物語るもので、後漢時代も後世になればなる程、その比重を増していくのである。

ところで、孝堂山祠堂と同じく初期祠堂に屬するものとして、嘉祥五老洼の畫像石と肥城縣樂鎮村畫像石がある。まず前者の嘉祥五老洼畫像石<sup>(50)</sup>は、一九八一年に嘉祥縣五老洼の横山北麓で發見された古墓から出土した。全部で大小十五石あり、墓室の壁或いは床に別々に置かれて、石面はみな約1cmの厚さに石灰が塗られていた。この出土狀況は上述の宋山石室墓と同じであり、漢代の幾つかの祠堂の畫像石が三國或いは西晉時期の墓に資材として利用されたことを物語っている。いま十五石のうち明らかに祠堂のものと思われるものに先に引いた「故太守」銘のある第三石と、第四石、第五石（圖59(2)(3)(1)）があり、これらは大きさや畫像内容からみて、第三石を後壁に、四石と五石を東壁と西壁に用い、一つの祠堂を構成していたものと考えられる。第三石は縦六二cm、横九三cmで、拜禮圖を刻し、上層の樓閣内には階上に二人の端坐する人物、階下に「故太守」と銘のある一際大きな人物が拜禮を受ける光景を描き、下層には繫駕を解いた馬車一輛と二頭の馬、二人の人物を描く。また第四石と第五石はともに三層に分かれ、第四石は上から伎樂、建鼓、庖廚を描き、第五石は西王母、出行、狩獵を描く。西壁の上層に西王母を描き、東壁の上層に未だ東王父を描かないのは孝堂山祠堂と同じであるが、かといって東壁の上層は孝堂山のように風伯を描くわけでもなく、鼗鼓、排簫、豎笛、笙、竿を扱う樂人を描くのは一つのヴァリエーションを示している。事實、第八石と第十二石（圖57(1)）は上層に孝堂山と同じく風伯吹屋の光景を描いており、當時は祠堂の東壁の上層に何を描くかは必ずしも一定していなかったのである。また後壁の拜禮圖では下層に繫駕を解いた馬車が配され、上層の樓閣内で拜禮を受ける人物がこれに乗って來たことを示しているが、これも車馬行列を描いた孝堂山祠堂とは違った表現形式である。しかしやはり祠堂の後壁を形成していたと思われる同出の第二石（圖59(4)）では、上層に拜禮圖を描いて下層に孝堂山と同じく車馬行列を描いており、これも平行して行われたので

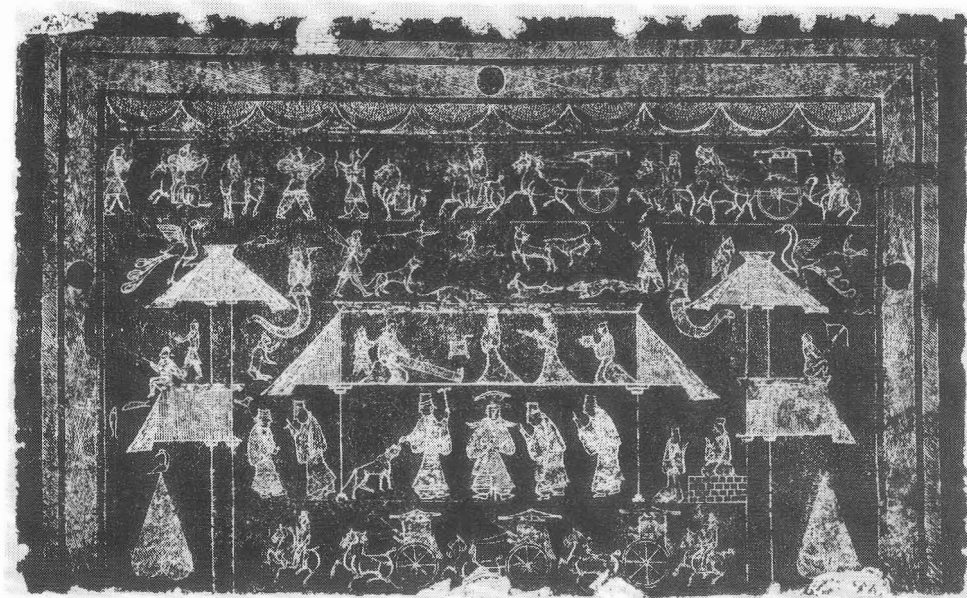
ある。またこの第二石で注目されるのは、上層の樓閣の左側に樹木を配して下に繫駕を解いた馬車と馬が描かれていることとで、武氏祠や宋山小祠堂などに見た拜禮圖の形式が素朴ながらここに既に見られるのである。

この嘉祥五老注畫像石の年代については、第三石に「故太守」銘の他、發表された圖版でははっきりしないが、樓閣階上の左の柱に「丁年」、右側闕の下にいる左の人物の身體に「丁卯」、右の人物の身體に「十一月」の銘があるという。この「丁卯」銘を信ずれば、前漢末の孺子嬰居攝二年（後六）、後漢の明帝永平十年（後六七）、順帝永建二年（後一二七）、靈帝中平四年（後一八七）などのいずれかの年になり、報告書は居攝二年と永平十年の可能性が大であるというが、永平十年がより有力であろう。先にも指摘したが、嘉祥五老注畫像石の畫像内容は孝堂山祠堂と多くの共通点があり、孝堂山に見られた西王母、風伯は勿論のこととして、周公輔成王圖は第一石（圖59（5））、七石、九石、孔子見老子圖は第七石、九石、升鼎圖は第一石、七石、九石、胡漢戰爭圖は第八石、十二石に見られるといった具合である。この餘りの類似は當然制作年代の近いことを雄辯に物語っており、およそ一世紀末と推定される孝堂山祠堂の年代を考慮して、それに先立つ永平十年（六七）が考えられるのである。前漢末の居攝二年とすれば、先に考察した前漢末の山東南部の畫像石棺などと較べ、表現様式、畫像内容ともに餘りに落差が大き過ぎるであろう。

次に肥城縣樂鎮村の畫像石二石は、一九五六年に後漢の畫像石墓から出土した。この墓は前室と後室から成り、その前室の天井の東面に第一石がはめ込まれており、同じ前室の東壁に第二石がはめ込まれていた。出土状況は餘り明瞭でないが、これも祠堂の畫像石が後代の墳墓に資材として轉用されたケースと考えられる。第一石（圖61（1））は縦七八cm、横一四九cm、第二石（圖61（2））は縦八七cm、横一四三cmで、ともに孝堂山の後壁と同じく上部と左右を三重の枠で圍んで、その枠内に二層の樓閣と雙闕を描いており、ともに祠堂の後壁に用いられたことがわかる。しかし畫像内容を細かく見ると、孝堂山のそれとは随分異なり、當時の祠堂の畫像解釋に重要な示唆を與えてくれる。また第一石の右側闕下部には「建初八年八月成、孝子張文思哭父而禮、石直三千、王次作勿敗□」と銘（圖60（1））があり、章帝建初八年（八三）に張



(1) 第一石 建初 8 年 (83) 高 78cm



(2) 第二石 高 87cm

圖 61 肥城縣樂鎮村出土畫像石 (拓本)

文思なる者が亡父のために「値三千」を費やして造ったことがはっきり記され、前期祠堂の編年の基準と成り得るものである。

第一石（圖61 (1)）は上層に攻戰圖らしきものを描き、右から武器を持った人物の乗る三騎とそれぞれ馬、三匹の魚、鹿の引く三輛の車が左へと進み、左側では弓を構えた三人の人物がそれに相對している。そしてそのすぐ下には兔や鹿を犬が追ったり、飛ぶ鳥を弓で射る狩獵の光景を描き、その更に下に樓閣と雙闕が大きく描かれる。雙闕はその外側に更に長青樹があつて、左側では大きな獸が飛び越えようとして槍で突かれており、雙闕の屋根には鳳凰が止まって、右の闕の中層では長い竿で魚を釣っている。そして樓閣内部とその下には舞樂の光景が描かれて、瑟を弾く者、建鼓を叩く者、舞を舞う者などがあり、それを左下の几に憑る一際大きな戴冠人物が侍者などに圍まれ楽しんでゐる。また右下には一株の樹木とそれに繋がれた馬が配され、樓閣の右と左には定規を持った人身蛇尾の伏羲、コンパスを持った人身蛇尾の女媧が、宙に浮いて相對している。

また第二石（圖61 (2)）は第一石と基本的には同じで、上層に攻戰圖、そのすぐ下に狩獵圖、そして長青樹、雙闕、樓閣、伏羲・女媧などが描かれる。但し樓閣内部とその下は内容が異なり、階上では瑟を弾く人物と三人の侍女が描かれるが、階下では中央の棒を杖にして立つ人物に對して、右傍らで笏を持った二人の人物が拜禮しており、左傍らには左手に何かを持ち右手で犬の頭を撫でる人物がいる。また樓閣の下には馬車三輛と二騎から成る車馬行列が描かれる。雙闕の中層にも右闕には弓を持って獲物をねらう人物、左闕には魚を釣る二人の人物がいる。

これら二つの畫像石で先ず注目されるのは、スペード形の長青樹が雙闕の脇に配されていることである。長青樹は先に前漢末期の江蘇沛縣棲山漢墓畫像石棺（圖2）山東鄆城縣蘇莊漢墓石棺（圖14 (4)）などで見、そこでは西王母の住む崑崙山の入口を象徴的に表していたが、ここでも雙闕の脇に配されてその内側が崑崙山の西王母の世界であることを表しているよう。棲山漢墓の畫像石棺でみた聖樹が第一石の雙闕の内側に描かれているのは、それを傍證するもので、ここでは弓



で鳥を射る代わりに馬が繋がれているのである。そしてこの馬は樓閣の下に表された几に馮る一際大きな人物が乗って來た馬車の馬に相違なく、この人物、即ち墓の主人公が馬車に乗って崑崙山の西王母の世界へと昇仙し、いまやその樓閣において舞樂を楽しみ生活しているのである。墓の主人公は樓閣の外にみるかにみえるが、背後に孝堂山祠堂後壁拜禮圖(圖54 (2)) などと同じく弩が壁に掛けられており、樓閣内にいるものと考えられる。一方、第二石も雙闕の脇に長青樹が表されて、その内部の樓閣が崑崙山の西王母の樓閣であることを示しているが、こちらは孝堂山などと拜禮の形式が異なるものの拜禮圖を表しており、拜禮を受ける人物が墓の主人公であり、下に描かれた車馬行列によって崑崙山の西王母の世界へと昇仙したことを表しているのである。従って祠堂の後壁にはあくまで墓の主人公の昇仙した後の有り様を描き、この二石も例外ではないが、第二石のように拜禮圖だけでなく、第一石のように舞樂圖を描くこともあったのである。

また狩獵や魚釣などをことさら描いているのも注目される。二石ともに樓閣の上の餘白を利用して原野での狩獵の有り様を描き、雙闕の中層には魚を釣る人物や鳥の獲物を待つて弓を構える人物がいる。仙界の内と外が長青樹、雙闕によって嚴格に區切られ、その内部は確かに樂園であるが、そこで生活する以上糧食を確保する必要があったのである。このような狩獵や魚釣の光景は先に見た武氏祠や宋山小祠堂では故事に押されて餘り見かけなかったが、前漢の畫像石棺では通有のモチーフであった。このように肥城縣樂鎮村の二つの畫像石は、これに先立つ前漢の畫像石棺と狩獵、魚釣、そして長青樹など畫像内容で共通點が多く、祠堂畫像でありながら、後漢前期の畫像石として確かに前漢の石棺畫像を受け継いでいるのである。

ところで、先に述べた如くこの肥城縣樂鎮村畫像石は第一石に建初八年(八三)の紀年銘があり、後漢の畫像石を考えるうえで編年の基準と成り得るものである。いまこれを基準にして孝堂山祠堂の年代を考えてみよう。周知の如く、孝堂山祠堂内には後人の題記が幾つかあるが、その最も早いものは三角隔梁石西面に「平原陰濕邵善君、以永建四年四月廿四日來過此堂、叩頭謝賢明」と刻されている。祠堂の造營年代はこの題記より早いに違いなく、この後漢の順帝永建四年

(一一九)が造營の下限をなす。そこで年代を更につめるため、樂鎮村と孝堂山の畫像を比較してみると、既に蔣英炬氏が指摘したように、石刻の技法、邊緣の文様、銘の書體など確かに似ている。即ち兩者ともに磨いた石の表面に陰刻線を施したり、部分的に凹面線刻を施す技法を用いている。また孝堂山後壁(圖54 (2))と樂鎮村第一石(圖61 (1))の邊緣の三重枰文様を比べてみると、前者は外側から小刻みに波打つ斜線文、交錯した線刻菱形文、紐で繋いだ五銖錢文を刻して、後者も同じく斜線文、交錯した菱形文を刻し、内側のみ穿壁文を刻している。孝堂山の「大王車」「成王」「二千石」など榜題(圖60 (1))の書體と樂鎮村第一石の書體ともに隸書體を用いて、全體に上下にひしゃげ横に伸びた裝飾的な八分隸の形が強調され、「大」字など右拂いの部分には雙鉤が用いられている。このように兩者は非常によく似ており、年代が近いことは明かである。蔣英炬氏はそこで紀元一世紀以内の後漢早期、或いは章帝時期(七六―八八)及びその後とする。しかし確かに兩者は個々の部分においてよく似ていても、全體を見ると、孝堂山が拜禮圖に象徴される如く形式的に餘りにも整った感じを與えるのも事實である。また銘の畫體も細かく見ると、樂鎮村の「王」字の最後の一畫は横に拂い出しても縦と横のバランスが程々であるのに對し、孝堂山の「王」字の最後の一畫は縦に比して横に極端に長く作られ、逆に形式的にはより整っている。つまり孝堂山の方が時代が下り、若干の開きが感じられるのである。

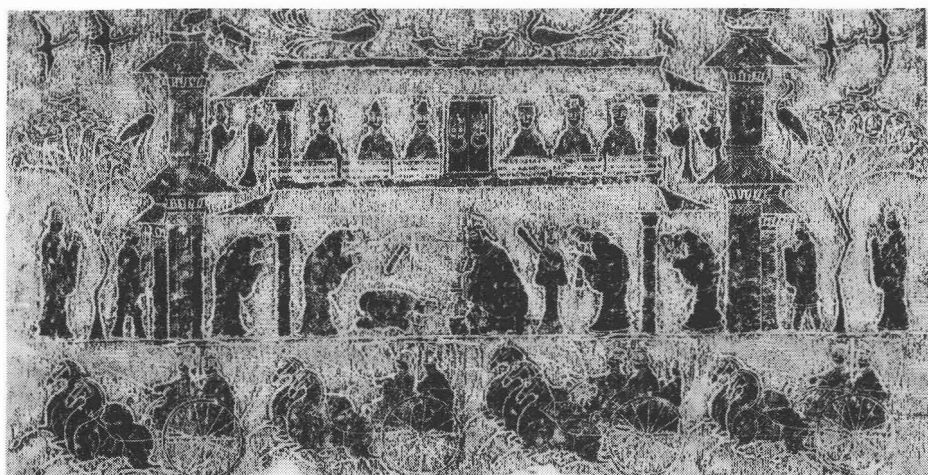
また先にも指摘したが、孝堂山の上層の車馬行列には「大王車」「相」「令」などの榜題があった。この「大王」はこの墓の主人公ではなく、下層の車馬行列に示される「二千石」の墓の主人公、即ち諸侯王國の相が仕えた主人を示し、諸侯王國の王を指すと考えられる。事實この地方は和帝永元二年(九〇)に泰山郡から分かれて置かれた濟北國に屬することになり、和帝の弟の劉壽が後漢濟北王に封じられている。また漢代では大王という漢の建國者である劉邦を指すこともあったが、『漢書』卷四四、淮南厲王傳に、文帝の時の將軍である薄昭が文帝の命令で淮南厲王劉長を諫めた時の書簡に、「今大王の行う所、天資に稱わず」とあるように、諸侯王を大王と呼ぶこともあった。従って「大王」は濟北王劉壽のことを指して、孝堂山祠堂の造營年代も濟北國の置かれた永元二年(九〇)以後と考えられ、樂鎮村畫像石から餘り隔たら

ない、およそ一世紀末の九十年代が妥當と考えられるのである。<sup>(21)</sup>

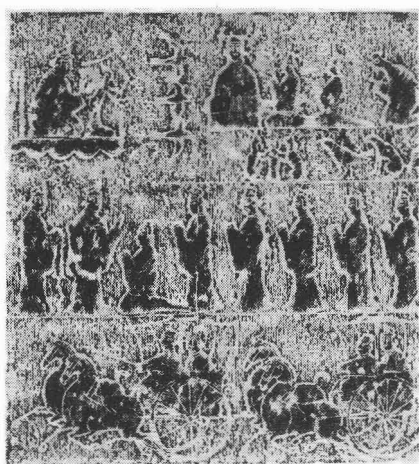
### (三) 祠堂のヴァリエーション

武氏祠、孝堂山祠堂を中心に考察してきたが、この章の冒頭でも述べたように、近年の目ざましい發掘成果によって、これまで用途が不明な多くの畫像石が祠堂の畫像石であったことが判明しつつある。祠堂の畫像石は地上にあったがために破壊されたり散逸しやすく、その一部は嘉祥宋山一、二、三號墓、嘉祥五老洼畫像石墓などのように後世の墳墓に資材として使われ、時にまとまって出土することもあるが、大部分は解體分散してもとの構造がわからなくなってしまうたのである。ここではそうした用途不明の畫像石のうち、明らかに祠堂に使用されたと思われるものを取り上げ、祠堂の様々な形式とその内容を探ってみたい。

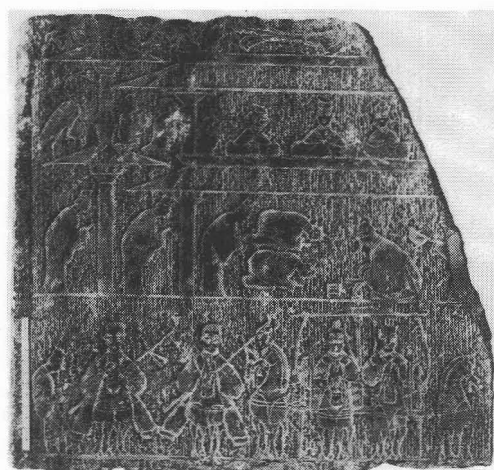
まずドイツのアドルフ・フィッシャー舊藏の畫像石<sup>(22)</sup>は、後壁と西壁の二石しかないが祠堂の畫像石と思われる。後壁畫像石(圖12) (1)は、上段に雙闕、樓閣を配して拜禮圖を描き、下段に五輦の馬車から成る出行圖を描く。初期の拜禮圖として孝堂山祠堂、嘉祥五老洼第三石などと異なる點は雙闕の兩側に鳥の止まる聖樹があることであり、後期の武氏祠、嘉祥宋山の祠堂などと異なる點は、その聖樹が左側だけに偏らず兩側にあり、またその樹下に繫駕を解いた馬車や鳥を射る人物がいらないことである。孝堂山から武氏祠に及ぶ過渡的形式といえよう。いずれにしても下段の出行圖の馬車に乗って上段の樓閣に昇仙して行くのである。また西壁畫像石(圖62) (2)は上層に西王母とその眷屬、そして鳥が引き羽人が御す雲車に戴冠の人物が乗って西王母の所へ向かう光景を描き、中層には八人の人物像、下層に二輦の馬車の出行圖を描く。下層の出行圖は勿論後壁の出行圖に連なり、更に失なわれた東壁畫像石の下層に連なったものと思われる。上層の西王母と鳥の引く雲車のモチーフは、嘉祥縣嘉祥村出土畫像石(圖42)の最上層にもみられ、この畫像石も一石しかないが



(1) 祠堂後壁畫像石 (拓本) フィッシャー舊藏



(2) 同上祠堂西壁畫像石 (拓本)  
フィッシャー舊藏



(3) 祠堂後壁畫像石 東京大學藏

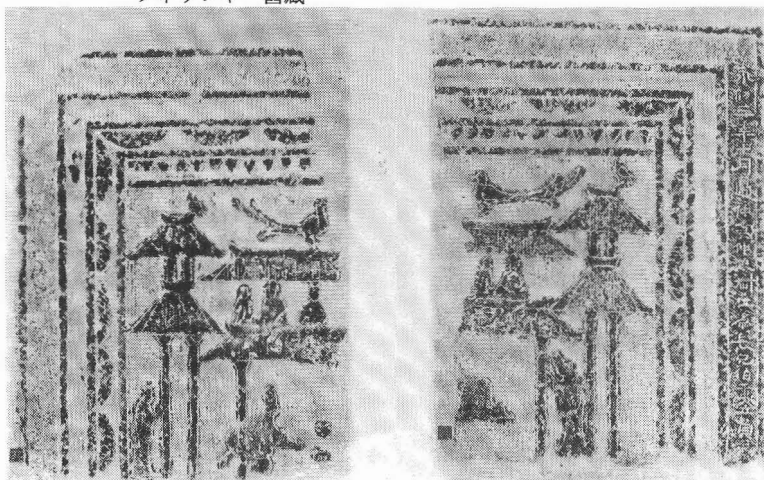


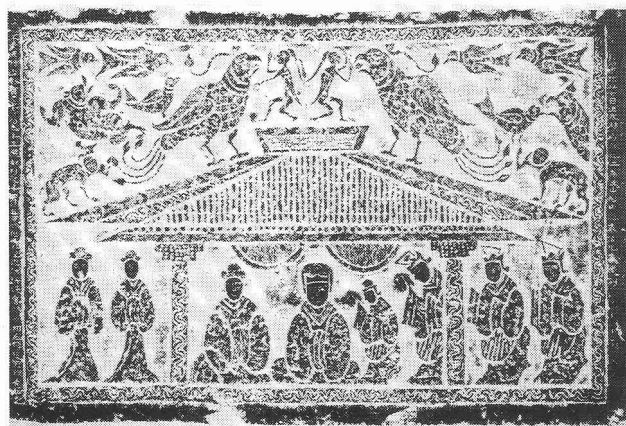
圖62 嘉祥出土祠堂  
畫像石

(4) 祠堂後壁畫像石  
(拓本) 永初3年(109)

祠堂の西壁を構成していたものと思われる。この二石の最上層の鳥の引く雲車、特により詳しい畫像の見られる嘉祥村の場合については、先に陝北畫像石との關連で考證した如く、西王母が迎えに派遣した羽人、玉兔、三足鳥とともに、墓の主人公が雲車に乗って西王母の所へ昇仙するさまを描いたものと思われる。

するとフィッシャー舊藏畫像石でみた場合、墓の主人公の出行の光景が後壁の下段と西壁の最上層で重複することになるが、これは後壁の西王母の家來たちの迎える樓閣と西壁最上層に位置する西王母の次元を區別したためと思われる。樓閣は屋根の上に鳳凰などがあるうえに兩側に聖樹が生え、あくまで崑崙山にある西王母の仙界を示しているが、階上の人物たちにみられるように、そこにいるのは西王母の家來たちであり、墓の主人公を迎えているのは西王母自身ではなく西王母の家來たちである。無論昇仙の先は西王母の所であるが、祠堂を三壁で構成し西壁に西王母を描いた關係上、また崑崙山の次元を考え、より低い位置にある後壁の樓閣には家來を配したのである。そして更にこの矛盾を解消するために、ここでは樓閣へ向かう出行圖の他に、次元の高い西王母の所へ向かう墓の主人公自身の姿を西壁最上層に改めて描いたのである。この雲車に乗る人物については上述の如く東王父との説もあるが、もし東王父であれば冠なり衣裝なりに何らかの特別な標識がある筈であるが、普通の進賢冠をつけて何もないうえに、嘉祥村畫像石の場合、もし東王父であれば原理的に西王母と同格もしくはそれに近い存在であるから、西王母より一段低い位置に描くということは無かつた筈である。<sup>(23)</sup>

フィッシャー舊藏畫像石は出土地不詳であるが、嘉祥縣嘉祥村畫像石との上述の畫像内容の類似は勿論のこととして、また畫像の面を低く彫りくぼめて細かい描線を陰刻し、外側の地は縦に平行に鑿痕をそろえるという技法の類似からも嘉祥縣出土のものと思われる。この技法は嘉祥縣から將來された東京大學所藏畫像石(圖62 (3))、東京國立博物館所藏畫像石二石(藏田信吉將來)や嘉祥縣吳家莊觀音堂出土畫像石(濟南府金石保存所舊藏)などの祠堂畫像石に典型的にみられるように嘉祥縣一帶のもので、後に嘉祥縣武氏祠畫像石に典型的にみられるような、畫像の輪郭を残して外側の地を彫りくぼめ、細かい描線を陰刻する技法が流行する前に、嘉祥縣一帶で流行したものである。ではいつ頃のものかというに、



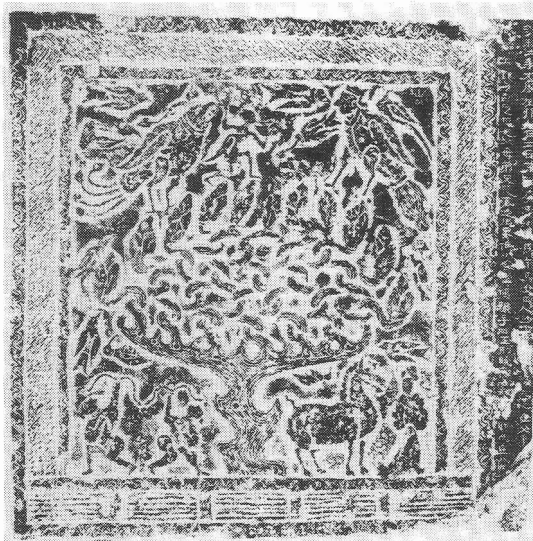
(1) 祠堂後壁畫像石(拓本)  
永和6年(141) 高67cm



(2) 祠堂西壁畫像石(拓本)  
高67cm  
(3) 祠堂東壁畫像石(拓本)  
高67cm



(4) 祠堂東壁畫像石左側面(拓本)



(5) 同上畫像石正面(拓本) 永和2年(137)  
高90cm



(6) 祠堂東壁畫像石左側面

圖63 微山兩城出土祠堂畫像石

やはり祠堂の後壁を構成したと思われる永初三年（一〇九）銘の山東畫像石（圖62）（4）が参考になろう。この畫像石は二つに割れているが、フィッシャー舊藏畫像石と同じ技法が用いられ、しかもともに雙闕が屋根が餘り横に開かないで縦に長い印象を與える。しかし永初三年銘畫像石の方が雙闕の基層を二本の柱で作るなど、より素朴であることも否めない。従ってフィッシャー舊藏畫像石は永初三年（一〇九）より數年遅れ、嘉祥村畫像石もそれとほぼ同時期と考えられる。いずれにしても、嘉祥縣の祠堂畫像石は後漢初期の五老注畫像石以來、獨自の傳統を保っていたのである。

次に山東省微山縣北部の兩城附近では、一九七六年に二十石の畫像石が出土した。そのうち永和六年（一四一）の紀年のある畫像石（圖63）<sup>(1)</sup>は、大きさが縦六七cm、横一〇四cmで、畫面の兩側に二行にわたって銘があり、

永和四年四月丙申朔廿七日壬戌、桓弄終亡。二弟文山・叔山悲哀、治此食堂、到六年正月廿五日畢成。自念悲痛、不  
 受天祐、少終。有一子男伯固、年三歲、却到五年四月三日、終歸皇泉（泉）。何時復會、慎勿相忘。傳後世子孫、令

知之

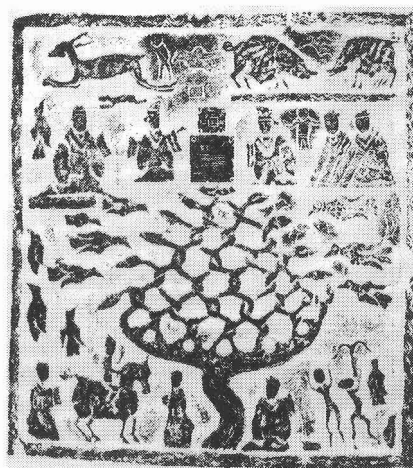
と書かれていた。つまり桓弄が亡くなったので弟の文山、叔山が兄のためにこの「食堂」を造り、途中兄の子の伯志が三歳で亡くなったので併せ記したことをいう。ここで「食堂」とは祠堂のことで、この石が祠堂の畫像石であったことが明かである。畫像は寄棟造の殿閣の中央に一際大きく描かれた戴冠の男性が端坐して、その左に女性が端坐し、右側で笏を持った戴冠の二人が拜禮して、殿閣の外には左に女性二人、右に戴冠の男性二人が立っている。また屋根の上には鳳凰が二羽止まって二人の羽人から餌を受けており、その他、猿に似た動物や飛ぶ鳥などがある。一見して拜禮圖であり祠堂の後壁を構成したものと考えられる。

では、東西壁にはどんな畫像石があてられたかというと、同出の西王母畫像石（圖63）（2）、聖樹畫像石（圖63）（3）がそれに當たるものと思われる。この二石は四邊の枠が複線の波浪紋で飾られているが、その途切れがちに續く波浪紋は上記の拜禮圖畫像石と全く同じであり、また縦の長さはともに六七cmで拜禮圖畫像石と同一である。<sup>(2)</sup>聖樹圖（圖63）（3）

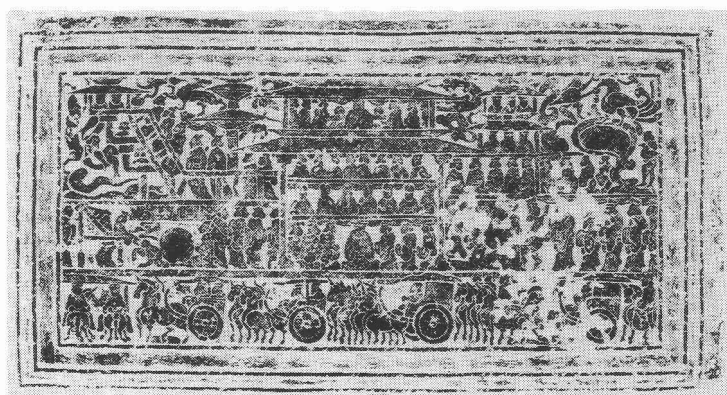




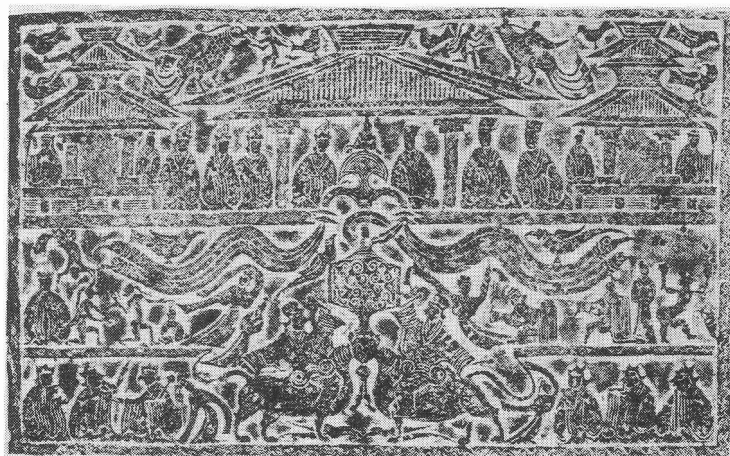
(1) 微山兩城祠堂西壁畫像石 高69cm



(2) 微山兩城祠堂東壁畫像石 高70cm



(3) 滕縣西戸口出土畫像石 長150cm



(4) 微山兩城祠堂後壁畫像石 長147cm

圖64 微山兩城出土祠堂畫像石及び關係畫像石



は枝のくねり絡まった樹木が畫面一杯に大きく描かれて、上に雉に似た鳥や小鳥が止まって空にも鳥が舞い、右下には一頭の馬が繋がれて左下には弓で鳥を射る人物がいる。武氏祠畫像石などでみた聖樹と同じである。また西王母圖(圖63 (2))は中央に三山形の頭飾をつけた女性が一人拱手端坐して、左右には人身蛇尾の男女二神が便面を持って侍して、その尾は互いに絡み合って先端は左右下にいる鳥の尾に繋がっている。中央の女性は頭に鳥が止まり、兩肩に卷雲紋が伸びているが、右肩の上に「西王母」の榜題があり、西王母と知れる。このようにこれら三石の畫像石は拜禮圖を奥壁に、聖樹圖を東壁、西王母圖を西壁に配して一つの祠堂を構成していたものと知れるが、それはまたお互いの畫像の類似によってもわかる。例えば聖樹圖の右上に舞う鳥は拜禮圖の右上に舞う鳥と形が極めてよく似ている。また西王母圖の左の男性侍者は進賢冠をつけ、右の女性侍者は西王母と同じく三山形の頭飾をつけているが、これらの冠や頭飾は拜禮圖の右側男性の進賢冠、左側女性の三山形の頭飾と極めてよく似ている。そして後者の類似は單に二石の畫像石が同一祠堂のものであることを證明するのみならず、拜禮圖の殿閣内外の人物たちが西王母もしくはその侍者の冠、頭飾をつけていることは、取りも直さず彼等が西王母の家來であることを物語っているのである。殿閣内の中央男性の左側の女性も三山形の頭飾をつけているところから、中央男性の夫人ではなく西王母の家來であり、これまでみた拜禮圖の樓閣階上にいた西王母の家來の女性がここに降りてきたのである。いずれにしても中央の男性はこの墓の主人公であり、ここでも西王母の世界の樓閣に昇仙して拜禮を受ける光景を描くのである。

こうした祠堂はこれにとどまらず、微山縣兩城ではたくさん造られたものと思われる。それを示すのが永和二年(一三七)銘の聖樹圖畫像石(圖63 (5))である。この畫像石は縦九〇cm、横九二cmで、右邊に銘があり、昆弟男女四人が亡くなった父母を思念して「冢を治め小食堂を作」ったことが記されており、小祠堂を構成する一石であったことがわかる。畫像は上記の永和六年祠堂の東壁聖樹圖と同じく、畫面一杯に聖樹が描かれ、上に人面長身の怪神や鳳凰、小鳥などがおり、左下で二人の人物が弓を構えて鳥を射ようとしており、右下に馬を引く人物がいる。興味深いことに畫面の所々に榜題があり、人面鳥身の怪神には「山鵲」<sup>(28)</sup>、鳳凰の上には「蜚鳥」、小鳥には「鳥生」、弓を射る二人の人物には「長卿」「伯

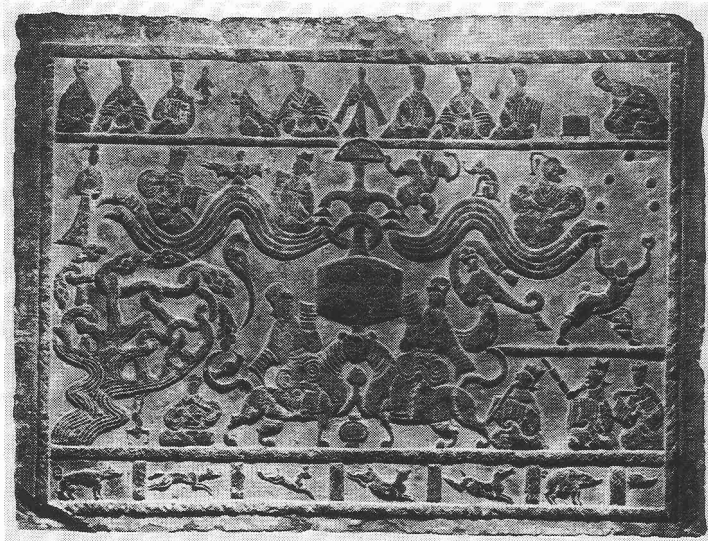


圖65 戴氏祠堂畫像石 高88cm 永初7年(113)

リエトバルク美術館

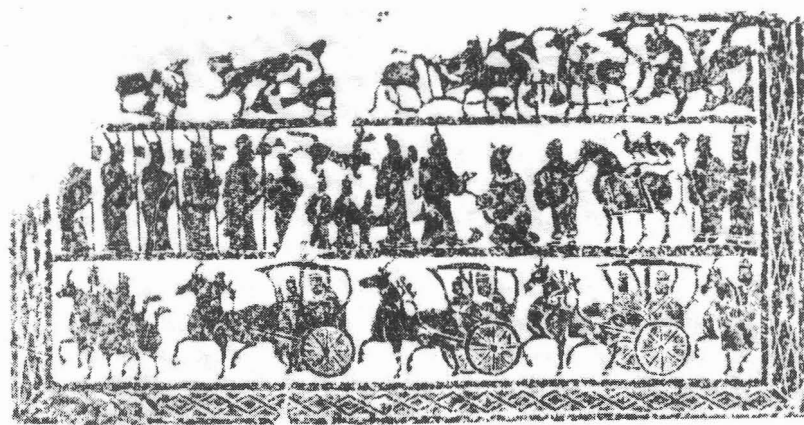
昌「馬を引く人物には「女黄」の榜題がつけられている。また注目すべきことに、この畫像石は左側面にも畫像(圖63(4))が刻されており、縦長の枠内に日輪を兩手で上に支えた人身蛇尾の日神がいる。この側面の畫像は、石を祠堂の側壁に使った時に觀者にみせるもので、これによってこの畫像石が祠堂に使われたことがわかると同時に、祠堂の向かって左側に位置していたことが知れるのである。後壁の畫像と右側の畫像は不明であるが、この畫像石は日神を描いていることや、聖樹圖のあった上記祠堂の類推から多分北向き祠堂の東壁に位置していたのである。聖樹圖を描いて側面に畫像を刻した畫像石(圖63(6))はもう一點知られており、これも畫像の様式から微山縣兩城のものと考えられる。

但し東壁聖樹圖との西壁の取り合わせは常に西王母圖かというところではなく、兩城では聖樹圖と並んでそれとほぼ同じ大きさの水樹圖がよく出土するが、聖樹圖と水樹圖の取り合わせもあったものと思われる。一九七六年に出土した水樹圖(圖64(1))は縦六九cm、横六六cmで、右下から左上へと階段が斜めに伸びその先には寄棟の亭の如き水樹が置かれて水に臨み、下では船を出したり籠を使ったり鋸で突いたりして魚を捕っている。魚を捕る人物はみな裸で、それを水樹の上や階段から數人の人物が見物している。またこれと對を成すと思われる畫像石(圖64(2))は、畫面を三段に分かつて上層に豚や鹿の動物、中層に六博の光景、下層の幅廣い部分に聖樹を描いている。聖樹圖は上に鳥が舞って下で二人の人物が弓で射ようとしているが、この人物がやはり裸で水樹圖の魚を捕る人物と姿態が似、祠堂畫像石として左右壁に對をなすと考えられ

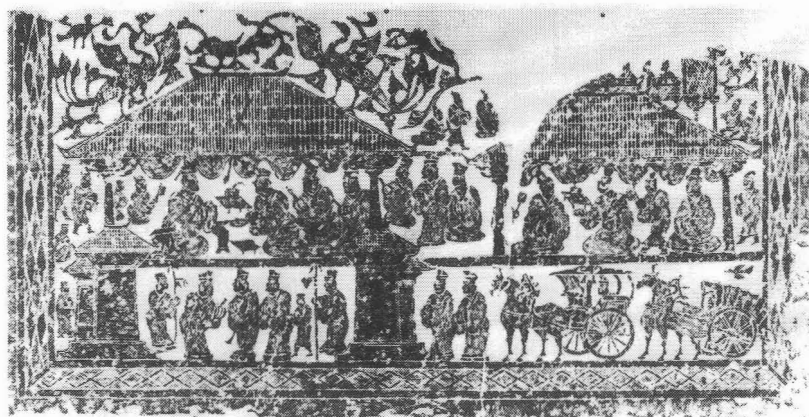
るのである。またそのことを傍證する、滕縣西戸口出土の祠堂後壁を構成したと思われる畫像石(圖64 (3))がある。これは中央に二層樓閣を配して階下に拜禮の様を描き、樓閣の左側には闕を介して水榭の圖、右側には望樓を介して上に羽人と口に聯珠を銜えた鳳凰のいる聖樹の圖を描いている。つまりこの畫像石は樓閣の拜禮圖を中に左右に水榭圖と聖樹圖を配しており、これが上述の兩城の後壁拜禮圖、西壁水榭圖、東壁聖樹圖の構成と似るのである。水榭も聖樹も西王母の仙界にあるもので、肥城樂鎮村畫像石でもみたように、魚を捕ったり鳥を射たりすることが重視されたのである。

この他、これまでに兩城から出土した三十七石の畫像石には、永和六年銘の拜禮圖に似た畫像石が六點知られており、これらも祠堂の後壁を構成したものと考えられる。その内の一つの畫像石(圖64 (4))は畫面を上下二段に分かつて、上段に雙闕、寄棟單層殿閣を配して殿閣内に墓の主人公らしき人物を描き、下段には建鼓を大きく配して、羽葆の飾りを左右に翻し、虎形鼓座に乗った二人の人物が建鼓を叩いている。これが祠堂の後壁に用いたものであるならば、永初七年(一一三)銘の所謂戴氏畫像石(チューリッヒ リエトベルク美術館藏 圖65)も祠堂の後壁に用いたものである。これは畫面を幅の狭い上下二層と幅の廣い中層の三層に分ち、中層には建鼓が大きく配されて、虎形鼓座に乗って建鼓を叩く二人の他、左右に翻る羽葆の上に乗って樂器を演奏する人物たち、下にも笛を吹く人物たち、弄丸の曲藝をする人物もいる。左下に聖樹に似た樹木があるのも興味深い。そしてこの建鼓や樂舞を觀賞するのが上層の人物たちで、左側に酒尊を中にして拜禮する人物がおり、中央の人物たちの中の一人が墓の主人公であろう。また下層に七つの杵を設けて中に犬、免などの動物を配するのも珍しい例である。このように拜禮よりも樂舞を強調した祠堂後壁畫像は、既に肥城樂鎮村第一石(圖61 (1))に先例があったが、ここでは一層大膽に描かれているのである。

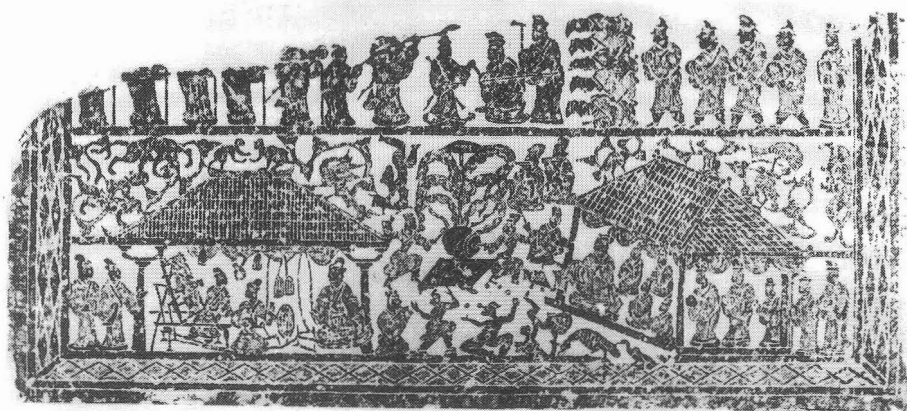
また江蘇北部の例として徐州市の東に位置した有名な銅山縣洪樓漢墓の祠堂がある。この墓は一九五七年に發掘され、墓は東向きで前室と後室とから成り、若干の畫像石が發見されたが、墓から西に四、五m離れた所に祠堂があり、畫像石が散亂していた。しかし祠堂を構成していた畫像石は大部分保存されていたために、復原も可能である。江蘇省文物管理



(1) 東壁畫像石



(2) 後壁畫像石

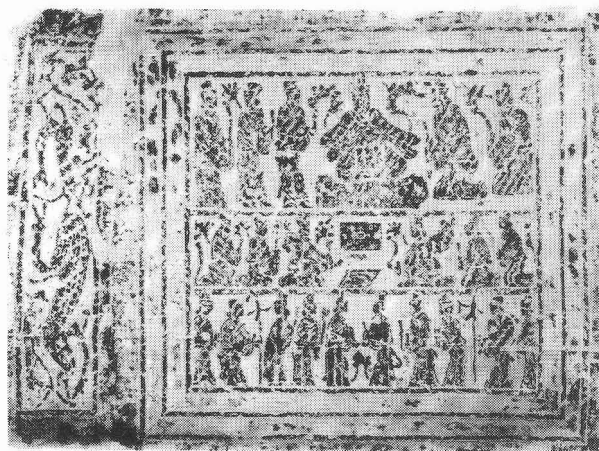


(3) 西壁畫像石

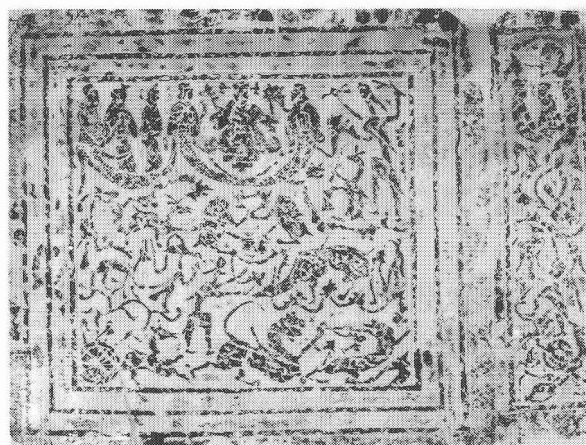
圖66 銅山縣洪樓漢墓祠堂畫像石（拓本）

委員會編『江蘇徐州漢畫象石』(北京 一九五九)、徐州市博物館編『徐州漢畫象石』(南京 一九八五)の報告を総合すると、祠堂の畫像石として發見されたのは計十二石<sup>(33)</sup>のようである。それによると、全體の構造は孝堂山祠堂に似て木造瓦葺切妻式建築を石材で模したもので、後壁と左右壁を基臺と一緒にコの字形に並べて、室の中央に三角形の隔梁石を縦に渡し、更に前坡、後坡の屋根を上にかぶせて、瓦當を刻した石を軒先に配していた。孝堂山祠堂の入口中央の柱に當たる石が見當たらず、代わりに両面に畫像を刻した長方形(縦一二〇cm、横七八cm)の石板<sup>(34)</sup>があり、或いはこれを入口中央に横に立てて三角隔梁石を載せたとも考えられる。また左右壁の上の破風に當たる部分が見當たらないが、これがないと屋根が安定せず不可缺であるので、散逸したものと思われる。

最も肝心な三壁の畫像は大略、東壁に出行圖、後壁に拜禮圖、西壁に舞樂圖を配する。東壁(圖66 (1))は三層に分かれ、上層は瑞獸、中層は拜謁、下層は出行を描く。また後壁(圖66 (2))は上下二段に分けて、下段は左に單層雙闕と柴戟を持った門衛を配して、右側の大車を伴った四維附き輅車を降りた人物が笏を持った人物に迎えられる場面を描き、上段には左右に單層寄棟の殿閣を二棟配して、左の殿閣は屋根に鳳凰が二羽止まって、幕の垂れた室内では左側の几に馮った戴冠の人物が三人の笏を持った人物たちの拜禮を受ける場面を描き、右の殿閣では二人の人物が便面を持つ侍者たちにかしずかれて談笑する場面を描く。雙闕と左側の殿閣は上下二段に分かれるが、雙闕の頂部が上段に及んで嚴格には區分されず、雙闕の奥に殿閣があるように描かれている。そして西壁(圖66 (3))は二段に分け、幅の狭い上段には中央の人物が左側の人物たちの拜禮を受ける光景を描くが、下段には後壁と同じく左右に猿や鳳凰などが屋根に止まる二棟の單層寄棟殿閣を配し、左の殿閣内では紡車や織機が置かれて紡織の光景が描かれ、右の殿閣では閣内にいる人物が庭で繰り廣げられる建鼓、弄丸、舞樂を楽しむ光景が描かれる。またこれら三壁の基座に當たる部分<sup>(35)</sup>には車馬行列が描かれ、行列は東壁から後壁を経て西壁へと左向きに進み、末端には雙闕が描かれて門吏が身を屈めて迎えている。従ってこの三壁の畫像も墓の主人公の昇仙の有様を描き、車馬行列を組んで昇仙出行した墓の主人公が仙界の雙闕に達すると門吏の迎謁を受けて、殿閣内で仙界の官僚たちの拜禮を受け、



(1) 祠堂東壁及び左側面 高85.0cm 有鄰館藏



(2) 同上祠堂西壁及び右側面 高85.0cm



(3) 鄒縣金斗山祠堂西壁



(4) 同上祠堂後壁 高106cm



(5) 同上祠堂東壁

圖67 山東祠堂畫像石（拓本）

絲を紡いだり布を織ったり地上の世界と變わらぬ仙界で舞樂を楽しんだりしながら生活を送るのである。西王母の畫像が見当たらないが、東西壁の破風に當たる部分の内側に描かれた可能性があり、これについては保留することにする。

また興味深いのは屋頂の前坡、後坡に描かれた畫像である。一石にはラッパ状のものを銜えて風を吹く風伯、壺をひっくり返して雨を振りまく雨師、太鼓を連ねた綱を肩で引く張る雷公、三匹の魚の引く雲車に乗り魚を頭に載せた河伯、四頭の龍の引く雲車に建鼓を載せて叩く虎形の神、象に乗り鉤狀の棒を持った神など、天上世界の神々が描かれる。また一石は左下部が缺けているが、三頭の虎の引く車に乗り太鼓を叩く熊形の神、足の生えた魚の神、虎に似て一角の獸に跨った神などが描かれる。また三角隔梁石は片面に榻に坐した神人と三頭の鹿の引く雲車に乗った神人を描き、片面には木を引き抜いたり動物の獲物を擔いだりする強力の人神七人を描いて、側面に大型の弩を足を使って引く蹶張圖を刻していた。

以上はおよそ前期の祠堂の例であるが、後期祠堂の例として有鄰館所藏の畫像石二石を擧げる。この二石は大きさがともに縦八五・〇cm、横九〇・〇cm、厚さ約二五・〇cmで、一石(圖67 (2))は三重の枠で圍んで、上段中央に玉勝をつけ三層の臺に乗った西王母がおり、周りには人身蛇尾の侍者の他、玉兔、蟾蜍、九尾狐、羽人などがおり、下方に虎や鹿車などが描かれる。また一石(圖67 (1))も三重の枠で圍んで、内部を三層に區切り、上層に三本の突起のある冠をつけた東王父と侍者、中層に六博の光景、下層に笏や檠戟を持って立つ人物たちを描く。典型的な西王母と東王父の圖で、山東省將來と考えられるが、前者は右側面に伏羲・女媧などの畫像が刻され、後者は左側面に龍が大きく刻されており、これによって祠堂のそれぞれ左壁(西壁)、右壁(東壁)を構成していたことが確實に知れるのである。

有鄰館のものには後壁の畫像石がないが、東西壁の西王母、東王父圖とともに後壁拜禮圖の揃ったものに、鄒縣金斗山畫像石(圖67 (3)(4)(5))がある。後壁は上に拜禮の様を描いて下は中央に建鼓を配して、左右に建鼓に向かって進む輦車一輛ずつを描き、笏を持った人物が迎えている。三壁とも畫風に共通性がみられ祠堂を構成していたものであろう。

この他にも組み合わせて祠堂を構成出来ると思われる畫像石は數多くあり、その復原は今後の課題である。



## (四) 祠堂の機能と畫像の意味

## 1 陵寢と祠堂

祠堂は食堂とも呼ばれ、墳墓の前に置かれた地上建築である。祠堂(圖69 (1))と墳墓(圖69 (2))の雙方が發掘された徐州青山泉白集漢墓<sup>(36)</sup>の祠堂は、墳墓墓室の前八・五六mの所に位置しており、孝堂山祠堂も墳丘のすぐ前に位置していた。また安徽宿縣褚蘭二號畫像石墓<sup>(34)</sup>では墳丘の周圍を低い垣が圍んで、祠堂は墳丘の南側にあり、南を向いて開いていた。この祠堂は奥壁畫像石の中央下部に碑形<sup>(35)</sup>が形作られ、建寧四年(一七一)に營まれた「辟陽胡元壬□墓」であることを明記していた。祠堂の大きさは、大型の部類に屬する孝堂山祠堂で内部の幅が三・八m、奥行二・一八m、高さ二・二〇mであり、武梁祠は内部の幅が約二・〇m、奥行一・四m、高さが一・八mであった。人間が中で動くには少々窮屈な廣さであり、より大きな孝堂山の場合でも入口中央の八角柱の高さが一・四〇mであるから、軒が低く、およそ人間が入って活動することを豫想しない建物であった。まして小型の宋山一號小祠堂に至っては、内部の幅が一・二〇m、奥行〇・六八m、高さ〇・七四mと、まさにほこらのようなものであった。

では、この祠堂は何のための建物かといえば、子孫が死者の祭祀を行う際に酒食などの供饌をする場所とするのが妥當である。青山泉白集漢墓の祠堂が埋まっていた土の中から杯、案、盤、勺などの陶製食器の破片が發見<sup>(36)</sup>されており、これらは祭祀の際に供物を盛った祭器と考えられている。事實、孝堂山祠堂でも武梁祠でも供物を置いたとみられる神臺があり、孝堂山では孝子郭巨の塑像を載せた臺を除いて明らかになったように、長方形の低い臺石<sup>(37)</sup>(圖54 (1))が後壁の前に石室の奥半分ほどのスペースを使って置かれ、武梁祠でも石自體は發見<sup>(38)</sup>されていないが、後壁下部の拜禮圖の下の帶狀文様の途切れた箇所(圖47 (2))に高さ約二〇cmの臺石<sup>(38)</sup>が置かれていた形跡がある。そして宋山小祠堂などの小型祠堂の場



合は、龕内部の三壁で囲まれた場所がそれに当たり、後壁に壁龕をもった武氏祠前石室や左右室の大型祠堂の場合も龕内部がそれに當たるものと思われる。要するにこれらの祠堂では後壁の中央下部に拜禮圖が描かれ、その樓閣内に墓の主人公が一際大きく描かれていたが、その拜禮圖の前に神臺が設置され、供物はその畫像の主人公にさげられるような仕組みになっていたのである。

このように後漢時代には墳墓の傍らで死者を祀る墓祭が行われ、祠堂はそのための建物であつた。墓祭については古來やかましい議論があるが、後漢の蔡邕の『獨斷』<sup>(40)</sup>卷下には陵寢制度と關連して次のように述べられている。

古は墓祭せず、秦始皇、寢を出すに至りて、これを墓側に起こす。漢因りて改めず。故に金陵上を寢殿と稱し、起居、衣冠、象生の備えあり。皆な古の寢の意なり。

即ち昔は墓祭は行われず、宗廟には宮室と同じく前に廟（朝）、後ろに寢があつて隣り合わせになつていたけれども、秦始皇帝に至ると、宗廟の中にあつた寢を分離して陵墓の近くに築くようになった。そしてこれが更に漢代に踏襲されて、陵上の寢殿に死者のために必要な起居、衣冠、生活の道具が備えられたものである。これが陵寢制度<sup>(41)</sup>で、祖先を祭る儀式が禮に規程された宗廟とともに陵寢でも行われるようになったことを示しているが、その陵寢制度が本當に秦の始皇帝から始まったか否かは別にして、確かに近年の秦始皇帝陵附近の發掘成果によると、陵の西側で建築遺蹟が發見され、併せて「麗山飢官 右」「麗山飢官 左」と書かれた陶壺の蓋一件、「麗邑二升半 八廚」と書かれた陶盤一件、また高さ一三・三cmの金銀象嵌編鐘一件などが見つかつている。麗山は驪山、即ち秦始皇帝陵のことであり、飢官は食官<sup>(42)</sup>、つまり漢代では奉常の屬官で、宮中や陵に設けられて飲食を供奉する官のことである。従つて飢官の存在、廚房の設備、祭祀のための奏樂の設備などがあったことになり、寢の存在が裏附けられつつある。また『漢書』<sup>(43)</sup>韋玄成傳は前漢の廟、寢、便殿の祭について次のように述べている。

高祖より下宣帝に至るまで、太上皇、悼皇考ともども、各々自ら居する陵の旁らに廟を立て、併せて百七十六たり。

又園中に各々寢、便殿あり。日ごとに寢に祭り、月ごとに廟に祭り、時ごとに便殿に祭る。寢にては日ごとに四たび食を上り、廟にては歳ごとに二十五たび祠り、便殿にては歳ごとに四たび祠る。又月に一たび衣冠を游ばしむ。

ここで寢が陵園の中に造られたのは秦以來のこととして、廟までも陵園の附近に造られるようになったのは注目すべきである。そして毎月の廟での祭祀には、寢から衣冠を取り出して廟まで運んで、衣冠についた靈魂を遊歴させ、これに對して毎日の寢での祭祀は、四回食事を供えることがその具體的内容であった。便殿は顏師古の注に「便殿は寢側の別殿なるのみ」とあるように、寢が陵上の正殿で、便殿はその側に附設された休息所のようなものであった。

こうして次第に宗廟の地位が低下して陵寢の地位が向上するようになったが、これを決定的にしたのが後漢の明帝の上陵の禮であった。永平元年（五八）正月、明帝は公卿以下を率い父光武帝の原陵に朝して元會儀の如くし、上陵の禮を盛大に行つたのである。この明帝に始まつた元旦の上陵の禮の有り様は『續漢書』禮儀志上には次のように述べられている。

鍾の鳴るや、謁者禮に治いて客を引き、羣臣位に就くこと儀の如し。乘輿東廂より下り、太常導き出で、西向して拜し、折旋して阼階より升り、神坐に拜す。東廂に退坐し、西向す。侍中、尚書、陞者は皆神坐の後にあり。公卿羣臣神坐に謁し、太官は食を上り、太常は食舉を樂奏し、文始、五行の舞を舞う。

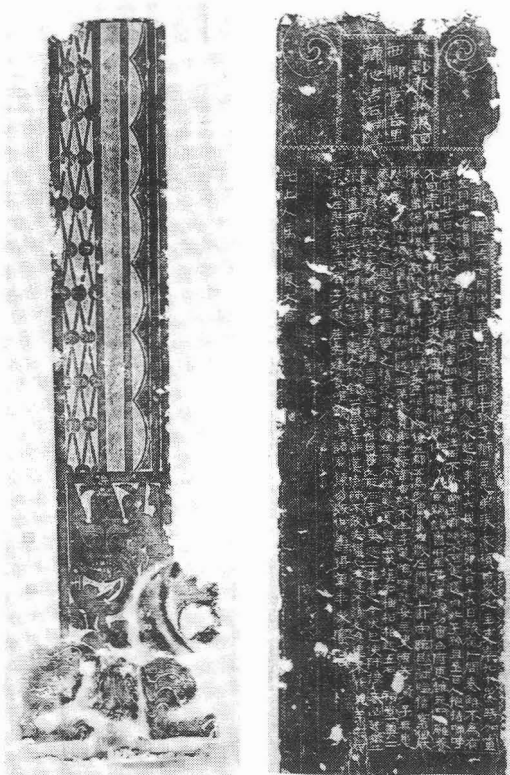
陵寢に靈魂の坐所である神坐があり、皇帝がこれに向かつて朝拜したのが注目されるが、この上陵の禮には公卿百官、周邊諸國からの來朝者のみならず、郡國の上計吏までも參列し、各郡國の上計吏は神坐に向かつて穀物の價格、民の苦しみなどを報告し、「神にその動靜を知らしめんと欲し」という。まさに靈魂がそこに在すが如くであるが、『古今注』（『續漢書』禮儀志注所引）によれば原陵の寢殿は鍾虞とともに確かに陵の周垣内にあった。

これらはいくまで陵寢制度、即ち皇帝の陵に關わるものであるが、祠堂は陵寢制度における寢を小型にしたようなものである。起居、衣冠、象生の道具が備えられていたかは定かでないけれども、祭祀の際には同じく食事が供えられた。

祠堂はまた、先に永和二年と永和六年の微山縣兩城祠堂畫像石の銘に「冢を治め小食堂を作る」とか「此の食堂を治む」

とかあったように、當時食堂と呼ばれた。この食堂という呼稱は陵寢制度の食官と關係があらう。食官は飢官と同義であり、飢は『説文解字』段玉裁注によれば、「案ずるに、食を以て人に物を食らわすなり。その字もと食に作り、俗に飢に作り、或いは飼に作る」とある。食堂の食もこの義であり、陵寢制度との關連を物語っているのである。

ところで、先に考察した如く、陵寢制度において陵内に寢が營まれるについては、當然のこととして死者の靈魂が陵の墓室内に留まっていることを前提とする。死者の靈魂が墓室内に住むと信じたからこそ、そのすぐ傍らに寢を設け、更に食官などを配し、毎日の飲食、起居の奉供をさせたのである。これは祠堂についても言える筈で、墳墓のすぐ傍らに祠堂が營まれたのは、死者の靈魂が墳丘の下に墓室内に住んでいると信じたからこそである。王充が『論衡』四諱篇に刑徒の上墓の問題と關連して「墓とは鬼神の在す所、祭祀の處なり」と述べる通りである。王充（二七—約九七）の生きた後漢時代には皇帝の上陵に負けず劣らず民間でも上墓が盛んに行われ、王充は「古禮の廟祭は今俗の墓祀なり」と、墓祭が盛



(1) 石柱側面（拓本）

(2) 題記（拓本）

圖68 鄉他君石祠堂石柱及び題記 永興二年(154)

んな當時の習俗を述べたうえで、刑徒は先祖の靈をはずかしめ、先祖の方も供物を享受するに忍びないから上墓はすべきでないと説くのである。

では、祠堂は出土文物に照らしてどのように考えられていたであろうか。一九三四年に山東省東阿縣西南の鐵頭山で發見された畫像石柱（圖68（1））は、高さ一・二〇mの四角柱の三面に畫像を刻して一面に題記（圖68（2））を刻していた。題額に「東郡厭縣東阿、西鄉常吉里、鄉他君石祠堂」と書かれていたことや形狀から、祠堂の前面の柱に用いたものと推測されてい

る。題記によると、この祠堂は郷他の子である薊無患と奉宗の兄弟が、亡き父母のために永興二年（一五四）に建てたものであるが、更に祠堂の建立の由來を記して次のようにいう。<sup>(88)</sup>

無患・奉宗、父母の恩を克く念じ、切怛悲楚の情を思念す。兄弟暴露して冢に在り、晨夏も辟けず、土を負いて墓を成し、松柏を列種して石祠堂を起立す。冀わくは二親の魂零（靈）に依止する所あらしめ、歲臈（臘）に拜賀すれば子孫懽喜せんことを。（略）財かに小堂を立てて子道あるを示し、路食に差<sup>たが</sup>わしめんとす。

これに従えば、墓や祠堂は靈魂が依り止まる所であり、臘祭の時などに子孫が上墓して、靈魂が浮遊して路邊で食べたりしないように、祠堂に飲食を供えるというのである。父母のために墓や祠堂を築き、祠堂に飲食を供することは、孝子として道に則った行爲でもあった。またこの祠堂に陵寢と同じく神坐が存在したか否かについては、遺物は何も語ってくれないが、現行『風俗通義』の佚文である汝南周霸の話は祠堂について具體的に語ってくれる。即ち汝南の周霸は北海の相となり、臘日に息子を故郷に遣わし墓參りをさせたが、先祖が安らかで供え物を楽しんでくれるどうか知るために「鬼を見る」のに長けた主簿の周光も同行させた。冢上に至り、息子が祭るのを周光が後ろで窺っていると、驚いたことに「神坐」に坐りこんで肉を裂き食らっていたのは破れた服を着た屠者（の靈）であり、周霸の先祖（の靈）は「陰堂の東西廂」をうろろしていて前に出て來なかった。實は周霸の息子は屠者の子で、女兒を産んだ周霸の妻が、同じ時に男兒を産んだ屠者の妻と密かに交換して育てていたというのである。ここで陰堂は祠堂であり、祠堂にも神坐はあったのである。靈が坐り込んで供物の肉を食っていたというから、恐らく孝堂山祠堂などの神臺がこれに該當しよう。但し王先謙が『後漢書集解』志卷九において、漢の帝陵の園寢には神主はなかったというように、祠堂にも神主はなかったと思われる。靈魂が住んでいるのであるから必要なかったのである。

## 2 墓室との關係

それでは、死者の靈魂が墓や祠堂に住んでいるとしたら、何故に、先にみた如く、祠堂に墓の主人公の仙界に昇った後

の姿が描かれたのであろうか。墓に住んでいるならば靈魂は仙界にいる筈はなく、また仙界に住んでいるならば墓にはいない筈である。これが漢代の畫像石墓の抱えた構造的な矛盾であり、この矛盾が畫像石墓の解釋を難しくしてきた。従って矛盾は單に祠堂畫像についてのみならず、地下の墓室畫像についてもいえ、地下の住處であるべき墓室にも基本的な矛盾が描かれたのである。

祠堂と墓室が同時に出土している徐州青山泉白集漢墓の墓室を見ると、墓室は南向きで、墓門、前室、中室、後室と、中室左右の二耳室から成っていた。畫像石は墓門、前室、中室、後室に計十九石あったが、いま中室の北壁、即ち後室（二室）に至る入口兩側の東西壁畫像に代表させると、東西壁（圖69）（2）ともに二層樓閣を描いて、屋根に鳳凰や猿のような動物がおり、階下の室内では勺の備わった酒尊を中にして二人の人物が歡談したり琴を弾く光景が描かれている。鳳凰などがあるから無論この世の世界ではなく仙界の光景であり、前室にはそこに至るための車馬出行の光景も描かれている。これは先に祠堂畫像を紹介した徐州銅山縣洪樓漢墓の墓室畫像も同様で、唯一残った、後室の入口に當たる前室後壁門の左右畫像石（圖71）には、ともに二段に分け下段には車馬出行を描き、上段はやはり鳳凰の止まる單層殿閣を描いて、左（南）側は室内で舞樂を楽しむ光景、右（北）側は對飲する光景を描いていた。つまり白集漢墓も洪樓漢墓も墓主人の遺體の納まる後室の前に、昇仙した後の仙界での生活の光景を描き、恰も墓主人が仙界にいるかの如く演出していたのである。この墓室畫像の樓閣の中にいる人物が墓の主人公か否か確かめるすべはないが、祠堂の後壁と殆ど變わらぬ畫像が描かれていたことは注目されよう。

また墳墓の前に祠堂があったか否かは不明であるが、墓室が比較的よく保存された山東、江蘇の畫像石墓をみてみよう。まず一九七三年に山東蒼山前城村で發掘された後漢畫像石墓は、元嘉元年（一五一）の長文題記があり、劉宋時期のものか後漢時期のものか物議をかもししたが、長文題記が畫像内容を説明し興味深いものであった。墓は南向きで墓門、前室、後室（二室）と前室西側の耳室から成っていた。主な畫像を取り上げると、墓門は左の立柱に樹狀山嶽に坐す西王母と羽



(1) 祠堂東壁畫像石（拓本） 高160cm

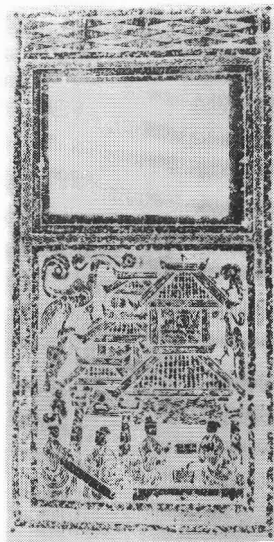


圖69  
徐州青山泉  
白集漢墓

(2) 墓中室北壁畫像石（西）  
（拓本） 高103cm



(1) 前室東壁橫額畫像石（拓本） 長146cm  
(2) 前室東壁畫像石（拓本） 高107.5cm

圖70 蒼山前城村畫像石墓 元嘉元年（151）



圖71 銅山縣洪樓漢墓前室後壁門  
南畫像石（拓本） 高103cm

人、中央の立柱に交龍文、右の立柱に門吏と玉女を描いて、門楣には車騎出行とそれを迎える門吏を描いていた。また前室の東西の横額には出行圖が描かれ、西壁はたもとに華表のある木橋を車馬行列の一行が渡ろうとする光景を描き、東壁(圖70 (1))には駢車と羊の引く羊車が騎吏に先導されて大きな建物に到着し、盾を持った門吏がこれを出迎え、建物の半ば開かれた扉から笏と便面を持った二人物の顔を出すところが描かれていた。この後者の畫像について、題記<sup>25)</sup>は、

小車駢驅馳、相隨到都亭、游徼候見、謝自便。後有羊車像、其□上即聖鳥乘浮雲

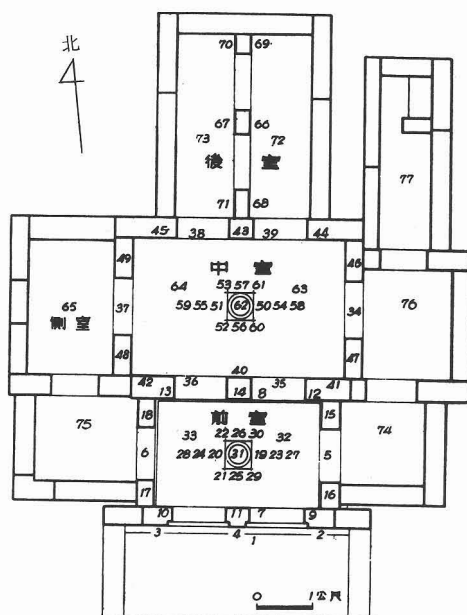
と記していた。建物を「都亭」、出迎えの門吏を「游徼」と記すが、勿論現實の都亭や游徼ではなく、建物に鳳凰に似た鳥が止まり、題記にもある如く駢車と羊車の上には、數羽の「聖鳥」の翼の波狀雲氣文に化した「浮雲」が描かれるように、仙界に到着した所を描くのである。また前室の東壁(圖70 (2))には畫面を三段に區切つて、上段に龍と鳳凰の圖、下段に駢車と先導の騎吏の出行を描き、中段には老婦が牀上の几に馮つて坐し、左右に便面を持って侍る二人の女性、案を前に環刀を持つ料理人らしい男性、便面を持つ男性などを描き、左上には酒尊も置かれている。題記には、

其中畫像、家親、玉女執尊、杯、案、棊局、桴、穩杭(元)好弱兒(貌)

と記されていた。「家親」は王恩田氏もいうように恐らく墓主のことであり、「玉女」は仙界の女性である。つまり墓の女主人公が仙界で玉女などにかしずかれ御馳走を食べて暮らす様を描いているのである。やはりこれらも纏めて墓の主人公の昇仙と昇仙後の生活を表しているのである。

また山東沂南畫像石墓<sup>27)</sup>は一九五四年に發掘された後漢末期の代表的な大型畫像石墓である。墓室(圖72 (1))は南向きで、南北八・七〇m、東西七・五五m、木造建築を模して、墓門、前室、中室、後室(二室)と、前室と中室の左右に側室、後室の東に側室及び廁室が設けられていた。畫像は墓門、前室、中室、後室などの柱、梁、桁、壁に隙間もないほど刻まれていた。墓門の東側と西側の立柱にそれぞれ三山形式の山嶽に坐す東王父と西王母の像(圖72 (2))が刻まれていたのも注目されるが、いま中室より奥の畫像に注目することにする。

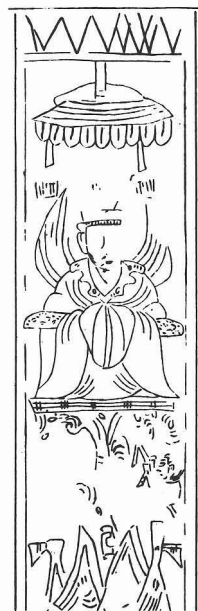




(1) 墓室平面及び畫像石位置圖

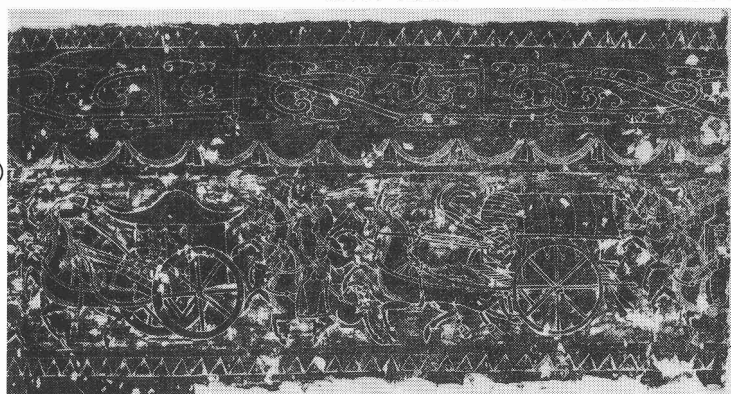


(2) 墓門西柱畫像石  
(拓本) 西王母



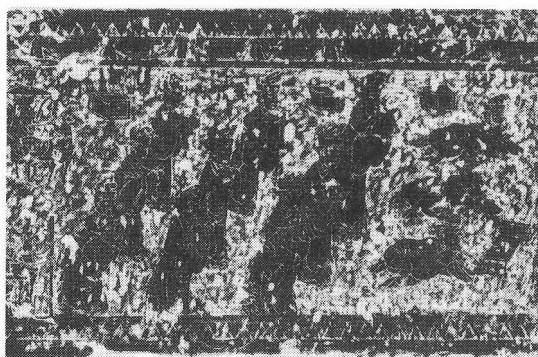
(3) 中室中心柱東面  
上部(模本)東王父

圖72 沂南畫像石墓 (一)



(4) 中室北壁橫額東段 出行圖(部分)(拓本)

(5) 中室南壁橫額西段 迎謁圖(拓本)



(6) 中室東壁橫額 百戲圖 戲車(拓本)





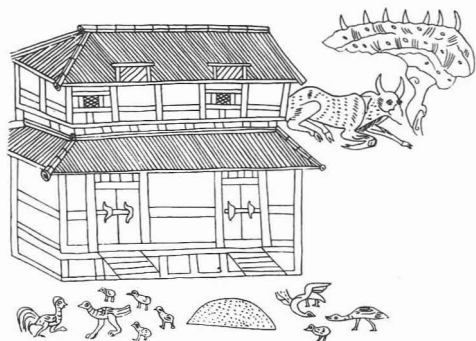
中室は南北二・三六m、東西三・八一m、高さ三・一二mで、室の中央の八角柱、四周の壁とその上の横額、そして三角持送式天井などに畫像があった。八角柱には各面に多くの神怪、例えば南面と北面には頭光をつけた佛とおぼしき神や神獸などが線刻されていたが、顔ぶれからみて東面と西面の最上部の樹狀山嶽に坐す東王父(圖72 (3))と西王母の像を中心とした配置といえる。また周壁の上部の横額(圖72 (1))には東壁に樂舞百戲圖、北壁・西壁に車馬出行圖、南壁に迎謁圖と庖廚圖が、それぞれ帶狀に描かれていた。この上横額の畫像をどのように解するかといえば、北壁東段の車馬行列から始まって西壁、南壁を経て東壁の樂舞百戲圖で終わるとみるのが妥當であろう。四川成都の昭覺寺畫像磚墓前室(圖34)、羊子山一號墓中室(圖35、36)のやはり長い車馬行列の先に宴樂圖、庖廚圖のあったのが思い起こされよう。即ち、北壁は東段と西段に畫面が分かれるが、東段(圖72 (1) 位置圖番號39 以下同じ)の東端から左向きに出發した車馬行列(圖72 (4))は西端の雙闕の描かれた亭で笏を持った門吏に迎えられていったん止まり、また西段(38)の東端で門吏に見送られた行列はずっととどまることなく西壁(37)に進み、その南端まで進んで盾と簪を持った門吏に迎えらる。ここが出行の終點であり、次の南壁西段(36)にみられる如く、門吏の背後には三人ずつ四列に並んで迎接する笏を持った人物群(圖72 (5))が配され、最前列の三人は案を前に置いて跪拜している。そして奥に進むと雙闕が置かれて盾を持った門吏があり、その前には繋駕を解いた馬が繋がれ、その後には日字形の大きな庭院(圖73 (2))が控えている。庭院の前方の中庭には井戸があり、後方の中庭には長條形の案、鼎、壺、尊などが置かれている。そしてその更に奥に當たる南壁東段(35)には、多くの人物が豚や牛を屠殺したり魚を料理したり煮炊きしたりする庖廚の光景が繰り広げられ、東端には倉房(圖73 (1))が配されてその前には穀物が山と積まれている。そして最後に東壁(34)の樂舞百戲の場面がくるのである。飛劍跳丸・七盤舞・戴竿の戲、建鼓・編鐘・編磬・排簫・琴・笙などの樂隊、走索、魚龍の戲、戲車(圖72 (6))、騎術など、まさに樂舞百戲のオンパレードである。

これらは要するに墓の主人公が出行して仙界に至り、そこで歓迎を受けてご馳走を食べたり樂舞百戲を楽しんだりする

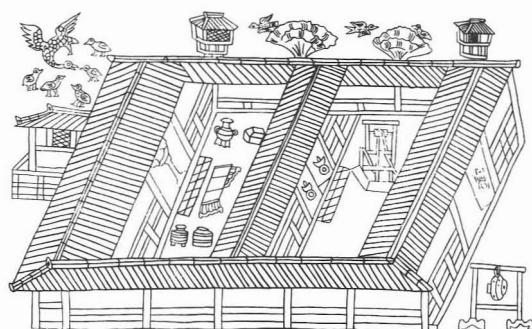
死後のことを描くであろう。車馬行列には先導の斧車、輶車、輜車、大車など合計十三輛描かれているが、北壁西段の四維の附いた輶車に男主人が乗り、北壁東段の婦人用の輶車(圖72 (4))に女主人が乗るのである。そして雙闕の前で門吏の出迎えを受けるのはこれまで通りであるが、車馬行列において縣令以上が導車に使う斧車が先導することにも示されるように、ここでは身分の違いを反映して更に十二人の文官が丁重に迎接している(圖72 (5))。雙闕より内側が仙界で、日字形庭院(圖73 (2))は中庭に井戸がある他、案、尊、壺など酒食の道具が散らばっており、ここで生活を送るのである。そしてその生活の具體的有り様として奥の南壁東段に庖廚圖が配されて、盛大な宴會の準備が今まさに進行中であり、大きな倉房(圖73 (1))も描かれて食糧には何の心配もなく、更に東壁に舞樂百戲圖(圖72 (6))が配されて、これらを樂しみながら毎日を送るというわけである。

この周壁上横額の畫像に室の中央八角柱の西王母・東王父像(圖72 (3))を加えるならば、祠堂畫像を構成したモチーフは殆ど揃っていると言ってよいであろう。出行圖、雙闕圖、樓閣圖、庖廚圖、舞樂圖、西王母・東王父圖などである。この中室には更に北壁の左右と中央に三石描くのを除き、周壁に各壁左右二石ずつ、一石上下二場面ずつ、「蒼頡と沮誦」「蘭相如と孟賁」「荊軻と秦王」など合計十八面の歴史故事の圖が描かれているが、これも上記圖の不變的要素に對する可變的要素として祠堂にあったものである。但し祠堂の拜禮圖にみた墓の主人公の像がみられないが、主人公は中室の奥に設けられた後室に住んでいるのである。

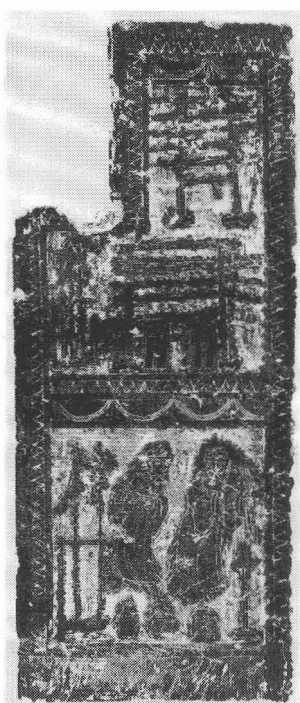
後室は東西二室あり、夫婦合葬墓の形式をなしていた。畫像は二室を分ける隔牆の前後二箇所両面刻され、生活するのに必要な身の廻りの道具が侍者とともに描かれていた。しかも畫像の内容は男女の區別がはっきりとなされ、西側の男性の室の前方の圖(圖73 (3))には武器架が描かれて、劍、戟、矛、盾などが掛けられ、二人の侍者も男性で方形盒を持ったり便面を持ったりしていた。一方東側の女性の室の前方の圖(圖73 (4))には几、鏡臺、烘籠、奩(化粧箱)など女性の日用品が描かれ、三人の侍女は鏡臺、奩などを持っていた。更に男女二室の後方の圖には、上段に鉞や鎚狀の物を持つ



(1) 中室南壁橫額東段 倉房 (模本)



(2) 中室南壁橫額西段 庭院 (模本)



(3) 後室隔牆前方西面 (拓本)



(4) 後室隔牆前方東面 (拓本)



(5) 後室過樑東面 (部分) (拓本)

圖73 沂南畫像石墓 (二)

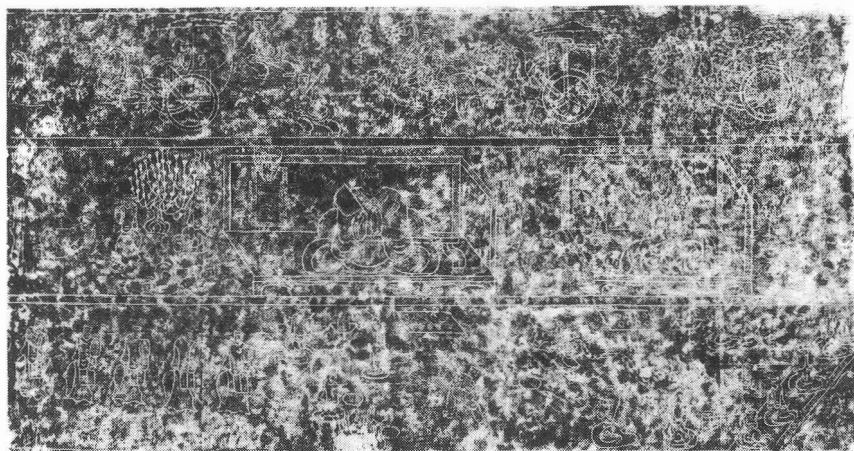


圖74 安邱縣王封村漢墓出土畫像石（拓本） 高84cm

た方相氏のような神怪を描き、下段にはそれぞれ几と衣桁、廁と傍らで掃除をする女性が描かれていた。男女が生活するに必要なものが一應揃っており、墓の主人公夫婦自身は描かれなかったけれども、確かにこの室に住んでいたのである。實際、この後室の東には側室（圖72（1））があり最も奥には廁室も設置されていた。しかしこの後室が單なる地下の空間でないことは、中室の昇仙圖的内容に加えて、隔牆の中間に設けられた過樑兩面の帶狀畫像をみれば明かである。そこには綬を銜えた鳳凰、人面鳥身の怪神（圖73（5））、有翼の虎・鹿など天上世界にいる所謂瑞獸の類がたくさん描かれていたからである。後室にはこのような瑞獸がよく描かれ、青山泉白集漢墓の後室奥壁でも二羽の鳳凰が頸を交差させたり、魚を啄んだりする様が描かれ、瑞氣に満ちていた。ここは仙界なのである。そしてその仙界がどこかといえば、中室の八角柱に西王母と東王父が中軸を占めていたように西王母と東王父の世界、もしくはそれに近い仙界と考えるのが妥當であろう。

このように地下の墓室にも仙界が作られて、墓の主人公がそこに住んでおり、その構成は昇仙と昇仙後の姿を描く點で祠堂畫像と何等變わらないのである。拜禮圖はともかく、舞樂觀賞圖などの祠堂後壁畫像は墓の主人公が地下の仙界に住んでいる姿をそのまま描いたともいえる。實際、沂南畫像石墓などでは墓の主人公は描かれなかったが、上述の蒼山畫像石墓には前室東壁に墓の女主人公の像（圖70（2））が描かれ、また一九五四年、山東安邱縣王

封村漢墓の槨室北壁で發見された畫像石<sup>(84)</sup>にも、墓の主人公の姿が描かれていた。王封村の畫像石(圖74)では、後述するように右側に「此上人馬、皆上食于天倉」と題刻があったが、上層に車馬行列を描いて昇仙出行の光景を示し、中層以下には屏風を背に榻に坐した墓の主人公夫婦が、前で繰り廣げられる舞樂雜技を觀賞する姿を描いて、左側には夫婦に跪拜する人物や枝の曲がりくねった聖樹が配されていた。勿論昇仙後の姿であり、祠堂の後壁畫像そのままといってよからう。

この祠堂と墓室の雙方にみられる地下と仙界の二重構造、これが漢代畫像石墓の特色である。一方で死者の靈魂が墳墓に住み身近な存在として供奉されたいという願望、一方で仙界に昇仙して永遠の不死を獲得したいという願望が、二つながら共存しているのである。これは靈魂が地下の墓室に住み祠堂において子孫の供饌を受けたとしても、地下に不死のための組織が未だ十分でないうえに子孫の繁榮に限りがある以上、永遠性が保證されないため、その永遠性を保證するべく不死の仙界への昇仙が演出されたと考えられよう。またこれを時間的にみるならば、先ず死者の誰しもが地下に葬られて一旦はそこに住むのであり、仙界への昇仙が考えられたとしてもその次のことにならう。事實、先にみた武氏祠左石室屋頂畫像石(圖53) (3)の昇仙圖では、死者の靈魂を乗せた馬車を運ぶ運氣は墳墓から立ち上り、靈魂は迎えの羽人を待つて昇仙していた。最終的な目標は昇仙による永遠の不死なのである。いずれにしても漢代の墳墓裝飾は二つの願望をかなえるべく演出されており、地下の住處と昇仙の目的地である仙界が墳墓においてオーバーラップして表現されたため、畫像石における紛らわしい表現を生んだのである。

また昇仙への願望が如何に強かったかは祠堂や墓室の銘に畫かれた「太倉に食まんことを」という呪文に似た語句にも窺える。これまでも度々紹介したが、現在までに發見されているこの語句の例は次の通りである。この他にも、河北望都一、二號漢墓壁畫や内蒙古和林格爾漢墓壁畫<sup>(85)</sup>にも例がみられるが、ここでは畫像石に限定することにする。

- 一 「其當飲食、就夫(天)倉、飲江海。(學者高遷宜印綬、治生日進錢萬倍)」(題記末尾)

山東蒼山城前村畫像石墓(元嘉元年 一五一)

二 「此上人馬、皆食大倉」(題記末尾) 山東東阿縣鄉他君石祠堂石柱(永興二年 一五四)(圖68)

三 「(陽遂富貴) 此中人馬、皆食太倉、飲其江海」 山東嘉祥宋山三號墓出土

第二八石畫像石(永壽三年 一五七)

四 「此園中車馬□□龍蛇馬牛、皆食大倉」 山東曲阜徐家村畫像石 (延熹元年 一五八)

五 「上人馬皆食大倉……律令……(・祿慕高、榮壽四敬、要帶朱紫、車……)」(題記末尾)

安徽宿縣褚蘭二號畫像石墓祠堂(建寧四年 一七一)

六 「此上人馬、皆上食於天倉」 山東安邱縣王封村畫像石(圖74)

七 「此人馬、食大山倉」 山東肥城縣北大留畫像石

八 「此上人馬、皆食大倉」 山東臨沂縣漢畫像石

九 「此上人馬、皆食大倉、急如律令」 河南白沙鎮出土漢畫像石

かくの如く、この語句は後漢後期の墳墓にみられ、題記の末尾に書かれることもあったが、多くの場合この語句だけが書かれたように、獨立した一種の慣用表現とみなされよう。「太倉」「大倉」「天倉」「大山倉」などであるが、上記の用例からみて同じものを指しており、「太倉」に統一することが出来るよう。先に取り上げた四川簡陽縣鬼頭山畫像石棺の建物の榜題にあった「大蒼」(圖28 (1))も、勿論同じものを指している筈である。また「此の上の人馬」、或いは「此の中の人馬」とあるが、この「人馬」はそこに描かれた人と馬を指していよう。というのは上の例をみてわかる通り、この語句は必ず畫像石や壁畫の傍らに書かれて、常に畫像の存在を前提としているからである。従って例えば(六)の安邱王封村畫像石(圖74)の場合、「人馬」の「馬」に該當するのは、圖の上段に描かれた出行圖の輅車、軒車、駟車を引く馬、そして二騎吏の馬であろう。また「人」は、その次に「皆な上りて」とあるように上段の馬車や馬に乗って出行する墓の主人公の一行を指していよう。(四)の徐家村畫像石では「車馬□□龍蛇馬牛」とあるが、車馬の他に龍蛇馬牛がそこに描か

れていたのである。

では、この人や馬が「太倉に食む」とはどのようなことであろうか。太倉とは、先に簡陽縣鬼頭山畫像石棺の榜題と關連し觸れた如く、政府の太倉、天上世界の星辰の太倉（天倉）を指すこともあったが、ここでは鬼頭山の「大蒼」の場合と同じく仙界の太倉を指しているよう。それが證據に、安邱王封村畫像石（圖74）の場合、先んじて中段には曲がりくねった聖樹の生える崑崙山に既に昇仙した墓主人夫婦が描かれており、その同じ畫面の右側に「此の上の人馬、皆な上りて天倉に食まんことを」と書かれていた。つまり中段には上の車馬行列によって仙界に「上った」「人馬」が既に「食ん」でいるところが描かれており、「天倉」は當然この仙界になければならないからである。従って「太倉に食む」とは昇仙することと同義といえ、仙界に昇仙してその太倉の恩恵に與り、死後の糧食が永遠に盡きることがないようにと祈願したのである。（一）と（三）の「（その）江海に飲む」は、飲料水を含めて祈願したのである。實際、これまで取り上げた畫像石墓の昇仙表現をみても、仙界には必ずこの太倉もしくは糧食に關連したことが描かれていた。簡陽縣鬼頭山の二號、三號石棺の「大蒼」畫像（圖28（4）、29（1））を始めとして、郫縣三號、四號石棺（圖25（3））にも左側に太倉が描かれており、沂南畫像石墓の中室南壁横額にも庖厨圖の隣に立派な太倉（圖73（1））が描かれていた。その他、庖厨圖、宴樂圖など直接飲食に關係したことは無論のこと、狩獵圖や漁撈圖もこの太倉、糧食に關わることである。古代の人々の抱いた昇仙のイメージとは、まず糧食に心配のないことであり、そこで昇仙願望をこのような語句に託して表したのである。

## おわりに

さて、戰國から前漢中期に至る時期、湖南省の長沙を中心に、山東省の臨沂、河南省の洛陽などで、帛畫、木棺漆畫、壁畫に描かれた昇仙圖が、その後どのような経過を辿ったか、漢代の各地の畫像石を中心に探ってきたが、それによって

多くの事實が分かってきた。前漢、後漢時代を通じて昇仙圖は、戰國以來の一つのはっきりした系譜のもとに、墳墓裝飾における最も主要なテーマの一つとして引き續き制作されていたのである。

まず、もともと戰國時代に楚の地方で生まれたと思われる昇仙圖は、前漢時代には、地元長沙で帛畫や木棺に描かれるとともに、戰國の楚の領土擴張とともに楚文化の影響を受けた江蘇北部、山東南部の一帯、そして河南の南陽一帯で引き續き制作された。特に山東南部の地域では、臨沂金雀山九號漢墓で前漢中期の帛畫昇仙圖が発見されているが、更に前漢初期に遡って畫像石棺に昇仙圖が描かれているのが判明したのは貴重である。即ち臨沂慶雲山二號漢墓の畫像石棺であるが、これは長沙の地方ではこれまで全くみられなかった畫像石という形式をとったうえに、これまで帛畫、木棺漆畫にみられなかったモチーフが數多く描かれていた。スペード形の長青樹も環の形をした壁も、同時期の長沙の畫像、砂子塘墓外棺漆畫や馬王堆一號漢墓朱地彩繪棺漆畫、T字形帛畫に全くなかったモチーフというわけではないけれども、異なった使われ方をして、やはり昇仙の行き着く先としての崑崙山の世界を象徴的に示していた。つまりそれらが樓閣の傍らに置かれることによって、その樓閣が崑崙山の樓閣であることが一目でわかるといふ方式においてである。慶雲山二號墓石棺はそうしたモチーフを石棺の内壁に描くことによって、その石棺内部が崑崙山の世界であることを示すとともに、永遠の不死を獲得する昇仙への祈願を表していた。恐らく畫像石という形式で昇仙圖を描くことを創始したと同じように、楚の昇仙圖そのままでない新しい昇仙圖が發明されたのである。前漢中期に、同じ臨沂の金雀山九號墓で長沙の傳統が色濃く感じられる帛畫昇仙圖が出現した背景には、またそれとは異なる畫像石棺の昇仙圖があり、三つの山嶽の示す崑崙山の麓に描かれた樓閣のモチーフも畫像石棺から影響を受けていたのである。山東鄆城縣蘇莊石椁墓の石棺、臨沂金雀山周氏墓群十四號漢墓で發見された漆棺にも、雙闕とともに樓閣が描かれていた。雙闕はまた馬王堆一、三號漢墓出土T字形帛畫の上方に描かれた崑崙山の門の系譜上にあるものであろう。

そして金雀山九號墓帛畫の後、前漢末の昇仙圖の實態を示したのが江蘇沛縣棲山漢墓畫像石棺であり、山東微山縣周邊



の畫像石棺であった。特に棲山漢墓畫像石棺發見の意義は大きく、この畫像石棺は慶雲山二號墓石棺、金雀山帛畫の昇仙圖の系譜を受け繼ぐとともに、これ以後の後漢時代の畫像石における昇仙圖を殆ど豫告するべき轉換點に位置を占めていた。外壁に描かれた崑崙山入口を守護する虎形の神獸は、金雀山、馬王堆帛畫を経て更に砂子塘墓外棺漆畫の崑崙山の麓に配された神獸にまで遡り、長青樹、壁は慶雲山石棺に由來する。しかし何よりも注目すべき點は西王母の登場であった。シンボルの玉勝をつけた西王母が樓閣内に、しかも金雀山帛畫と同じく長青樹が屋根に生えた樓閣内にはっきりと描かれていたのである。金雀山帛畫では崑崙山は描かれてもその女神西王母は未だ登場しなかったが、ここに昇仙圖は西王母という強力な主役を得て裝いを一新したのである。西王母は、これに先立つ前漢中期の洛陽卜千秋墓壁畫の昇仙圖では、西王母自身と思われる人物と、周りに彼女の眷屬たちが描かれていたけれども、未だこの人物を西王母と斷定するには至らなかった。この棲山漢墓石棺畫像には西王母がはっきり描かれており、しかも昇仙のための出行圖、西王母の世界の入口を示す雙闕圖、六博、舞樂、庖廚などの宴樂の類の圖と、後の昇仙圖の道具立ては拜禮圖を除き全て揃っていたのである。また昇仙の乗り物として龍などが使われず馬車が使われているのは、既に神話の時代が終わり現實的な神仙の時代に入ったことを告げ、漢代文化が前漢末期に大きな變化のあったことをはっきりと示していたのである。

この他、前漢時代の昇仙圖は河南省南部の南陽一帯で制作され、ここでは畫像石棺ではなく畫像石墓や畫像磚墓において表された。早期の畫像石墓である南陽趙寨磚瓦廠漢墓や唐河縣石灰窰村漢墓では、墓門に長青樹を伴った樓閣、鋪首が描かれ、墓の主人公もその樓閣内に描かれることもあったが、稍や後の南陽楊官寺畫像石墓では墓門のみならず棺の納まった主室の入口にも描かれ、いずれもその内部が仙界であることを示していた。これらの畫像石墓は王莽期の天鳳五年（後一八）の紀年銘を有する唐河新店の馮孺人畫像石墓より古い墓葬形式と畫像樣式を示し、前漢後期の畫像石墓であることは確實である。また江蘇沛縣棲山漢墓石棺と同じように昇仙が經過を追って描かれたのは新野樊集の畫像磚墓で、その二八號墓や三七號墓では墓門門楣や柱に出行、雙闕及び門吏（亭長）の迎謁、西王母自身などが描かれた。また沛縣棲山漢

墓と同じく雙闕内の西王母の世界に、聖樹とその上の鳥を射るモチーフが描かれていたのも見逃せないところである。これらの昇仙圖も楚の文化の影響を受けて發展的に制作されたものと思われる。また鄭州、洛陽一帯でも昇仙を表す畫像磚が盛んに制作され、特有の空心磚に小さなスタンプを押して畫像を構成した。長青樹や鳳凰の止まる樓閣、雙闕及び府門などが表され、抽象的なものが多かったけれども西王母も度々描かれ、前漢末期の資料とはいえ前漢中期の洛陽卜千秋墓壁畫の昇仙圖を裏附けた。

そして後漢時代に入ると、畫像石、畫像磚はいよいよその數量を増して、二世紀に全盛期を迎えることになるが、昇仙は依然としてその最も主要なテーマであった。これまで畫像石、畫像磚のテーマとしては神話傳説、歴史故事、辟邪、祥瑞などが強調され、昇仙は餘り強調されなかったけれども、その原因はこのテーマが一つの畫像石や畫像磚だけで表現されずに、幾つかの畫像石、畫像磚が組合わさって表現されたためと思われる。畫像石棺、畫像石墓、畫像磚墓をもとの形に復原構成し直して始めて昇仙のテーマが明かになるのである。

後漢時代において、昇仙のテーマが最も明確に表現されたのは四川の畫像石棺、畫像磚墓である。畫像石棺は、後漢に入ると山東南部や江蘇北部では大型の畫像石墓が流行して下火になったけれども、代わって四川で流行するようになり、郫縣、彭山、新津、榮經、瀘州、簡陽、宜賓などの崖墓や磚室墓で盛んに制作された。この地方には西王母信仰が根強くあり、獨特の龍虎座に坐った西王母が玉兔、三足鳥、九尾狐、蟾蜍の眷屬とともに石棺の頭部側板や左右側板に描かれた。そして他の側板には出行圖、雙闕迎謁圖、宴樂圖、六博遊戲圖、日月圖などが表され、それらが組合わさって、前漢末期の山東南部、江蘇北部の畫像石棺と同じように、西王母の世界への昇仙が表されたのである。なかでも簡陽縣鬼頭山の崖墓で發見された畫像石棺は貴重で、四神、日月、伏羲・女媧などとともに雙闕、倉が描かれ、雙闕には「天門」、倉には「大倉（太倉）」と榜題されていた。昇仙の先としての西王母の世界の入口が天門、その世界の盡きることのない倉が太倉と呼ばれたのである。

また畫像磚墓も畫像石棺と同じように昇仙圖が幾つもの畫像磚を使って表された。四川の畫像磚墓は新繁清白郷、成都羊子山、成都昭覺寺などが知られているが、これらの墓では一樣に日神・月神磚を左右に伴った三幅對の西王母畫像磚が発見されている。この畫像磚は從來單なる西王母圖としてしか解釋されてこなかったけれども、實は昇仙圖であり、右下に描かれた墓主人夫婦が龍虎座に坐した西王母のところに昇仙し、その眷屬である玉兔、蟾蜍、三足鳥、大行伯などの歡迎を受ける光景が表されているのである。新繁や昭覺寺などの畫像磚墓ではこの三幅對を墓室後壁の高い位置にはめ込み、その前方の墓道や前室の左右壁には多くの車騎による出行、雙闕迎謁、拜禮、舞樂百戲、宴樂、弋射・收穫、鹽場などの畫像磚をはめ込んでいた。従って前に昇仙の經過を順に示して、奥に目的の西王母を配し、全體として昇仙圖を構成したのである。四川の畫像磚ではとりわけ動きに富んだ車騎出行畫像磚、生活の光景を寫實的に描いた弋射・收穫、鹽場圖畫像磚などが有名であるが、これらはみな墓の主人公の昇仙に關わるものであり、雙闕圖の内側に配されて、西王母の世界に昇仙した後の生活の光景を表していたのである。

次に陝北畫像石は、陝西省北部の無定河流域の綏德、米脂といった地域の畫像石を指すが、この地域は當時邊境にあって匈奴との最前線である西河郡に屬したため、制作時期が一世紀末から二世紀前半に限定され、南匈奴の反撃を受けた永和五年（一四〇）より後は、山西離石に郡治が徙されて主にそこで制作された。邊境の前線であるため、その畫像石は獨自の要素が認められると同時に、他の本場の四川、南陽、山東などの影響も顯著である。この地方の畫像石は主に墓門に表現され、門楣、門框、門扉などに一面に畫像が刻された。その畫像の表現には一定の形式があり、左右の門框には下にスピード形の長青樹に似た植物と門衛、上に樹狀の山嶽に坐す西王母が表され、上の門楣には長い帶狀畫面を使って天上世界の祥瑞や日月、そして昇仙圖が表された。綏德四十鋪鎮出土の門楣畫像石には一つの屋内の右側に西王母、左側に昇仙した墓の主人公が西王母の家來の拜禮を受ける拜禮圖を描き、四川榮經畫像石棺と似て昇仙を表していた。また綏德劉家溝漢墓の門楣畫像石にも昇仙圖が表され、墓の主人公が三羽の鳥の引く雲車に乗って西王母のところへ向かう有り様が描かれ、山東嘉祥縣嘉

祥村出土畫像石と圖柄が似ていた。また郡治の徙った山西離石の馬茂莊では、一九一九年發掘の左表墓（和平元年銘 一五〇）に續き、近年二、三號畫像石墓が發掘され、そこには昇仙の光景が壯大に表現されていた。この昇仙圖では西王母のほかに新たに東王父が登場したのが注目され、樹狀山嶽に坐す西王母、東王父を目指し、昇仙する人物が雲車に乗って空中を驅ける様が描かれた。後漢後期、四川、山東などの昇仙圖と呼應して、昇仙の先として東王父が出現したのである。

それでは前漢時代から昇仙圖が表された山東や江蘇北部の状況はどうであったかというところ、この地方は既に畫像石棺は下火になり替わって畫像石墓が營まれるようになったが、それと同時に地上の墳丘のすぐ前に石造の祠堂が設置されるようになり、昇仙圖はこの地上の祠堂と地下の墓室の雙方に表された。まず祠堂は山東肥城の孝堂山祠堂や山東嘉祥の武氏祠が古來有名であるが、江蘇徐州青山泉白集畫像石墓、銅山縣洪樓畫像石墓、安徽宿縣褚蘭畫像石墓などで祠堂と墓室の雙方の畫像石が發見されたうえに、嘉祥宋山や嘉祥五老洼などでは、資材として利用した六朝墓から祠堂畫像石がまとまって出土し、資料の大幅な増大をみた。それらによると、祠堂は東壁、西壁、後壁の三壁から構成され、祠堂の形式が完成した武氏祠、宋山小祠堂などでは、原則として後壁に拜禮圖、東壁上層に東王父、西壁上層に西王母が表されて、三壁の下部に車騎出行圖、庖廚圖が表された。車騎出行圖によって昇仙に出發した墓の主人公は、拜禮圖の樓閣の傍らの枝の曲がりくねった聖樹の下で馬車を下り、樓閣の中に入って西王母もしくは東王父の家來の拜禮を受け、庖廚で用意された御馳走に舌鼓を打つという仕組みである。祠堂畫像の最も中心をなす後壁拜禮圖の樓閣が、西王母もしくは東王父のすむ仙界の建物であることは、樓閣の屋根には鳳凰、羽人などを始めとして仙界の神獸や神人が止まっているうえに、樓閣の傍らの聖樹が、前漢末期の沛縣棲山漢墓畫像石棺、南陽の新野縣樊集畫像磚以來、その樹上の鳥を弓で射るモチーフとともに、一貫して西王母の世界内のこととして描かれてきたことによってわかるのである。この聖樹については弓の名手である羿が九日を射落としたという神話と關連した扶桑説が根強くあるけれども、畫像石、畫像磚を系譜を追いながらみる限り、西王母の世界に生える樹木である。ところで、祠堂の畫像石が昇仙圖を表しているとして、ここに生ずる問題は拜禮圖の樓閣と西王母との位置關係である。

墓の主人公は西王母の世界に昇仙して樓閣内で拜禮を受けるが、そこには西王母の家来だけが登場して西王母自身は登場せず、西王母は西壁の最も高い所に君臨するように表されていた。これはどのように説明されるかというと、西王母の住む崑崙山の構造と関係があると思われる。『淮南子』墜形訓によると、天帝の下都にあてられた崑崙山は樊桐、涼風、懸圃の三層から成り、その中層の涼風に達すれば不死を獲得することが出来、頂の懸圃に達すれば靈の力を獲得することが出来る。これを祠堂の昇仙圖に適用すれば、西壁の西王母は當然頂の懸圃に在るとして、後壁の拜禮圖に描かれた光景は中層の涼風での光景ということになる。というのは、昇仙とは永遠の不死を獲得することであるが、『淮南子』の記事に従えば、その不死は中層の涼風に至れば獲得することが出来、必ずしも西王母のいる頂の懸圃にまで上る必要がないからである。ただ西王母が登場しないだけでなく、拜禮圖が祠堂において西王母より常に低い位置に描かれるのもそのためと思われるのである。但し昇仙した者は西王母に拜謁しないのかというところではなく、例えば祠堂畫像石において例えばアドルフ・フィッシャー舊藏畫像石や嘉祥縣嘉祥村出土畫像石では、後壁の拜禮圖の他に、更に西壁には西王母差し回しの三羽の鳥（三足鳥）が引き羽人と玉兔が誘導する雲車に乗って、墓の主人公が西王母の所へ向かう光景が表されていた。これは西王母の神格の絶對化に伴う現象で、四川成都の昭覺寺畫像磚墓などでも、前室の出行、拜禮、宴樂などを描いた昇仙圖とは別個に、後室奥壁の高い位置に日月とともに西王母を描いて、その傍らに歡迎を受ける墓主人夫婦が描かれていた。昇仙が二重に表わされているのである。この構造は宋山四號小祠堂をみる限り、東王父の場合も同様である。

いずれにしても、ここに西王母に加えて東王父も昇仙の先になっているのは注目すべきであるが、蔣英炬氏の復原した武氏祠左右室屋頂の畫像石では、墓の主人公夫婦が迎える羽人などとともに二輛の馬車に乗って空中を駆け、上方の西王母のもとへは女性性が、東王父のもとへは男性性が昇仙する光景が表されていた。先の山西離石馬茂莊二、三號畫像石墓の昇仙圖もこれらの影響を受けていたのである。但し東壁に東王父が登場するようになるのは、紀年のある祠堂では元嘉元年（一五一）頃の武梁祠が最初で、それ以前の一世紀末頃の孝堂山祠堂ではまだ東王父は登場せず、東壁上層には代わりに

風伯が表されていた。後漢後期に至って始めて西王母から派生して東王父が誕生し、その性格は文獻によっては西王母とともに崑崙山に住むなど必ずしも明瞭ではないけれども、西王母の對の男性神と考えられたのである。その他、祠堂畫像のヴァリエーションは幾つかあり、復原を試みた山東微山縣兩城の祠堂では、後壁に拜禮圖の代わりに舞樂觀賞圖、東壁に聖樹圖、西壁に西王母圖を配したものの、また東壁に聖樹圖を配して西壁には水榭圖を配したのもあった。

このように祠堂畫像石は昇仙を内容としているが、從來何故これが十分に認識されなかったかといえ幾つかの理由があった。一つは拜禮圖において拜禮を受ける人物が墓の主人公ではなく「齊王」とみなされたためである。古來有名な嘉祥焦城村の祠堂畫像石にはこの人物の傍らに「此齊王也」と榜題が畫かれており、これを畢沅、阮元の『山左金石志』が「此齊王也」と讀んで以來、異口同音に齊王の故事を描いたものとしてきたのである。これは信立祥氏もいうように「此齊王也」と讀むのが妥當であろう。これまでの綏德四十鋪鎮出土門楣畫像石、或いは拜禮を受ける人物に「故太守」と榜題のあった嘉祥五老洼出土畫像石などを勘案しても、やはり墓の主人公以外の何者でもないのである。

またいま一つは祠堂に描かれた車馬行列圖について、全て一様に墓の主人公の生前の出行の有り様を描いたものとみなす考え方が有力であったためである。確かに祠堂には武氏祠前石室の畫像石にもみられるように、「君爲市掾時」「君爲都□時」「爲督郵時」などと榜題に畫かれた車馬行列圖があり、生前の出行の有り様が描かれたことは事實である。しかし祠堂の車馬行列圖には二様あることも事實で、三壁の下層、即ち拜禮圖の下に描かれた車馬行列圖はあくまで墓の主人公の昇仙のための出行を表して、その他の上層の壁に描かれた車馬行列圖は生前の出行を表していたのである。これは孝堂山祠堂畫像石、武氏祠前石室畫像石に照らしても明かなことで、孝堂山では下層に描かれた車馬行列圖は、四維、四屏の附いた最も立派な馬車に「二千石」の榜題があつて、二千石の墓の主人公の乗る馬車が主車となつて昇仙出行するところを表している。これに對して上層の三壁通じて描かれた大車馬行列圖は、後方の四頭立て馬車の榜題に「大王車」とあるように、自分の主人である諸侯王の乗る「大王車」を主車として墓の主人公が隨從として従つた生前の車馬行列を表していたのである。これは武

氏祠前石室も同様で、下層に自分の馬車「君車」を主車とする行列、上層には前方の車に「此丞相車」とあり、後方の車に「此君車馬」とあるように、主人の「丞相」の車馬行列に生前従った時の光景を表していたのである。そして祠堂の出行圖としてはどちらが不可缺少といえ、下層の昇仙のための出行圖の方で、事實武梁祠や宋山小祠堂では下層の車馬行列のみ描いて上層の車馬行列は省略されていたのである。これは前漢の畫像石棺以來の出行圖に照らしても明かで、上層の生前の出行圖は、後世になればなるほど盛んになる歴史故事の表現などとともに、墳墓裝飾における現世的要素とみるべきである。

ところで、山東や江蘇北部の地上の祠堂にはこのように昇仙圖が表現されたが、この地方では地下の墓室にも、これまで四川の畫像磚墓や陝北の畫像石墓でみきたと同じく昇仙圖が表された。祠堂と墓室の雙方の畫像石が発見された徐州青山泉白集漢墓、銅山縣洪樓漢墓でも、墓室の後室に至る入口には鳳凰のとまる樓閣内で歡談したり對飲したり仙界で生活する光景が表されていた。また最も代表的な大型畫像石墓である沂南畫像石墓をみても、中室の周壁の横額には、北壁の車馬行列圖から始まって、西壁の雙闕門吏圖、南壁の迎謁圖、庭院（樓閣）圖、庖廚圖、東壁の舞樂百戲圖、と昇仙の經過が順を追ってぐるりと帶狀に表されていたのである。これは四川の昭覺寺畫像磚墓、羊子山一號墓などと構成が似ており、更にこれら畫像磚墓の墓室奥壁に昇仙の先の西王母が日神・月神を伴って表されていたのと同様に、中室の中央の八角柱に西王母、東王父が表されていたのである。そして棺の納まった後室には墓主人自身は表されなかったけれども、生活に必要な日用品や侍者が男女別々に畫像石に描かれるとともに、鳳凰などの天上界の瑞獸が表され、墓主人夫婦がまさにその仙界にいるかの如く表されていたのである。

以上みてきた如く、漢代の畫像石や畫像磚は、前漢、後漢を通じて昇仙圖が最も主要なテーマとして制作され續けてきたことがわかった。では、この昇仙圖を戰國から前漢初期に制作された長沙の帛畫昇仙圖などと全く同様に、死後の靈魂の不死の聖域である崑崙山への昇仙、或いはそこに住む西王母の世界への昇仙を純粹に表したものと解釋出来るであろうか。答はそんなに簡單ではないようである。というのは、畫像石の昇仙圖はその成立の當初から、即ち前漢初期に制作された山東

臨沂慶雲山二號墓の畫像石棺から、その内壁に崑崙山の門や樓閣が描かれて恰も石棺内部が崑崙山の世界であるかのように表現され、しかも石棺内部への入口がその門衛とともに内壁に描かれて嚴重に守られていた。これは西王母が登場するようになった前漢末期の沛縣棲山漢墓石棺も同様で、更にこちらは外壁にも崑崙山を守護する神獸や鋪首が描かれて、益々石棺内部が崑崙山の西王母の世界である趣を強め、墓の主人公の靈魂が石棺内部にいと同時に、西王母の世界であるかのような演出がなされていた。これは長沙砂子塘漢墓の外棺漆畫やT字形帛畫を同出した長沙馬王堆一號漢墓の朱地彩繪棺漆畫の畫像にもみられなかった性格である。砂子塘墓や馬王堆漢墓の木棺漆畫は帛畫と同じく大地の中央に位置する不死の聖域である崑崙山への昇仙を表していただけで、墓の主人公の靈魂がそこに住んでいるかのような印象はなかった。畫像石のこの性格は後漢に入っても一貫して保持され、先にみたように昇仙が表されて仙界である筈の墓室内部は同時に墓の主人公の住處であるかのように演出されていた。つまり死者の靈魂が墓室内部に仙界が作られてそこに住んでいるのである。事實、陝北の畫像石墓では墓門に昇仙圖が表される一方、その銘には楊孟元墓の場合は「楊君孟元の舍」、牛文明墓の場合は「牛文明の千萬歳の室」とか記され、他に「吉宅」「室宅」「廬舍」という言葉が使われていた。これは明らかに靈魂がその墓室に住んでいることを物語っていたのである。

この畫像石墓における二重の構造を更にあからさまに表明したのが祠堂である。祠堂はもともと皇帝陵における陵寢に對應するもので、季節ごとに行われる上墓などの墓祭のために營まれたものである。皇帝陵の場合には、祖先を祭る儀式が宗廟とともに陵の寢殿でも行われたが、次第に上陵の禮など墓祭が盛んになって、遂に後漢時代には宗廟の祭を凌駕するようになった。これが陵寢制度で、秦の始皇帝陵から始まったと言われるが、この陵寢制度は秦の始皇帝陵がそうであったように、死者の靈魂が陵内に住んでいることを前提とする。靈魂が住んでいるが故に、食官によって寢殿に毎日四度食事が供えられ、また皇帝自ら靈魂に治政を報告する上陵の禮が行われたのである。民間の墳墓の前に營まれた祠堂もこれと同様で、祠堂は當時また「食堂」と呼ばれたが、食は飼と同義で、食を與える場所、即ち死者に飲食を供饌する場所であった。従っ



て祠堂も死者の靈魂が墓内に住んでいることを前提にしており、またそれ故に祖先祭祀として上墓が行われたのである。それにも拘らず祠堂の壁面に死者の靈魂の西王母、東王父の世界への昇仙の圖が表され、上墓の際には昇仙して仙界にいる墓主人の像に向かって供物をささげる仕組みになっていたのである。

思うに、古代中國の人間にとっては靈魂がどこにいくかは大問題であり、儒家は『禮記』檀弓下に「魂氣は天に歸し、形魄は地に歸す」とあるように、肉體的な魄と分かれて天上世界に昇っていくとし、また戰國、前漢初期の楚の地方では馬王堆漢墓帛書に見られたように、大地の中央に位置し、天帝の下都として不死の聖域である崑崙山に昇っていくと考えた。しかし一方、秦の始皇帝が創始した陵寢制度にみられた如く靈魂が地下に住むという考え方もこの頃からあり、前漢時代には秦の始皇帝陵の影響を受けた前漢の皇帝陵や、咸陽の楊家灣漢墓など關中の墓だけではなく、嘗て楚の領域であった南の地方でも靈魂のすみかとして獨特の地下に對する信仰が生まれた。それを示すのが前漢初期の湖北江陵鳳凰山一六八號漢墓や十號漢墓から出土した木牘、竹牘であり、そこには地下の世界の官吏である「地下丞」に對する申告が記され、墓主人がそのリストである遺策に記された副葬品とともに地下の世界に行くから地下の支配者である「主」に告げよというものであった。同じ内容のものは文帝十三年（前一六八）に死亡した馬王堆三號漢墓出土の木牘にも記されていた。馬王堆三號漢墓では一方で一號漢墓と同じく崑崙山への昇仙を内容とする帛書を出土しながら、一方でこのような地下に對する信仰を記した木牘を出土していたのである。そしてこれ以後、陵寢制度などの盛行にもみられた如く、地下に對する信仰は益々盛んになっていったのである。後漢時代の墳墓から屢々出土する架空の土地賣買文書、即ち賣地券もそれを示すものである。

前漢以來の畫像石墓はこのような狀況を背景にしており、一方で地下に對する信仰を受け入れつつ、一方で依然として仙界に對する信仰を保持して、あのように二重の構造をもった畫像石墓を生んだのである。要するに畫像石墓においては、死者の靈魂が地下の墳墓に住み身近に供奉されたいという願望と、崑崙山の仙界に昇仙して永遠の不死を獲得したいという願望がみられ、墓室を靈魂の住處に作ると同時に仙界の如く作って、兩方の願望を満たそうとしたのである。

注

- (1) 山東省博物館、山東省文物考古研究所編『山東漢畫像石選集』(濟南 一九八二)。  
朱錫祿『武氏祠漢畫像石』(濟南 一九八六)。  
徐州市博物館編『徐州漢畫像石』(南京 一九八五)。  
南陽漢代畫像石編輯委員會編『南陽漢代畫像石』(北京 一九八五)。  
王建中、閔修山『南陽兩漢畫像石』(北京 一九九〇)。  
高文編『四川漢代畫像石』(成都 一九八七)。  
常任俠編『中國美術全集 繪畫編一八 畫像石畫像磚』(北京 一九八八)。  
以上の資料は、以下編著者名を省略する。
- (2) 周到、呂品、湯文興編『河南漢代畫像磚』(上海 一九八五)。  
南陽文物研究所編『南陽漢代畫像磚』(北京 一九九〇)。  
高文編『四川漢代畫像磚』(上海 一九八七)。  
以上の資料は、以下編著者名を省略する。
- (3) 傅惜華編『漢代畫象全集 初編』(巴黎大學北京漢學研究所圖譜叢刊之一 北京 一九五〇)。  
傅惜華編『漢代畫象全集 二編』(同上 北京 一九五一)。  
江蘇省文物管理委員會『江蘇徐州漢畫像石』(北京 一九五九)。  
聞有編『四川漢代畫象選集』(北京 一九五六)。  
重慶市博物館編『重慶市博物館藏 四川漢代畫像磚選集』(北京 一九五七)。  
劉志遠編『四川漢代畫象碑藝術』(北京 一九五八)。  
陝西省博物館、陝西省文物管理委員會編『陝北東漢畫象石刻選集』(北京 一九五八)。  
曾昭燏、蔣寶庚、黎忠義『沂南古畫像石墓發掘報告』(北京 一九五六)。  
以上の資料は、以下編著者名を省略する。
- (4) Chavannes, Edouard, *Mission Archéologique dans la Chine Septentrionale*, Paris, 1909, 1913. 以下『シャヴァンヌ』と省略する。
- (5) 拙稿『崑崙山と昇仙圖』(『東方學報』京都五一冊 一九七九)。拙稿『崑崙山への昇仙』(東京 一九八一)。
- (6) Fairbank, Wilma, *The Offering Shrines of "Wu Liang Tz'u, Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol.6, No.1, 1941.
- (7) 蔣英炬、吳文祺『武氏祠畫像石建築配置考』(『考古學報』一九八一年二期)。蔣英炬『漢代的小祠堂—嘉祥宋山漢畫像石的建築復原』(『考古』一九八三年八期)。蔣英炬『略論曲阜“東安漢里畫象”石』(『考古』一九八五年二期)。
- (8) 曲阜東安漢里畫像石棺(復原) 參照。圖5。
- (9) 徐州市博物館、沛縣文化館『江蘇沛縣棲山漢畫像石墓清理簡報』(『考古學集刊』第二集 一九八二)、『徐州漢畫像石』圖版五一—五四。
- (10) この玉器は嚴密に言えば、孔の直徑である「好」と、輪の幅の總和である「肉」がほぼ等しく環というべきであるが、便宜的に璧の呼稱を用い、以下も同様とする。爾雅 釋器「肉倍好、謂之璧、好倍肉、謂之瑗、肉好若一、謂之環」。
- (11) この形の樹木は便宜的に長青樹と呼ぶことにする。
- (12) 禮記 月令 季春「羅罔畢翳」。注「小而柄長、謂之畢」。國語 齊語「田狩畢弋」。注「畢、掩雉兔之網也」。
- (13) この二種の神人は江蘇北部、山東南部の畫像石に屢々登場するが、嘉祥宋山第四號小祠堂(圖49 (4))や嘉祥南武山祠堂の畫像石では狗頭の神人も登場するので、この三種でトリオをなしたものと思わ

れる。

- (14) 漢書 卷二 禮樂志 安世房中歌十七章「芬樹羽林、雲景杳冥」。顏師古注「言所樹羽葆、其盛如林、芬然衆多、仰視高遠、如雲日之杳冥也」。
- (15) 揚雄 方言 卷五「所以投傳、謂之枰、或謂之廣平」。
- (16) 西王母の畫像についての主な論考には次の如きものがある。小南一郎「西王母と七夕傳承」(『東方學報』京都四六冊 一九七四)。岡村秀典「西王母の初期の圖像」(『高井三郎先生喜壽記念論集』『歴史學と考古學』福岡 一九八八)。
- (17) 山海經 大荒西經「西海之南、流沙之濱、赤水之後、黑水之前、有大山、名曰崑崙之丘、(略)有人、戴勝、虎齒有豹尾、穴處、名曰西王母」。王逸注「河圖玉版亦曰、西王母居崑崙之山。西山經曰、西王母居玉山。穆天子傳曰、乃紀名迹于崑崙之石、曰西王母之山也。然則西王母雖以崑崙之宮、亦自有離宮別窟、游息之處、不專住一山也。故記事者各舉所見而言之」。
- (18) 山海經 西山經「又西三百五十里、曰玉山、是西王母所居也。西王母其狀如人、豹尾虎齒而善嘯、蓬髮戴勝」。郭璞注「此山多玉石、因以名云」。(略)蓬頭亂髮。勝、玉勝也。
- (19) 山海經 海內北經「西王母梯几而戴勝杖、其南有三青鳥、爲西王母取食、在崑崙虛北」。注「梯謂馮也。又有三足鳥主給使」。郝懿行箋疏「如淳注漢書司馬相如大人賦引此經、無杖字」。
- (20) 司馬相如 大人賦(漢書 卷五七下 司馬相如傳所引)「吾乃今日覩西王母、昂然白首、戴勝而穴處兮、亦幸有三足鳥爲之使、必長生若此而不死兮、雖濟萬世不足以喜」。注「張揖曰、(略)三足鳥、三足青鳥也、主爲西王母取食、在崑崙虛之北」。前注參照。
- (21) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」一五〇—一五五頁。
- (22) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」九三頁。
- (23) 山海經 海內西經「海內崑崙之虛、(略)開明北有視肉珠樹、文玉樹、玕琪樹、不死樹」。淮南子 墜形訓「(崑崙虛)上有木禾、其脩五尋、珠樹・玉樹・璇樹・不死樹在其西、沙棠・琅玕在其東、絳樹在其南、碧樹・瑤樹在其北」。
- (24) 呂氏春秋 本味篇「菜之美者、崑崙之蔬、壽木之華」。高誘注「壽木、崑崙山上木也。華、實也。食其實者不死、故曰壽木」。
- (25) 拙稿「六博の人物坐像銅鑲と博局紋について」(『古史春秋』第五號 一九八九) 三八—四六頁。
- (26) 筆者には先にこの神獸を陸吾とした。山海經 西山經「西南四百里、曰崑崙之丘、是實惟帝之下都、神陸吾司之、其神狀虎身而九尾、人面而虎爪、是神也、司天之九部及帝之囿時」。拙稿「崑崙山と昇仙圖」九三—九四頁。
- (27) 前注參照。
- (28) 淮南子 覽冥訓「譬若羿請不死之藥於西王母、姮娥竊以奔月」。
- (29) 漢書 卷二八 地理志下「魯國、(略)縣六、魯、(略)蕃、鄒、(略)楚國、(略)縣七、彭城、留、(略)」。留縣は微山湖の西岸に當たる。譚其驥編『中國歷史地圖集 第二冊』(北京 一九八二) 一九—二〇頁參照。
- (30) 王思禮等「山東微山縣漢代畫像石調查報告」(『考古』一九八九年八期) 七〇—七〇三頁、圖四(上)。
- (31) 張衡 西京賦(文選卷二所收)「跳丸劍之揮霍、走索上而相逢」。宋書 卷一九 樂志一「於是除高絙、紫鹿、跂行、鼈食及齊王捲衣、笮兒等樂」。韓順發「漢唐高絙藝術考」(『中原文物』一九九一年三期)。
- (32) 王思禮等「山東微山縣漢代畫像石調查報告」七〇—七〇二頁、圖一(中・右)、一、三、圖版參一4。
- (33) 王思禮等「山東微山縣漢代畫像石調查報告」七〇〇—七〇二頁、圖一〇、圖版參一3。『山東漢畫像石選集』圖版五一。
- (34) 『山東漢畫像石選集』圖版四八。王思禮等「山東微山縣漢代畫像石調查報告」七〇三頁、圖四下。

- (35) 『山東漢畫像石選集』圖版四九。
- (36) 『山東漢畫像石選集』圖版五〇。
- (37) 『山東漢畫像石選集』圖版三八—三三。
- (38) 圖55 (1) 参照
- (39) 『漢代畫象全集 初編』圖版五七—八〇。
- (40) 蔣英炬「略論曲阜『東安漢里畫象』石」(『考古』一九八五年二期)。  
この銘の解釋をめぐって李發林氏と蔣英炬氏との間で議論が交わされた。蔣英炬氏は雙線で勾勒された「山」字を不明として、魯縣の東安漢里で作った墓石の意にとった。これがより妥當のようである。
- (41) 李發林「『山魯市東安漢里馬石也』簡釋」(『考古』一九八七年一期)。  
蔣英炬「『河平三年八月丁亥漢里馬墓 拓片辨偽及有關問題』(『考古』一九八九年八期)。
- (42) 王志傑、朱捷元「漢茂陵及其陪葬冢附近新發現的重要文物」(『文物』一九七六年七期)圖二、三、四。茂陵附近出土の同時期玉器に青玉獸面文鋪首があり、四神が刻されている。但し玄武の龜と蛇は合體していない。『中華人民共和國出土文物展』(東京 一九七七)圖版六一。
- (43) 咸陽市文管會、咸陽市博物館「咸陽市空心磚漢墓清理簡報」(『考古』一九八二年三期)。
- (44) 山西省文物管理委員會「山西平陸縣園村壁畫漢墓」(『考古』一九五九年九期)圖版壹 1、2、3、5。
- (45) 蔣英炬「略論曲阜『東安漢里畫象』石」一一三—三頁。
- (46) 論衡「訂鬼篇」山海經又曰、滄海之中、有度朔之山。上有大桃木、其屈蟠三千里、其枝開東北曰鬼門、萬鬼所出入也。上有二神人、一曰神荼、一曰鬱壘、主閔領萬鬼。惡害之鬼、執以葦索而以食虎。於是黃帝乃作禮以時驅之、立大桃人、門戶畫神荼、鬱壘與虎、懸葦索以禦凶魅。續漢書 禮儀志上 劉昭注にも『山海經』が引かれ、大意はこれと同じである。但し應劭『風俗通義』卷八には『黃帝書』とされている。
- (47) 前注參照。蔡邕「獨斷」歲竟、畫荼・壘、并懸葦索以禦凶。荆楚歲時記「(正月一日)帖畫雞戶上、懸葦索於其上、插桃符其傍、百鬼畏之」。
- (48) 淮南子「詮言訓」昇死於桃棗。高誘注「棗、大杖、以桃木爲之、以擊殺邪、由是以來鬼畏桃也」。桃木で俑を作り墓に埋葬して辟邪に使うことも行われ、長沙馬王堆一號漢墓では桃木片に墨で目鼻をつけた桃木小俑が三三件出土している。『長沙馬王堆一號漢墓 上集』一〇一頁、圖九三。
- (49) 徐州市博物館等「江蘇沛縣樓山漢畫像石墓清理簡報」一二二頁。王思禮等「山東微山縣漢代畫像石調查報告」七〇九頁。
- (50) 臨沂金雀山漢墓發掘組「山東臨沂金雀山九號漢墓發掘簡報」(一九七七年一期)二五—二六頁。劉家驥、劉炳森「金雀山西漢帛畫臨摹後感」(同上)。
- (51) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」一五〇—一五五頁。
- (52) 漢書 卷六 武帝紀「(元封)三年春、作角抵戲、三百里內皆觀」。注「文穎曰、名此樂爲角抵者、兩兩相當角力、角技藝射御、故名角抵、蓋雜技樂也。巴俞戲、魚龍蔓延之屬也」。
- (53) 洛陽博物館「洛陽卜千秋壁畫墓發掘簡報」(『文物』一九七七年六期)八一—九頁、圖三三、三四、圖版壹、貳、參。孫作雲「洛陽西漢卜千秋墓壁畫考釋」(同上)。
- (54) 郭沫若「關於晚周帛畫的考察」(『人民文學』一九五三年一期)。楚文物展覽會「楚文物展覽圖錄」(北京 一九五四)圖版二二。拙稿「崑崙山への昇仙」(東京 一九八二)六九—七八頁。
- (55) 湖南省博物館「新發現的長沙戰國楚墓帛畫」(『文物』一九七三年七期)。文物出版社「長沙楚墓帛畫」(北京 一九七三)。
- (56) 湖南省博物館、中國科學院考古研究所「長沙馬王堆一號漢墓」(北京 一九七三)上集、三九—四五頁、圖三八。湖南省博物館、中國科學院考古研究所「長沙馬王堆二、三號漢墓發掘簡報」(『文物』一九七四年七期)四二頁、圖版伍。

- (57) 史記 卷三三 魯周公世家「頃公」十九年(前二六一)、楚伐我、取徐州。二十四年(前二五六)、楚考烈王伐滅魯。頃公亡、遷於下邑、爲家人、魯絕祀」。山東省博物館、臨沂文物組「臨沂銀雀山西漢墓葬」(考古)一九七五年六期)三二頁。
- (58) 湖南省博物館「長沙砂子塘西漢墓發掘簡報」(文物)一九六三年二期。湖南省博物館「湖南省文物圖錄」(長沙 一九六四)圖版七二。
- (59) 湖南省博物館等「長沙馬王堆一號漢墓」上集、二五—二七頁、圖二五。
- (60) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」八七一—一四頁。
- (61) 山海經 西山經「西南四百里、曰昆侖之丘、是實惟帝之下都」。郭璞注「天帝都邑之在下者也」。
- (62) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」一五五—一七〇頁。
- (63) 淮南子 墜形訓「昆侖之邱、或上倍之、是謂涼風之山、登之而不死、或上倍之、是謂懸圃、登之乃靈、能使風雨、或上倍之、乃維上天、登之乃神、是謂太帝之居」。
- (64) 漢書 卷二七 五行志下「哀帝建平四年正月、民驚走、持葉或楸一枚、傳相附與、曰行詔籙。道中相過逢多至千數、或被髮徒跣、或夜折關、或踰牆入、或乘車騎奔馳、以置驛傳行、經歷郡國二十六、至京師。其夏、京師郡國民聚會里巷仟佰、設張博具、歌舞祠西王母。又傳書曰、母告百姓、佩此書者不死。不信我言、視門樞下、當有白髮。至秋止」。
- (65) 漢書 卷十一 哀帝紀「(建平)四年春、大旱。關東民傳行西王母壽經歷郡國、西入關至京師。民又會聚祠西王母、或夜持火上屋、擊鼓號呼相驚恐」。
- (66) 李洪甫「連雲港市錦屏山漢畫像石墓」(考古)一九八三年一〇期)八九四—八九五頁、圖一(上)、圖二(1—4)、圖版肆—2。
- (67) 李洪甫「連雲港市錦屏山漢畫像石墓」八九六頁。
- (68) 商丘地區文化局「河南夏邑吳莊石椁墓」(中原文物)一九九〇年一期。これらの石槨墓は石槨内に朽ちた木灰がみられ、あるものには漆皮が発見されたところから、内に木棺或いは漆棺を置いたことが確實に知られた。但し紛らわしさを避けるため、この場合も統一的に石棺の語を使用することにする。
- (69) 商丘地區文化局「河南夏邑吳莊石椁墓」圖八一—十一。
- (70) 漢書 卷二八 地理志上「沛郡、故秦泗水郡。高帝更名。莽曰吾符。屬豫州。(略)縣三十七、相、莽曰吾符亭。(略)沛、有鐵官。(略)栗、侯國。(略)」
- (71) 『徐州漢畫象石』圖版四。
- (72) 『徐州漢畫象石』圖版一—三。
- (73) この他にも一九八六年に發掘された平陰縣新屯漢畫像石墓などがある。濟南市文化局文物處、平陰縣博物館籌建處「山東平陰新屯漢畫像石墓」(考古)一九八八年一期)。
- (74) 『山東漢畫像石選集』圖版四六六、四六七。
- (75) 臨沂市博物館「山東臨沂金雀山周氏墓群發掘簡報」(文物)一九八四年一期)四三頁、圖七、八。
- (76) 同上 五七頁、圖四四。
- (77) 同じような圖は『シャヴァンヌ』Fig. 1269にもある。また二株の長青樹とその間に一個の壁を表した曲阜畫像石も、壁の使用が象徴的である。『山東漢畫像石選集』圖版一七一。
- (78) 爾雅 釋地「西北之美者、有崑崙虛之璆琳琅玕焉」。注「璆琳、美玉名也。琅玕、狀似珠也。山海經曰、崑崙山有琅玕樹」。淮南子 俶眞訓「譬若鍾山之玉、炊以鑪炭、三日三夜、而色澤不變、則至德天地之精也」。高誘注「鍾山、昆侖也」。
- (79) 注(18) 參照。
- (80) 八木春生「勝」についての一考察—「勝」と昇仙思想の關係を中心として」(美學美術史論集)東京 一九九二)。
- (81) 林巳奈夫「中國古代の祭玉、瑞玉」(東方學報)京都四〇冊 一九六九)二九七—三〇六頁。盧兆蔭「試論兩漢的玉衣」(考古)一九

- (81) 八一年一期)。同上「再論兩漢的玉衣」(『文物』一九八九年一〇期)。  
臨沂市博物館「臨沂的西漢金棺、磚棺、石棺墓」(『文物』一九八八年一〇期)七一一七五頁。
- (82) この文様は嘉祥縣將來畫像石(東京國立博物館所藏)にもみられる。これは天の邊緣の維の方角にある鉤(V)と天の中心とを繋ぐ綱(四維)を表すものと考えられる。『漢代墳墓の表飾』圖版一四六。拙稿「六博の人物坐像銅鏡と博局紋について」四四一四五頁。
- (83) 臨沂市博物館「臨沂的西漢金棺、磚棺、石棺墓」七五頁。
- (84) 河南省南陽地區文物研究所「新野樊集漢畫像磚墓」(『考古學報』一九九〇年四期)。
- (85) 同上 四七九一四八二頁、圖五、附圖三一二、圖版拾參。『南陽漢代畫像磚』圖版三、五九、拓本一四八一五〇。
- (86) 漢書 卷七六 韓延壽傳「延壽衣黃紬方領、駕四馬、傳總、建幢、植羽葆、鼓車、功曹引車、皆駕四馬、載樂、載」。注「師古曰、幢、麾也。樂、有衣之載也、其衣以赤黑綸爲之」。
- (87) 河南省南陽地區文物研究所「新野樊集漢畫像磚墓」新野樊集漢畫像磚墓登記表、五〇八頁。『南陽漢代畫像磚』圖版五、五七、拓本一六四一六五。
- (88) これについては馬車の蓋とする見方もあろうが、蓋はその下に平たく描かれているうえに車蓋としては大き過ぎ、やはり闕樓のような門の屋根を上から寫したものと考える。闕の近くで虎が牛に似た神獸などと闘うモチーフは南陽ではよく描かれ、新野張樓、新野樊集出土畫像磚などがある。南陽文物研究所「南陽漢代畫像磚」拓本一八六、一八七。
- (89) 牛天偉、崔慶明「南陽漢畫石又有新發現」(『中國文物報』一九九一年九月二二日)。
- (90) 河南省南陽地區文物研究所「新野樊集漢畫像磚墓」四八三—四八五、圖八、附圖一—三。『南陽漢代畫像磚』圖版五〇、拓本二九—三一。
- (91) (92) 『南陽漢代畫像磚』拓本一七、七七、七八。また亭長が盜賊を捕らえるだけでなく、盾などを持って迎撃することも任務であったことは次の記事に窺える。後漢書 逸民 逢萌傳「逢萌字子康、北海都昌人也。家貧、給事縣爲亭長。時尉行過亭、萌候迎拜謁、既而擲楯嘆曰、大丈夫安能爲人役哉。遂去之長安學、通春秋經」。注「亭長主捕盜賊、故執楯也」。
- (93) 『南陽漢代畫像磚』圖版六六、拓本一。
- (94) 同上 拓本四。
- (95) 同上 圖版七二、拓本九七。
- (96) 河南省南陽地區文物研究所「新野樊集漢畫像磚墓」四九九頁。
- (97) 『河南漢代畫像磚』圖四五、四六、五〇、五一、六七。
- (98) 漢書 卷七六 韓延壽傳「還至府門、門卒當車、願有所言」。
- (99) 河南文化局文物工作隊「鄭州二里崗漢畫象空心磚墓」(『考古』一九六三年一期)圖二、三。
- (100) 鄭州市博物館「鄭州新通橋漢代畫象空心磚墓」(『文物』一九七二年一〇期)圖三、一三一。
- (101) 張秀清「河南鄭州新發現的漢代畫像磚」(『文物』一九八八年五期)圖一一—八。
- (102) 鄭州市博物館「鄭州新通橋漢代畫象空心磚墓」圖一四—一六、22。
- (103) 河南省文化局文物工作隊「鄭州南關一五九號漢墓的發掘」(『文物』一九六〇年八・九期)一九頁、圖一九。
- (104) 『河南漢代畫像磚』圖一九一解說。
- (105) 黃明蘭「洛陽漢畫像磚」(鄭州一九八六)二四〇、一四二頁(金村出土)、一五〇、一五一頁。
- (106) 南陽市博物館「南陽縣趙寨磚瓦廠漢畫像石墓」(『中原文物』一九八二年一期)四頁。『南陽漢代畫像石』六一—一二頁。信立祥「漢畫像石的分區與分期研究」(『餘偉超編『考古類型學的理論與實踐』所收 一九八九)二五一—二六一頁。信立祥氏は楊官寺と同時期のものとし

- て湖北隨縣最家灣墓出土墓門畫像石をこれに加える。湖北省文物管理委員會「湖北隨縣唐鎮漢魏墓清理」(考古)一九六六年二期)圖二、圖版陸一、二。
- (107) 南陽市博物館「南陽縣趙寨磚瓦廠漢畫像石墓」。
- (108) 同上 圖七、二。『南陽兩漢畫像石』圖版二、四。樓閣上の鳳凰の向きは右と左の雙方があったと思われる。
- (109) 南陽漢畫館編『南陽漢代畫像石刻(續編)』(上海 一九八八)圖版五〇。出土地については、注(110)の闕圖畫像石と同じく「趙寨磚瓦廠漢墓」とあるが、これらを出土した墓は趙寨磚瓦廠漢畫像石墓とは別と思われる。また『南陽兩漢畫像石』圖版二〇〇の「大雛」畫像石(縱四一cm、横五四四cm)も、前漢の「南陽市趙寨出土」とあるが、これも別の墓と思われる。
- (110) (1) 南陽市博物館編『南陽漢代畫像石刻』(上海 一九八一)圖版四六。(2) 『南陽漢代畫像石』圖版一。(3) 『南陽兩漢畫像石』圖版二。(1)と(3)は同一畫像石の拓本と思われるが、(2)は別の畫像石の拓本と思われ、闕圖が二點あることになり、雙闕を構成していたものと思われる。
- (111) 趙成甫、張逢西、平春照「河南唐河縣石灰窯村畫像石墓」(『文物』一九八二年五期)。
- (112) 河南省文化局文物工作隊「河南南陽楊官寺畫像石墓發掘報告」(『考古學報』一九六三年一期)。南陽漢代畫像石編輯委員會編『南陽漢代畫像石』寫真圖版一〇〇—一〇一。
- (113) 報告書には膝に琴を置いて兩手で弾くところがあるが、これまでの例からみて盾を置いているのである。河南省文化局文物工作隊「河南南陽楊官寺畫像石墓發掘報告」一一八頁。
- (114) 他に升鼎圖、伯樂圖など興味深い畫像がある。同上 圖八、一〇。
- (115) 南陽地區文化局考古隊、南陽市博物館「唐河縣新店發現一座有紀年的漢畫象石墓」(『河南文博通訊』一九七八年三期)。南陽地區文物隊、南陽博物館「唐河漢鬱平大尹馮君孺人畫象石墓」(『考古學報』一九八〇年二期)。
- (116) 「孺人」の讀み方に關して、孺人ならば「禮記」曲禮の「天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人」に照らして馮君の夫人となり、ここは馮君の名であることと同時に字體に照らして「孺久」と讀むべきだとする説がある。閃修山「漢鬱平大尹馮君孺人畫像石墓研究補遺」(『中原文物』一九九一年三期)七五—七六頁。
- (117) 周到、李京華「唐河針織廠漢畫像石墓的發掘」(『文物』一九七三年六期)。
- (118) 同上 二七—二八頁。
- (119) 高文、范小平「四川漢代畫像石棺藝術研究」(『中原文物』一九九一年三期)。高文「四川漢代畫像石初探」(『四川文物』一九八五年四期)。
- (120) 四川省博物館、郫縣文化館「四川郫縣東漢磚墓的石棺畫像」(『考古』一九七九年六期)。
- (121) 同上 四九五頁。
- (122) 同上 五〇—五〇三頁、圖八、一二、一三、一五。
- (123) 同上 圖一。
- (124) 同上 圖一六。
- (125) 同上 四九八—五〇〇頁、圖七、圖一〇。
- (126) 林巳奈夫「洛陽卜千秋墓壁畫に對する注釋」(『漢代の神祇』所收京都 一九八九)三〇二—三〇六頁。
- (127) 四川省博物館、郫縣文化館「四川省郫縣東漢磚墓的石棺畫像」圖一六。
- (128) 西王母圖を描いた方を頭部とする。
- (129) 小南一郎「西王母と七夕傳承」三四—三八頁。
- (130) 『漢代畫像全集 初編』圖版二一。
- (131) 李復華、郭子游「郫縣出土東漢畫像石棺圖像略說」(『文物』一九七五年八期)。「四川漢代畫像石」石棺畫像 圖二〇、二二、二三、二四。

- (132) 漢書 卷九六 西域傳下「設酒池肉林以饗四夷之客、作巴俞都廬、海中碣極、漫衍魚龍、角抵之戲以觀視之」。注「師古曰、漫衍者、即張衡西京賦所云巨獸百尋、是爲漫延者也。魚龍者、爲舍利之獸、先戲於庭極、畢乃入殿前激水、化成比目魚、跳躍激水、作霧障日、畢、化成黃龍八丈、出水敖戲於庭、炫耀日光。西京賦云海鱗變而成龍、即爲此色也」。
- (133) 報告書は『列子』湯問篇に基づく鼇山圖というが、圖版が不鮮明で不明というほかない。
- (134) 高文「絢麗多彩的畫像石—四川解放後出土的五個漢代石棺槨」(『四川文物』一九八五年一期)一三頁、圖二、三。『四川漢代畫像石』石棺畫像 圖二五—二六。
- (135) 拙稿「南朝帝陵の石獸と磚畫」(『東方學報』京都第六三冊 一九九一)一七四—一八五頁。
- (136) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」九九、一六六頁。
- (137) 高文、高成英「四川出土的十一具漢代畫像石棺圖釋」(『四川文物』一九八八年三期)二三—二四頁、圖八、九。
- (138) 報告書には天祿とあるが、麒麟とするのが妥當と思われる。瀘州石棺の一角の動物も麒麟とするのが妥當である。高文「絢麗多彩的畫像石」一四頁、圖九。
- (139) 『四川漢代畫像石』圖二六—二九。
- (140) 高文、高成英「四川出土的十一具漢代畫像石棺圖釋」二三頁。
- (141) 彭山縣高家溝崖墓石棺の側板畫像において、羽人が上廣下狹の二つの山嶽に分かれて六博をしているのも同じ例であり、この場合も崑崙山の山嶽を表している。高文「絢麗多彩的畫像石」圖一。
- (142) 李曉鳴「四川榮縣東漢石棺畫像」(『考古』一九八七年一期)。「四川漢代畫像石」石棺畫像 圖九—一二。唐長壽「榮縣畫像石棺、秘戲圖」及其它」(『四川文物』一九九一年一期)。
- (143) 頬を寄せ合い抱擁する男女のモチーフは四川ではしばしばみられ、
- 樂山麻浩一號崖墓六號墓門の石刻羊背抱擁接吻圖、樂山鴨河灣五號崖墓石刻接吻圖、彭山縣寨子山崖墓(M五五〇)石刻門楣秘戲圖(北京故宮博物院藏)などがある。樂山市文化局「四川彭山麻浩一號崖墓」(『考古』一九九〇年二期)圖四。谷建祥「四川彭山崖墓門楣石刻試析」(『南京博物院集刊』第六集)。Lim, Lucy, *Stories from China's Past*, San Francisco, 1987, Pl.40.41. 但し抱擁しないまでも體を寄せ合う男女のモチーフは新繁清白鄉出土西王母圖畫像磚(圖30)などにもみられ、後述するように昇仙してきた墓の主人公夫婦を示すと思われる。
- (144) 内江市文管所、簡陽縣文化館「四川簡陽縣鬼頭山東漢崖墓」(『文物』一九九一年三期)。
- (145) 同上 二二—二三頁、圖一〇—一二、一四、一六。
- (146) 趙殿增、袁曙光「天門」考——兼論四川漢畫像磚(石)的組合與主題」(『四川文物』一九九〇年六期)五頁。報告書はこれについて觸れていない。
- (147) ここでは先にみた山東曲阜東漢里畫像石棺の四神の辟邪的機能よりも、四方星宿としての天象の性格が前面に出ていよう。他に四神を表した四川の畫像石棺には廬山縣出土の建安十六年(二二一)の銘をもつ王暉石棺がある。『四川漢代畫像石』石棺畫像圖一六。
- (148) 春秋感精符(太平御覽卷九一七所引)「王者德流四表、則白雉見」。孝經援神契(禮記注疏卷二二 禮運 孔穎達疏所引)「德至鳥獸、則鳳凰來、鸞鳥舞、麒麟臻、白虎動、狐九尾、雉白首」。
- (149) 王充 論衡 無形篇「圖仙人之形、體生毛、臂變爲翼、行於雲則年增矣、千歲不死」。
- (150) 『四川漢代畫像石』畫像石棺 圖二七。
- (151) 内江市文管所「四川簡陽縣鬼頭山東漢崖墓」二三頁。
- (152) 淮南子 原道訓「昔者馮夷大丙之御也、乘雲車入雲蜺、游微霧、(略)經紀山川、蹈騰昆侖、排闥闔淪天門」。高誘注「闔闔、始升天之门也」。



- (153) 天門、上帝所居、紫微宮門也。  
淮南子 墜形訓「懸圃・涼風・樊桐、在昆侖闔闔之中」。高誘注「闔闔、昆侖虛門名也。懸圃・涼風・樊桐、皆昆侖之山名也」。
- (154) 宋書 卷二一 樂志三 駕六龍 氣出倡 (魏) 武帝詞「駕六龍乘風而行、行四海外。路下之八邦、歷登高山、臨谿谷、乘雲而行、行四海外、東到泰山。仙人玉女、下來翺游、驂駕六龍、飲玉漿、河水盡、不東流。解愁腹、飲玉漿。奉持行、東到蓬萊山。上到天門、玉闕下、引見得入、赤松相對、四面顧望、視正焜煌。(略)遨遊八極、乃到崑崙之山、西王母側。神仙金止玉亭、來者爲誰。赤松王喬、乃德旋之門。樂共飲食到黃昏、多駕合坐、萬歲長宜子孫。(略)」。
- (155) 列仙傳 卷上「赤松子者、神農時雨師也。服水玉、以教神農、能入火自燒、往往至崑崙山上、常止西王母石室中」。
- (156) 趙殿增、袁曙光「『天門』考」三一四頁。
- (157) 同上 三一四頁、圖一。
- (158) 同上 四頁、圖一。
- (159) 何志國「四川綿陽河邊東漢崖墓」(考古)一九八八年三期)一二二五頁、圖五、圖八。
- (160) 高文、高成英「四川出土的十一具漢代畫像石棺圖釋」一七一—一九頁、圖一—三。
- (161) 宋書 卷二一 樂志三 駕虹蜺 陌上桑 武帝詞「駕虹蜺、乘赤雲、登彼九疑歷玉門。濟天漢、至崑崙、見西王母、謁東君。交赤松、及羨門、受要秘道愛精神。食芝英、飲醴泉、柱杖桂枝佩秋蘭。絕人事、游渾元、若疾風游欒飄飄。景未移、行數千、壽如南山不忘愆」。
- (162) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」一三〇—一三四頁。
- (163) 雷建金、萬立新、曾建「四川內江漢畫民居千欄及大倉」(中原文物)一九九一年三期)。
- (164) 史記 卷三十 平準書「太倉之粟陳陳相因、充溢露積於外、至腐敗不可食」。
- (165) 晉書 卷十一 天文志上「天倉六星、在婁南、倉穀所藏也」。
- (166) 匡遠澄「四川宜賓市翠屏村漢墓清理簡報」(考古通訊)一九五七年三期)圖版七一。
- (167) 余德章、劉文傑「試論四川漢代畫像磚的分布地區、刻塑技法及其史料價值」(考古與文物)一九八六年五期)。
- (168) 四川省文物管理委員會「四川新繁清白鄉東漢畫像磚墓清理簡報」(文物參考資料)一九五六年六期)。馮漢驥「四川的畫像磚墓及畫像磚」(文物)一九六一年二期)圖一—四。
- (169) 成都西門外、郫縣花牌坊、新都、彭縣三界鄉などの畫像磚がある。成都西門外出土のものは新繁清白郷の日神とよく似る。「四川漢代畫像磚集」圖版八六—八八。「中國美術全集 繪畫編一八」圖版二四七。「四川省博物館」(東京 一九八八)圖版一〇三。
- (170) 于豪亮「幾塊畫像磚的說明」(考古通訊)一九五七年四期)一〇八頁。
- (171) 山海經 海內北經「西王母梯几而戴勝杖。其南有三青鳥、爲西王母取食、在昆侖虛北。有人曰大行伯、把戈」。
- (172) 張德全「新都縣發現漢代紀年磚畫像磚墓」(四川文物)一九八八年四期)封面二 圖二。この墓は「永元元年(八九)三月三日造此」の紀年磚が出土しており、編年にとって貴重な資料である。
- (173) 四川省博物館「四川彭縣等地新收集到一批畫像磚」(考古)一九八七年六期)五三五頁、圖版柒一。
- (174) 帥希彭「四川彭山出土的漢代畫像磚」(考古與文物)一九八九年三期)二六頁、圖一—一。
- (175) この畫像磚は一九四〇年代に彭山で發見されたが、一九七五年にも彭山江口梅花村で同種のもので發見され、よく作られたようである。「四川漢代畫像磚集」圖版八五、聞圖解說。帥希彭「四川彭山出土的漢代畫像磚」二四頁、圖二—八。
- (176) 王嘉 拾遺名山記「崑崙山有崑崙陵之地、其高出日月之上。山有九層、每層相去萬里、有雲色」(說郛本)。

- (177) 馮漢驥「四川的畫像磚墓及畫像磚」圖四。上部に雲氣文帶が施されているのが特徴である。
- (178) 劉志遠「成都昭覺寺漢畫像磚墓」〔考古〕一九八四年一期。
- (179) 于豪亮「記成都揚子山一號墓」〔文物參考資料〕一九五五年九期。揚子山とあるが、以下羊子山で統一する。
- (180) 馮漢驥「四川的畫像磚及畫像磚」圖九、一〇。『重慶市博物館藏四川漢畫像磚選集』（北京 一九五七）重慶市博物館藏漢墓畫象磚編號表。
- (181) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二四一。『重慶市博物館藏四川漢畫像磚選集』圖一五。
- (182) 『四川漢畫像磚選集』重慶市博物館藏漢墓畫象磚編號表。
- (183) 同上。西南博物院籌備處「資成鐵路修築工程中發現的文物簡介」〔文物參考資料〕一九五四年三期。二二頁、圖七一、圖一五一、圖一五二。
- (184) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二二〇。
- (185) 成都市文物管理處「四川成都曾家包東漢畫像磚石墓」〔文物〕一九八一年一〇期。『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二四二、二四三、二四九。
- (186) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版一九一、二〇五、二二二、二二六、二二七、二三〇。
- (187) 『四川漢畫像磚選集』圖二。『中國美術全集 繪畫編一八』圖版一九一。
- (188) 劉志遠「成都昭覺寺畫像磚墓」〔考古〕一九八四年一期。
- (189) ここでは上記報告書の記す通り並べ、圖の内容を稍や詳しく記す。但し右壁を左壁、左壁を右壁と改めた。
- (190) これと同じ圖柄の畫像磚は、『四川漢畫像磚選集』圖一〇に掲載された成都羊子山二號墓出土の畫像磚が該当しよう。圖一〇解説では畫題を「饒路」としているが、この劉志遠氏の報告がいう通り寶主見禮もしくは拜禮圖とするのが妥當である。
- (191) 余德章、劉文傑「試論四川漢代畫像磚的分布地區、刻塑技法及其史料價值」一〇六一—一〇七頁。
- (192) 于豪亮「記成都揚子山一號墓」。馮漢驥「四川的畫像磚墓及畫像磚」圖五。
- (193) Yu Dezhang, 'Yanzishan Tomb Number One: A Vaulted Brick Tomb', Lucy Lim, *Stories from China's Past*, pp. 192-193.
- (194) 『四川漢畫像磚選集』圖四〇。この圖は四川崇慶縣出土の日神・月神畫像磚（縱三九・二 横四七・九cm）の日神像と似るが、長方形の枠が残っており、日神像のみを納めた縦長の畫像磚であったことがわかる。
- (195) 同上 圖三九。縱四〇・七、横四八・九cm。大きさは新繁清白鄉漢墓出土西王母畫像磚（縱三九・五、横四五・五cm）より少し大きいようである。
- (196) 陳孟東「陝北東漢畫像石綜述」〔文博〕一九八七年四期。四三頁。
- (197) 綏德縣博物館「陝西綏德畫像石墓」〔文物〕一九八三年五期。
- (198) 陳孟東「陝北東漢畫像石綜述」四三頁。
- (199) 後漢書 孝順帝紀「（永和五年夏四月）南匈奴左部句龍大人吾斯、車紐等叛、圍美稷。（略）（九月）丁亥、徙西河郡居離石、上郡居夏陽、朔方居五原。句龍吾斯等東引烏桓、西收羌胡、寇上郡、立車紐爲單于。」注「離石、縣名、在郡南五百九里。西河本都平定縣、至此徙於離石。」
- (200) 梁宗和「山西離石縣的漢代畫像石」〔文物參考資料〕一九五八年四期。謝國楨「跋漢左元異墓石陶片拓本」〔文物〕一九七九年二期。高維德「左元異墓漢畫像石淺析」〔漢代畫像石研究〕所收 北京一九八六。Shih, Hsio-yen, *Some Fragments from a Han Tomb in the Northwestern Relief Style, Artibus Asiae*, Vol. XXV, 2/3, 1962.
- 綏德縣博物館「陝西綏德畫像石墓」。

- (201) 史記 卷八 高祖本紀「(漢六年) 後高祖朝、太公擁簪、迎門卻行。高祖大驚、下扶太公」。集解「李奇曰、爲恭也、如今卒持帚者也」。
- (202) 東京帝國大學文學部『樂浪』(東京 一九三〇) 四二―四三頁、圖版五六―五八。
- (203) 陝西省博物館、陝西省文管會寫作小組「米脂東漢畫象石墓發掘簡報」(文物)一九七二年三期 圖七。
- (204) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版八三、解說。
- (205) 同上 圖版七八。同様に「一九七五年陝西綏德四十鋪鎮出土」とある。更に同墓出土と思われる門楣畫像石がある。同上 圖版八一。
- (206) 『陝北東漢畫象石刻選集』三八頁。綏德縣博物館「陝西綏德漢畫像石墓」三〇頁。
- (207) 吳蘭、學勇「陝西米脂縣官莊東漢畫像石墓」(考古)一九八七年一期 圖五。『陝北東漢畫象石刻選集』圖二八。
- (208) 『陝北東漢畫象石刻選集』圖二〇解說。
- (209) 『陝北東漢畫象石刻選集』圖二〇解說。小南一郎「西王母と七夕傳承」(東方學報)京都四六冊 一九七四 六〇頁。
- (210) 東方朔神異經 中荒經「崑崙之山有銅柱焉。其高入天、所謂天柱也。圍三千里、周圓如削。下有回屋、方百丈、仙人九府治之。上有大鳥、名曰希有、南向張左翼覆東王公、右翼覆西王母。背上小處無羽、一萬九千里。西王母歲登翼上、之東王公也」(說郭本)。
- (211) 『シャヴァン』Fig. 170, 171.
- (212) 『山東漢畫像石選集』圖版一九四。この畫像石は後述する通り祠堂の西壁を構成する。また嘉祥紙坊鎮敬老院畫像第九石も参考になろう。
- (213) 朱錫祿「嘉祥漢畫像石」(濟南 一九九二) 圖一三四。
- (214) 山西省考古研究所、呂梁地區文物工作室、離石縣文物管理所「山西離石馬茂莊東漢畫像石墓」(文物)一九九二年四期。
- (215) 同上 一四二―一九頁、圖二一三六。
- (216) 後述するように武氏祠や宋山小祠堂においても、西王母、東王父の周りに頻りに表された。
- (217) 『陝北東漢畫象石刻選集』圖八九、九九、一〇〇。
- (218) 山西省考古研究所「山西離石馬茂莊東漢畫像石墓」二九―三五頁、圖四二一六二。
- (219) 後漢書 光武帝紀上「(更始元年) 十月、持節北渡河、鎮慰州郡。李賢等注「節、所以爲信也、以竹爲之、柄長八尺、以旄牛尾爲其旒三重。大庭脩「漢代の節について一將軍假節の前提」(關西大學東西學術研究所紀要) 第二號 一九六八。
- (220) 徐州睢寧縣九女墩漢墓出土畫像石では羽人が節を持つ。『徐州漢畫象石』圖版二二九。前注大庭氏論文、圖二參照。
- (221) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」一五五―一七一頁。
- (222) 離石馬茂莊畫像石墓出土の二本の石柱はカナダ、トロントのロイヤル・オンタリオ美術館に所蔵されている。柱の銘は次の通りである。
- (223) (一)「和平元年西河中陽光里左元異造作萬年廬舍」。(二)「使者持節中郎將莫府奏曹史、左表字元異之墳」。注(193) Hsü, Hsiao-yan 論文參照。
- (224) 山西省考古研究所等「山西離石馬茂莊東漢畫像石墓」四〇頁。
- (225) 河北省文化局文物工作隊「望都二號漢墓」(北京 一九五九)。
- (226) 同上 一一―一二頁、圖二一三七。
- (227) 祠堂一般について記した主な論考には次のものがある。長廣敏雄「漢代の家祠堂について」(『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』所收 京都一九六一)。信立祥「論漢代的墓上祠堂及其畫像」(『南陽漢代畫像石學術討論會辦公室編「漢代畫像石研究」所收 北京 一九八七)。
- (228) 佐原康夫「漢代祠堂畫像考」(『東方學報』京都六三冊 一九九二)。
- (229) 漢書 卷六八 霍光傳「(霍) 光薨、上及皇太后親臨光喪。太中大夫任宣與侍御史五人持節護喪事。(略) 發三河卒復土、起家祠堂、置園邑三百家、長丞奉守如舊法。(略) 禹既嗣爲博陸侯、太夫人顯改光時所自造塋制而侈大之。起三出闕、築神道、北臨昭靈、南出

- (227) 承恩、盛飾祠堂、輦閣通屬永巷、而幽良人婢妾守之。  
漢書 卷五九 張安世傳「(元康四年 前六二)至秋薨。(略)賜塋杜東、將作穿復土、起家祠堂」。
- (228) 『漢代畫象全集 初編』圖版二二八、山東鄒縣白楊樹村畫象。「食齋祠園」の題記あり。
- (229) 水經注 卷二一 洧水 漢弘農太守張伯雅墓石廟。水經注 卷二九 洧水 漢日南太守胡著墓石祠。
- (230) 『武氏祠漢畫像石』二頁。Wu Hung, *The Wu Liang Shrine, The Ideology of Early Chinese Pictorial Art*, Stanford, 1989.
- (231) 黃易 修武氏祠堂記略(翁方綱 兩漢金石記 卷十五所收)。同前 後左右室畫象及祥瑞圖三跋(方朔 枕經堂金石畫題跋 卷二所收)。
- (232) 蔣英炬、吳文祺「武氏祠畫象石建築配置考」卷末 武氏祠畫象石一覽表參照。この表には、『金石索 石索』、『漢代畫象全集 二編』の編號と蔣英炬氏(山東省文物考古研究所)の原石編號が對照されており有益である。畫像石の番號は各書によりまちまちで混亂しているので、蔣英炬氏の原石編號を用いることにする。
- (233) Fairbank, Wilma, *The Offering Shrines of "Wu Liang Tz'u, Harvard Journal of Asiatic Studies. Vol.6, No.1, 1941.*
- (234) 蔣英炬、吳文祺「武氏祠畫象石建築配置考」。
- (235) 趙明誠 金石錄 卷一四「右漢武氏石闕銘」云、建和元年、太歲在丁亥、三月庚戌四日癸丑、孝子武始公、弟綏宗、景興、開明、使石工孟季、季弟卯造此闕、直錢十五萬、孫宗作師子、直四萬。開明子宣張仕濟陰、年二十五、曹府君察舉孝廉、除敦煌長史、被病云歿、苗秀不遂、嗚呼哀哉。士女痛傷。武氏有數墓在任城、開明者、仕爲吳郡府丞、綏宗名案、仕爲郡從事、宣張名斑、皆自有碑」。
- (236) 洪适 隸釋 卷六 敦煌長史武班碑「建和元年大歲在丁亥二月辛巳朔廿三日癸卯、長史同(下缺) 敦煌長史武君諱班、字宣張、(略)以永嘉元年□月□日遭疾不□哀□」。
- (237) 注(235) 參照
- (238) 金石錄 卷一四「右漢吳郡丞武開明碑云、(略)永嘉元年、喪母去官復拜郎中、除吳郡府丞。壽五十七、建和二年十一月十六日遭疾卒」。
- (239) 隸釋 卷六 從事武梁碑「故從事武掾、掾諱梁、字綏宗。據體德忠孝、岐嶷有異。治韓詩經、闕幘傳講、兼通河雒、諸子傳記。(略)年七十四、元嘉元年季夏三日、遭疾隕靈、烏亭哀哉。孝子仲章、季章、季立、孝孫子儒、躬修子道、竭家所有、選擇名石、南山之陽。擢取妙好、色無斑黃。前設礪碑、後建祠堂。良匠衛改、雕文刻畫、羅列成行。據勢技巧、委蛇有章、垂示後嗣、萬世不亡」。
- (240) 隸釋 卷十二 執金吾丞武榮碑「年卅六、汝南蔡府君察舉孝廉。□□郎中、遷執金吾丞。遭孝桓大憂、屯守玄武、感哀悲愴、加遇害氣、遭疾隕靈、□□□□」。
- (241) ただ武梁祠のみ名前がついているのは、洪适の『隸釋』がこれを武梁祠石室畫像として以來、慣例として行われているのである。隸釋 卷六 從事武梁碑「此碑長不半尋、廣纔尺許、既无雕畫技巧、亦非羅列成行、其辭決不爲碑設也。詳味之、似是指石室畫像爾」。
- (242) 嘉祥縣武氏祠文管所「山東嘉祥宋山發現漢畫像石」(『文物』一九七九年九期)。
- (243) 濟寧地區文物組、嘉祥縣文管所「山東嘉祥宋山一九八〇年出土的漢畫像石」(『文物』一九八二年五期)。
- (244) 同上 七〇頁。
- (245) 同上 六三頁、圖一一。
- (246) 同上 六四、七〇頁。圖一三、二六。趙超「山東嘉祥出土東漢永壽三年畫像石題記補考」(『文物』一九九〇年九期)。
- (247) 蔣英炬「漢代的小祠堂——嘉祥宋山漢畫像石的建築復原」(『考古』一九八三年八期)。但し三號小祠堂については、後壁畫像石と東西壁畫像石とで様式、内容上の齟齬がみられるため、ここでは東西壁畫像を保留することにする。また四號小祠堂についても、蓋頂石が下

の三石と大きさ、文様帶で矛盾があるため、これのみ保留することにする。

(248) 信立祥「論漢代的墓上祠堂及其畫像」一八七頁。

(249) 注(276) 蔣英炬「孝堂山石祠管見」論文、二二六頁。

(250) 嘉祥縣文物管理所「山東嘉祥南武山漢畫像石」(「文物」一九八六年四期)。

(251) 宋山四號小祠堂、南武山祠堂では三神人が揃っている。山西離石馬茂莊二・三號畫像石墓參照、圖43 (3)、44 (1)(2)。

(252) 長廣敏雄編「漢代畫象の研究」(東京 一九六五) 六一—九五頁、「武梁石室畫象の圖像學的解説」。

(253) 尙書 大誥序「周公輔成王」。

(254) 史記 卷三一 吳太伯世家「季札之初使、北過徐君。徐君好季札劍、口弗敢言。季札心知之、爲使上國、未獻。還至徐、徐君已死、於是乃解其寶劍、繫之徐君冢樹而去」。

(255) 晏子春秋 諫下篇。

(256) 漢書 卷七二 貢禹傳「復舉賢良爲河南令。歲餘、以職事爲府官所責、免冠謝。禹曰、冠壹免、安復可冠也。遂去官」。後漢書 宋弘傳「(宋)弘乃離席免冠謝曰、臣所以薦桓譚者、望能以忠正導主、而令朝廷耽悅鄭聲、臣之罪也。帝改容謝、使反服、其後遂不復令譚給事中」。

(257) 朱錫祿「嘉祥五老注發現一批漢畫像石」(「文物」一九八二年五期) 七一—七二頁、圖六。

(258) 畢沅、阮元 山左金石志 卷八 嘉祥焦家村畫象四石「石柱題云、此齋王也四字、齋即齊字、與武氏前石室畫象同」。馮雲鵬、馮雲鵬金石索 石索 卷四 嘉祥焦家村畫像石二「其中一層題此齋王也四字、齋即齊字、武梁祠畫像多有之」。

(259) 漢代畫象全集 初編「圖版一六二」、「隸書、此齋王也」。長廣敏雄「武氏祠左右石室第九石の畫象について」(「東方學報」京都三一冊 一九六二) 一〇六一—一〇八頁。

(260) 信立祥「論漢代的墓上祠堂及其畫像」一八三、一九四頁。

(261) この樹木について、樹上に鳥が止まり、下に弓を射る人物がいるところから、十日の傳説と結び附けて扶桑と解釋する説が根強くあるが、再検討すべきである。「四川漢代畫象選集」圖版三一聞有解說。

(262) 說文解字 十三篇上「維、車蓋維也」。續漢書 輿服志上「景帝中元五年、始詔六百石以上施車轡、(略)二百石以下白布蓋、皆有四維杠衣、(略)」。

(263) 容庚 漢武梁祠畫像錄 前石室三、十、十一、十二。林巳奈夫「後漢時代の車馬行列」(「東方學報」京都三七冊 一九六〇) 圖七。

(264) 注(247) 參照。

(265) 注(247) において、蔣英炬氏が復原した宋山三號小祠堂において、後壁畫像石と東西壁畫像石が様式的にも内容的にも齟齬が見られることを述べたが、内容的にも、車馬行列が西王母(西壁)の方へ向かっているにも拘らず、後壁拜禮圖の樓閣階上に東王父の家來の男性たちがいる點が食い違っているのである。

(266) 「漢代畫象全集 初編」圖版五四。「山東漢畫像石選集」圖版一七二。前者は「濟寧畫象」として「此石右下角殘斷」とあり、確かに拓本(縱六七、横一四七)では右下角が缺けているが、後者の説明によると右下角は缺けていず、缺けているのは左側の二區畫である。

(267) 「山東漢畫像石選集」圖一五五。

(268) 金石索 石索 卷四 漢武氏石室祥瑞圖一、二。林巳奈夫「漢代鬼神の世界」(「東方學報」京都四六冊 一九七四) 二九三—二九六。石が缺けてわかりにくいのが、前者に一部の復原的圖像と榜題がある。木連理榜題「木連理、王者德純治、八方爲一家、則連理生」。

(269) 「漢代畫象全集 二編」圖版二二七。朱錫祿「武氏祠漢畫像石」圖三〇。林巳奈夫「漢代の文物」(京都 一九七〇) 三四—三三頁。

(270) 未編號畫像石の一であり、光緒八年(一八八二)の蔡壽生題識がある。朱錫祿「武氏祠漢畫像石」圖六三、「其它第三石」。

(271) この圖の近年の解釋には以下の論考がある。林巳奈夫「漢代鬼神の

(272)

- 世界」(『東方學報』京都四六冊 一九七四) 二五三―二五六。信立祥「論漢代的墓上祠堂及其畫像」一九九頁。
- (273) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」一二二―一三四頁。
- (274) 注(161) 參照。
- (275) 注(210) 參照。
- (276) 孝堂山祠堂については以下の論考がある。『漢代墳墓の表飾』一二二―二三頁、圖版一一二六。羅哲文「孝堂山郭氏墓石祠」(『文物』一九六一年四・五期)。同上「孝堂山郭氏墓石祠補正」(『文物』一九六二年九期)。蔣英炬「孝堂山石祠管見」(南陽漢代畫像石學術討論會辦公室編『漢代畫像石研究』所收 北京 一九八七)。
- (277) 『漢代墳墓の表飾』圖版七、八。孝堂山祠堂西壁外面に刻された北齊武平元年(五七〇)の「隴東王(胡長仁)感孝頌」にもみられるように、この祠堂を孝子郭巨の墓祠とする見方が根強くあった。金石錄 卷三二 北齊隴東王感孝頌。
- (278) 蔣英炬「孝堂山石祠管見」二二七頁。信立祥「論漢代的墓上祠堂及其畫像」一八九頁、圖八。信立祥「漢畫像石的分區與分期研究」(俞偉超編『考古類型學的理論與其實踐』所收 北京 一九八九) 二七三頁、圖一六(東壁畫像模本)。『中國美術全集 繪畫編一八』圖版五六(西壁畫像拓本)。李發林「孝堂山石室畫像舊拓校勘和墓主問題」(『考古學集刊』第四集 一九八四)。
- (279) 『漢代畫像全集 初編』圖版一五―二四。
- (280) 同上 圖版二二、二五、二六。
- (281) 史記 封禪書「秦滅周、周之九鼎入于秦。或曰宋太丘社亡、而鼎沒于泗水彭城下」。同上 秦始皇本紀(二八年) 始皇還、過彭城、齋戒禱祠、欲出周鼎泗水。使千人沒水求之、弗得。
- (282) むしろ武梁祠の祥瑞圖第一石に神鼎があつて、「神鼎、炊かざるに自ずから熟し、五味自ずから生ず」と題記され、また徐州や四川の畫像石に屢々描かれたように、天上界の神鼎と或いは關係があるかもしれない。金石索 石索 卷四 漢武氏石室祥瑞圖一「神鼎、不炊自熟、五味自生。睢寧九女墩漢墓畫像石」(『徐州漢畫像石』圖一三一)。瀘州石棺鼎人圖(『四川漢代畫像石』石棺畫像圖三四)。
- (283) 朱錫祿「嘉祥五老注發現一批漢畫像石」七三―七四頁、圖一〇。
- (284) 『漢代畫像全集 初編』圖版一六〇。
- (285) 『徐州漢畫像石』圖版九一。
- (286) 風伯は箕星の人格神であり、箕星は東方の青龍星座に屬する。獨斷「風伯神、箕星也、其象在天、能興風」。信立祥「論漢代的墓上祠堂及其畫像」一九五頁。
- (287) 蔣英炬「孝堂山石祠管見」二二七頁。
- (288) 後漢書 和帝紀(永元二年) 夏五月庚戌、分太山爲濟北國、(略) 丙辰、封皇弟壽爲濟北王、(略)。後漢書 章帝八王傳「濟北惠王壽(略) 壽以永元二年封、分太山郡爲國。(略) 壽立三十一年薨。續漢書 郡國志三「濟北國 和帝永元二年、分泰山置」。
- (289) 續漢書 百官志五「皇子封王、其郡爲國、每置傳一人、相一人、皆二千石。本注曰、傳主導王以善、禮如師、不臣也。相如太守。有長史、如郡丞」。
- (290) 林巳奈夫「後漢時代の車馬行列」圖三四、三五、三六。夏超雄「孝堂山石祠畫像、年代及主人試探」(『文物』一九八四年八期) 三四―三十七頁。
- (291) 蔣英炬「孝堂山石祠管見」二二六頁。
- (292) 夏超雄「孝堂山石祠畫像、年代及主人試探」三八頁。
- (293) 蔣英炬「孝堂山石祠管見」二一六―二一七頁。
- (294) 隸續 卷一七 魯峻石壁殘畫象(畫像)「祠南郊從大駕出時、(略) 象二石、並廣三尺、崇二尺、(略) 此石上下三橫、首行一勝云、祠南郊從大駕出時、次有大車帳下騎、鮮明騎、小史騎、凡十六勝、大車之上、一勝三字、上兩字略有左畔偏旁、似校尉騎字、(略) 次石上橫

兩勝云、君爲九江太守時、車前導者八人、後騎石損其半、(略)」。林已奈夫「後漢時代の車馬行列」一八六一一八八頁。

(295) 武氏一族のうち、官位が最も高かったのは執金吾丞の官に就いた武榮で千石であった。武斑のついた敦煌長史の官は郡の丞クラスに過ぎず、武開明の吳郡丞と同クラスであった。續漢書 百官志四「執金吾一人、中二千石。本注曰、掌宮外戒司非常水火之事。月三繞行宮外、及主兵器。吾猶禦也。丞一人、比千石。同上 百官志五「每郡置太守一人、二千石、丞一人。郡當邊戍者、丞爲長史」。范邦瑾「關於山東嘉祥漢武氏墓羣家族若干問題的探討」(上海博物館集刊)第四集 三七八—三七九。

(296) 注(289) 參照。  
(297) 注(301) 參照。  
(298) 宋治民「漢代郡國小議」(考古)一九八九年九期 七三九頁。  
(299) 容庚 漢武梁祠畫像錄 前石室二、四、五。林已奈夫「後漢時代の車馬行列」圖一五、五、六。

(300) 續漢書 百官志五「漢初立諸王、因項羽所立諸王之制、地既廣大、且至千里。又其官職傳爲太傅、相爲丞相、(略)國家唯爲置丞相、其御史大夫以下皆自置之。至景帝時、吳、楚七國恃其國大、遂以作亂、幾危漢室。及其誅滅、景帝懲之、遂令諸王不得治民、令內史主治民、改丞相曰相、(略)」。

(301) 續漢書 百官志五「每縣、邑、道、大者置令一人、千石、其次置長、四百石、小者置長、三百石、侯國之相、秩次亦如之」。

(302) 續漢書 輿服志上「公卿以下至三百石長、導從置門下五吏、賊曹・督盜賊・功曹、皆帶劍、三車導、主簿・主記、兩車爲從。縣令以上加導斧車」。

(303) 林已奈夫「後漢時代の車馬行列」圖七。

(304) 行亭車という言葉は、管見の限り、文獻には見當たらぬ。

(305) 例えばオート・フィッシャーは仙界への出行とし、林已奈夫氏は生前の官職にあつた時の出行とした。Fischer, Otto. Die Chinesische Malerei der Han-Dynastie, Berlin, 1931, pp. 98-100. 林已奈夫「後漢時代の車馬行列」一八四—一九〇頁。

(306) 『漢代畫象全集 二編』圖版一七九。  
(307) 同上 圖版一八〇。容庚 漢武梁祠畫像錄 前石室八、九。  
(308) 山左金石志 卷七「案諸家金石書載李剛・魯峻・武氏、皆有石室畫象、大都雕刻聖賢故事及其人所歷官職、如李剛刻云、君爲荊州刺史時、魯峻刻云、祀南郊從大駕出時、又云爲九江太守時、武氏刻云、此君車馬、君爲都□時、君爲市掾時、爲督郵時、皆明證也」。

(309) 蔣英炬「武氏祠畫象石建築配置考」圖六 前石室建築配置圖、前石室八、前石室九。容庚 漢武梁祠畫像錄 前石室八、九。  
(310) 朱錫祿「嘉祥五老注發現一批漢畫像石」(文物)一九八二年五期。  
(311) 蔣英炬「漢代的小祠堂」七五〇頁。

(312) 朱錫祿「嘉祥五老注發現一批漢畫像石」七二頁、圖一〇。  
(313) 同上 七一頁。朱錫祿「嘉祥漢畫像石」圖八七。

(314) 朱錫祿「嘉祥五老注發現一批漢畫像石」七四頁。  
(315) 王思禮「山東肥城漢畫象石墓調查」(文物參考資料)一九五八年四期。  
(316) 『山東漢畫像石選集』圖版四七、四七三。寸法は後者によつた。  
羅哲文「孝堂山郭氏墓石祠」四七頁。蔣英炬「孝堂山石祠管見」二一三頁。

(317) 蔣英炬「孝堂山石祠管見」二一三—二一四頁、圖六、七。  
(318) 注(288) 參照。  
(319) 漢書 卷一下 高帝紀下「於是諸侯上疏曰、(略)大王陛下、先時秦爲亡道、天下誅之。大王先得秦王、定關中、於天下功最多」。

(320) 漢書 卷四四 淮南厲王長傳「淮南厲王長、高帝少子也、其母故趙王張敖美人。(略)時帝舅薄昭爲將軍、尊重、上令昭予厲王書諫數之、曰、竊聞大王剛直而勇、慈惠而厚、貞信多斷、是天以聖人之資奉大王也甚盛、不可不察。今大王所行、不稱天資」。

- (321) この大王、即ち諸侯王をこの地、即ち濟北國の諸侯王ではなく、この墓主が仕えたかもしれない別の地の諸侯王とする見方も當然あるが、大王という呼び方には現地の諸侯王ならではの感じが込められていると考えられる。
- (322) 『シャヴァンヌ』Fig. 170, 171. 現在の所在は不明である。
- (323) 嘉祥紙坊鎮第九石參照。朱錫祿『嘉祥漢畫像石』圖一三四
- (324) 『漢代墳墓の表飾』一〇〇—一〇一頁、圖一五三(第二石)、一五四(第三石)。この二石は、第二石(高一尺四分、幅一尺八寸)が上層に西王母圖、中層に周公輔成王圖、下層に出行圖を刻し、第三石(高二尺三分、幅一尺九寸)が上層に樂伎圖、中層に建鼓・六博圖、下層に庖廚圖を刻す。材質が同じで大きさもほぼ等しいうえに、第二石は右側面に菱形條線文があり、第三石は左側面に同じ文様があるところから、元來各々祠堂の西壁、東壁を構成していたものと思われる。
- (325) 『漢代墳墓の表飾』一〇〇—一〇一頁、圖版一七六。
- (326) 『山東漢畫像石選集』圖版一、解説。
- (327) 大きさは『山東漢畫像石選集』の説明では、西王母圖が縦六七、横五六・五cm、聖樹圖が縦六七、横六六cmとあるが、聖樹圖の横の長さは圖版で見ると縦との比から計算して五六cmの誤りと思われる。
- (328) 『山東漢畫像石選集』圖版三二、解説。
- (329) 爾雅 釋鳥「鸞、山鵲」。注「似鵲而有文彩、長尾、背脚赤」。
- (330) 『シャヴァンヌ』Fig. 1242, 1243. Finsterbusch, Käte, Verzeichnis und Motiindex der Han-Darstellungen, Band II, Wiesbaden, 1971, Tafel 107, Abb. 365, 366.
- (331) 『山東漢畫像石選集』圖版一の解説によると、近年(一九七六年)に二十石(圖版一一〇)出土し、早くに十七石(圖版二一四五)出土し、曲阜の孔廟に現存するという。また孔廟の内の十二石が『漢代畫象全集 初編』に著録されているという。
- (332) 『漢代畫象全集 初編』圖版三三三。端方 陶齋藏石記 卷一 戴氏畫象題字。Siren, Oswald, Chinesische Skulpturen der Sammlung Eduard von der Heydt, Museum Rietberg Zürich, Abb. 2. 王德慶「江蘇銅山東漢墓清理簡報」(『考古通訊』一九五七年四期)三三—三四頁。『江蘇徐州漢畫象石』九—一頁、圖四五—六三。
- (334) 『徐州漢畫象石』圖版七〇—八九。
- (335) 『徐州漢畫象石』はその圖版七三(車騎出行)、七四(同上)を祠堂の畫像石と明記せず、計十石を擧げるが、『江蘇徐州畫像石』はそれらも祠堂畫像石として計十二石を擧げる。三壁に基座があったとすれば、圖版七五とともに圖版七三、七四の畫像石がそれにあてられたと考えられる。
- (336) 『徐州漢畫象石』圖版八八、八九。
- (337) 段拭「江蘇銅山洪樓東漢墓出土紡織畫象石」(『文物』一九六二年三期)。
- (338) 『徐州漢畫象石』圖版七三、七四、七五。
- (339) 『徐州漢畫象石』圖版八三—八五。
- (340) 同上 圖版八〇—八二、七一。
- (341) 有鄰館學藝部編『有鄰館精華』(京都 一九九二)圖版三三。
- (342) 『山東漢畫像石選集』圖版二二五—二二七。
- (343) 例えば次の如きものがある。滕縣龍陽店畫像石三石、『山東漢畫像石選集』圖版二七五、二七六。滕縣西戶口畫像石三石、『山東』圖版二二八、二三〇。同上二石、『山東』圖版三三四、三三〇。同上二石、『山東』圖版二二七、二二九。同上二石、『山東』圖版二二三、二三三。滕縣小王莊畫像石二石、『山東』圖版三三六、三三七。
- (344) 南京博物院「徐州青山泉白集東漢畫象石墓」(『考古』一九八一年二期)。
- (345) 王步毅「褚蘭漢畫像石及有關物像的認識」(『中原文物』一九九一年三期)。
- (346) 題額及び碑文には次のようにあった。題額「辟陽胡元王」墓」。碑文



- 「建寧四年二月壬子……爲冢墓石……父以九月乙巳母以六月……子孫……上人馬皆食大倉……律令……祿墓高壽四敬要（腰）帶朱紫車……金銀在懷何取不尋（得）貴延年……德子孫常爲……」
- (346) 南京博物院「徐州青山泉白集東漢畫象石墓」一三七頁。
- (347) 羅哲文「孝堂山郭氏墓石祠」四五頁。
- (348) 秋山進吾氏は拓本によつて武梁祠の復原を行い、第三石（奥壁）の畫像下段中央部（拜禮圖の下）がわざと文様帶を表していないことに注目し、孝堂山の例から推してここに神臺が奥壁に接して置かれていたとし、關野貞「漢代墳墓の表飾」圖版五二の「畫像石配置實測圖」の（は）の記號で表された石（長さ七七、幅二五）がこれに該當すると推測した。秋山進吾「武梁祠堂復元の再檢討」（「史林」四六卷六號一九六三）一一五頁。この武梁祠における神臺の存在説は卓見であつたが、關野貞が「畫象を有せず、唯（だ）波文・複菱文・連弧文より成れる周縁を示せるのみ」という（は）の石は、蔣英炬氏が論文で示した同じ文様の「花紋條石」（殘石 高さ二五、幅七一・五）に該當すると思われ、蔣英炬氏の復原案では「左右室四」、「左右室五」の文様帶と完全に一致するとして左右室奥壁の龕の下に用いられている。蔣英炬氏も武梁祠奥壁前に「祭祀用石案」が存在したというが、該當する石は今のところ發見されていないようである。「漢代墳墓の表飾」三五頁。蔣英炬「武氏祠畫象石建築配置考」一六八頁、圖三、一七八頁、圖八、一七二頁。
- (349) 顧炎武 日知錄 卷一五 墓祭。
- (350) 獨斷 卷下「宗廟之制、古學以爲人君之居、前有朝、後有寢、終則前制廟以象朝、後制寢以象寢。廟以藏主、列昭穆、寢有衣冠几杖象生之具、總謂之宮。（略）古不墓祭、至秦始皇出寢、起之於墓側、漢因而不改、故金陵上稱寢殿、有起居衣冠象生之備、皆古寢之意也。」楊寬「中國古代陵寢制度史研究」（上海 一九八五）一四一三九頁。拙稿「秦始皇陵と兵馬俑に關する試論」（「東方學報」京都五八冊
- 一九八六）四一三—四二三。
- (352) 趙康民「秦始皇陵原名麗山」（「考古與文物」一九八〇年三期）。袁仲一「秦代金文、陶文雜考三則」（「考古與文物」一九八二年四期）。秦始皇陵考古隊「秦始皇陵西側『麗山』山食官、建築遺址清理簡報」（「文博」一九八七年六期）。王學理「『麗山』山食官（東段）復原的構想」（「考古與文物」一九八九年五期）。
- (353) 漢書 卷一九 百官公卿表上「奉常、秦官、掌宗廟禮儀、有丞。景帝中六年更名太常。屬官有太樂、太祝、太宰、太史、太卜、太醫六令丞、又均官、都水兩長丞、又諸廟寢園食官令長丞、有麗太宰、太祝令丞、五時各一尉。又博士及諸陵縣皆屬焉。」
- (354) 漢書 卷七三 韋玄成傳「京師自高祖下至宣帝、與太上皇、悼皇考各自居陵旁立廟、并爲百七十六。又園中各有寢、便殿。日祭於寢、月祭於廟、時祭於便殿。寢、日四上食、廟、歲二十五祠、便殿、歲四祠。又月一游衣冠。顏師古注「寢者、陵上正殿、若平生露寢矣。便殿者、寢側之別殿耳。」
- (355) 續漢書 明帝紀「永平元年春正月、帝率公卿已下朝於原陵、如元會儀。」
- (356) 續漢書 禮儀志上「西都舊有上陵。東都之儀、百官、四姓親家婦女、公主、諸王大夫、外國朝者侍子、郡國計吏會陵。晝漏上水、大鴻臚設九賓、隨立寢殿前。鍾鳴、謁者治禮引客、羣臣就位如儀。乘輿自東廂下、太常導出、西向拜、折旋升阼階、拜神坐。退坐東廂、西向。侍中、尚書、陛者皆神坐後。公卿羣臣謁神坐、太官上食、太常樂奏食舉、舞文始、五行之舞。樂闋、羣臣受賜食畢、郡國上計吏以次前、當神軒占其郡國穀價、民所疾苦、欲神知其動靜。」
- (357) 古今注（續漢書 禮儀志下 李賢等注所引）「光武原陵、山方三百一十三步、高六丈六尺。垣四出司馬門。寢殿、鍾虞皆在周垣內。隄封田十二頃五十七畝八十五步。」
- (358) 長廣敏雄氏が石室の狹小さを理由に、神主または象生の具を藏し安

置するだけの小建築としたのは検討の餘地がある。長廣敏雄「漢代の家祠堂について」五四九頁。

(359) 一六六頁參照。

(360) 說文解字 五篇下「飢、糧也、从人食」。段玉裁注「按、以食食人物其字本作食、俗作飢、或作餓。經典無飢、許云、餓、食馬穀也、不作飢馬。此篆淺人所增、故非其次釋爲糧也。又非宜刪」。

(361) 拙稿「秦始皇陵と兵馬俑に關する試論」四一七—四一九頁。

(362) 論衡 四諱「二曰諱被刑爲徒、不上丘墓、(略)愧負刑辱、深自刻責、故不升墓祀於先。古禮廟祭、今俗墓祀、故不升墓慙負先人、一義也。墓者、鬼神所在、祭祀之處。祭祀之禮、齊戒潔清、重之至也。(略)緣先祖之意、見子孫被刑、惻怛憐傷、恐其臨祀、不忍歆享、故不上墓、二義也」。

(363) 羅福頤「鄒他君石祠堂題字解釋」(《故宮博物院院刊》總二期 一九六〇)。啓功編《中國美術全集 書法篆刻編一 商周至秦漢書法》(北京 一九八七)圖版七五。

(364) 佐原康夫「漢代祠堂畫像考」七頁。

(365) 羅福頤論文(注363)、陳直「漢鄒他君石祠堂題字通考」(《文史考古論集》)所收 天津 一九八八)などによる。鄒他君石祠堂題記「永興二年七月戊辰朔廿七日甲午、孤子鄒無患・弟奉宗頓首。家父主吏、年九十、歲時加貢、五月中卒得病、飯食衰少、遂至掩忽不起。母年八十六、歲時在卯、九月十九日被病、卜問奏解、不爲有差、其月廿一日況忽不愈。(略)無患・奉宗、克念父母之恩、思念怙怙悲楚之情。兄弟暴露在家、不辟晨夏、負土成墓、列種松柏、起立石祠堂。冀二親魂靈有所依止、歲時拜賀、子孫懼喜。堂雖小、經日甚久、取石南山、更逾二年、迄今成已。使師操蒙・山陽瑕丘榮保・畫師高平代盛・邵強生等十餘人、價錢二萬五千、朝暮侍師。(略)財立小堂、示有子道、差於路食。唯觀者諸君、願勿敗傷、壽得萬年、家富昌。此上人馬、皆食大倉」。

(366) 當時は夏と冬に墓祭を行い、伏祭、臘祭と呼ばれた。漢書 卷四〇 張良傳「及良死、并葬黃石。每上冢伏臘祠黃石」。

(367) 風俗通義(太平御覽卷三六一 八八三、意林卷四引)「汝南周霸、字翁仲、爲太尉掾。婦於乳舍生女、自毒無男。時屠婦比臥得男、因相與私貨易、裨錢數萬。後翁仲爲北海相、吏周光能見鬼、署光爲主簿、使還致敬於本郡縣、因告光曰、事訖、臘日與小兒俱上冢、去家經十三年、不躬蒸嘗、主簿微察知、相先君寧息、會同飲食忻娛否。往到於冢上、郎君沃醑、主簿俛伏在後、但見屠者弊衣蠶結、偃神坐、持刀割肉、有五時衣帶青墨綬數人、彷徨陰堂東西廂、不敢來前。光怪其故、還至、引見、問之、乞屏左右、起造於膝前、白事狀如此」。

(368) 王先謙 後漢書集解 志卷九「古不墓祭、漢諸陵皆有園寢、承秦所爲也。(集解)漢園寢設坐而無主、主必立于廟。明帝以下不起寢廟、則藏主世祖廟更衣。塲・質・沖三帝、就陵寢祭、則並無主也」。

(369) 後漢書 光武帝紀「大司徒鄧禹入長安、遣府掾奉十一帝神主、納於高廟。注「神主、以木爲之、方尺二寸、穿中央、達四方。天子主長尺二寸、諸侯主長一尺。虞主用桑。練主用栗。衛宏舊漢儀曰、已葬、收主、爲木函、藏廟太室中西壁坎中、去地六尺一寸、祭則立主於坎下」。

(370) 南京博物院「徐州青山泉白集東漢畫象石墓」。『徐州漢畫象石』圖版九七一—一六、附圖五。

(371) 『徐州漢畫象石墓』圖版八六、八七。附圖四。

(372) 山東省博物館、蒼山縣文化館「山東蒼山元嘉元年畫象石墓」(《考古》一九七五年二期)。『山東漢代畫像石選集』圖版四〇三—四一五。

(373) 最初前注報告書は劉宋元嘉元年(四二四)説を主張したが、方鵬鈞氏等は反證を挙げ後漢元嘉元年説を主張した。方鵬鈞、張助燎「山東蒼山元嘉元年畫象石題記の時代和有關問題的討論」(《考古》一九八〇年三期)。

(374) 山東省博物館等「山東蒼山元嘉元年畫象石墓」圖七一。

- (375) 方鵬鈞等「山東蒼山元嘉元年畫象石題記の時代和有關問題的討論」。
- (376) 王恩田「蒼山元嘉元年漢畫像石墓考」(『四川文物』一九八九年四期)。
- (376) 方鵬鈞等「山東蒼山元嘉元年畫象石題記の時代和有關問題的討論」。
- (377) 王恩田「蒼山元嘉元年漢畫像石墓考」。
- (377) 曾昭燏、蔣寶庚、黎忠義「沂南古畫像石墓發掘報告」(北京一九五六)。
- (378) 「沂南古畫像石墓發掘報告」圖五四—五七。
- (379) 同上 圖三四—三九。
- (380) 續漢書 輿服志上「縣令以上、加導斧車」。注(302) 參照。
- (381) 「沂南古畫像石墓發掘報告」圖四—四九。
- (382) 同上 圖六六、六七。
- (383) 南京博物院「徐州青山泉白集東漢畫像石墓」圖一三。
- (384) 「山東安邱縣漢墓發現的石刻」(『文物參考資料』一九五五年三期) 封面。土居淑子「古代中國の畫像石」(京都一九八六) 七四頁。
- (385) 佐伯有清「食大倉考」德興里高句麗壁畫古墳の墓誌に關連して「(日本常民文化紀要」第十三輯 東京一九八七)。この論考は當時までに發見された用例を網羅的に上げ、一々検討を加えている。
- (386) 望都一號漢墓前室西壁券門北側壁畫、「□□□□下□□皆食太倉」。望都二號漢墓前室東壁北側壁畫、「□□大倉穀」。和林格爾壁畫墓前室西壁甬道門南側、「繁陽吏人馬皆食太倉」、前室南壁甬道門西側、「上郡屬國都尉、西河長史吏兵馬皆食太倉」、前室西壁甬道門北側、「□上人□(馬)□□□□」、前室東壁甬道門上方、「・・□上人馬皆食大倉」。北京歷史博物館、河北省文物管理委員會編『望都漢墓壁畫』(北京一九五五) 一三頁、圖版八。河北省文化局文物工作隊『望都二號漢墓』圖一九、二〇。內蒙古自治區博物館文物工作隊『和林格爾漢墓壁畫』(北京一九七八) 三三頁、圖版五四、一一四—一二五。また江西黎川縣發見の車馬文磚にも「此上人馬皆食太倉」と記されている。鄧小明、鄧小青「黎川縣發現漢車馬紋磚」(『江西文物』一九八九年三期) 一一九頁。
- (387) 山東省博物館等「山東蒼山元嘉元年畫象石墓」一二六—一二七頁、圖五。
- (388) 濟寧地區文物組等「山東嘉祥宋山一九八〇年出土的漢畫像石」六三頁、圖二一。朱錫祿「嘉祥漢畫像石」圖七四。
- (389) 「山東漢畫像石選集」圖版一五九。
- (390) 王步毅「褚蘭漢畫像石及有關物像的認識」六二頁、圖四。
- (391) 「山東漢畫像石選集」圖版四八六、四八七。
- (392) 「漢畫象石全集 二集」圖版二一九。
- (393) 「シャヴァンヌ」p. 278—279, Fig. 1271. 羅振玉 石交錄 卷一。六五—六六頁參照。
- (394) 淮南子 墜形訓「昆侖之邱、或上倍之、是謂涼風之山、登之而不死、或上倍之、是謂懸圃、登之乃靈、能使風雨、或上倍之、乃維上天、登之乃神、是謂太帝之居」。また下層が樊桐と呼ばれたことは『淮南子』の次の記事によってわかる。同上「懸圃・涼風・樊桐、在昆侖閭闔之中」。
- (396) 拙稿「秦始皇陵と兵馬俑に關する試論」四三—四四頁。

# 圖出所目錄

- (1) 「徐州漢畫象石」圖版二一。(2) (7) 徐州市博物館等「江蘇沛縣漢山漢畫像石墓清理簡報」圖四。
- (2) 同上 圖六
- (3) (1) 「山東漢畫像石選集」圖版四七。(2) 同上 圖四六。(3) 王思禮等「山東微山縣漢代畫像石調查報告」圖三。(4) 同上 圖版三—四、圖二。
- (4) (1) 「山東漢畫像石選集」圖版四八。(2) 同上 圖版三二一。
- (3) 同上 圖版三二二。(4) 同上 圖版三二九。(5) 同上 圖版三三〇。(6) 同上 圖版三三一。

- (5) 蔣英炬「略論曲阜『東安漢里畫象』石」圖一。
- (6) (1) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二〇。(2) 『漢代畫象全集 初編』圖版七一。(3) 同上 圖版七三。(4) 同上 圖版六三。(5) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版五〇。
- (7) 湖南省博物館等「長沙馬王堆一號漢墓 上集」圖三八。
- (8) 臨沂金雀山漢墓發掘組「山東臨沂金雀山九號漢墓發掘簡報」封面圖版二。
- (9) 洛陽博物館「洛陽西漢卜千秋壁畫墓發掘簡報」圖三三、三四。
- (10) 湖南省博物館「長沙砂子塘西漢墓發掘簡報」圖版二、藤森哲朗氏模寫。
- (11) 湖南省博物館等「長沙馬王堆一號漢墓 上集」圖二五。
- (12) (1) 李洪甫「連雲港市錦屏山漢畫像石墓」圖二一、二。(2) 同上 圖二一、三。(3) 同上 圖版四一、一、古田眞一氏模寫。
- (13) (1) 商丘地區文化局「河南夏邑吳莊石椁墓」圖五。(2) 同上 圖六。(3) 同上 圖七。
- (14) (1) 『徐州漢畫象石』圖版四、古田眞一氏模寫。(2) 同上 附圖一。
- (15) (3) 『山東漢畫像石選集』圖版四六七。(4) 同上 圖版四六六。
- (16) 臨沂市博物館「山東臨沂金雀山周氏墓群發掘簡報」圖八一、三、四。(1) 臨沂市博物館「臨沂的西漢畫棺、磚棺、石棺墓」圖一二。(2) 同上 圖一六。(3) 同上 圖一五。(4) 同上 圖一四。
- (17) (5) 同上 圖一三、古田眞一氏模寫。
- (18) (1) 『南陽漢代畫像磚』圖版一四八。(2) 河南省南陽地區文物研究所「新野樊集漢畫像磚墓」圖五。(3) 『南陽漢代畫像磚』圖版一六四。(4) 同上 圖版一八七。(5) 牛天偉等「南陽漢畫石又有新發現」圖。
- (19) (1) 『河南漢代畫像磚』圖四五。(2) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二五五。(3) 『河南漢代畫像磚』圖八七。(4) 同上 圖八八。(5) 同上 圖八九。(6) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版三五四。
- (20) (1) 河南省文化局文物工作隊「鄭州南關一五九號漢墓的發掘」圖一九。(2) 黃明蘭編「洛陽漢畫像磚」一五〇頁。
- (21) (1) 南陽市博物館「南陽縣趙家磚瓦廠漢畫像石墓」圖一。(2) 同上 圖七一、一。(3) 同上 圖七一、二。(4) 南陽漢畫館編「南陽漢代畫像石刻 續編」圖五〇。(5) 『南陽兩漢畫像石』圖一六、一七。
- (22) (1) 河南省文化局文物工作隊「河南南陽楊官寺畫象石墓發掘報告」圖一。(2) 同上 圖八一、三。(3) 同上 圖一一、一。(4) 同上 圖一一、二。
- (23) (1) 南陽地區文物隊等「唐河漢麟平大尹馮君孺人畫象石墓」圖一九一、二。(2) 同上 圖一〇一、一、二。
- (24) (1) 『南陽兩漢畫像石』圖一八。(2) 周到、李京華「唐河針織廠漢畫像石墓的發掘」圖一七。
- (25) (1) 四川省博物館等「四川郫縣東漢磚墓的石棺畫像」圖一三。(2) 同上 圖八。(3) 同上 圖二二。(4) 同上 圖一五。
- (26) (5) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版九一。
- (27) (1) 四川省博物館編「四川省博物館」(東京 一九八八) 圖版一三。(2) 同上 圖版一一四。(3) 『四川漢代畫像石』石棺畫像圖二六。(4) 同上 圖二五。
- (28) (1) 高文等「四川出土的十一具漢代畫像石棺圖釋」圖九。(2) 同上 圖八。(3) 『四川漢代畫像選集』圖版二六。(4) 『四川漢代畫像石』石棺畫像圖九。
- (29) (1) 內江市文管所等「四川簡陽縣鬼頭山東漢崖墓」圖一四一、一、三。(2) 同上 圖一〇。(3) 同上 圖一一。(4) 同上 圖一六。
- (30) (1) 同上 圖九。(2) 趙殿增、袁曙光「天門」考」封面二圖一。(3) 同上 封面二圖二。(4) 何志國「四川綿陽河邊東漢

- (29) 崖墓「圖八。(5) 高文等「四川出土的十一具漢代畫像石棺圖釋」圖三。
- (30) (1) 馮漢驥「四川的畫像磚墓及畫像磚」圖一より。(2) 同上 圖三。(3) 四川省文物管理委員會「四川新繁清白鄉東漢畫像磚墓清理簡報」三六頁。(4) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二四八。
- (31) (1) 張德全「新都縣發現漢代紀年磚畫像磚墓」封面一 圖2。(2) 『四川漢代畫像磚墓選集』圖版八四。(3) Lim, Lucy, *Stories from China's Past*, Pl. 61. (4) 『四川漢代畫像磚墓選集』圖版八五。
- (32) (1) 馮漢驥「四川的畫像磚墓及畫像磚」圖一—1。(2) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二二一。
- (33) (1) 『四川漢畫像磚墓選集』圖一六。(2) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二二六。
- (34) (1) 劉志遠「成都昭覺寺漢畫像磚墓」圖一。(2) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二二〇。(3) 『四川漢畫像磚墓選集』圖二七。(4) 同上 圖二六。(5) 筆者蒐集拓本。(6) 『四川漢代畫像磚墓選集』圖版八〇。(7) 『四川漢畫像磚墓選集』圖一〇。(8) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版二四一。(9) 『四川漢畫像磚墓選集』圖一一。(10) 同上 圖二。
- (35) (1) 馮漢驥「四川的畫像磚墓及畫像磚」圖五。(2) Lim, Lucy, *Stories from China's Past*, pp. 183. (3) 『四川漢畫像磚墓選集』圖三二。(4) 同上 圖三四。(5) 同上 圖三〇。(6) 同上 圖一。
- (36) (1) Lim, Lucy, *Stories from China's Past*, pp. 189. (2) *ibid.* pp. 188. (3) *ibid.* pp. 190. (4) *ibid.* pp. 189.
- (37) (1) 『四川漢畫像磚墓選集』圖四〇。(2) 『四川漢畫像磚墓選集』圖三九。
- (38) (1) 綏德縣博物館「陝西綏德漢畫像石墓」圖一。(2) 同上 圖三。
- (39) (1) 『陝北東漢畫像石刻選集』圖二八。(2) 同上 圖三九。(3) 東京帝國大學文學部「樂浪」圖版五七。(4) 陝西省博物館寫作小組等「米脂東漢畫像石墓發掘簡報」圖七。(5) 『陝北東漢畫像石刻選集』圖七一。(6) 同上 圖一。
- (40) (1) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版八三。(2) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版七八。(3) 陝西省博物館藏 筆者攝影寫真。(4) 陝西省博物館寫作小組等「米脂東漢畫像石墓發掘簡報」圖四。(5) 『陝北東漢畫像石刻選集』圖一〇。
- (41) (1) 陝西省博物館藏 筆者攝影寫真。(2) 同上。
- (42) 筆者蒐集拓本。
- (43) (1) 山西省考古研究所等「山西離石馬茂莊東漢畫像石墓」圖六より。(2) 同上 圖一〇。(3) 同上 圖二九。(4) 同上 圖二〇、二一。(5) 同上 圖三三。(6) 同上 圖四八。
- (44) (1) 同上 圖六〇。(2) 同上 圖六一。
- (45) (1) 河北省文化局文物工作隊編「望都二號漢墓」圖二七。(2) 同上 圖三七。
- (46) (1) 蔣英炬等「武氏祠畫像石建築配置考」圖五。(2) 『大黃河文明の流れ 山東省文物展』(東京 一九八六) 附圖九。(3) 蔣英炬等「武氏祠畫像石建築配置考」圖六。
- (47) (1) 『武氏祠漢畫像石』圖四。(2) 同上 圖七。(3) 同上 圖一。
- (48) (1) 同上 圖二。(2) 同上 圖二五。(3) 同上 圖二一。(4) 同上 圖三三。(5) 同上 圖一一。(6) 同上 圖三二。
- (49) (1) 『大黃河文明の流れ 山東省文物展』附圖九。(4) 『山東漢畫像石選集』圖版一九〇。(5) 濟寧地區文物組等「山東嘉祥宋山一九八〇年出土的漢畫像石」圖一四。(6) 『山東漢畫像石選集』圖版一八四。
- (50) (1) 濟寧地區文物組等「山東嘉祥宋山一九八〇年出土的漢畫像石」圖一六。(2) 信立祥「論漢代的墓上祠堂及其畫像」圖一五。

- (3) 京都大學人文科學研究所所藏拓本。  
(51) 京都大學人文科學研究所所藏拓本。  
(52) (1) 『山東漢畫像石選集』圖版一七二。(2) 同上 圖版一五五。  
(53) (1) 『シャヴァンヌ』Fig. 91, 102。(2) 京都大學人文科學研究所所藏拓本。(3) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版一四。  
(54) (1) 羅哲文「孝堂山郭氏墓石祠」圖一。(2) 『シャヴァンヌ』Fig. 45。  
(55) (1) 同上 Fig. 52。(2) 信立祥「漢畫像石的分區與分期研究」圖一六。  
(56) 『中國美術全集 繪畫編一八』圖版五六。  
(57) (1) 朱錫祿「嘉祥五老洼發現一批漢畫像石」圖四。(2) 『山東漢畫像石選集』圖版二〇五。  
(58) (1) 信立祥「論漢代的墓上祠堂及其畫像」圖八。(2) 『武氏祠漢畫像石』圖一〇。(3) 『漢代畫象全集 二編』圖版一。(4) 京都大學人文科學研究所所藏拓本。  
(59) (1) 朱錫祿「嘉祥五老洼發現一批漢畫像石」圖八。(2) 同上 圖六。(3) 同上 圖七。(4) 同上 圖五。(5) 同上 圖二。  
(60) (1) 蔣英炬「孝堂山石祠管見」圖七-2。(2) 同上 圖七-1。  
(61) 王思禮「山東肥城漢畫象石墓調查」圖一。(2) 同上 圖二。  
(62) (1) Finsterbusch, Käte, *Verzeichnis und Motindex der Han-Darstellungen*, Abb. 373。(2) *ibid.* Abb. 364。  
(3) 『漢代墳墓の表飾』圖版一四八。(4) 『漢代畫象全集 初編』圖版二六六、二六七。  
(63) (1) 『山東漢畫像石選集』圖版一。(2) 同上 圖版三。(3) 同上 圖版四。(4) 同上 圖版三。(5) 同上 圖版三。  
(64) (1) 『シャヴァンヌ』Fig. 1243。(2) 同上 圖版九。(3) 同上 圖版二四。(4) 同上 圖版三四。  
(65) Siren, Oswald, *Chinesische Sculpturen*, Abb. 2。  
(66) (1) 『徐州漢畫象石』圖版七八。(2) 同上 圖七六。(3) 同上 圖七七。  
(67) (1) 有鄰館提供寫真。(2) 同上。(3) 『山東漢畫像石選集』圖版二六。(4) 同上 圖版二五。(5) 同上 圖版二七。  
(68) (1) 『中國美術全集 書法篆刻編一』圖版七五。(2) 同上 圖版七五。  
(69) (1) 『徐州漢畫象石』圖版一〇三。(2) 同上 圖版九八。  
(70) (1) 『山東漢畫像石選集』圖版四〇八。(2) 同上 圖版四一〇。  
(71) 『徐州漢畫象石』圖版八六。  
(72) (1) 『沂南古畫像石墓發掘報告』圖版三。(2) 同上 圖三。  
(3) 同上 圖五四。(4) 同上 圖三九。(5) 同上 圖版九八。  
(6) 同上 圖三六。  
(73) (1) 同上 圖版一〇四。(2) 同上 圖版一〇三。(1)。(3) 同上 圖七一。(4) 同上 圖六八。(5) 同上 圖六六。  
(74) 『山東漢畫像石選集』圖版五四〇。